Online edition: ISSN 2186-0777

国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies

日本語・日本学研究 vol. 12 (2022)

≪論文≫

いわゆる「集合操作表現」の文法的位置づけ
帰翔

共振する「内」と「外」
―夏目漱石『行人』における「彼岸」への情動―
張希毅

『椿説弓張月』と二系統の「楊家将演義」小説
平原真紀

平林たい子「敷設列車」論―生政治の視座を通して―
楊佳嘉

水上勉文学における「満洲娼婦」像の生成
―「からゆきさん」から朝鮮人「娼婦」へ―
楊柳岸

『万葉集』歌の序詞の翻訳について
―ドイツ語訳と英訳における方法と歴史的な変遷―
フィットレル・アーロン

≪研究ノート≫

多国籍の学生と芸人・教師による漫才ワークショップ
―「メディア日本語：メディアとメッセージ」授業における試み―
鈴木美加、島岡学

日本語の「不同意」に関わる談話研究の変遷と提言
袁姝

中国人日本語学習者のオノマトペの習得研究
―音象徴性を中心に―
周超超、葛茜

安部公房における思想的転換
―『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』を通して―
解放

≪寄稿論文≫

対格言語における活格形式、能格形式、「心」の表現とそれらの起源に関する類型論的試論
―「主語」「フォーカス主題」の観点から見た日本語とフィリピン・台湾諸語との例外例の対照より―
森口恒一

≪寄稿研究ノート≫

海外日本語教育インターン派遣に求めるものと求められるもの
―大学院科目「日本語教育実践研究」での実践を例に―
谷口龍子

夏季セミナー2021・大学院生サマースクール
報告要旨

執筆者一覧
国際編集顧問一覧
編集後記

東京外国語大学 国際日本研究センター

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』要項および編集・応募規程

発行の目的：国際日本研究センターにおける研究や研究活動と関連を有する研究成果を公表することを通じて、日本研究の発展に寄与することを目的とする。

発行回数並びに発行時期：年 1 回、3 月（2010 年度より開始）
※第9号から電子版のみ発行。

編集規程：
・国際日本研究センターは『日本語・日本学研究』の発行のために編集委員会を置く。編集委員会はセンター長、副センター長、編集幹事および各部門から選出された教員により構成される。
・投稿論文について：『日本語・日本学研究』は、本センターの研究活動に関連した日本研究の諸論考を受け入れる。(本センターの研究活動については、本センターのホームページを参照のこと）
・査読：投稿された研究論文については、編集委員会の責任において2名の査読者を選定するが、その際、編集委員会は外部の査読者を依頼することができる。査読は、査読要領にもとづき審査を行い、採否の決定をする。
・編集委員会は、東京外国語大学教員ならびにセンターの研究活動に積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を求めることができる。
・その他、編集上の細則については編集委員会が適宜これを定める。

応募規程：
・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研究論文（15ページ程度）、海外の研究動向・研究潮流の紹介（15ページ程度）、研究ノート（10ページ程度）、書評（10ページ程度）
・原稿の書式：投稿論文は日英いずれかの言語とする。掲載決定後、日本語論文には、英語の概要（300 語程度）、英語論文には日本語の概要（800 字程度）をつける。
・投稿申込みと申込み締め切り：論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、「執筆申込書」に必要事項を記入し、下記編集委員会アドレスに E メールで投稿予定の旨を連絡すること。また、メールの Subject（件名）には「『日本語・日本学研究』投稿希望」と記入すること。

原則、投稿された論稿はすべて査読対象とする。ただし、編集委員会の判断により査読対象に含めないものを認める場合がある。
公開、複製、公衆送信に関する権利：掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

投稿申込み締切日：毎年 7月 31日
原稿締切日：毎年 9月 30日

【連絡先】 東京外国語大学国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』編集委員会
〒 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 / FAX：042-330-5794
E-mail：icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

Call for papers and the information
The Journal of the International Center for Japanese Studies,
Journal for Japanese Studies

Editorial policy and guidelines of Journal for Japanese Studies

Purpose:
To contribute to the development of Japanese Studies through publishing efforts and results pertaining to the research activities conducted at the International Center for Japanese Studies.

Publication Period and Frequency: Starting from the fiscal year of 2010, published annually.
From volume 9, this journal will be published in electronic format only.

Policies:
・Editorial Committee: For the publication of International Japanese Studies, the International Center for Japanese Studies will establish an editorial committee. The committee will be composed by the director of the Center, the associate director, a chief editor, and a staff member each from three divisions of the Center.
・Articles: The articles to be submitted for the Journal are selected considering their relations to the Japanese studies conducted by our center (please refer to the official website of the Center as below for details on our research areas and activities.)
・Reference: Two referees appointed by the editorial committee will review and select the submitted articles based on the selection guidelines. The editorial committee is permitted to request experts for referees from outside of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS.)
・The editorial committee may request submission of articles from faculty members at TUFS, or other individuals who have actively contributed to the Center's research activities. The editorial committee will add or modify any other details as needed.

Submission Requirements:
Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 15 pages,) international research trends (approx. 15 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (approx. 10 pages.)
Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

In principle, all the articles are subject to be peered review. However, the editorial committee might, at their discretion, permit the article not to be included in the review.

Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

Entry Deadline: Every 31st of July
Submission Deadline: Every 30th of September

【For further information, please contact 】
International Japan Studies Editorial Committee International Center for Japanese Studies Tokyo University of Foreign Studies

【Address】 3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81 (0) 42-330-5794
E-mail: icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL：http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/

東京外国語大学　国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』第 12 号

目　　次

≪論文≫

◆ いわゆる「集合操作表現」の文法的位置づけ
帰翔・・・1

◆ 共振する「内」と「外」―夏目漱石『行人』における「彼岸」への情動―
張希毅・・・17

◆『椿説弓張月』と二系統の「楊家将演義」小説
平原真紀・・・33

◆ 平林たい子「敷設列車」論―生政治の視座を通して―
楊佳嘉・・・49

◆ 水上勉文学における「満洲娼婦」像の生成―「からゆきさん」から朝鮮人「娼婦」へ―
楊柳岸・・・63

◆『万葉集』歌の序詞の翻訳について―ドイツ語訳と英訳における方法と歴史的な変遷―
フィットレル・アーロン・・・79

≪研究ノート≫

◆ 多国籍の学生と芸人・教師による即興漫才ワークショップ
―「メディア日本語：メディアとメッセージ」授業における試み―
鈴木美加、島岡学・・・99

◆ 日本語の「不同意」に関わる談話研究の変遷と提言
袁姝・・・117

◆ 中国人日本語学習者のオノマトペの習得研究―音象徴性を中心に―
周超超、葛茜・・・133

◆ 安部公房における思想的転換―『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』を通して―
解放・・・151

≪寄稿論文≫

◆ 対格言語における活格形式、能格形式、「心」の表現とそれらの起源に関する類型論的試論
―「主語」「フォーカス主題」の観点から見た日本語とフィリピン・台湾諸語との例外例の対照より―
森口恒一・・・167

≪寄稿研究ノート≫

◆ 海外日本語教育インターン派遣に求めるものと求められるもの
―大学院科目「日本語教育実践研究」での実践を例に―
谷口龍子・・・189

夏季セミナー 2021・大学院生サマースクール大学院生報告要旨　・・・197

執筆者一覧
国際編集顧問一覧
編集後記

いわゆる「集合操作表現」の文法的位置づけ

The grammatical status of "set operational expressions"

帰　翔

This paper discusses the grammatical properties of expressions such as "nikagirazu", "ohajime", "nikuwaete" and "no-hoka(ni)", which are considered to be compound functional expressions. These expressions have been analyzed as "set operational expressions" in Eguchi (2013). In this paper I will provide an overview of Eguchi's analysis and then show some facts that cannot be explained by it.

In Eguchi (2013), the nouns NA and NB, which are in a paradigmatic relation to each other, are considered as elements of a set. And the entire <NA nikagirazu NB> is considered as the set constituted in the context, positioning <NA nikagirazu> as the dependent of NB.

This paper shows that Eguchi's analysis fails to explain at least two phenomena, and proves the fact that <NA nikagirazu> appears to be a phrase, but has an equal semantic relationship to the entire following clause. Then, as a new proposal, I argue that expressions such as "nikagirazu" are signs that constitute coordinate structure between clauses.

【キーワード】複合辞、「に限らず」タイプ、とりたての範囲、量修飾の副詞句、等位構造

compound particle, the “nikagirazu” type, scope of focusing particles, quantity adverbial phrase, coordinate structure

1. はじめに

日本語には「太郎に限らず次郎も来た」、「花子をはじめ、多くの学生をパーティーに呼んだ」、「国語に加えて数学も不合格だった」、「雑誌のほか辞書も買った」など、同類の事物を並べて、並べられる事物の相互関係を示す複合辞表現がある。これらの表現は“累加”、“列挙”などの関係を表し、接続表現に使われる助詞類や副詞類と非常に似ている面を持つと言える。

従来の研究は、もっぱら個別形式の意味記述を中心に行われてきた。文法的な観点からカテゴリー全体を捉えるアプローチはそれほど注目されなかった。上述形式がどのような統語機能を担うかについてはいまだに定説がないように見受けられる。

本論文では、まず統語論の観点から上述の表現を考察する江口正氏の研究を概観する。その上で江口氏が提案した「集合操作表現」という分析の妥当性について検討する[1]。

2. 江口氏の主張

「集合操作表現」とは「名詞が指示する集合の操作を表す表現」（江口2013：155）である。当該の表現は連体形でないにもかかわらず、「ホスト」と呼ばれる名詞（以下の例文1aでは「次郎や三郎」、1bでは「メンバー」）と強い結びつきがある、と述べられている。

1 「集合操作表現」という概念は最初に江口（1998）に見られる。その後、「～のほかφ」句の考察（江口 2000）と「～のうちφ」句の考察（江口 2006）で詳しく分析されている。江口（2013）では、多くの複合辞表現を掬い上げ、カテゴリーとしての記述を行っている。

(1) a 太郎{**に限らず／のほか／をはじめ／に加え**}次郎や三郎が来てくれた。
b 太郎{**に限って／を除き／を含め**}、メンバーを呼んだ。

［江口2013：155 ～ 156、例(1)］

江口(2013)によれば、集合操作表現に該当するものは本稿が注目する(1a)の諸表現だけではなく、上の(1b)に現れる表現も考えられる。江口(2013)は(1a)のものを「に限らず」タイプと呼び、(1b)を「に限って」タイプと呼んでいる。両タイプは次の現象を基準にして区別できる。

分析1【ホスト句との共起が必須かどうか】

cf. **太郎に限らず**、次郎や三郎も来てくれた。
***太郎に限らず** φ 来てくれた。
cf. **太郎に限って**、関係者を呼んだ。
太郎に限って φ 呼んだ。

分析2【ホスト句との語順が置き換えられるかどうか】

cf. **太郎に限らず**、次郎や三郎も来てくれた。
*次郎や三郎も、**太郎に限らず**来てくれた。
cf. **太郎に限って**、関係者を呼んだ。
関係者を**太郎に限って**、呼んだ。

このように、江口氏は「名詞＋集合操作表現」句(以下では便宜的に「集合操作句」と呼ぶ)とホスト名詞句との共起様式の違いを手掛かりに集合操作表現を二種類に分けている。次の引用から明らかなように、二種類の集合操作句はそれぞれホスト名詞句に対して異なる統語関係を持つ、という主張が示されている。

> 「に限らず」タイプは、語順の固定性やホスト省略ができない点からみて、ホストに強く依存していることが指摘できる。一方「に限って」タイプはホストから部分的に独立しているため、語順の制限がゆるく、ホストの存在自体も必須でないということができる。
>
> ［江口2013：167、下線は筆者］

本稿が注目しているのは、いわゆる「に限らず」タイプの集合操作句をホスト名詞句の従属要素として扱う点の是非である。この点に注目すべき理由は、江口氏はこのことを前提として、「に限らず」タイプの集合操作句とホスト名詞との主従関係は通常の連体修飾における修飾成分と被修飾名詞との関係とは異質であるという議論を展開したからである。

連体修飾関係と異質なことを説明するために、江口(2013)は以下の現象を提示している。

(2) a **花子のほか**、太郎は{次郎も／関係者を}呼んだ。
b **合格者に限らず**、昨日は学生が集まってくれた。

［江口2013：161、例(17-a)、(17-c)、囲みは筆者］

(2a)の「〜のほか」、(2b)の「〜に限らず」はともに「に限らず」タイプの集合操作表現である。例文が示しているように、集合操作句とホスト名詞句との間に別の名詞句や副詞句が割り込んでいるにも関わらず、文の適格性は落ちていない。通常の連体修飾構造では、連体修飾成分と被修飾名詞との間に他の成分を挿入すると文は不適格になる。

(3) a 太郎は白いスーツを着ている。
b*白い太郎はスーツを着ている。

このように、江口(2013)は①集合操作句は連体形でないのに、名詞であるホストに依存する、②集合操作句はホスト名詞から離れた位置に現れても、名詞への依存関係が読み取れる、ということを根拠として、「**太郎に限らず**次郎も来た」「**花子をはじめ**関係者を呼ぶ」、「**焼酎のほか**ウイスキーを飲む」の下線部は通常の連体修飾構造と異質な「名詞句の拡張的な構造」(江口2013:171)を形成すると説明している。同様な主張は、同じく「に限らず」タイプである「〜のほか」句と「〜のうち」句を扱った江口(2000)、江口(2006)にも見られる。

> すでに触れた列挙解釈のホカ句における「ホストがなければならない」という制約も、ホスト自体が主要部になっており、ホカ句がその修飾要素であると考えればアドホックな制約を立てる必要がなくなる[…中略…]以上の観察をまとめると、修飾語でありながら句の最も外側に位置し、しかも名詞を修飾している名詞であるにもかかわらず名詞修飾のマーカーを持たない、という非常に変わった性質をホカ句は持っていることになる。
>
> [江口2000:300、下線は筆者]

> ここで一つの仮説が立てられるかも知れない。「ウチ+{デ/φ}」は後続の名詞にいわゆる連体修飾の関係でつながっていると考えると、被修飾語がなくなったり、語順が変わったりすることができないことに説明がつけられるのである。しかしもし連体修飾であると考えると、(17b)[筆者注:「*太郎が贈った、花子は帽子を被っている」]のように名詞修飾句と被修飾名詞句の間に他の要素は入れないという性質が出てくるはずであるが、(18b)[筆者注:「従業員のウチ{デ/φ}実はまだ1人は若かった」]のようにウチ句と要素表現の間には別の句が挿入されてもよい。
>
> [江口2006:240、下線は筆者]

ここまでの概観を通して、本稿が注目する「〜に限らず」、「〜をはじめ」、「〜に加えて」などの複合辞表現がいわゆる「名詞句の拡張的な構造」を形成する標識と見なされていることが明らかになった。すでに述べたように、この捉え方は、「に限らず」タイプの集合操作句とホスト名詞との間に主従関係があることを前提としている。しかし、以下の節で検討するように、江口氏の考察ではこの前提の妥当性を十分に検証する根拠が提示されていない。それに、この前提を受け入れることによって、かえって説明ができなくなる現象もある。以下では、いわゆる「に限らず」タイプの集合操作句をめぐる江口氏の分析の問題点を取り上げる。

3. 問題の所在

前述した通り、江口(2013)では、「**太郎に限らず**次郎や三郎(も)」「**花子をはじめ**関係者(を)」、「**焼酎のほか**ウイスキー(を)」などの語列が「名詞句の拡張的な構造」を形成すると考えられている。最初に、拡張的な構造を形成するということの意味を確認しておこう。江口(2013)では「に限らず」タイプの集合操作句の機能について次のように述べている。

> 「に限らず」タイプの集合作成句は集合を文脈上に作成していく表現であり、集合作成の最初の手掛かりを提供するものである。
>
> [江口2013:171]

この説明に従うと、例えば「**太郎に限らず**次郎や三郎(も)」はひとまとまりの「集合」を表すと考えられる。確かに意味的にはそう解釈することは可能である。しかし、「太郎に限らず次郎や三郎」という語列は意味的に「集合」を形成すると言えるとしても、「太郎に限らず」を統語的に「次郎や三郎」の従属要素として認めることの説明はできない。念のため、江口(2000)と江口(2013)における関連箇所を引用して確認しておこう。

> [筆者注:「変な人のほか、さまざまな先生が来た」は]結果的には既に文脈上にある「変な人」をもとに「さまざまな先生」を足して新たな集合を作った、という形になる。この性質は累加解釈のホカ句全般に見られるものであり、「定である要素を元に新たな集合を作成する」といった文脈的機能がうかがわれる。
>
> [江口2000:299、下線・傍点は筆者]

> 「累加」という意味から離れ、文脈の中で集合がどう扱われるかという点に目を向けると、これらの要素[筆者注:「に限らず」タイプの集合操作句]は集合作成の最初の手掛かりを与える表現であるように思われる。(42)[筆者注:「*次郎とか三郎とか、花子をはじめ、関係者を呼んだ」]とは異なり、(41)[筆者注:「花子をはじめ、次郎とか三郎とか関係者を呼んだ」]では、これらの要素が集合作成の手掛かりを提供し、それを受けた後続する例示句で代表的な要素が示されて、同格的な「関係者」がそれら要素が持つ集合の属性を同定する形で自然な文となっている。
>
> [江口2013:170、下線は筆者]

上の引用が示すように、江口氏の説明にある「集合」と呼ばれるものは統語レベルの単位ではなく、意味レベルの概念であるように見受けられる。言い換えれば、いわゆる「集合作成」という操作は、複数の名詞句をひとまとまりの句にすることではなく、意味的に、「〜に限らず」の直前名詞に何らかの意味で共通性を持つ文中要素をとりまとめて一つの集合を成すことに過ぎない。これは、まさに江口(2000)からの引用で見たように、「文脈的機能」にほかならない。

それに、もう一つの問題がある。仮に「太郎に限らず、次郎や三郎」全体が一つの句として捉えられても、「太郎に限らず、昨日の飲み会に次郎や三郎も来てくれた」のように、いわゆる外部要素が一つの句の内部に挿入する現象を如何に説明するかは不明である。前節で概観したように、江口氏はこの現象を連体修飾と区別する根拠として挙げているが、この現象がなぜ許されるかについては説明していない。

ただし、例えば「昨日の飲み会に、太郎に限らず次郎や三郎も来てくれた」のような、集合操作句がホスト句と隣接する構造を深層構造と見なし、「太郎に限らず、昨日の飲み会に次郎や三郎も来てくれた」のような現象を集合操作句が移動した変形と見なす、即ち一種の遊離(floating)構文として分析すると、この問題は一応処置できるように見える。

そこで本稿は、別要素の挿入という非隣接現象をしばらく棚上げにして、江口氏の指摘に従って「に限らず」タイプの句をホストの従属要素として見ることにしよう。以下では、「**太郎に限らず**次郎や三郎」や「**花子をはじめ**関係者」のような「名詞句の拡張的構造」を一つの句として捉える立場に立って、この考え方の妥当性を検証する。

4. 検証:「N_Aに限らずN_B」は一つの句であるか

結論を先に述べると、仮に別要素の挿入現象を無視したとしても、「太郎に限らず次郎や三郎」を一つの句として捉えることには無理がある。本節では、二つの根拠を提示しつつこの問題を検討する。

4-1. ホストに後続する係助詞・副助詞によるとりたての範囲

江口氏の考察でも触れたように、「に限らず」タイプの複合辞句は"累加"として解釈される場合が多い。この解釈を持つ文の特徴としては、ホスト名詞句の下に助詞「も」が付加する現象が多く見られる。まず、助詞「も」が何を対象にとりたてているかという問題を考察しよう。

(4) a **太郎に限らず**次郎や三郎も来てくれた。
b 太郎は**焼酎のほか**ウイスキーも飲んだ。
c 太郎は**花子をはじめ**良子と道子もパーティーに誘った。

(4a)を例として説明すると、助詞「も」が使用されるのは、主節述語に当てはまるものは「〜に限らず」が付加した名詞「太郎」だけでなく、ホストの「次郎や三郎」も同様に述語に当てはまるという同類関係が成立しているからである。この文については、"来てくれた人"という集合に「次郎」と「三郎」の要素のほかに「太郎」もいるという解釈が最も自然である。しかし、前節で設定した前提から考えると、(4a)では「太郎に限らず次郎や三郎」全体で一つの句となり、助詞「も」によってとりたてられたのは「次郎」、「三郎」、「太郎」など三人のはずである。すなわち、"来てくれた人"という集合にはさらに別の人(例えば「四郎」)が想定できるという解釈になるのである。後者の解釈が困難なように、「も」はホスト名詞だけをとりたてているということが明らかになる。

次の名詞句並列構造「N_AとN_B」と比較すればわかるように、並列構造の場合、助詞「も」の作用域にはN_AとN_Bの両方が入っている。「N_AとN_B」は上述した「N_Aに限らずN_B」と異なって、「も」が並列構造における最後の並列要素N_Bだけをとりたてるという解釈が得られない。

(5) a 太郎と次郎と三郎も来てくれた。
b 太郎は焼酎とウイスキーも飲んだ。
c 太郎は花子と良子と道子もパーティーに誘った。

次に"限定"を表す副助詞「だけ」のとりたて範囲について見よう。次の(6)に見られるように、「だけ」は並列構造「N_AとN_B」全体をとりたてて、N_AとN_Bからなる集合以外に同類のものは存在しないという意

味を表す。一方、興味深いことには、「N_Aに限らずN_B」の次に「だけ」を挿入した(7)は非文である。

(6) 太郎は焼酎とウイスキーだけ飲んだ。
(7) 太郎は**焼酎に限らず**ウイスキーだけ飲んだ。

(7)が成立しないのは、副助詞「だけ」が「N_Aに限らずN_B」全体をとりたてることができず、N_Bの「ウイスキー」のみとりたて、結果として「だけ」が表す"限定"の意味が「〜に限らず」の表す"非限定"の意味と矛盾しているからと考えられる。ここで重要なのは、もし「焼酎に限らずウイスキー」全体が一つの句であるなら、(7)は(6)と同様に"焼酎、ウイスキー以外に飲んだものはない"という解釈になるはずである、という点である。この解釈が(7)では成立しないということから、「N_Aに限らずN_B」はひとつのまとまりとしてとりたてられない、という結論が導かれる。

ここまでの考察をまとめると、「N_Aに限らずN_B」という語列の下に現れる係助詞と副助詞は、いわゆるホストのN_Bしかとりたてられない。この観察結果は、前節で設定した「N_Aに限らずN_B」が一つの句を形成するという前提と矛盾している。本節で見たとりたての範囲に関わる現象は、「N_Aに限らずN_B」はひとまとまりの句ではないということの根拠と考えられる。

4-2. "集合解釈"を表す副詞句との共起

次に、以下の文に現れる下線部の副詞句を確認されたい。

(8) a 太郎は焼酎とウイスキーを一緒に飲んだ。
b 太郎は花子と良子を別々にパーティーに誘った。
c 太郎と次郎はそれぞれ70kgだ。

これらの副詞の特徴としては、それによる修飾を受ける出来事の動作主体、または動作対象に該当する名詞には複数の要素が想定されなければならない、という点が指摘できる。次の例では、「焼酎」「花子」「太郎」はそれぞれ類を表すもの(例えば、"数種類の焼酎"、"花子とよばれる女子達"、"日本中にいる太郎達"など)と解釈できない限り、上記の副詞と共起しにくい。

(9) a？太郎は焼酎を一緒に飲んだ。
b？太郎は花子を別々にパーティーに誘った。
c？太郎はそれぞれ70kgだ。

一方、「N_Aに限らずN_B」や「N_AのほかN_B」、「N_AばかりかN_B」の語列がひとつの句を形成するという3節の前提から考えると、これらの語列はそれぞれN_AとN_Bを包含する集合と解釈されることになり、上の副詞句と自然に共起できると予測し得る。実際はどうであろうか。

(10)a？太郎は**焼酎のほか**、ウイスキーを一緒に飲んだ。
b？太郎は**花子に限らず**、良子を別々に誘った。
c？**太郎ばかりか**、次郎もそれぞれ70kgだ。

(10)は前掲した(9)と同様に、「一緒に」「別々に」「それぞれ」は使用できないようである。しかし、これらの副詞が使用できない理由は「に限らず」タイプの複合辞句と共起しているからというわけではない。以下の例のように、上記の副詞が「に限らず」タイプの句と自然に共起する場合もある。

(11)a 太郎は**焼酎のほか**、三種類の洋酒を一緒に飲んだ。
　b 太郎は**花子に限らず**、女の子たちを別々に誘った。
　c **太郎ばかりか**、男子生徒たちはそれぞれ75kgだ。
(12)a 太郎は**焼酎のほか**、ウイスキーとブランデーを一緒に飲んだ。
　b 太郎は**花子に限らず**、良子と道子を別々に誘った。
　c **太郎ばかりか**、次郎と三郎もそれぞれ75kgだ。

このように、「一緒に」「別々に」「それぞれ」などの副詞が「N_Aに限らずN_B」と共起できるかどうかは、ホストのN_Bが集合と解釈できるかどうかで決まる。このことは、「一緒に」などの連用修飾成分は、N_AとN_Bから構成される集合を取り巻く事態を修飾するのではなく、ホストN_Bだけが参与する事態を修飾し、その上に「N_Aに限らず」句が付加される、という統語構造の反映と言えよう。このことは、「N_Aに限らずN_B」が統語上のひとまとまりでないことの証拠と考えられる。

実は、副詞成分がホスト名詞だけが参与する事態を修飾するという現象については、江口(2000)で言及されている。江口(2000)は、「N_AのほかN_B」と共起する数量詞に注目している。

(13)太郎のほか、学生が三人出席した。　［江口2000：303、例文(36a)］

この文の解釈と数量詞との関係については、江口(2000)では以下のように述べている。

> 実際に出席した人数は四人であるが、数量詞は三人となっている［…中略…］これは、(36a)でもし「太郎のほか学生」に数量詞がかかるのであれば解釈がおかしくなるはずであるが、「学生が三人」に「太郎のほか」がかかっているから、と考えられる。つまり、「学生」の一部として「太郎」は位置付けられないため、学生の数え方とは別にカウントされなければならなくなるのである。
>
> ［江口2000：303、下線は筆者］

引用から明らかなように、「N_AのほかN_B」構造は、N_Aの数とN_Bの数を合わせた数を表す数量詞(上記の例で言えば「四人」)と共起しない。言い換えれば、「N_AのほかN_B」構造と共起する数量詞は、ホストN_Bの数しか数えられない。この現象は、前掲した「一緒に」などの副詞句がホストN_Bだけしか修飾できないという現象と共通する。

上と似た現象は、相互行為を表す述語と共起しにくい現象についても言える。

(14)a *花子{に限らず／のほか}、良子が殴り合った。
　b *太郎{に限らず／のほか}、次郎は仲良がいい。

(14)の述語「殴り合う」と「仲がいい」は「花子と良子が互いに殴り合う」、「太郎と次郎は互いに仲がいい」というように使われる。しかし、上の(14)ではこのような解釈は成立しない。これらの例もホス

トNBが複数の要素を含むと解釈できない限り許容しにくい。(14)の現象からも、「NAのほかNB」や「NAに限らずNB」などの語列は意味上"集合を作成していく"とはいえても、統語上はひとまとまりをなさないということが読み取れる。

では、統語的にはともかく、「NAに限らずNB」は意味上ひとまとまりの集合を表現すると言ってよいだろうか。通常、一つの集合について何かを言おうとするとき、集合を構成する個々の要素を一つ一つ述べる場合と、個々の要素に言及しないで、集合そのものについて述べる場合がある。前者は「個別読み(individual reading)」、後者は「集合読み(collecting reading)」と呼ばれることがある(茂木2000:31)。しかし、4-1節から確認してきたように、いわゆる「に限らず」タイプの集合操作句とホスト名詞からなる「NAのほかNB」や「NAに限らずNB」などは、NAとNBをひとまとまりの集合として捉える、いわゆる「集合読み」の解釈ができないということなのであった。したがって、「〜に限らず」、「〜のほか」、「〜ばかりか」などは意味の上でも「ひとまとまりの集合を形成する」とは言い難い。

4節の考察を通して、いわゆる「名詞句の拡張的構造」としての「NAのほかNB」や「NAに限らずNB」は、①統語的にひとまとまりの句ではない、②意味的にひとまとまりの集合を作ることを目指さない、という特徴を確認した。3節の問題提起に戻ると、「に限らず」タイプの句をホスト名詞句の従属要素として見るには、「NAに限らずNB」がひとまとまりであることの証拠を示さなければならない。しかし、それを「もう一つの連体成分」として見る江口氏の主張では、前節で見た他成分の挿入現象だけでなく、本節で提示した現象にも有効な説明ができかねる。したがって、「に限らず」タイプの表現の文法的な位置づけを改めて考え直す必要があると言えよう。

5. いわゆる「ホスト」のあり方

4節では、「に限らず」タイプの句をホスト名詞句の修飾部として捉えることの問題点を分析した。しかし、この問題より前に、何を基準にホストを同定するかという問題も検討しなければならない。

ホストの同定が問題だと言っているのは、それを示す形態的な手段がないからである。そのため、文中要素のどれがホストなのかの判断は文脈解釈に依存せざるを得ない。江口論文におけるホストの定義を見ても、やはり意味の観点からの説明しか述べられていない。

> 「ほか」が付加された句をホカ句と呼び、ホカ句が表す「それ以外」の「それ」の部分を明示する名詞句をホストと呼ぶ。 [江口2000:292]

> 「以下に示される、それと並んで考えられるもの」が本稿でいうホストである。 [江口2013:156-157]

ここでは少し意味の観点からホストとは何かを考えよう。江口(2013)が提示した用例では、ホストと集合操作句との意味関係には三つの種類が見られる。いずれの種類でも、集合操作表現の直前にある名詞とホスト名詞は、主節述語を共有しかつ述語に対して同じ格関係を担う、という共通性が見られる。

【種類１】同列関係

太郎に限らず、次郎や三郎が来てくれた。(「太郎」、「次郎や三郎」は共にガ格)

焼酎のほか、ウイスキーも飲んだ。(「焼酎」、「ウイスキー」は共にヲ格)

東京をはじめ、大阪や名古屋にも行った。(「東京」、「大阪や名古屋」は共にニ格)

【種類２】〈要素―集合〉の包含関係

太郎をはじめ、関係者が来た。(「太郎」、「関係者」は共にガ格)

花子に限らず、女子学生を呼んだ。(「花子」、「女子学生」は共にヲ格)

【種類３】〈集合―要素〉の逆包含関係

関係者のうち、太郎だけが来てくれた。(「関係者」、「太郎だけ」は共にガ格)

女子学生のうち、花子だけを呼んだ。(「女子学生」、「花子だけ」は共にヲ格)

二つの名詞が同じ述語に対して同じ格関係を担うというのは、当の述語が支配する項(argument)の位置に同時に二つの名詞が現れるということに言い換えられる。この場合、同じ項の位置に現れる二つの名詞句は、互いに範列的(paradigmatic)な関係にある。

日本語では範列的な関係を示す代表的な形式としては、「太郎だけが来ている」や「花子も泣いた」など、いわゆるとりたての助詞が考えられる。また、「ただ黙って聞いただけだ」や「例えば食事などはどうですか」、「最初に私が行く」など、いわゆる限定副詞や序列副詞と呼ばれる副詞類も挙げられる。本稿が注目する「～に限らず」「～をはじめ」「～に加えて」などの複合辞表現には、ただ前方の要素Aを受けるだけではなく、後方にある要素Bと意味的に呼応し、AとBとの二者関係を表示する機能があると考えられる。そのために、「に限らず」タイプの複合辞表現は、4-1節で触れた並列接続に使われる助詞類と非常に似ていると言える。

ところが、4-1節で見たように、「Aに限らずB」は統語的に一つの句を形成するとは言えない点で並列構造と根本的に異なる。それだけではなく、並列構造は、体言であれ用言であれ節であれ、並べられた要素は同じ文法範疇のものでなければならない。品詞性が違う二要素、例えば形容詞と名詞との間では並列関係が成り立たない。この点については、渡辺(1971)の指摘が参照できる。

> 例えば一つの花が「桜の花」であると同時に「美しい花」であったとしても、この二つの連体成分の素材概念を並列して素材概念群たらしめ、
>
> 桜と美しい花
>
> のように表現することは、現実には不可能なのである。並列成分「桜と」の並列対象たり得る素材概念は、その並列成分の素材概念すなわち並列素材「桜」と意義的に同質対等であるという特色をそなえた体言でなくてはならない。
>
> ［渡辺1971：227］

一方、「Aに限らずB」におけるAとBは必ずしも同じ品詞のものとは限らない。実例を確認したところ、いわゆるホストと思われるものは、名詞以外の形で現れる場合がある。ここでは、江口(2013)でも挙げられた「～をはじめ」を例にして考察する。

まず、「～をはじめ」の直前に現れる名詞と並んで考えられるものが名詞としてではなく、副詞で現れる例から見よう[2]。

2　例文（15）（16）（21）（22）は国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から収集した。

(15) キリンサイ属も、**東半球の熱帯海域をはじめ**、世界的に広く分布している。
［サンプルID：LBc6_00013　村杉幸子・西澤和俊『海藻の本：食の源を探る』研成社、1988年］

(16) **富士山本校、沖縄校をはじめ**、自然界を拠点に全国的に活動している「自然体験型の環境教育事業所」です。
［サンプルID：LBr3_00120　長沼豊（編）『親子ではじめるボランティア』金子書房、2003年］

下線部の副詞句がホストと考えられるのは、二つの点から説明できる。

まず、「～をはじめ」の直前名詞と下線部は品詞性が異なるが同じ述語を共有すると言える。この点は、「**太郎をはじめ**、関係者を呼ぶ」における「太郎」と「関係者」との関係に似ている。

(17)a（キリンサイ属は）東半球の熱帯海域に広く分布している。
b（キリンサイ属は）世界的に広く分布している。
(18)a 富士山本校、沖縄校で、自然界を拠点に活動する。
b 全国的に、自然界を拠点に活動する。

次に、下線部は副詞でありながら、「～をはじめ」の直前名詞を包含すると解釈し得る。(15)では「東半球の熱帯海域」は「世界的に」に含まれる一部として考えられる。(16)では「富士山本校」も「沖縄校」も「全国的に」に含まれる一部として考えられる。

さらに、非常に興味深い現象であるが、江口(2013)が示唆した、ホストの消去不可という現象や、ホストが複合辞句より先行できない現象は上の副詞句にも適用される。

(19)a *キリンサイ属も、**東半球の熱帯海域をはじめ** φ 分布している。
b ***富士山本校、沖縄校をはじめ**、自然界を拠点に φ 活動している
(20)a *キリンサイ属も、世界的に**東半球の熱帯海域をはじめ**、広く分布している。
b *全国的に**富士山本校、沖縄校をはじめ**、自然界を拠点に活動している。

続いて、ホストが句としてではなく、節として現れる場合を確認しよう。

(21) 健脚自慢の天随だけに、**千八百九十三（明治二十六）年の富士山や、立山、剣山などの登山をはじめ**、彼の足跡が及ばぬ地域は稀だ。
［サンプルID：LBt7_00053　山と渓谷社（編）『目で見る日本登山史』山と渓谷社、2005年］

(21)では、ホストに当たるものは句として明示されていない。この文では、主節述部は意味的に「彼は非常に多くの地域に行っている」と解釈し得るが、実はこの述部全体がホストに当たる。それに対して、太字の名詞句は主節述部から抽出された具体的な例と言うべきである。つまり、意味の観点からして、今まで見たホストの明示された文と同様に、〈要素―集合〉という包含関係が成り立っている。この文においては、「～をはじめ」句と後続する述部全体とが並んでいるという関係が見てとれる。

同じく後続述部全体と並んでいる現象は、以下の(22)にも見られる。

(22)京城を睥睨するかのように、**南山に建てられた朝鮮神宮**をはじめ、各地に神社が設置された。
［サンプルID:OB5X_00155　池田大作『新・人間革命』聖教新聞社、1998年］

意味的に考えると、「～をはじめ」の直前に現れる名詞「南山に建てられた朝鮮神宮」は主節のガ格補語「神社(が)」から抽出された要素と解釈できる。しかし、この文では「神社」をホストとして捉えることができない。なぜなら、二つの名詞句は主節述部を共有する関係でないからである。

(23)a 各地に神社が設置された。
b *各地に南山に建てられた朝鮮神宮が設置された。

このように、「～をはじめ」句と「並んで考えられる」のは名詞「神社」ではなく、後続する主節全体と解釈すべきである。「～をはじめ」句をそのあとに来る主節の内部に移動すると文は許容できなくなるという現象から、「～をはじめ」句は後続主節全体と対等な関係であると言える。

(24) *健脚自慢の天随だけに、彼の足跡が及ばぬ地域は、**千八百九十三(明治二十六)年の富士山や、立山、剣山などの登山をはじめ**、稀だ。
(25) *京城を睥睨するかのように、各地に、**南山に建てられた朝鮮神宮をはじめ**、神社が設置された。

ここまでの考察をひとまず整理すると、いわゆるホストのあり方は複雑であることが分かった。「に限らず」タイプの直前位置に名詞句が現れたとしても、それと並んで考えられる要素は必ず名詞として現れるとは限らない。本節の考察を通して、「に限らず」タイプの複合辞句を「もう一つの連体修飾要素」と見なし、「N_Aに限らずN_B」全体を名詞句の拡大構造として捉えることの必然性は疑われる、ということが明らかになった。

6.「に限らず」タイプの位置付けについての新たな提案

2節で概観したように、江口(2013)では以下のb、cを根拠に、「に限らず」タイプの句を名詞句に依存する成分と主張している。

a 太郎をはじめ、関係者を呼んだ。
b *太郎をはじめ呼んだ。(ホスト消去不可)
c *関係者を太郎をはじめ呼んだ。(ホストとの入れ替えができない)

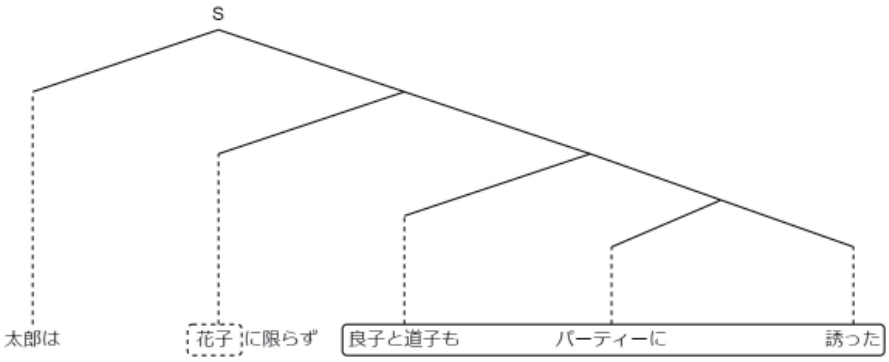
江口論文の立場からすれば、bでは、複合辞句が主要部たるホスト句を介せずに文の直接成分になったため不適格になるのである。cでは主要部であるはずのホストが修飾部より先行してしまうため不適格になるのである。要するに、この分析の根底には、複合辞句は修飾要素としてホスト名詞句の内部に収まる、という仮説があると言うことができる。

それに対して、本稿4節では「に限らず」タイプの句をホスト名詞句の従属要素とする捉え方の問題点を指摘し、5節ではいわゆる「ホスト」の複雑な性格について論じた。この二つの節の考察を通して、上にあげた江口(2013)の分析に対して別の解釈が可能だと思われる。本稿は、以下のような新しい分析を提案する。

いわゆる「に限らず」タイプの句は、「N_Aに限らずN_BもP（Pは述語）」のようにN_AとN_Bの関係を示すかのように見えるが、①統語的に「N_Aに限らずN_B」はひとまとまりにならない、②N_Aと意味的に対応する要素が後続述部全体内部に見当たらず、むしろ後続述部全体「N_BもP」が「N_Aに限らず」句と対等な関係にある現象がある、という二点を根拠にして考えると、この種の句は後続する主節全体と並立する、等位節に相当する成分として位置づけられる。

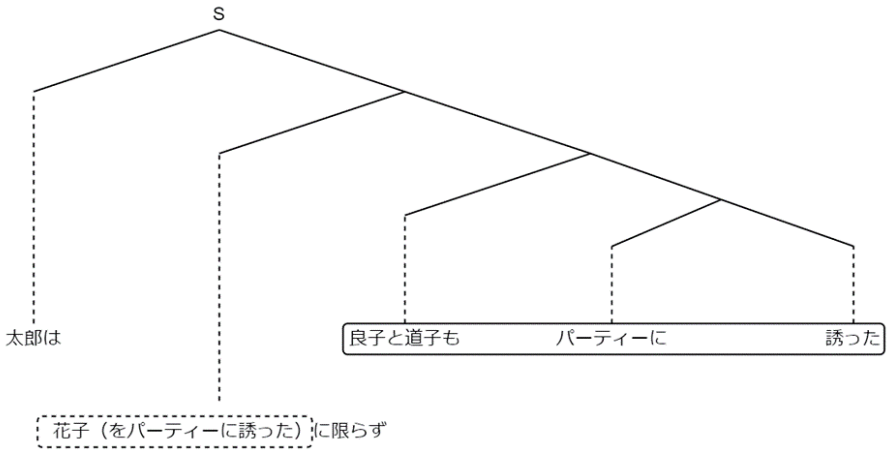
本稿の主張としては、「に限らず」タイプの複合辞句はそれに後続する主節述部全体と並列するものであり、いわゆるホストと解釈し得る名詞句や副詞句などが明示されたとしても、複合辞句とそれらの句との間に統語的な関係は認めない。例えば、「太郎は花子に限らず、良子や道子もパーティーに誘った」という文は、本稿の観点からは次のように分析する。以下では、等位関係の前後二節はそれぞれ破線と実線で囲んで示す。

(26) 太郎は**花子に限らず**、良子や道子もパーティーに誘った。



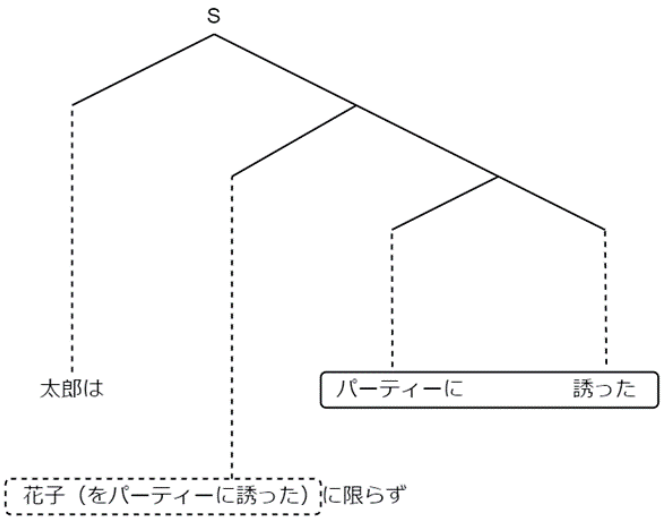
上の(26)では、「〜に限らず」句の直前に現れる名詞句「花子」といわゆるホストの「良子や道子」とは意味的に対等であると解釈され得るにもかかわらず、両者は統語的に対等な位置にはない。「〜に限らず」の直前に名詞一語が現れているものの、実質としては節「花子をパーティーに誘った」と同等だと考えられる。すなわち、次の(27)のように、「〜に限らず」は節と節とを並列的に結びつける機能を果たすが、前後の節に重複する部分が存在する場合、その重複部分は先行節において省略される、という現象として把握できる。

(27) 太郎は**花子に限らず**、良子や道子もパーティーに誘った。



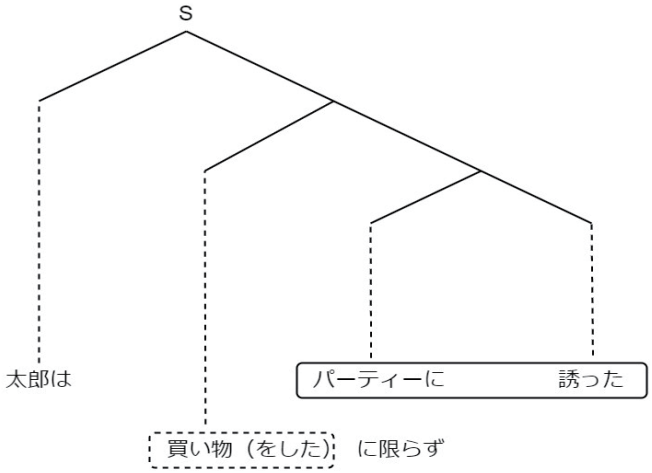
ここでは、本稿が提案する分析方法と江口(2013)が指摘した①ホストを消去ができない、②ホストと集合操作句との語順が置き換えられない、という二つの現象との対応関係について考える。まず、ホストの消去によって文が非文になるという現象については、次の(28)が示すように、そもそも「太郎はパーティーに誘った」という文は意味的な完結性に欠けているという点が挙げられる。さらに、実線で囲まれる範囲から「〜に限らず」の直前名詞「花子」と対等な意味と解釈し得る要素が消去されたため、「パーティーに誘った」だけでは前後節の意味的な対等関係が読み取れない、ということが許容できない原因と考えられる。

(28) *太郎は花子に限らず、パーティーに誘った。



上の(28)と似たような構造として、次の(29)が考えられる。(29)では「買い物」は名詞でありながらも、動詞と同じように一つの行為を表すと言える。したがって、「買い物」と「パーティーに参加する(こと)」は同じ人物による行為として、意味的に対等な関係にあると解釈でき、文の許容度は比較的高いと予測できる。この場合、実線で囲まれる後行節全体が「買い物」と意味的に対等である、と捉えられる。

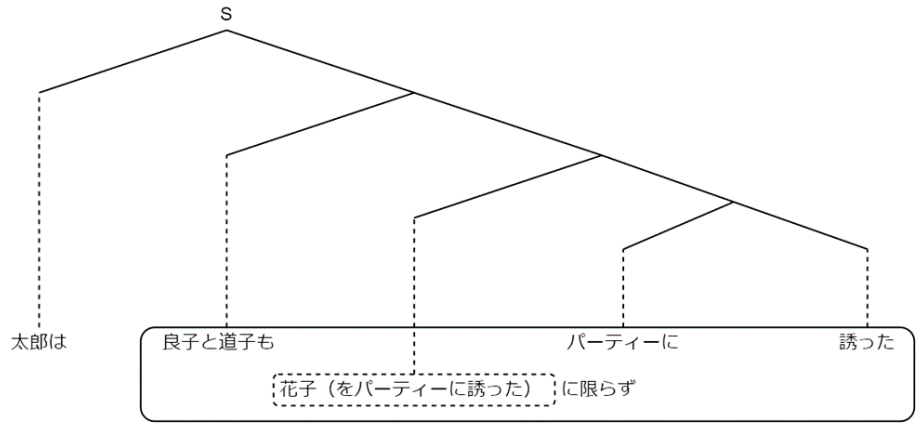
(29) 太郎は買い物に限らず、パーティーにも参加した。



次に、いわゆるホストが複合辞句より先行することによって生じる不自然さについて説明する。以下の(30)が示すように、この現象は、ホストの前置のように見えるかもしれないが、実際は等位接続さ

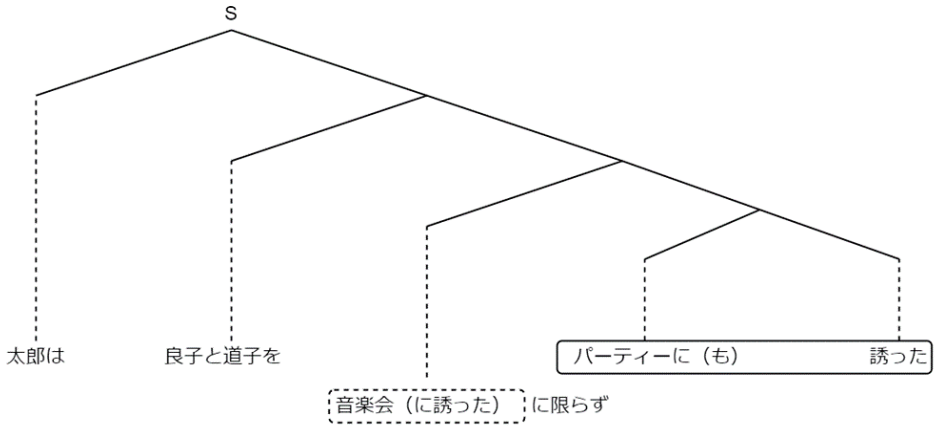
れた先行節「花子(をパーティー誘った)」が後行節「良子や道子をパーティーに誘った」の内部に割り込んだ形式として捉えられる。

(30) *太郎は良子や道子を、花子に限らずパーティーに誘った。



上の構造を成り立たせるためには、「〜に限らず」句と後続する「パーティーに誘った」との間に新たに等位接続関係を生み出す必要がある。例えば、次の(31)のように「〜に限らず」の直前にある「花子」を「音楽会」に置き替えることによって、「音楽会に誘った」と「パーティーに誘った」との間で新しい等位関係が生まれるのである。この場合、助詞「も」は当然ながらニ格名詞句「パーティーに」の後部に移動しなければならない。

(31) 太郎は良子と道子を音楽会に限らず、パーティーにも誘った。



以上示したように、「に限らず」タイプの複合辞表現を節と節との接続関係の標識として考えると、いわゆるホストを設定せずに分析することが可能になる。江口氏が提唱したいわゆる「もう一つの連体」要素である集合操作表現は、等位接続関係を表す複合辞形式として記述する可能性があると考えられる。

7. まとめ

本稿は江口(2013)で提示された「に限らず」タイプの複合辞句をめぐって、このタイプの句をいわゆるホスト名詞の従属要素として捉えることの問題点を示した。そして、「に限らず」タイプの複合辞句はそれに後続する主節述部と意味的に対等な、言わば等位節に相当する成分であるという新しい分析を

提案した。

一方、本稿で使用している、いわゆる「前後節にある重複部分を先行節で省略する」という分析方法はすべての現象に通用するわけではない。「太郎は買い物に限らず、パーティーにも参加した」の下線部は、重複部分を省略したものとは考えにくい。このように、いわば語と節を結びつけるような非対称な接続は「に限らず」タイプの複合辞表現に頻繁に見られる。この現象を含めて、「～に限らず」、「～をはじめ」、「～に加えて」などの形式で表す日本語の等位接続構造はさらに検討する必要がある。

帰　翔（き　しょう）GUI, Xiang
東京外国語大学大学院博士後期課程

参考文献

江口正（1998）「日本語の間接疑問節の文法的位置付けについて―不定的同格要素として―」『九大言語学研究室報告』19、pp.5 ～ 24

江口正（2000）「「ほか」の2用法について」『愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編』32、pp.291 ～ 310

江口正（2006）「集合を設定する「ウチ」の分布特性」、藤田保幸；山崎誠（編）『複合辞研究の現在』、和泉書院、pp.235 ～ 247

江口正（2013）「集合操作表現の文法的性質」、藤田保幸（編）『形式語研究論集』、和泉書院、pp.155 ～ 175

茂木俊伸（2000）「順序助詞句「AからBまで」について」『筑波応用言語学研究』07、pp.29 ～ 42

渡辺実（1971）『国語構文論』、塙書房

用例出典

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search）

共振する「内」と「外」

―夏目漱石『行人』における「彼岸」への情動―

The Union of the Object and the Subject: Passions toward the Other Side in Koujin by Natsume Souseki

張　希毅

Natsume Soseki was well-known as a novelist who was good at presenting ordinary Japanese people's lives in a realistic way. What made Natsume Soseki's novels so attractive was his narrative technique and his use of accumulated knowledge to create a new realm for narrative. In his mid-to-late novels, the adaption of the traditions became a basis point for him to criticize modern Japan. It can be understood as his attempt to broaden the boundaries of modern realistic narrative. There are memories of the lost pre-modern space of meaning and his hope for the Japanese nation in the coming future in his literary space. The resonance of these two sentiments brought various interpretations to his novels.

This paper focuses on the metaphorical relationships between the protagonist Ichiro and the female characters in Natsume Soseki's Koujin, to explore the mechanisms of the symbolic repressions in the protagonist's family and the society. Furthermore, it proposes to discuss the symbolism of the non-modern ideology, which tries to exclude Ichiro and the modern civilization he represents by defining him as mentally disordered. As is hinted in the final chapter by the Zen ideology, the non-modern ideology, an opponent of modern rationalism, is a set of thoughts designed for the unification of the subject and the object. Eventually, this paper plans to investigate how this ideology leads to understanding Soseki's awareness of the modern world.

【キーワード】近代、彼岸、隠喩、情動、禅

Modern, The Other Side, Metaphor, Passion, Zen

はじめに

『行人』は漱石の作品の中で極めて異色の作品と言えよう。複数の断片をもって一つの全体を構成する手法は前作の『彼岸過迄』と次作の『心』にも見られるが、他の2作の中核的な位置を占める「告白」がこの作品には見当たらない。ミステリー風に創作された『彼岸過迄』では、一連の調査と報告の末に秘められた謎の正体が自白という形で暴露される。また、『心』では、「私」と「先生」の一連のやり取りも観察者・探偵としての「私」が「先生」の秘密に迫っていくという文脈で読むことができる[1]。そして、その到達点とは先生が過去の罪を告白する遺書である。

『心』の中で「先生」が遺書を残すことに、「告白」を通じて「私」に何かを語りかけ、何らかの影響を及ぼそうとする目的を読み取ることができる。しかし、『行人』の最初の3編では、読者は語り手の二郎の視点を通じてしか一郎の重層的に錯綜する苦悩を知ることができない。最終編の「塵労」の半分を占めるのは一郎の友人Hさんからの長い手紙である。一郎が最後に発する「神は自己だ」、「僕は絶対だ」(「塵

1　小森陽一（2010）「「私」という〈他者性〉――『心』をめぐるオートクリティック」『漱石論――21 世紀を生き抜くために』、岩波書店、234-264 頁。

労」四十四）[2]という唯我独尊的な認識は、旅仲間のHさんに自分の考えを理解させるためのものではなく、自分の考えに確信を得ようとする独白のようなものである。観察される側が最終的に観察者に向けて告白することを許される他の二作とは違い、『行人』の中での一郎は最後まで観察される側に立たされている。告白の語り手と受け手を一身に収束することで、一郎の孤独が絶対化される。『行人』の中で、一郎は彼の内面を探る観察者の視線によって終始受動的な立場に立たされるのである。この受動性は自己を絶対化する一郎の内省の到達点に至るまでは、彼の性格づけの基調をなしている。

兄である一郎に対する二郎の意識も徐々に変化している。最初は家の長男であり、真面目な学者である一郎を「正面ばかり見て、遠慮したり気兼したり、時によつては恐れ入」っているが、嫂と嵐の中で一晩を過ごしたことをきっかけに、兄を「裏から甘く見」(「兄」四十三)られるようになる。この事件をきっかけに、一郎に対する優越感を覚えた二郎は保護者的な態度で一郎の様子の監視をHさんに依頼するようになる。一郎はその気質のため、親、兄弟、妻に敬遠される存在であり、家を出て下宿で暮らす二郎より、むしろ家の中にいる一郎の方こそ、家によって抑圧され、排斥される存在である。

もし、一郎と二郎の意識の変遷の軌跡がテクストを構成する経線であれば、プロットの進行と同時に、テクストに散りばめられた様々な挿話はテクストの地平を広める緯線である。その中で最も特徴的なのは数多くの「女」に纏わるエピソードである。その最初のものは第1編の「友達」に登場する「あの女」と「其娘さん」の話である。二郎の友人である三沢は宴会で知り合った体調の優れない芸者に無理やりに酒を飲ませる。後にこの芸者が病院に運ばれ、死の危機に瀕することになる。三沢の行為と芸者の急病との間にはっきりした因果性がないが、三沢は道義上の負い目を感じ、離別する際に、「あの女」と呼ばれた娘に金を渡す。三沢が芸者の「あの女」をそれほど気にかけるのは、彼女にかつて自分の家に寄宿していた彼に好意を持つ精神病の「其娘さん」の面影を感じているためである。一郎と二郎の父の話の中に登場した「盲目の女」の「天下の人が悉く持つてゐる二つの眼を失つて、殆んど他から片輪扱ひにされるよりも、一旦契つた人の心を確実に手に握つてゐる方が、遥に幸福なのであつた」(「帰つてから」十八)という言葉が端的に示したように、肉体と精神を別個のものと見做す心身二元論は作品の全体を行き渡る伏流となっている。

一郎は妻の直が弟の二郎に好意を抱いていると疑い、「おれが霊も魂も所謂スピリツトも攫まない女と結婚してゐる」(「兄」二十)と思い込んでいる。この一郎の自白を誘発したのも、一郎の読んでいるメレジスの「書翰集」の中で言及される女の肉体に対する掌握と心に対する掌握という対比である。

二郎の友人である三沢は体を病んでいる「あの女」について、「向は僕の身体を知らないし、僕は又あの女の身体を知らないんだ」(「友達」二十一)という身体の不可解さに関する感慨を発する。それとは対照的に、顔立ちの似ている「其娘さん」の自分に向けた好意を「病人の事だから恋愛なんだか病気なんだか、誰にも解る筈がないさ」(「友達」三十三)という風に精神病を理由にごまかす。このように、このテクストにおける不可知性は明らかに身体と精神の二元的な分断に依拠している。

この意味で、『行人』に前景化される問題意識は他者の心を把握できない苦痛というよりも、むしろテクストのいたるところに散見される精神と身体の分断であろう。この精神と身体の分断、そして不可知性への意識は、一見すれば「塵労」における一郎の文明の発展に由来する苦痛や超越的な志向とは別の方向に向かっている。柴田勝二は、作品の数々のエピソードにおける精神的負性と肉体的病気や「欠陥」がすべて一郎に収斂されていき、一郎自身が抱える負性と暗喩的に繋がっていると指摘した[3]。すなわち、作品の中では直や重などの「名」を持つ女性とは違い、「名」が語られていない未知の性質を持つ女

2　本論文におけるテクストの引用は 2016 年から刊行されている岩波書店の『定本　漱石全集』による。
3　柴田勝二（2006）「表象される〈半島〉――『行人』と朝鮮統治」『漱石のなかの〈帝国〉』、翰林書房、166-169 頁。

たちは一郎の性格を反映する媒体のような存在である。

本論の問題意識の焦点の一つはまさにこのように「女」に託された断片的なメタファーが「男」の一郎に収斂されていくメカニズムである。本論では、まず体を病んでいる「あの娘」と精神病の「其娘さん」のエピソードを手がかりに、身体と意識が個別に扱われる二元論的な文脈が近代文明による抑圧のもとにいかに完成されるのかを分析する。次に、合理主義的な近代とは相容れない、一種の非近代的な精神を託されるため、一郎とエピソードに登場する女たちが家と世の中に二重に抑圧される構図を論証したい。非近代的な精神を志向する一郎は、周囲から孤立し、家の中の狂人と見なされていく。この意味で、『行人』における肉体と精神の分離や狂気といった、一見無関係のように思われる文脈は、実際に近代文明と拮抗する非近代的な精神という一貫する文脈の中に統合されている。そして、本論の最後では、第4編の「塵労」の後半を占める「Hさんからの手紙」という部分と漱石が残したノートや断章を踏まえ、この非近代的な精神とは、主体と客体という二元論的な構造を超越する禅的な志向であると同時に、テクストにおける近代文明を相対化し、超越する一つの基点であることを論証する。

1.「あの女」と「其娘さん」

『行人』第1編の「友達」の中で、使用人のお貞の縁談をまとめるために、二郎はかつて自分の家に書生をしていた親類の岡田の大阪にある家を訪ねる。この家族を代表する「公」的な目的をめぐる編章の前半で、東京から大阪への人員の移動の他に、新生の中流階級の家庭的日常が克明に描き出される。しかし、すぐに移り変わる世相に対する描写が中断し、テクストの進行は急に方向を変える。縁談の件の他に、二郎が大阪に向かうもう一つの目的とは友人の三沢とともに高野山を登ることである。しかし、待ちくたびれた二郎の手元に届いたのは病院からの手紙である。三沢は大阪についた途端、病院に入ってしまっていた。そのため、二郎も病院と宿を往復する生活を開始する。その病院に芸者の「あの女」も入院している。

話が三分の一を過ぎるところで、「友達」という編の名前が示す中心的人物である三沢がようやく顔を出す構造は、「塵労」という一見異質的な部分を除けば、第2編に一郎が登場する『行人』の、初めの三編の構図を先取りするものだと思われる。この意味で、主人公の一郎が登場しない「友達」はテクスト全体における序章のような部分だといえる。ここで、注目されるのは芸者の「あの女」が死にゆく病院の文明論的位相である。

明治初期に漢方医より西洋医が圧倒的に少なかった状況の中、速やかに近代的な医療の整備と導入を完成するために、医制が明治7（1874）年に制定、公布された。医療と衛生政策全般の各種の規則を定め、日本近代医療の体制を確立したこの法令の主な目的の一つとは、「西洋医学に基づく医学教育の確立」である[4]。つまり、明治政府は医療を近代西洋文明の導入の一環として見据えていた。

作品の中での三沢の入院は、明治44（1911）年漱石の関西講演途中の湯川胃腸病院での入院経験を下敷きにしている。開業医が主導するこの病院は、まさに当時もっとも西洋の科学文明を体現する空間であった。なお、三沢が泊まる「八畳」の空間は当時の大阪の一般の病院における二等病室に相当する[5]。このように金銭的代償に準じて人間の身体を規定された空間に配置することは、合理主義に基づく西洋近代の科学文明による人間の身体の疎外と物象化を象徴しているであろう。

西洋的近代のヘゲモニーを集約的に体現する病院という空間の中で、江戸的な好色の空間を想起させる芸者である「あの女」が死にゆくこと自体が大きな意味を持つと思われる。三沢は「あの女」の病気

4　厚生省医務局 編（1976）『医制百年史 記述編』14 頁。
5　『漱石全集』「第八巻　行人」注釈、460 頁。なお、明治 37（1904）年の病院創立当時の名前は「大阪胃腸病院」である。

の原因は自分が無理やりに飲ませた酒だと疑い、別れの際に、二郎が岡田に貸してもらった金を渡す。三沢と「あの女」が金によって治療を受ける権利が保障されたのと対照的に、「あの女」と同じ年輩で危険な状態にいる娘が治療費を払えないために夜中に故郷に連れ戻される。この悲惨な退院は確かに当時の階級差を反映するが[6]、後のプロットが主に長野一家を中心に進められる点から見れば、この退院のエピソードは階級差の反映というよりも、漱石の一貫する近代的な功利主義に対する批判と見なしたほうが妥当である。

義理堅く「なかなか強情な男」(「友達」十五)とされ、酒を飲ませた自責の念に耐えきれずに「あの女」に金を渡した三沢は後に登場する一郎を彷彿させる。なお、彼の入院に漱石自身の経験が用いられたのと同じように、学者として頑なな一郎には、おそらく漱石自身の特質が多く投影されている。そして、前述した第1編における彼の登場と作品に一郎が登場する順序との類似性を考えれば、主人公である一郎に先んじて登場する三沢も、女たちと同じように一郎の性質を反映する媒体のような存在であろう。そうだとすれば、二人の「一郎」が胃腸を壊し、文明の利器である医療によって、身体の内部を探られ、再生されるのである。三沢は二郎に向かって以下の言葉を吐露して「暗然としてゐた」とされる

> 知らないんだ。向は僕の身体を知らないし、僕は又あの女の身体を知らないんだ。周囲に居るものは又我々二人の身体を知らないんだ。それ許ぢやない、僕もあの女も自分で自分の身体が分らなかつたんだ。其上僕は自分の胃の腑が忌々しくつて堪まらなかつた。それで酒の力で一つ圧倒して遣らうと試みたのだ。あの女もことによると、左右かも知れない。(「友達」二十一)

三沢を暗然とさせるのは、身体の不可知性、すなわち体が意識による掌握から逃れてしまう必然性である。この場合、唯一彼らの身体を知りうるのは西洋的医療の担い手の医者である。換言すれば、病院という象徴的な空間の中で、文明という第三項の介入によって、意識と身体の分離が達成されるのである。そこで、自分の体の一部であるはずの「胃」が、正体不明の自分の主体を脅かす忌々しい肉の塊という客体へと変貌していく。近代の功利主義原理を媒介する金銭と科学文明を代表する医療によって、「あの女」の肉体が再生され、置換されていくことになる。その結果、「外」である身体は「内」である意識から疎外されることになる。

こうした「内」と「外」の対立する構図は、柴田が指摘した『門』の中での宗助の歯の「エソ」[7]と同様、「外発的な開化」による日本の華々しい外見と内実の空虚さとの乖離を表している。金銭と文明の利器によって治療される肉体は内実である意識にとって不可知の領域に引きずり込まれることになる。この医療の介入こそ日本の開化の性質を象徴している。その結果、文明に理解、掌握される空虚な肉体・外見だけが残され、内実である精神は追放されることになった。この事態こそ医療をめぐるエピソードの中に隠された近代文明の抑圧的な構造である。また、日本の開化を集中的に体現する「あの女」が「友達」の最後までに体が治らずに、死の可能性が暗示されることも『三四郎』の中で、日露戦争後に日本が益々発展するという三四郎の見解に対し、広田先生が述べる「滅びるね」という日本の運命を暗示する予言を彷彿させる。

前に述べたように、三沢が身体を病んだ「あの女」をこれほど気にかけるのは、単に無理やりに酒を飲ませた自責の念に駆られているだけではなく、かつて自分の家に寄寓した「其娘さん」を想起させる

6　小平麻衣子（2010）「医療のお得意さま――『行人』をめぐる身体の階級」『漱石研究』第15号「行人」、翰林書房、100-114頁。

7　柴田勝二（2006）「陰画としての〈西洋〉――『門』と帝国主義」、『漱石のなかの〈帝国〉』翰林書房、133-165頁。

からである。エピソードの中に登場する「其娘さん」は、この後のプロットの展開の過程にも度々顔を出し、小説の全体を貫く一つの伏線のような存在となっている。「あの女の顔がね、実は其娘さんに好く似て居るんだよ」(「友達」三十三)という三沢の発言が暗示するように、体を病んだ「あの女」と精神病を患った「其娘さん」は、作品における分裂した肉体と精神という2つの側面を象徴する一体両面の存在である。

肉体が衰退しつつある「あの女」に施された治療は、肉体を精神から疎外させるため、健全な精神に対する抑圧、追放を意味する。同じように、精神病の娘にも何らかの抑圧を受けていると考えられる。彼女の精神病の原因は婚姻の失敗であり、彼女の主体を抑圧するのは「婚姻」ないし明治国家の家父長制を担う「家」の構造だと思われる。

未だ女性が自由に職業を選ぶことができなかった当時、婚姻がうまく行かない「其娘さん」にとって、「家」は彼女の精神を抑圧するばかりではなく、肉体の行動をも制限する「牢獄」だといえよう。もとの夫の「家」から三沢の「家」に転居した後にも、家の中で閉じこもる「其娘さん」の姿勢はまさにこの抑圧の機構を反映している。

「其娘さん」はこのような近代的な家制度に十全に順応できない人間として造形されていると言えよう。三沢に好意をもつ「其娘さん」が、三沢が外出する度に「早く帰つて来て頂戴ねと云ふ」(「友達」三十三)のは、新たな「家」の中にかつてできなかったことを三沢とともに果たそうとするためであろう。しかし、三沢がこの思いを受け止めようとしないため、彼女の意識もまた空転せざるを得なくなり、最終的に西洋文明の抑圧を体現する病院に葬られることになる。

2. 家と「世の中」

プロットが進むにつれ、家族同然に思う下女のお貞の縁談が思うより順調に進んでいるのを不思議に思い、二郎は岡田への訪問を決意する前に、「其娘さん」の不幸の婚姻を思い浮かべる。そこで、「女」である「其娘さん」は彼に「男」の一郎を連想させる。

> 自分の想像は、此時其美しい眼の女よりも、却つて自分の忘れやうとしてゐた兄の上に逆戻りをした。さうして其女の精神に祟つた恐ろしい狂いが耳に響けば響く程、兄の頭が気に掛つて来た。兄は和歌山行の汽車の中で、其女は慥かに三沢を思つてゐるに違ないと断言した。精神病で心の憚が解けたからだと其理由迄も説明した。兄はことによると、嫂を左右いふ精神病に罹らして見たい、本音を吐かせて見たい、と思つてるかも知れない。さう思つてゐる兄の方が、傍から見ると、もうそろそろ神経衰弱の結果、多少精神に狂ひを生じ懸けて、自分の方から恐ろしい言葉を家中に響かせて狂ひ廻らないとも限らない。(「帰つてから」三十一)

> 兄が自分より神経質な事は、兄も自分もよく承知してゐた。けれども今迄兄から斯う歇私的里的に出られた事がないので、自分も実は途方に暮れて仕舞つた。(「兄」二十)

この2節を合わせてみれば、漱石のテクストに現れる幾つかの精神状態を意味する病の相対位置が分かるようになる。つまり、漱石の各テクストに頻繁に出てくる男性の神経質の表徴である「神経衰弱」の度合いが進めば、狂気に発展していく。そして、ヒステリーはその狂気に相当し、あるいは近い位置にある。

『門』の主人公である宗助は自分の精神的不安を神経衰弱と認識する一方、子供の喪失を苦悩する御

米をヒステリーだと思っている。漱石のテクストでは、女は往々にして男より神経質的な存在とされている。宗助と『心』の中の「先生」を代表とする男性主人公たちは主に近代文明に抑圧されているのに対し、三沢の「家」から「病院」に移動され、最終的に死亡する「其娘さん」のエピソードが反映するように、女たちは「家」という牢獄と近代文明に二重に抑圧されている。

山本芳明が指摘したように、子宮からくると思われたヒステリーは当時の文脈においては一般的に女性固有の病気として論じられた[8]。それが男性である一郎の身にあらわれたとすれば、一郎も「其娘さん」と同じように、「家」と「世の中」によって二重に抑圧された存在であることになる。

一郎は長野家において明らかに周縁化された異質の存在である。家長を頂点とする日本近代の家父長制では、「家」の性格は家長である父に集約されると言えよう。将来的に家長になることを約束された長男の一郎もこの中心に比較的に近い存在である。しかし、かつて役人だった家長の父は交際家で世渡りの上手い男であり、偏屈な学者である一郎とはまったく違う人種である。一郎の眼から見ればむしろ弟の二郎こそ「矢つ張りお父さん流」の「今日の日本の社会」を表す「上滑りの御上手」な「軽薄もの」(「帰つてから」二十一)である。ここでの「上滑り」という言葉は、漱石の講演「現代日本の開化」にある「日本の開化は皮相上滑の開化である」という評価を想起させる。この意味で、長野家自体は当時の日本社会の「外発的開化」を象徴する微視的な空間だと考えられる。「学問をして、高尚になり、かつ迂闊になり過ぎた」一郎は「家中から変人扱ひにされるのみならず、親身の親からさへも、日に日に離れて行」っていく(「帰つてから」二十一)。

なお、一郎の学者の身分は漱石本人の経験と趣味を連想させる。『文学評論』の「序言」における作品の「歴史又は批評」についての議論の中では、趣味による態度としての鑑賞は「科学」による批評と相対する位置におかれている[9]。ローカルな特殊性を代表する「趣味」は科学に代表される普遍性、合理主義と拮抗する漱石の文学意識の一端を担っている。前近代的な「色」の空間を想起させる芸者の「あの女」や、世阿弥作の謡曲の中で登場する平家の武将の藤原景清を彷彿させる「盲目の女」といった一郎自身のメタファーが示すように、一郎とは近代文明の普遍性とは相容れない非近代的あるいは前近代的な精神を集約的に体現する存在である。しかし、その内実を知るには、第4編の「塵労」を待たなければならない。

一郎にとって、もっとも親密な関係が集約される場である家庭でさえ、自分を抑圧する今日の日本の開化を照らし出す微視的な空間である以上、彼の目に世の中はまさに重層的な牢獄のように映るのであろう。一郎は妻の直と母とともに和歌浦に旅する。そこで、大阪から来た二郎と合流し、二人は一緒に観光エレベーターに乗る。このエピソードは明治43(1910)年に和歌浦の旅館望海楼が客寄せのために造っていた当時日本初の鉄骨製エレベーターに関するものである。これも明治44(1911)年8月に『現代日本の開化』の講演を行うために和歌山に訪れた際にこのエレベーターに乗った漱石自身の経験に基づいている[10]。当時の日本の技術力を代表する機械をめぐって以下の会話が交わされる。

> 二人は浴衣掛で宿を出ると、すぐ昇降器へ乗つた。箱は一間四方位のもので、中に五六人這入ると戸を閉めて、すぐ引き上げられた。兄と自分は顔さへ出す事の出来ない鉄の棒の間から外を見た。さうして非常に鬱陶しい感じを起した。
>
> 「牢屋見たいだな」と兄が低い声で私語いた。

8　山本芳明(1989)「ヒステリーの時代――「或る女」序説」『明治大学文学部研究年報』36期、93-120頁。
9　『漱石全集』「第十五巻　文学評論」、21-26頁。
10　和歌山市史編纂委員会編(1979)『和歌山市史　第8巻』

「左右ですね」と自分が答へた。

「人間も此通りだ」

兄は時々斯んな哲学者めいた事をいふ癖があつた。自分は只「左右ですな」と答へた丈であつた。けれども兄の言葉は単に其輪廓位しか自分には呑み込めなかつた。(「兄」十六)

一郎がこのエレベーターを牢獄と見做したのは「東洋一」と誇るこのエレベーターへの漱石自身の「現代日本の開化」に対する意識の反映であろう。そこで、話の流れは一変し、一郎は人をも自分を禁錮する牢獄だと言う。もっとも、これは彼が相手の二郎に向けた言葉とも理解できる。つまり、「人間もこの通りだ」における「人間」は主に家族として身近にいながら、自分を理解せずに、世の中の代弁者である二郎を指している。二郎の一郎に対する抑圧は、単に家長である父と同じように「今日の日本社会」を体現する存在として一郎の主体性を脅かしているだけではなく、嫂の直との関係にも表現されている。一郎は直が自分ではなく、二郎に惚れていると疑っている。彼女の真意を試すために、一郎は二郎に直と二人きりで泊り、その様子を自分に報告するように頼む。

直の身体と心はともに、夫の一郎に対して閉ざされたままである。直は、もっと身近にいながらも、未知の存在として一郎の精神を苛みつづけている。三浦雅士が『行人』における対話について指摘したように、「直は二郎には気楽に対応できるが、一郎にはそうはいかない」のである[11]。和歌山で二人きりで過ごした一晩の中での誘惑的な言動を皮切りに、直の心は徐々に二郎に接近していくように見える。ここで、直と一晩を過ごしたことをきっかけに、尊敬し、恐れていた兄を裏から見る、つまり相対化する二郎の意識の変化は一種の近代的な自己の目覚めだと理解すべきである。このように、近代文明による非近代的な精神に対する抑圧という象徴的な文脈はテクストのプロットの進行と平行する『行人』のサブテクストを形成しているといえよう。

3. 文明という牢獄

『行人』の前3編を特徴づける精神と身体の分断と呼応するように、主人公である一郎の苦悩も多岐にわたるように見える。前の3編の主に妻の直の心を理解できないことに集約される一郎の苦悩は、第４編の「塵労」に、さらに科学文明の進歩がもたらす人間全体の不安に発展する。Hさんからの報告の中で、一郎は人間の不安について以下のように語っている

「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許してくれた事がない。徒歩から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、それから飛行機と、どこまで行っても休ませてくれない。どこまで伴れて行かれるか分らない。実に恐ろしい」(「塵労」三十二)

以上の一郎の話から見受けられるように、一郎の不安は科学文明の世紀である二十世紀という近代の時間軸に向けられている。これは一見すれば、前3編の人の心を理解できずに空転する一郎の苦しみと断絶しているように見える。この点もこれまで多くの論者によって指摘されてきた。大岡昇平は一人の知識人の内面に関する描写が、直接に「塵労」以前の部分と主題上の分裂をもたらし、「思想」をそのまま文学の素材として使用すべきではないと批判した[12]。また、三浦雅士は第４編を小説全体の筋から浮

11　三浦雅士（2010）「恋愛と家父長制――『行人』ノート」『漱石研究』第 15 号「行人」、翰林書房、30-44 頁。
12　大岡昇平（1988）「文学と思想――『行人』をめぐって」、『小説家夏目漱石』、筑摩書房。

いている冗長な部分と見做し、「塵労」を切り離し、残りの3編を家父長制の枠組みの中で論じた[13]。

しかし、すでに見てきたように、一郎が彼を取り巻く周囲の環境に抱いている違和感は、非近代的な意味空間を志向する主体が、近代の文明の空間に抛り出されることに由来する。体を病んでいる「あの女」のエピソードが示したように、近代という時間がもたらす意識と身体の分離は、そのまま一郎の直に対する認識に反映される。一郎にとっては、直は心だけではなく、身体も彼に対して未知なままである。それは意識と身体を別々に取り扱う近代文明と違い、一郎が象徴する非近代的思考では精神と身体ないし主体と客体に対する観念が本質的に異なるためである。

しかし、近代の時間に抛り出される一郎は、むしろこのことを十全に認識し得ずにいる。それ故に、周りの環境に強烈な違和感を抱いている。そこで、『行人』の最後の編である「塵労」の中で彼がHさんとともに旅に出るのは近代的な生活空間を離れ、自然の中で自分の苦悩を見極めるためであろう。彼のそこでの最終的到達点は「絶対」という認識である。一郎の言う「絶対」の意味を解明する前に、まず、彼が自分の運命について提示する３つの可能性に焦点を当てることにする。旅の中で、一郎は自分の運命について次のように予言する

> 「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない。」
> 兄さんは果して斯う云ひ出しました。其時兄さんの顔は、寧ろ絶望の谷に赴く人の様に見えました。(「塵労」三十九)

一郎が自分の運命について下した３つの予言は、どれも絶望的な陰翳に覆われている。彼の言う「死」は、それに続く「死ぬのも未練に食いとめられそうだ」(「塵労」三十九) という発言から見れば自殺のことである。それも、近代文明による抑圧と排除の成功を意味するのであろう。

そして、一郎の苦痛の根源の一つは、近代文明を反映する微視的な空間である家に由来するものである。この「非近代」と「近代」との雑居に、一郎が予言した二番目の可能性である「気が違う」――狂気に陥る――の一つの方向性が読み取れる。

ミシェル・フーコーは『狂気の歴史』で、かつて中世では絵画や文芸の中で神の精神に近すぎた存在として豊饒な意味をもった狂気が、歴史の発展とともに、社会的に排除され、合理主義的な精神医学の枠組みの中で解釈されていく歴史を辿った。そこでは、狂気をめぐる一連の歴史的経緯に二つの事態が生じていたとされる。一つは狂気に対する認識論的な変容である。それは以前の理解を離れた、合理主義による狂気の解釈である。もう一つは、狂人に対する制度的な排除である[14]。実際に、西洋を範式として文明開化を推進した日本でも、類似する制度化が行われていた。

まずは、精神病患者に対する社会的排除の一角を構成する「私宅監置」について見ておこう。日本では明治７(1874)年に発布された医制ですでに、東京府、京都府、大阪府という３つの地域に対し、癲狂院[15]の設置が求められた。また、明治12 (1879)年に上野恩賜公園内に「東京府癲狂院」が設置された。しかし、当時患者の需要に比べ、病院の数は極めて不足していた。入院できるのは、極一部の裕福層に限られた。下流階級ないし作品中の長野家を代表とする中流階級を中心に取られた措置は「私宅監置」である。いわゆる「私宅監置」とは、私宅の中に一室を設け、精神病患者を監禁することである。そして、民間に広く採用された「私宅監置」は、明治33 (1900)年に発布された「精神病者監護法」で本格的に制度

13　同注 11。
14　ミシェル・フーコー〔著〕、田村俶〔訳〕(1975)『狂気の歴史』、新潮社。
15　当時の精神病院に対する一般的な呼称である。

化された。この場合、患者の家族、主に親兄弟や配偶者が責任を負う後見人となり、内務省の管理のもとで、患者を自宅の一室に監禁することになった[16]。

この家の中での排除に合った当時の精神病患者の生活状態は極めて劣悪であり、ほとんどは隔離されただけである。彼らに対する治療や物質的な保障は乏しかった。当時東京帝国大学医科大学精神病学教室主任であった呉秀三は「私宅監置」の実態を調査し、出版した『精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的視察:附・民間療方ノ実況等』に、「我邦十何万ノ精神病患者ハ實ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ生マレタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ」という一文を記した[17]。呉秀三の一文に端的に示されるように、国家と家庭の共謀のもとで、一郎のような、狂人と思われた数多くの人々が、「家」という構造の中で、徹底的な抑圧と排除を余儀なくされた。

一郎が、死と同列の「気違い」に定められた自分の未来の可能性を口にした後、絶望の谷に向かうような顔をするのも、「私宅監置」というあり得る未来を予見したのであろう。また、その場合、将来的に家長になることが約束された長男である一郎はその立場を奪われ、家を相続するのは自然に父の世渡りのいい性質を継承した二郎である。

その場合、二郎が狂人である一郎の後見人となり、また、妻の直と娘の面倒を見ることになる。つまり、文明という強制力のもと、非近代的な精神を象徴する一郎は、家の中にいながらも、いないも同然とされ、認識的かつ空間的に二重に抑圧、排除されることになる。

『門』と『心』に見られる「女」を奪う事件を通じて描き出される抑圧の文脈は、『行人』に潜在する一つの可能性として提示されている。二郎を始めとする家族が一郎を異質な狂人と見なすことは一種の認識論的な変容であれば、この潜在する文脈はまさに一郎に対する制度的な抑圧であろう。この場合、二郎と一緒にエレベーターに乗る際の人間を牢獄と見る一郎の発言は自分自身の惨憺たる未来に対する予言としても捉えられるであろう。

4.「父母未生以前」

ここまで見てきたように、前3編で、一郎が周囲に理解されずに、家の中の狂人と見なされることは非近代的な主体に対する一種の抑圧、排除の機構のアレゴリーとなっている。それはつまり、異質な原理を近代の枠組みの中で解釈し直すことによって、その本来の意味を隠蔽、簒奪することである。狂気という文脈にさらなる考察を加える前に、まず、一郎が志向する非近代的な精神の内実を解明する必要がある。

漱石の作品で、科学文明の原理として度々言及されるのは遺伝の学説である。『行人』にも当時の最先端の科学の学説として遺伝が言及される。しかし、一郎の目に映る遺伝は、身体の形質的な遺伝というより、むしろ一種の気質の遺伝である。例えば、一郎が二郎の世渡りのいい性質を「御父さんの遺伝を受けてゐる」(「兄」十八)と解釈している。それに対し、二郎はこの遺伝を「今の日本社会があれでなくつちや。通させない」(「帰つてから」二十一)という時代の趨勢に還元する。つまり、漱石のテクストにおける「遺伝」の一つの意味は世の中の趨勢や原理を媒介的に体現することだと理解できる。ならば、一郎が遺伝する非近代的な精神はどのように捉えられるべきであろうか。

漱石の前期の小説『趣味の遺伝』では、語り手の「余」は浩さんが一目惚れする意中の人への恋愛感情を「父母未生以前に受けた記憶と情緒」(三)という先祖からの遺伝だと認識する。この先祖の話とは

16　国立精神・神経センター（2011）『わが国の精神保健福祉』「平成 23 年度版」、太陽美術出版部、19-23 頁。
17　呉秀三・樫田五郎（1920）『精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的視察 : 附・民間療方ノ実況等』、内務省衛生局、138 頁。

河上才三という武士と娘の先祖の婚約が、御上の意向によって引き裂かれたという伝説的な逸話である。ここに出てくる「父母未生以前の本来の面目」という禅の公案は『趣味の遺伝』だけではなく、『門』や『行人』などの作品の終盤に、作品の核心に迫る手がかりとして提示されている。この意味で、漱石の文学を理解するための一つの重要な概念といえよう。

『行人』では、「父母未生」は一郎の「何うかして香厳になりたい」(「塵労」五十)という願望から始まる、禅僧の香厳をめぐる話の中にあらわれる。そこで、「父母未生」と「香厳撃竹」という2つの禅の公案によって、「塵労」の宗教的雰囲気が一気に濃密になってくる。一郎の自分の未来に対する３番目の予言である「宗教に入る」の宗教は明言されないが、このような禅的な地平だと思われる。

『門』での宗助の参禅は漱石が菅虎雄の紹介で、明治27（1894)年12月23日から翌年の1月7日まで鎌倉五山の臨済宗円覚寺の帰源院にこもり、釈宗演のもとで修行した経験に由来する。その時に出た公案はまさに「父母未生以前の本来の面目」である。この経験について漱石は、『文学論ノート』に「超脱生死」というタイトルのもと、以下のように記している

> 我此問に向つて一字を著するを得ず
> 吾ガ云フ所ノ者ハ幻象界ノコトナリ幻象以外ニ渡レバ不可許空想ニ帰ス.根蒂ナキ迷想ニ帰ス.幻象以内トハ意識ヲ離レズトノコト智ヲ離レズ情ヲ離レズ又意志ヲ離レズトノコトナリ之ヲ換言スレバ生ニ就テ云フコトナリ
> 十年前円覚ニ上リ宗演禅師ニ謁ス禅師余ヲシテ父母未省以前ヲ見セシム。次日入室見解ラ呈シテ日ク物ヲ離レテ心ナク心ヲ離レテ物ナシ他ニ云フベキコトアルヲ見ズト禅師冷然トシテ日クソハ理ノ上ニ於テ云フコトナリ
> （後略）

以上のノートから見れば、「香厳になりたい」と並ぶ一郎のもう一つの願望である「僕は是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」(「塵労」四十四)という生死を超越する志向は漱石文学の草創期にすでに問題意識に浮上していたことが分かる。そして、一郎が辿り着いた「僕は絶対だ」という境地は、この生死を超越する志向のことだと分かる。しかし、上述のノートにも記されるように、「超脱生死」という問題意識の濫觴と思われる公案「父母未生」に対する「物ヲ離レテ心ナク心ヲ離レテ物ナシ」という回答は、禅師に理に拘るのを理由に斥けられた。

「物ヲ離レテ心ナク心ヲ離レテ物ナシ」は人間の意識という主体をもって、客体である世界を観測していくということであろう。これも近代の科学文明の原理では世界を観察、解剖する対象と見なすことに通底する。この意味で科学の極致の形態はまさに体を病んだ「あの女」と精神病の「其娘さん」に投影される肉体と精神への医学の介入である。その場合、自らの身体ないし精神までもが、観察、解剖の対象として疎外されていく。このように過剰に発展する文明について一郎は次のような見解を述べている

> 「人間全体が幾世紀かの後に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに経過しなければならないから恐ろしい。一代のうちなら未だしもだが、十年間でも、一年間でも、縮めて云へば一カ月間乃至一週間でも、依然として同じ運命を経過しなければならないから恐ろしい。君は嘘かと思ふかも知れないが、僕の生活の何処を何んな断片に切つて見ても、たとひ其断片の長さが一時間だろうと三十分だらうと、それが屹度同じ運命を経過しつつあるから恐ろしい。要するに僕は人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさ

を経験してゐる」(「塵労」三十二)

一郎は科学文明による不安を人間全体と自分一人という2つの側面で論じている。人間全体が経験する不安は、文明の発展に伴い、人間自身の物象化と疎外も「進んで止まる事を知らな」くなる現状を指すのであろう。そして、話の矛先が一転し、人間全体の不安が彼一人に集約すると言い出したのはいささか不自然に見える。しかし、これは彼が非近代的な精神を志向するためであろう。近代文明によって排除される非近代的な精神は、時間的な位相から見れば前近代的だともいえよう。実際に、これから見ていくように、それは主体と客体の二元的な構造を超越する禅的な志向である。

引用した一郎の発言は、まさに前近代から近代へ移行する日本の様相を象徴的に語っている。この発言から分かるように、『行人』において、主人公の一郎は単に一種の非近代的な精神の代弁者であるだけではなく、近代化を経験する日本のメタファーでもある。漱石が講演「現代日本の開化」で批判したように、西洋が百年をかけて達成した開化を日本がその半ばに足らぬ歳月で完了しようとするために、国全体が神経衰弱を患っていた。そして、近代日本を象徴する神経衰弱を患う一郎もまた「刻一分の短時間に煮つめた恐ろしさを経験」せざるを得なくなる。

「超脱生死」のノートの後半では、漱石は「物ヲ離レテ心ナク心ヲ離レテ物ナシ」という二元論から、一歩も踏み出せず、一種の禅学批判に転じた。禅門の「彼等を見るに遂に山師と云ふを得ず狂人と云ふを得ざるを如何せん」という一文でノートを締め括った。しかし『行人』では、禅とそれが代表する非近代的な志向は、近代文明を相対化する一つの基点として提示される。漱石の禅に対する思考が、このノートを書いた後に一つの大きな転回を迎えたといえよう。

「塵労」の香厳の話は『大正蔵』の中に収録される『潭州溈山霊祐禅師語録』における「香厳撃竹」という公案から由来する。香厳は石が竹に当たった音を聞いた途端に、音という外界と我という内面が一体であることを悟り、内と外を倶に忘れることで、禅の境地を開いた[18]。一郎がすべての「知」を投げ捨てた香厳に対する憧憬は、自我の内面と現象を二項対立的に捉える合理主義的な知の構造を捨象する心境の表れであろう。

以上からみれば、一郎の言う「僕は絶対だ」の意味は明白になってくる。漱石が「超脱生死」というノートを記したのは鎌倉参禅の10年後の明治38(1905)年の初頭だと思われる。その翌年の明治39(1806)年に彼は以下の断章を残した。そこに「超脱生死」の結論からの思想の転回が見受けられる

> 主客は一なり。但便宜の為めに之を分かつ。物に於テ色ト形ヲ分ツガ如ク。文ニ於テ想と形トヲ分ツガ如ク。物ト心ヲ分ツが如シ。
>
> 物ト心トハ本来分ツベキ物ニアラズ。何人モ之ヲ分チ得ルナシ。天地山川日月星辰悉ク是自己なり。但コノ自己ノ存在ヲ明瞭ナラシムル為メ、又自己ノ存在ヲ容易ナラシメン為メニ之ヲ主客ノ二ニ分ツニ過ギズ。分カチタル後ハ自己ヲ離レテ万物存在スルニ至ル。
>
> 天地ノ事ハ皆夢幻ノ如只一事の炳乎トシ争フベカラザル者アリ、自己ノ存在是ナリ。万物ハ影ノ如シ、影ノ消エル時、影ノ死スルトキ猶儼然トシテ実在スル者ハ自己ナリ。自己慳カナル者ナシ。故ニ自己程貴キ者ナシ。

この断章から見られるように、一郎の「僕は絶対だ」という独我論的な発言は主体と客体という内外の境界線を解消することで「天地も万有も、凡ての対象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在

18　李潤生(2016)「香厳智閑―如来禅と祖師禅」『禅宗公案』宗教文化出版社、100-112頁。

する」(「塵労」四十四)というような禅的な境地に達することである。修善寺登山の途中に一郎が周囲の風景を指して「あれ悉く僕の所有だ」(「塵労」三十六)と言い放ったのも、合理主義的な近代文明によって分断された主体と客体を統合しようとする心境のあらわれであろう。

「塵労」における一郎の旅は、禅的な絶対の精神を覚醒する道程と言えよう。実際に、一郎の意識は常に非近代的なものへの情動によって牽引されている。それは近代文明の彼方にある彼岸的なものでもある。この意味で、第4編の「塵労」における一郎の旅の舞台も前の3編のような近代文明の都市空間とは異なる原理をもつ彼岸的な空間だと思われる。近代文学における自然の描写について、柄谷行人は近代文学と心理学の共謀によって、かつて一つの意味構成に統括される人間の心理と風景が互いへの疎外を余儀なくされ、そこで、人間の内面に眺め解釈される風景が立ち上げられたと指摘した[19]。一郎の旅する自然の空間はまさにこのような近代文明の参入以前の「絶対」の原理のもとで、人間と風景が一体となる空間である。

「塵労」の後半部の「Hさんからの手紙」は、三重の意味での彼岸性によって特徴付けられる。1つ目は非近代的な精神に回帰しようとする一郎の情動である。2つ目は「Hさんの手紙」の舞台という近代的空間と異なり、禅的な原理に支配される自然空間である。そして、最後は近代精神の持ち主の二郎の視点から逃れるHさんの語り自体の彼岸性である。

前にも触れたように、「塵労」後半部の手紙の部分は今まで多くの先行研究にテクストの構造上の破綻として指摘されてきた。なお、身体と精神、狂気の2つのテーマの他に、「Hさんからの手紙」における「絶対」の精神などが提示されていることから見ると、『行人』がテーマと構造の両方に多重に分裂しているように見える。作品の最後の手紙の部分に託された漱石の意図を解明するために、前節の「絶対」をめぐる議論を踏まえ、肉体と精神そして狂気という2つのテーマを整理する必要性が生じてくる。

一郎はその性質からして「大小となく影で狐鼠々々何か遣られる」(「兄」七)のを嫌い、裏と表のない「誠実」を求めている。この意味で、世間体を繕うことを重んじる二郎や父と区別される異質な存在である。二郎と父を軽薄ものと批判し、妻の直を始めとする周囲の家族に裏と表のないように行動させ、本音を晒しださせようとする一郎はやがて周囲から孤立し、家の中の狂人と見なされる。三沢に好意を抱いている「精神病の娘さん」について、一郎は二郎に以下のような見解を述べている

> 「人間は普通の場合には世間の手前とか義理とかで、いくら云ひ度つても云へない事が沢山あるだらう」
>
> 〔中略〕
>
> 「所でさ、もし其女が果たして左右いふ種類の精神病患者だとすると、凡て世間並みの責任は其女の頭の中から消えて無くなつて仕舞ふに違なからう。消えて無くなれば、胸に浮んだ事ならな何でも構はず露骨に言へるだらう。さうすると、其女の三沢に云つ言葉は、普通我々が口にする好い加減な挨拶よりも遥に誠の籠つた純粋のものぢやなからうか」
>
> 〔中略〕
>
> 「噫々女も気狂にして見なくつちや、本体は到底解らないのかな」(「兄」十二)

一郎の発言の中で、精神病つまり狂気という近代文明によって異端視され、排除されるものはかえって人間を世間の手前の桎梏から解放する「誠の籠もった」純粋な状態とされている。裏と表の境が

19　柄谷行人（2008）「風景の発見」『定本　日本近代文学の起源』岩波書店、7-41頁。

解消される精神病は「Hさんの手紙」の文脈から見れば、主客、内外の二項対立的な図式を超越する「絶対」の境地に近い。後に再び三沢と娘さんについて話し合う際に、二郎は妻の心を理解できずに、苦悩している一郎が直を「精神病に罹らして見たい、本音を吐かせて見たい」(「帰つてから」三十一)と考えているのではないかと疑う。これも、「絶対」という前近代的な精神を志向する一郎が、妻や周りの家族に身体という「外」に隔絶される「内」なる「誠」つまり意識を引き出そうとしているためであろう。

その際に、一郎が使った最も極端な手段は直に暴力を振るうことである。一郎は自分の暴力に対し、ただ沈黙するだけの直の身体に「残酷」さを感じている。(「塵労」三十七)この場合、まさに意識の発露を拒絶する身体が、「絶対」を求める一郎にとってのなによりの否定であろう。この意味で、「Hさんの手紙」における近代文明と拮抗する「絶対」の精神は意識と身体、狂気と正常といったテクストにおける重層的なテーマの到達点だと言える。しかし、前近代的な「絶対」への意識は、『行人』の前の3編では、意識の発露を拒絶する身体のように、近代人の二郎の語りによって遮られ、意識と身体、正常と狂気といった互いに関係のないようなテーマを通してしかその片鱗を窺うことができない。これも「Hさんの手紙」という一見異質な部分の価値の所在であろう。

一郎と同じ学者でありながら、社会的で呑気な人間として描かれるHさんは報告者であると同時に、前近代的な精神に回帰しつつある一郎を近代社会とつなげる媒介的な存在といえる。一郎を異質な他者と見なす弟の二郎より、むしろ一郎の話を聞いて感心し、一郎を取り巻く雲を散らしてあげたいと願う友人のHさんの語りには一種の客観性とぬくもりが感じられる。「塵労」の最後で、自分の手紙の価値について、Hさんは以下のように述べている。

> 私の見た兄さんは恐らく貴方方の見た兄さんと違つてゐるでせう。私の理解する兄さんも亦貴方方の理解する兄さんではありますまい。もし此手紙が此努力に価するならば、其価は全くそこにあると考へて下さい。違つた角度から、同じ人を見て別様の反射を受けた所にあると思つて御参考になさい。(「塵労」五十二)

「Hさんからの手紙」という「違った角度から」の一郎の「反射」によって、手紙の前の部分の二郎の語りはその信用性を失い、相対的な立場に立たされることになる。この意味で、「Hさんからの手紙」と『行人』というテクストの独特な構造には、二郎の語りが象徴する近代文明の一環として西洋から移入された近代文学とリアリズム小説の制度をその内部から相対化する意識が込められているのであろう。また、手紙の部分によって、二郎の語りが撹乱され、その中の断片のような意識と身体そして狂気といったあたかも確実な一貫性のないような複数のテーマが一郎の前近代的な「絶対」への情動のもとに、統合されることになる。

終わりに

『行人』において、「絶対」という非近代的な精神は近代文明による人間と物との休むことのない争いを相対化する地平として提示されている。しかし、この種の原理は「塵労」の最後でむしろ否定的な形で描かれている。一郎は最後に、「絶対」の境地を認めた上で、「絶対」に到達することが出来ない苦痛を語っている

> 僕は明かに絶対の境地を認めてゐる。然し僕の世界観が明かになればなる程、絶対は僕と離れて仕舞う。要するに僕は図を披いて地理を調査する人だつたのだ。それでゐて脚絆を着けて山河

を跋渉する実地の人と、同じ経験をしやうと焦慮り抜いてゐるのだ。(「塵労」四十五)

これから自然から都市にもどり、文明の時間を生きていく一郎は、禅的な「絶対」の観念を抱擁し、過去に遡行するのは不可能である。一郎のアンビバレントな苦痛の根源は「図を披いて地理を調査する」二十世紀の人間として、彼岸に存在する「絶対」の精神に回帰することの不可能性であろう。

作品の中で一郎は自分の矛盾について「自分のしてゐる事が、自分の目的になつてゐない程苦しい事はない」(「塵労」三十一)と言っている。彼のしていることは非近代的な「絶対」の精神に接近しようとすることであるが、その不可能性のために、一郎の苦痛がますます深まっていく。小説の最後で、Hさんはぐっすり眠っている一郎の姿を見、彼が「此眠から永久覚めなかつたら嘸幸福だらうといふ気が何処かでします。同時にもし此眠から永久覚めなかつたらさ嘸悲しいだらうといふ気も何処かでします」(「塵労」五十二)という感慨を漏らす。彼岸への情動が沈静化し、ぐっすり眠っている一郎は幸福であるが、夢中にしか近代文明の抑圧を免れ、「絶対」を抱擁し、安息の一時を迎えることができないのは何より悲しいことである。

一郎の苦痛を解消するには、「外発的な開化」による抑圧と排除の構造が解消される未来に到達しなければならない。Hさんは一郎の「予期通りに」彼に「向かつて働き懸ける世の中」が「今の世の中より遥に進んだもの」(「塵労」三十八)だと感じている。まさに一郎が象徴する非近代的な精神は近代日本の「外発的開化」を脱却する未来に通じる基点として提示されている。『行人』における前近代と近代の精神をそれぞれに象徴する一郎と二郎が同居するという構造は、丸山真男の『日本の思想』の中での以下の見解を想起させる

> 新たなもの、本来異質的なものまでが過去との十全な対決なしにつぎつぎと摂取されるから、新たなものの勝利はおどろくほどに早い。過去は過去として自覚的に現在と向きあわずに、傍におしやられ、あるいは下に沈降して意識から消え「忘却」されるので、それは時あって突如として「思い出」として噴出することになる。[20]

まさに、自分の固有の属性を自覚せずに、近代を象徴する二郎や「家」によって抑圧され、一郎は潜在する狂気の文脈のように、常に識閾下の領域まで追いやられる可能性に晒されている。しかし、彼の旅が象徴する「自己への発見」とともに、こうした前近代的な地平が、「思い出」としてテクストの物語の時間が流れる表層の意識の世界に「噴出」することになる。このような彼岸への情動は、「僕は迂濶なのだ。僕は矛盾なのだ。然し迂濶と知り矛盾と知りながら、依然として藻掻いてゐる」(「塵労」四十五)という彼の言葉が示すように、一郎の自我に対する断罪という否定のプロセスを経、新たな精神を結実する可能性として二郎たちの代表する現在の地平を常に相対化しつつあるのであろう。

張　希毅(ちょう　き) ZHANG, Xiyi
東京外国語大学大学院博士後期課程

20　丸山真男（1961）『日本の思想』、岩波書店、13 頁。

参考文献

1. 大岡昇平(1988)「文学と思想――『行人』をめぐって」、『小説家夏目漱石』、筑摩書房
2. 小平麻衣子(2010)「医療のお得意さま――『行人』をめぐる身体の階級」『漱石研究』第15号「行人」、翰林書房
3. 柄谷行人(2008)「風景の発見」、『定本　日本近代文学の起源』、岩波書店
4. 厚生省医務局 編(1976)『医制百年史 記述編』
5. 国立精神・神経センター（2011)『わが国の精神保健福祉』、「平成23年度版」、太陽美術出版部
6. 小森陽一(2010)「「私」という〈他者性〉――『心』をめぐるオートクリティック」、『漱石論――21世紀を生き抜くために』、岩波書店
7. 呉秀三・樫田五郎(1920)『精神病者私宅監置ノ実況及ビ其統計的視察:附・民間療方ノ実況等』、内務省衛生局
8. 柴田勝二(2006)「陰画としての〈西洋〉――『門』と帝国主義」、『漱石のなかの〈帝国〉』、翰林書房
9. 柴田勝二(2006)「表象される〈半島〉――『行人』と朝鮮統治」、『漱石のなかの〈帝国〉』、翰林書房
10. 丸山真男(1961)『日本の思想』、岩波書店
11. 三浦雅人(2010)「恋愛と家父長制――『行人』ノート」『漱石研究』第15号「行人」、翰林書房
12. ミシェル・フーコー〔著〕、田村俶〔訳〕(1975)『狂気の歴史』、新潮社
13. 山本芳明(1989)「ヒステリーの時代――「或る女」序説」、『明治大学文学部研究年報』 36期
14. 李潤生(2016)「香厳智閑――如来禅と祖師禅」、『禅宗公案』、宗教文化出版社、 100－112頁。
15. 和歌山市史編纂委員会編(1979)『和歌山市史　第8巻』

『椿説弓張月』と二系統の「楊家将演義」小説

Chinsetsu Yumiharizuki and two novels of Yangjiajiang Yanyi

平原　真紀

In this paper, at first, I summarize the outline of *Chinsetsu Yumiharizuki* [*Strange Tales of The Crescent Moon*], one of the representative works of Yomihon [long lecture history novels in early modern Japanese literature], including the circumstances at the time of its publication and an explanation of the book title. In addition to *Chinsetsu Yumiharizuki, Bei Song Zhizhuan* [*Record of the Northern Song*] which is one of the two novels of *Yangjiajiang Yanyi*, and *Nan Song Zhizhuan* [*Record of the South Song*], the first part of which is *Nan Song Zhizhuan*, there are Chinese poems in common with *Chinsetsu Yumiharizuki*. In this paper, I will investigate the relationship between *Chinsetsu Yumiharizuki* and the two novels of *Yangjiajiang Yanyi*, taking into consideration the fact that I confirmed in the previous chapter that there are many similar characters, plots, passages, and motifs in the other *Yangjiafu Yanyi* novel.

Next, I reconfirme the outlines of the necessary parts of the two systems of *Yangjiajiang Yanyi* novels, the relationship between the two systems of plates, and the results of the research on the transmission of the two systems to Japan in the early modern period. In particular, I found that thirteen inserted poems from *Nan Song Zhizhuan* and *Bei Song Zhizhuan* were borrowed without specifying their source in the fifteen poems at the beginning of Bakin's *Chinsetsu Yumiharizuki*, that the method of borrowing was very similar to that of the compiler of *Yangjiafu Yanyi*, Ji Zhenglun, and that the existence of related books such as "*Yangjiafu* etc. Biography" was mentioned in the notes to *Bei Song Zhizhuan*. In addition, there is a similarity between the two novels, and the fact that Bakin must have seen them.

Furthermore, the settings, motifs, and views of good and evil that are common to both novels are common to *Yangjiafu Yanyi*. In this paper, I will discuss the possibility that *Yangjiafu Yanyi*, one of the novels of *Yangjiajiang Yanyi*, was accepted in *Chinsetsu Yumiharizuki*.

【キーワード】椿説弓張月、曲亭馬琴、江戸文学、読本、楊家将演義

Chinsetsu Yumiharituki [Strange Tales of The Crescent Moon], Bakin Kyokutei, Edo Literature, Yomihon [long lecture history novels in early modern Japanese literature], *Yangjiajiang Yanyi*

はじめに

この書、保元の猛将八郎為朝の事跡を述ぶ。
その談唐山の演義小説に倣ひ多くは憑空結構に成。
閲者理外の幻境に遊ぶとして可なり。

『椿説弓張月』前編冒頭題詞

近世日本文学において、初めて唐山の演義小説の体裁を整えた長編講史小説といえば、曲亭馬琴著

『鎮西八郎為朝外伝 椿説弓張月』[1]（以下『椿説弓張月』と称す）であろう。前掲題詞に記載の通り、この『椿説弓張月』は、曲亭馬琴が唐山（中国）の演義小説の構造を倣って執筆した初の読本作品である。物語は、軍記『保元物語』に登場する、巨漢で美男子の弓の名人とされる源氏の御曹司、鎮西八郎為朝を主人公として虚実を交えた活躍と悲劇を描く。周知の通りこの物語は、史実では配流先の伊豆大島で官軍に攻められた挙句、無念にも自害して果てたはずの為朝が生き延びており、琉球へと渡って時の琉球王朝の乱れを平定し、最後には為朝の息子が王位を継承するというあらすじを有している。

『椿説弓張月』という作品については、同じ馬琴作品である『南総里見八犬伝』と比較する時、その論考の数では及ばないが、従来多くの先行研究により「一代記構想」[2]をはじめとして、「琉球との関係」「謡曲」「作品構想の変化」「中国小説との関係性」など、多角的に議論を重ねられてきた。橋本眞一氏によると、近年の研究は、「日本編」と「琉球編」に分けられるものの、共通するテーマが存在すると述べている[3]。また、馬琴は洋の東西を問わず、豊かな外国知識を持ち、文化年間(1804~1818)以降から天保期(1831~1845)に至るまで、外国の情報を集め続け、当時においては高度に正確な外国知識を持っていたともされる[4]。この馬琴の外国知識や外国観より、『椿説弓張月』という作品は、外国の脅威を実感する馬琴が日本の辺境へと目を向けて書いた作品でもあるともされる。

また、馬琴の読本作品の中でも、この『椿説弓張月』などの所謂「史伝物」は、馬琴を代表する作品群であり、勧善懲悪や因果応報といった儒教仏教の思想が色濃く描き出されていることが夙に知られている。高藤武馬氏によると、馬琴自身は武士階級の出自ながら、自分は市井の通俗文芸作家に成り果ててしまったという思いを忘れることができず、皇室中心・神仏崇敬・武士道賛美が常に作品に込められていたと述べている。また、戯作者としての思いは常に高く、戯作を通して衆生を教化することをもって、物語の根本義と考えていたために、不遇の英雄や歴史に埋もれた人物を自身の作品において活躍させたのではないかとも述べている[5]。

一方、これら先行研究の中で、「中国小説との関係性」においては、本作品が唐山の演義小説に習って荒唐無稽な妖怪や妖術を含むプロットや情節を多く有していることなどから、『三国演義』や『水滸伝』、『水滸後伝』等を粉本として挙げる先行研究がすでに多く存在する。そして、それらの粉本となる唐山の演義小説へも目を向けたとき、この演義小説と称される一群の長編講史小説の中には、前述の『三国演義』や『水滸伝』、『水滸後伝』、などと比較・対比される白話小説作品が他にも数多く存在する。明代の嘉靖・万暦の時代には、紙すき技術の向上と印刷技術の更なる発展により、科挙関連書籍をはじめ多くの書籍が刊行された。白話文学においても、この空前の出版ブームの中で様々な作品が陸続と出版され、絶大な人気を博す作品も数多く生み出された[6]。これらの白話小説は、他の書籍群と一様に唐船などに船載され、長崎の出島経由や朝鮮半島から対馬経由、または琉球貿易などを通じて、潤沢とは言えないまでも、ある程度の冊数が近世日本へも渡来したのである[7]。

1　『椿説弓張月』については、坪内逍遥・水谷不倒共編『近世列伝体小説史』上下巻（暁霞処士「曲亭馬琴」を含む）春陽堂　1897.5、藤岡朔太郎「近代小説史」大倉書店 1917.1、「馬琴の研究」藤村作・新潮社版日本文学講座第十巻所収　昭 6、麻生磯次『滝沢馬琴』人物叢書・日本歴史学会編集・吉川弘文館 1987.10（初版昭 18）、衣田学海『椿説弓張月細評』帝国文庫 39・1899、後藤丹治校訂『椿説弓張月』上下巻・日本古典文学大系・岩波書店、1958.8 - 1962.1、などを総合的に参照した。

2　中村幸彦『中村幸彦著述集　第５巻』中央公論社　昭 57 などを参照。

3　橋本眞一「『椿説弓張月』論」『日本文学研究』(46) 大東文化大学 2007.2

4　橋本眞一「曲亭馬琴伝記小攷－曲亭馬琴旧蔵本『鎖国論』・石川畳翠旧蔵本『松窓雑録』について」『読本研究新集』第二集・読み本研究の会・翰林院書房 2000

5　高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集 27 筑摩書房 1960.8

6　万暦年間の背景については、小松謙『中国歴史小説研究』汲古選書　平成 13 に詳しい。

7　大庭脩著者兼編輯著『江戸期における唐船持渡書の研究』関西大學東西学術研究所　昭 42 に詳しい。

であるならば、馬琴が『椿説弓張月』を執筆する際に参照した白話小説は、前掲の三作品以外にも確認できるのではないだろうか。本稿において取り上げる二系統の「楊家将演義」小説、『北宋志伝』(『南宋志伝』を含む)と『楊家府演義』[8]もこうした作品のひとつである[9]。書籍名としての『楊家将演義』とは、五代十国時代に北漢から北宋へ投降し、その後は北宋の武将として活躍、「楊無敵」とまで称されるも味方の裏切りによって非業の最期を遂げた[10]、名将・楊継業[11](楊業とも称す)とその一族郎党が活躍する、中国は明代に刊行された長編講史小説の総称である。この、一般に『楊家将演義』と称される書籍には、中国は明代に現存最古の板本[12]として異なる二系統の小説を確認できる[13]。一つは、福建は建陽の敏腕編集者・熊大木[14]による編次『北宋志伝』(『南宋志伝』を含む)であり、もう一方が、南京在住の不遇の文人・紀振倫[15]により編纂された『楊家府演義』である[16]。

これら『南宋志伝』や『北宋志伝』に記載されている複数の挿入詩の借用を、曲亭馬琴の『椿説弓張月』の冒頭題詞の中に確認した[17]ことから、この二系統の「楊家将演義」小説もまた、その可能性を有する作品の一つではないか、と推測するに至った。確かに、「楊家将演義」は、日本においての認知度が高いとは言い難いが、何より『水滸伝』成立に大きな影響を与えたとされる作品でもある。特に、「楊家将演義」小

8　本稿において使用する主要テキストのうち、内閣文庫附『新刊出像補訂參采史鑑南宋史傳通俗演義』題評十卷五十回、同『北宋』十卷五十回（世徳堂刊本）の板本と、台湾国立中央図書館編印歴史通俗演義所収『楊家府世代忠勇通俗演義志伝』の板本は、どちらもデジタル資料データを東京大学東洋文化研究所の上原究一氏より賜ったものである。また、二系統の板本間の異同などの参照には、国立国会図書館所蔵・経国堂『玉茗堂批點繡像南北宋志傳』、北大学所蔵・維経堂『玉茗堂主人按鑑批點南北宋志傳』、東京大学所蔵・天一出版社『全像按鑑演義南北両宋志傳』、上海古籍出版社『楊家府世代忠勇演義志傳』、国立国会図書館所蔵『鐫出像楊家府世代忠勇演義志傳』などの板本を適宜使用する。尚、両板本の共通点については、平原真紀「二系統の明刊本「楊家将演義」小説における共通底本の可能性―『北宋志伝』と『楊家府演義』の二系統をその対象に―」『樹間爽風』和漢韻文研究会 2021.12.25 に詳しい。

9　明代刊行の二系統の「楊家将演義」小説、『北宋志伝』と『楊家府伝』の概要と関係性については、平原真紀「小説『楊家将演義』再考―《北宋志伝》と《楊家府伝》」『中国俗文学研究』中国俗文学研究会 2013.4 に詳しい。

10　『宋史』では、宋軍を率いた出征中に契丹の大群に遭遇し、激闘の末に捕縛されるも節を守り、食を断って死んだとされている。

11　大塚秀高氏が、『楊家将演義』に関する戯曲や小説と史実による呼称の区別に言及し、史実においては「楊業」、戯曲小説を論ずる際には「楊継業」との表記と述べているように、「楊業」の呼称には、「楊業」以外にも「楊継業」や「楊令公」など複数存在する。本稿では、史実に関する論考も取り上げることから、楊家第一世代の登場人物の呼称は「楊業」とする。(大塚秀高「『楊家将演義』前後の歴史小説」『楊家将演義 読本』2015.6)

12　「板本」には、「版本」との表記も見られるが、本稿においては木板を使用し印刷された本として「板本」の表記を使用する。この唐代からの印本技術と表記については、井上進『中国出版文化史』名古屋大学出版会 2002.1 に詳しい。

13　二系統の板本差異については、「二系統の明刊本「楊家将演義」小説における共通底本の可能性―『北宋志伝』と『楊家府演義』の二系統をその対象に―」『樹間爽風』和漢韻文研究会 2021.12.25 に詳しい。

14　熊大木（約 1506~1578）の生平については、常毅氏が「元明期 " 楊家将 " 戯曲小説研究」『暨南大学』2005 で詳細に考証している。熊大木は、嘉靖年間当時の中国における出、版業の中心地の一つに数えられる福建・建陽の書房の主人であり、八十有余軒の専業の書肆が軒を連ねていた同地において、三本の指に数えられる大出版元であったという。また、この熊大木の機を見るに敏な商才は、現代中国においても「熊大木モデル」という経済用語が存在するほどである（平原真紀「明刊『北宋志伝』板本による楊家将小説の完全邦訳」『東方』2016.1）

15　紀振倫（生没不詳、字は春華、号は秦淮墨客、江寧出身）については、常毅氏前掲書において、下級文人で非常に文化的教養度の高い人物として、様々な「楊家将演義」小説群の解説部分に、本作品の校閲者、時には作者として記載されていると述べている。また、紀振倫は、『続英列伝』と始め、戯曲伝奇である『葵花記』、『三桂記』、『折桂記』、『七勝記』など、多くの作品の編纂や校閲者として、真面目で頑なな編纂態度と、時として憤懣に近い語気の序を記していることなどが知られている。他にも明代の後期に出版された書籍の中に、著者、編纂者、或いは批評家としてその名前が記されている。(平原真紀「明刊『北宋志伝』板本による楊家将小説の完全邦訳」『東方』2016.1)

16　『北宋志伝』(『南宋志伝』を含む)と『楊家府演義』の概要については、平原真紀「明刊本《楊家将演義》小説の基本問題―《北宋志伝》と《楊家府伝》の二系統とその対比―」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 第 20 号 2014.1 に詳しい。

17　平原真紀「近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来」『東京外国語大学国際日本学研究』2021.3

説と『水滸伝』の関係性については、前出中鉢雅量氏の論考をはじめ、いくつもの専論がその関係性について研究成果を発表している。その研究成果としては、両作品が共に北方の遼と対峙する北宋時代であり、『水滸伝』における征遼の段が「楊家将演義」の影響を受けて成立したとする点、また、『水滸伝』に登場するプロットが「楊家将演義」から影響を受けて成立したとする点、などを代表的なものとして挙げることができる。

また、そもそも中国の白話小説とは、宋代の大都市部に設立された瓦舎や瓦市などの通俗文芸を扱う口誦芸能から発展したものである[18]ということを鑑みる時、これまでの先行研究において述べられているように、白話文学全体におけるプロットの構成や人物の形象が、様々な形で互いに影響し合って成立しているのも当然であろう。本稿においては、明代刊行の二系統の「楊家将演義」小説と『椿説弓張月』について、両作品の内容や構成を対比し、両者の関係性を更に詳細に探っていく。但し、本来ならば、ある作品における他作品の受容に関して考察をおこなう際、受容作品からの視座によって考察をおこなうのが一般的だが、筆者の元々の研究対象が「楊家将演義」小説であり、この二系統の小説が近世日本でどう受容されたのか、の研究過程において発見・確認した点も多いことから、本稿においては「楊家将演義」小説側からの考察とする。

1.『椿説弓張月』と「楊家将演義」小説との接点

まず、曲亭馬琴[19]の『椿説弓張月』について、その出版状況を整理しておく。『椿説弓張月』は、「鎮西八郎為朝外伝」の角書きがあり、正式名称としては『鎮西八郎為朝外伝 椿説弓張月』と称す。作者は曲亭馬琴、作画が葛飾北斎による全五編二十九冊の読本で、初版刊本版元は平林庄五郎、並びに、文刻堂西村源六である[20]。『椿説弓張月』は、文化四年(1807)から文化八年(1811)にわたって刊行されており、それぞれ、前篇、後篇、続篇、拾遺、残編、の全五篇から成り立ち、葛飾北斎による挿絵となっている。半紙本全二十八巻六十八回の内訳としては次の通り。

前篇　六巻　六冊(合二冊)　文化四年(1807)一月刊行(文化二年十一月～十二月稿)
後篇　六巻　六冊(合一冊)　文化五年(1807)一月刊行(文化四年三月～九月稿)
続篇　六巻　六冊(合一冊)　文化五年(1807)十二月刊行(文化五年三月～八月稿)
拾遺　五巻　五冊(合一冊)　文化七年(1809)八月刊行(文化六年冬起草)
残篇　五巻　六冊(合一冊)　文化八年(1810)三月刊行(文化七年三月～五月稿)[21]

18　瓦舎や瓦市と通俗文芸に関しては、大木康『明末江南の出版文化』研文出版 2004.5 に詳しい。

19　曲亭馬琴の先行研究については、青木稔弥氏・大高洋氏の両氏によって、1993 年に纏められた「曲亭馬琴研究文献目録」を継いで、板坂則子氏により纏められた「曲亭馬琴研究文献論文」1988~1997)『専修国文 』(通号 64)1999.01 国立国会図書館デジタル http://id.ndl.go.jp/bib/000000013618、または、専修大学内人文系データベース http://www.senshu-u.ac.jp/School/kokubun/kotengakka2/itasaka-bunken.htm に収録の曲亭馬琴関連の論文や資料を参照させて頂いた。本データベースは曲亭馬琴研究の成果を、影印・翻刻・注、研究論文や年譜、短文の報告書類なども含め、500 以上の資料について 1988 年より一年ごとに纏めて収録している。これにより、高田衛「馬琴・南北における一典拠」『都大論究』25 .1988、高木元「江戸読本の形成―貸本屋の出板をめぐって―」『文学』56『江戸読本の研究』1995、土岐和美「読本における『水滸伝』の受容―『八犬伝』及び『八犬伝』以前の読み本を中心に―」『古典研究』16 1989、『滝沢馬琴集』全 20 巻・帝国文庫 1990、をはじめとし多くの論考を参照させて頂いた。(本稿における最終閲覧日は 2021.09.30)

20　岡本勝・雲英末雄編『新版近世文学研究事典』おうふう 2006.2　115 頁を参照。

主人公の鎮西八郎為朝こと源為朝は、『保元物語』にも登場する巨漢で美男子の弓の名手としても名高い武将であり、同じ勧善懲悪の伝奇物語である『南総里見八犬伝』と並んで、馬琴の代表作とされる。作者である曲亭馬琴[22]については、明和四年(1767)六月九日に、江戸深川(現在の東京都江東区平野一丁目)の旗本・松平信成家の用人・滝沢運兵衛興義の五男として生まれている。寛政二年(1790)二十四歳で山東京伝に弟子入りを請うも断られたが、その後の人生において長く深い交流を続けることになった。また、この山東京伝からの紹介によって、寛政四年(1792)の三月、版元・蔦屋重三郎に見込まれ、手代として雇われることになった。この時、商人に仕えることを恥じた馬琴は、武士としての名を捨てて瑣吉と改名した。

その後、人気戯作家として、また山東京伝のよきライバルとして、多くの作品を世に送り出した。文化十年(1813)に京伝が読本界から引退した後は、文字通り馬琴の独壇場となり、数々の名作を発表し続けた。実生活においては一男と三女に恵まれたものの、息子や娘婿が相次いで他界し、馬琴自身も文化十一年(1814)には病の為に両目を失明してしまうのであった。しかし、負けず嫌いで有名であった馬琴は、盲目になった後も長男の嫁であるお路に、原稿を口述して書き取らせることで『南総里見八犬伝』の執筆を継続したのであった。嘉永元年(1848)、四谷信濃坂において、馬琴はその生涯を八十二歳の盲目の作家として閉じることとなった。

一方で、明代刊行の二系統の「楊家将演義」小説についてだが、前述の通り北宋時代に実在し「楊無敵」と称された北漢の名将・楊業(楊継業・楊令公とも称す)と、その一族郎党の武勇伝と悲劇を虚実織り交ぜて、楊家代々の歴史故事として描いた唐山の演義小説である。馬琴周辺の記録の調査から、『新編水滸画伝』[23]編訳引書には、『一統志』や『金瓶梅』と共に『南北宋志伝』との書名が記載されており、馬琴が二系統の「楊家将演義」小説のうち、少なくとも『北宋志伝』には確実に目を通していたことを確認できた。次に、『椿説弓張月』冒頭に記載されている全十五首の絶句について、全十五首のうち十三首の題詞が『南宋志伝』または『北宋志伝』からの借用であることも確認している[24]。そして、この借用によって、馬琴が『椿説弓張月』を執筆するよりも以前に、二系統の「楊家将演義」小説の一つである『北宋志伝』と『南宋志伝』に目を通していた点までを確認できたのである。

本来であれば、これらの接点による二系統の「楊家将演義」小説と、曲亭馬琴や『椿説弓張月』との関

21　青木稔弥ほか編・横山邦治監修『読本研究文献目録』溪水社 1993.10、大高 洋司「八戸南部家の読本収集」『読本研究新集』6・2014.6 による。この大高洋司氏によると、『椿説弓張月』の初印本は、早く日本古典文学大系 60・61『椿説弓張月　上下』(後藤丹治校注、岩波書店、1958.8、1962.1)の底本となり、鈴木重三による詳しい書誌解題(「椿説弓張月の初版本について」、日本古典文学大系 60 所収)が附され、最も信頼に足る翻刻テキストとして今日に至っているとされる。更に、初印本と後印本を分ける最も大きな違いについては、初印本前篇巻之 6 の末尾に「(後篇を併せて)すべて十二冊を全本とす」とある執筆予定であったものが、後印本になって後、「三十冊」に変更されたことから、前・後篇の間に全体構想の大きな変化があり、その結果が冊数にも反映したことが分かる、としている。(大高洋司「『椿説弓張月』論―構想と考証―」「読本研究」第 6 輯上套、1992.9)。尚、本稿で使用する板本として、国立国会図書館集蔵本とした点については、「第一類 A 系本」(鈴木解題)の特徴に一致する点が多く、刷りの技巧の一部省略や合冊・疲れなどのマイナスは見られるが、揃いの早印本として初印本に継ぐ価値をもつ。(大高洋司「『椿説弓張月』論―構想と考証―」「読本研究」第 6 輯上套、1992.9・及び、「『椿説弓張月』の構想と謡曲「海人」」「近世文藝」79、2004.1)との解説を参考とした。

22　曲亭馬琴の呼称については、別に滝沢馬琴という名も知られているが、本稿においては、高木元氏による、「滝沢馬琴」との呼称は明治以降に流布した表記であり、教科書・副読本などで「滝沢馬琴」と表記するものも存在するが、これは本名と筆名をつなぎあわせた誤った呼び方であるとの見解によって、曲亭馬琴との表記で統一して論を進めることとする。(高木元「 放送大学「特別講義 人文科学 11」平成 16 年度第 1 学期」の講座内容による。また、「曲亭馬琴」は、戯作にのみ用いる戯号であって、幼名は春蔵、倉蔵、通称として左七郎、瑣吉、著作堂主人、笠翁、篁民、蓑笠漁隠、飯台陳人、玄同などを始めとして多くの別号を持し、これらの別号は非常に厳格に使い分けていたとされる。

23　有朋堂文庫『新編水滸画伝』第一　有朋書店　昭和２年

24　平原真紀「近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来」『東京外国大学国際日本学研究』2021.3

連についての調査であるため、『椿説弓張月』と『北宋志伝』との考察とすべきかもしれない。しかし、両作品の対比考察によって『楊家府演義』系板本のあらすじやプロットと、『椿説弓張月』における筋立てやモチーフの多くに、類似点であると推測できる箇所を複数確認していることから、ここはあくまで『北宋志伝』と『楊家府演義』の二系統の板本を共に調査対象として考察を進めるものとした。

そこで、まずはこの『椿説弓張月』冒頭の全十五首の絶句について、具体的に考察をおこなっていく。この十五首の漢詩については、合計十三首の題詞が『南宋志伝』または『北宋志伝』からの借用であったが、ここで注目すべきは、一部分の語句が書き換えられていた十首の漢詩の借用についてである。この二作品における挿入詩の対比表[25]からも、『南宋志伝』と『北宋志伝』から借用された漢詩が、他からの借用であることを一切明記せず、『椿説弓張月』で描かれている場面に沿った内容へと改筆された上で採録されている。その際、漢詩によっては元の七言律詩の「正格」での押韻を崩してまで、場面に合わせた内容へと改筆していたのである[26]。

この馬琴の漢詩採録の態度と改筆から、本節へと繋がる曲亭馬琴と『楊家府演義』編者である紀振倫の意外な共通点を見出すこととなった。それは、『北宋志伝』に採録された詠史詩を意識した紀振倫による『楊家府演義』での挿入詩採録の態度である。周知のように、紀振倫は、馬琴同様に『南宋志伝』や『北宋志伝』で使用されている詠史詩の原文を、それぞれが採録されている場面に合致するような内容へと語句の一部を改筆し、原詩の押韻を崩してまでも同一情節や同一場面に採録している。これら曲亭馬琴と『南北宋志伝』との接点、及び、『南宋志伝』や『北宋志伝』の挿入詩に対する馬琴と紀振倫の態度の一致という接点より、曲亭馬琴による紀振倫や『楊家府演義』に対する何らかの意図的な考えがあるのではないかと推測するに至った。

ここでもう一つ、馬琴と「楊家将演義」の接点を予想させる記述を提示したい。『椿説弓張月』後篇巻之六の讖語には、次のような記述を確認できる。

> 批為朝外傳弓張月
>
> 余嘗羅氏が三國志、及十二朝、武王、漢楚、隋史遺文、玄宗、五代史、岳飛、元明、
> 國姓爺等の諸演義を閲するに、変化の奇、宛轉の妙、虚実相半せり。或はその言、荒　唐に係るといへとも、亦史の闕文を補うことなきにあらず。
>
> 魁蕾子　識

この「魁蕾子」については、馬琴の号のひとつであり、読本の讖語に「魁蕾子」と記されていれば、馬琴作品であることを示している[27]。馬琴は、この讖語において、自身が羅貫中の『三国演義』や『十二朝（開闢演義）』、『武王（封神演義）』、『漢楚（兩漢演義）』、『隋史遺文』、『玄宗（隋唐演義）』、『五代史（残唐五代史演義）』、『岳飛（岳飛伝）』、『元明（皇明英烈伝）』、『國姓爺』などの諸演義を閲覧してきたと述べている。だが、ここには先行研究で取り上げられている「水滸伝」関係の書籍名は見当たらない。

ここで注目したいのは、『五代史（残唐五代史演義）』や『岳飛（岳飛伝）』などの書名である。この両作品は、『南北両宋志伝』のうち、『南宋志伝』と大きく関わる作品であり、「楊家将演義」小説とも非常に深

25　平原真紀「近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来」【図表一】『東京外国語大学国際日本学研究』2021.3

26　『椿説弓張月』冒頭の題詩と『南宋志伝』『北宋志伝』の挿入詩の対比表では、「十四」の漢詩が該当する。例えば、元の『南宋志伝』の漢詩では、第一句の最期が「俘」で、偶数句の「謨」、「塗」で「正格」の押韻だが、題詩の第一句の最期が「里」に改筆されている。

27　馬琴の号や異名については、菱岡 憲司「傀儡子から魁蕾子へ―馬琴異称にみる執筆意識の変化―」『近世文藝』日本近世文学会 2011 に詳しい。

い関係を有している。[28]また、これら中国の歴代王朝を描く演義小説群の中において、しかも、宋の太祖の登基までを描いた『岳飛伝』や、宋代の後の王朝を描いた『元明』まで記されているというのに、北宋時代を描いた「楊家将演義」小説だけが欠損していることは非常に不自然である。

この点について、後藤丹治氏は、中国の典籍で『椿説弓張月』に利用されたものが多くあると述べたうえで、「たとえ「援引書目」に記載があったとしても、ちょっと使われたに過ぎない場合もあり、作中に書名が示されていなくても弓張月の有力な材料となった作品も多くある」と述べている[29]。曲亭馬琴という作家が、幼少の頃より儒学や国学、諸子百家のみならず、稗史小説や繰人形浄瑠璃の台本、果ては医学書や経典に至るまで和書漢籍を問わず万巻の書を読破し、その知識の上に馬琴の諸作が誕生していることも既に多くの先行研究によって分析されている[30]。更には、諸所に存在する馬琴による「援引書目」や「読書記録」についても、『惜字雑箋』をはじめその全てが作品執筆に係る重要な参考文献というわけではないこと、参考文献等に記載のない作品で有力な執筆材料となったものもあることなども、既に多くの先行研究や史料により明らかとなっている。

他にも、この『椿説弓張月』という作品の骨格には、物語の最初の主人公である源八郎為朝の未来が、崇徳院の荒御魂によって暗示されるという情節が設定されていることや、その主人公の最期が白峯御陵の前で自死して果てるという設定など、二系統の「楊家将演義」の骨格を予感させるかのような設定の一致点がある。また、琉球編では、為朝の嫡男である舜天丸が主人公となって活躍しており、主役の代替わりが行われていることや、白峰以降のプロットには、超自然的で荒唐無稽な情節や妖怪、妖術に幽霊などが登場する設定も、基本的に二系統の「楊家将演義」小説との共通点として挙げられる点である。何より、物語の終盤では、崇徳院の荒御魂を借りて、馬琴の執筆姿勢である勧善懲悪や因果応報の理を滔々と述べさせてもいる。この点についても高藤武馬氏が、馬琴の読本から八郎為朝の人間像を思い浮かべることはできない、馬琴の頭の中に理想の武将としての八郎為朝像があり、この歴史や忠義の武士への因果応報の理想化を阻まれることに対して、作品中で憤懣を表していることを読み取れるのみである、などと述べている[31]。

以上の考察よって、『椿説弓張月』には、『南宋志伝』『北宋志伝』の挿入詩が受容されているだけでなく、馬琴の性格や作風、世界観、漢詩の改作、なによりその勧善懲悪や因果応報などの理想世界への憧憬などからも、馬琴が『楊家府演義』にも目を通しているのでは、との仮説を立てるに至った。そこで、次節においては、『椿説弓張月』と中国白話小説との関係、中でも『楊家府演義』の派生小説ともされる『狄青演義』と『椿説弓張月』との関連を述べている先行研究について確認し、両作品における世界観や作風、類似プロットを具体的に対比させて考察していく。

2.『椿説弓張月』の概要と先行研究

前述の通り、『椿説弓張月』は、江戸時代に曲亭馬琴によって執筆された、近世日本において初めて中国演義小説の形態で描かれた作品である。「角書」に「鎮西八郎為朝外伝」とあるように、源為義の息子で源家の御曹司・為朝は、崇徳上皇の御代に実在した人物であり、『保元物語』では悲劇の武将・源為朝とそ

28 『五代史（五代史通俗演義）』や『岳飛（岳飛伝）』と『南宋志伝』との関係や受容については、上田望「講史小説と歴史書 (2)—『残党五代史演義』、『南宋志伝』構造と変容—」『東洋文化研究所』第 137 冊 1999.3 に詳しい。

29 後藤丹治校訂『椿説弓張月』上下巻・日本古典文学大系・岩波書店 1958.8 – 1962.1

30 曲亭馬琴の『椿説弓張月』に関連する先行研究については、各年代別に曲亭馬琴に関する論考をほぼ網羅するデータベースである、板坂則子「曲亭馬琴研究文献論文」（1988~1997）専修大学国文学古典学科デジタル資料ほかを参照させて頂いた。（本稿における最終閲覧日は 2021.09.30）

31 高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集 27・筑摩書房 1960.8

の一族の物語として、兄義朝や平清盛を敵にし、「心飽くまで剛にして大力の強弓」を引き戦うも破れ伊豆大島に流刑、院宣を持った討伐軍に包囲され「今は思うことなし」と三十三歳でこの世を去った悲劇の武将として、現代日本においても絶大な人気と認知度を誇っている。

この源為義八男の御曹司、弓の名手であり巨漢の美男子として武勇を誇る源為朝が、物語冒頭から主人公になっている作品が『椿説弓張月』である。『椿説弓張月』に関する先行研究を分類する時、一、中国典籍との関連、二、日本史や日本文学との関連、三、琉球関連、の三つに大別できるのだが、中でも中国典籍との関連について、先行研究が粉本として挙げるのは『水滸伝』『水滸後伝』と『三国演義』であった。そんな中、本節において注目すべき論考として挙げられるのが、徳田武氏による「『椿説弓張月』と『狄青演義』」である[32]。

まず、この論考の主軸となっている『狄青演義』であるが、『五虎平西前伝』[33]と、『五虎平南後伝』[34]の二作品を総称する書名でもある。二系統の「楊家将演義」小説が明代万暦年間(1573~1620)の作品であるのに対し、『狄青演義』は清代嘉慶年間(1796~1820)の作品であり、実在の人物「狄青」をモチーフに描いているのだが、この『狄青演義』こそ、二系統の「楊家将演義」と非常に関係の深い派生作品なのである。常征氏によっても、『狄青演義』は「楊家将演義」の派生小説ともいえる作品[35]であり、作品の設定やプロットは『楊家府演義』と類似点が多く、『楊家府演義』での「狄青」は、主人公である楊家の御曹司を理不尽に陥れる悪役として登場するが、『北宋志伝』には登場していない。

確かに、二系統の「楊家将演義」小説のうち、『北宋志伝』は挿入詩として『椿説弓張月』に受容されていた。しかし、『北宋志伝』の単純明快な筋立てと大団円で物語の幕が下ろされる構成と、緻密な構成と複雑な筋立てで勧善懲悪を作風とする『椿説弓張月』とを読み比べる時、『北宋志伝』が『椿説弓張月』の本筋に受容されているとは到底言い難い。また、前述のように幼いころより万巻の書を読破し、常日頃より貪欲なまでに知識を求めた馬琴が、『北宋志伝』に記載されている「楊家府等伝」など、別の板本の存在を示唆する数多くの注を果たしてみすみす見逃すであろうか[36]。

また、『楊家府演義』は、当然ながら『狄青演義』との類似点を数多く確認できる。編者である紀振倫の、乱世の不条理を嘆き勧善懲悪を是とする執筆姿勢は、まるで「南京の馬琴」のようでもあり、『楊家府演義』と『椿説弓張月』の世界観もまた、『狄青演義』と『椿説弓張月』同様、非常に類似したものである。一方で、当時の唐船舶載書籍の取扱状況と、書籍が長崎に到着して江戸市中で流通するまでの時間[37]を鑑みる時、弓張月執筆時に馬琴の目に触れた可能性が低い清代嘉慶年間(1796~1820)刊行の『狄青演義』に対して、遅くとも明代万暦年間(1573~1620)には刊行され、日本においても享保年間(1716~1736)の

32　徳田武「『椿説弓張月』と『狄青演義』」『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店　昭 62.5

33　孫楷第目録（孫楷第『中国通俗小説書目』作家出版社 1957.1）によると、『五虎平西前伝』は、現存最古の板本として同文堂刊本が確認できる。北京大学図書館に収蔵されており、嘉慶六年坊刊本で題目を『新録異説五虎平西珍珠旗演義狄青全伝』と作る。清無名氏撰。首嘉慶六年序。大塚目録（大塚秀高『増補中国通俗小説書目』汲古書院 1987.5 増補）では、福文堂刊本と作る。

34　同じく『五虎平南後伝』についても、現存最古の板本として同文堂刊本が確認できる。北京大学図書館に収蔵されており、寶華順刊本で題目を『新鐫後續繡像五虎平南狄青全伝』と作る。清無名氏撰。巻首の序は、『五虎平西前伝』に同じ。前出大塚目録では福文堂刊本と作る。

35　常征『楊家将演義史事考』天津人民出版社 1920

36　『南宋志伝』や『北宋志伝』には、注釈部に「楊家府等伝」との記述があり、別板本の存在を示唆する注釈などが複数個所確認できる。

37　江戸期における唐船持渡書である漢籍の取り扱いや江戸市中に届くまでの経緯や手続きなど、江戸期における漢籍の流れについては、麻生磯次『江戸文学と中国文学』三省堂 昭 21.5.1、諏訪春雄・日野辰夫『江戸文学と日本』毎日新聞社　昭 52.2.10(1977)、中野三敏「漢文劇作の展開」『江戸文学と日本』毎日新聞社　昭 52.2.10(1977)、今田洋三『江戸の本屋さん―近世文化史の側面』平凡社ライブラリー 2009.11、高橋智『海を渡ってきた漢籍―江戸時代の書誌学入門』日外アソシエーツ 2016.6、中野三敏『江戸の板本』岩波書店 1995.12、ほかを参照した。

書籍目録等で書籍の渡来が確認できている『楊家府演義』は、当該時期には確実に当時の日本へ伝来していた板本でもある[38]。

徳田武氏は、この「『椿説弓張月』と『狄青演義』」において、『椿説弓張月』における『狄青演義』受容の可能性を述べており、それを示す有力な根拠として、『惜字雑箋』[39]にこの『狄青演義』の詳細な筋立てを書き残している点を指摘している。しかしながらその記述は、『椿説弓張月』刊行より二十年も後であり、『椿説弓張月』執筆時点での『狄青演義』読了は確認できていない。そもそも曲亭馬琴が『椿説弓張月』の脱稿以前に、より厳密に述べるならば『椿説弓張月』の作品構想時点において、前述の状況からも『狄青演義』を入手して読了することが可能であった、という見解には疑問を呈せざるを得ない。

曲亭馬琴が、『椿説弓張月』前篇を脱稿したのは文化二年(1805)十一月であるが、緻密な作品構成を作風としている点から執筆前の作品構成の期間を考えると、遅くとも脱稿の半年前には参考文献に大方目を通していると考えられる。一方で、『狄青演義』の刊行は、『五虎平西前伝』が嘉慶六年(1801)[40]であるものの、『五虎平南後伝』嘉慶十二年(1807)[41]も合わせた『狄青演義』[42]をその時期までに江戸において入手、読了していた、と判断するのは難しいのではないだろうか。[43]そこで、もし徳田武氏が論じているように、『狄青演義』を受容した可能性があるならば、執筆構想の時期には既に江戸市中に板本があり、そもそも『狄青演義』とも多くの類似点を有する『楊家府演義』もまた、『椿説弓張月』に受容されている可能性があると捉えても不都合は生じないであろう。

次の論拠として徳田武氏は、『椿説弓張月』と『狄青演義』が同じ「一代記」であるという点を挙げている。周知のように、『椿説弓張月』における「一代記構想」という視点は、『椿説弓張月』に関する先行研究において、中村幸彦氏による提唱以来、数多くの論考によって述べられてきたものである。[44]その為、『椿説弓張月』が受容している可能性を有する中国白話小説に関する論考において、この「一代記構想」という視点は、今の『椿説弓張月』の受容論には欠かせない視座となっていることは事実である。

この「一代記構想」について、筆者自身にも何ら異論があるわけではない。但し、この点については、従来述べられてこなかった新たな視点をひとつ提案したい。これまでの「一代記構想」に加えて、「家将小説」という新たな視点から『椿説弓張月』を捉える、という提案である。大塚秀高氏によると、「家将小説」とは「一族数代に亙る武将の活躍とその悲運を語り、これを鎮魂する役割をも担っていたと思われる小説群」である、とその定義を述べている[45]。この「家将小説」についての論考を見る時、呼延贊などの呼家将、高懐徳などの高家将、薛仁貴・薛丁山の薛家将、などがその代表として挙げられる。

38　当時の漢籍輸入については、大庭脩著者兼編輯『江戸時代における唐船持渡書の研究』 関西大学東西学術研究所昭和 41.11、大庭脩『江戸時代の日中秘話』東方選書 5　東方書店 1980.5、大庭脩『漢籍輸入の文化史―聖徳太子から吉宗へ―』研文出版 1997.1『漢籍輸入の文化史―聖徳太子から吉宗へ―』研文出版 1997.1、大庭脩『漂着船物語―江戸時代の日中交流―』岩波新書 2001.8、中野三敏『江戸文化再考―これからの近代を創るために』笠間書院 2012.7 ほか、を総合的に参照した。

39　早稲田大学所蔵　瀧澤馬琴『惜字雑箋』1802 ‐ 1838

40　福文堂板本。北京図書館、首都図書館に蔵書あり。

41　現存最古の板本として確認されているのは、聚錦堂刊本（前伝も刊行）。東京大学東洋文化研究所倉石文庫に蔵書。

42　前注 32,33 を参照。

43　この時代の漢籍が唐船で長崎へ運ばれてから、齎来目録や大意書による書物改めを経て、江戸市中の庶民階層の手にも触れるまでの所要年数から類推した。『狄青演義』の後半である『五虎平南後伝』刊行までのタイムラグをほとんど考慮せず、一般の娯楽書でなく史書や医学書類であったとしても一年前後の時間を考慮すべきであり、例えば『狄青演義』刊行後に、最短の流通経路を辿って、版元の李雨堂、もしくは同文堂や福文堂から上海船か福建先船、または寧波船に舶載され、長崎での齎来目録や大意書の作成、及びこれら書目類の江戸への搬送、江戸詰めの老中による見分と、その後の許可を経て、江戸市中に書籍が届くまでの漢籍輸入に係る一連の手続きを含む。その上で、他の通俗小説などの書籍輸入の実例などからも総合的に勘案し、非常に厳しいと判断したものである。

44　中村幸彦「椿説弓張月の史的位置 (滝沢馬琴)」『文学』36 1968.3

45　大塚秀高「歴史物語の育成と発展―高家将物語を中心に」埼玉大学紀要教養部 2017

確かに、『椿説弓張月』前篇刊行時、馬琴が一代記構想を掲げて刊行した作品ではある。しかし、第一巻目の執筆当初は前後編全十二巻の予定であったものの、その後次々と続編が刊行され、最終的には当初の予定を大幅に超える長編小説となったのもまた事実である。後藤丹治氏によると、この『椿説弓張月』という作品は、文化四年(1807)にまず『前篇』が刊行され、それ以後、足掛け四年の歳月をかけて、『後篇』、『続篇』、『拾遺』、そして『残篇』が陸続と刊行、最終的には、全五篇、二十九冊でやっと完結をみた超長編作品となったとされる。また、その理由として、『椿説弓張月』の第一冊の刊行当初は、前篇と後篇の全十二巻で完結予定であったのだが、第一冊出版後に予想以上の大反響があり、これによって馬琴の筆が伸び、作品の完結も幾度にも渡って延期を繰り返したとも述べている。[46]

しかも、この『椿説弓張月』後半の琉球編に至っては、もはや実質的な主人公として活躍するのは為朝ではなく、源家次世代の御曹司である舜天丸や他の子供たちである。これはまさに「源家三代とその一族郎党をめぐる悲劇の物語」、つまり源家の「家将小説」であると言える作品であろう。本稿で取り上げている「楊家将演義」小説もまた、楊家と一族郎党の「家将小説」であり、この視座を持つことで両作品の関係に更なる可能性を予測できると考えた。

つまり、刊行当初の『椿説弓張月』が、たとえ「一代記」構想のもとに執筆されていても、馬琴が一代記の作品だけを執筆時の参考文献とした訳ではなく、前編刊行当時の構想は、作品が人気を博すほどに連載期間を延長することとなり、新プロットを企画して本筋を修正しつつ加筆するという変更を余儀なくされていったとも捉えられるだろう。ならば、『椿説弓張月』に対する新たな視点として、源家三代とその一族郎党の悲劇を描いた「家将小説」であるという点からも本作品を捉えられるのではないか。以上の新たな視点を踏まえた上で、徳田武氏が『狄青演義』受容の論拠として挙げている点について、氏の論証方法を参考としつつ『椿説弓張月』と『楊家府演義』の両作品の類似点について、更なる考察をおこなっていく。

3.『椿説弓張月』における『楊家府演義』受容の可能性

「『椿説弓張月』には『楊家府演義』を受容している可能性がある」との推測が成り立つということは、換言するならばそれは、徳田武氏が「『椿説弓張月』と『狄青演義』」において論拠としている点が、『楊家府演義』にも全て該当するということでもある。前節においては、徳田武氏の論考において、『椿説弓張月』が『狄青演義』を受容している論拠として挙げていた『狄青演義』の刊行年代や、『惜字雑箋』に『狄青演義』の詳細な筋立てを書き残している点について、『狄青演義』と二系統の「楊家将演義」小説の関係と刊行順序や年代、さらに「一代記構想」に対しては、「家将小説」という新しい視座から、『楊家府演義』にも同等の可能性があることを述べてきた。

本節では、徳田武氏が論拠としている点について更なる考察を試みる。先述した論拠のほかに徳田武氏は、人物設定や重要モチーフやプロット、情節の対比、作品主題や世界観の同一性を、重要な論点として挙げて考察している。それは、

①「敵対者が主人公に迫害を加え、遠隔地にある物を取りにやらせる」プロット
②「義兄弟のような忠臣達」という設定
③「遠隔地において武勇ある美女を妻にする」情節
④「不遇の英雄である主人公に、次々に襲い掛かる艱難辛苦」という設定
⑤「天空から雲に乗って現れる巨漢で真っ赤な妖怪」という登場人物

46　後藤丹治校注『椿説弓張月』上 岩波書店 1958.8

の五点であるが、この設定は全て『楊家府演義』にも当てはまる。

設定①については、楊文広の東岳参拝のプロットが該当し、②についても、楊家代々の御曹司たちには、例えば楊六郎には孟良と称賛、楊文広と魏化など、必ず忠義の腹心たちが控えている点で当てはまる。③についても、楊文広の比武招親の段がまさにそれである。また、この①や③のプロットはどちらも、『楊家府演義』にのみ描かれているプロットである。更に、④は、二系統の「楊家将演義」小説がそもそもの作品骨格として有している設定であり、⑤にいたっては、二系統の「楊家将演義」小説における共通プロットである七十二座天門陣そのものであるということができる[47]。

尚且、これらの設定は全て、そもそも『楊家府演義』と『狄青演義』の作品の成立ちと関係からは、当然のことばかりということができる。では、『楊家府演義』においても、具体的にどのような点が、どの程度類似しているのであろうか。ここで、『椿説弓張月』と『楊家府演義』の類似プロットや情節について、前掲①から⑤も含めて顕著にその類似を読み取れる点を、いくつか具体的に指摘したい。

(1)譜代の佞臣による迫害と流刑

『椿説弓張月』に描かれる、信西入道ら佞臣による度重なる理不尽な迫害や流刑、一族の不遇を嘆きつつも武士の本分を貫き続ける為朝や一族郎党だが、『楊家府演義』二十一則でも、佞臣による度重なる理不尽な迫害や流刑に、一族の不遇を嘆きながらも、武士としての忠義や先祖に対する孝心から立ち上がる楊六郎や一族郎党の姿が描かれている。また、『楊家府演義』に通底する、主人公達が時の権力の身勝手さを憂い、一族の不遇を嘆く姿は、単純明快な筋立てで人気を博した『北宋志伝』には見られない細やかな心理描写である。

(2)主人公の身代わり死体

『椿説弓張月』では、伊豆大島で為朝が窮地から脱出するために自身の身代わり死体を用意する場面が描かれているが、『楊家府演義』二十則でも、楊六郎が流刑地で佞臣の配下の者たちの暗殺から逃げるために、身替り死体を準備する場面が描かれている。

(3)仙桃と兵法書

『椿説弓張月』では、為朝の息子であり、為義から三代目の御曹司である舜天丸が、窮地に陥った岩山で仙人から仙桃と兵法書を授けられる場面が描かれているのは、周知のことである。この「山中で仙桃と兵法書を授けられる」情節も、『楊家府演義』二十三則に記載がある。この二十三則の即題も「宗保遇神授兵書」で、兵法書を授けられることを示唆している。この情節では、山中で窮地に陥った宗保が、仙女に出会って仙桃を口にして不思議な力を身に着け、敵軍を破るための兵法書を授かり、ついに敵陣を破るまでの活躍が描かれている。

(4)弓矢の腕比べ

弓矢の腕比べといえば、為朝が信西入道に陥れられ松の木の下に立ち、次々射かけられる矢を見事に掴み、最後の一本は口で喰い止め、鏑をかみ砕いてしまう情節が有名である。『楊家府演義』では三十五則、宴席において敵の将軍が弓矢の腕比べを言い出し、楊家の忠臣である孟良が柱に縛られ、近距離か

47 『北宋志伝』(『南宋志伝』を含む)と『楊家府演義』の各プロットやモチーフに関しては、平原真紀「明刊本《楊家将演義》小説の基本問題―《北宋志伝》と《楊家府伝》の二系統とその対比―」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 第 20 号 2014.1 に詳しい。

ら矢を次々に射かけられる。孟良は、その矢を自分の頭をひねっては避け、手で掴んでは止め、最後に飛んできた矢を口で受け止めるまでを詳細に描いている。この矢を口で噛み折って止める「弓矢の腕比べ」エピソードは、「楊家将演義」との関係を指摘される『水滸伝』などにも受容されており、中国白話で広く目にする情節でもある。

(5)勅命による遠征と次々現れる美しい押しかけ妻

『椿説弓張月』では、為朝が勅令により仙鶴を捕まえに琉球まで遠征し、その先々で勇猛果敢で美しい美女が次々と現れては為朝に迫り、一夜を共にしてはそのまま妻となる。この情節は、『楊家府演義』でも比武招親[48]と称される有名な情節である。『楊家府演義』四十六則では、楊文広は勅命を受けて、強奪された宝物を奪還すべく東岳へと遠征する。その長い旅路の途中、地元有力者や山賊の美しく武勇に秀でた娘達が、次々と楊文広に一目惚れをしては一夜の契りと結婚を迫るという、非常に類似したプロットが存在する。

以上のように、徳田武氏が論拠としている類似点以外にも、主要な類似プロットや情節の一例を提示したが、この他にもまだ数多くの類似点となるモチーフを挙げることがでる。それは、例えば、主人公の設定がどちらも皇室に連なる血筋を持ち、巨漢で弓の名手と謳われる眉目秀麗な名家の御曹司であることや、戦場での非業の自死、仙鶴や真珠の珠、雲に乗る怪しく醜い妖怪、流浪中に出逢う忠臣たちや、彼らの非業の死など、その類似点は枚挙に遑がない。何よりも、『椿説弓張月』に通底する乱世の不条理を嘆く世界観や、主人公を迫害した佞臣たちが最後に必ず因果応報の報いを受ける点などは全て、『北宋志伝』には見られない、『楊家府演義』だけが有する特徴である。

おわりに

本稿ではまず、近世日本文学における長編講史小説の代表作のひとつである『椿説弓張月』について、その出版時の状況や書名についての解説を含む概要を整理した。次に、二系統の「楊家将演義」小説について、考察に必要な部分の概要と二系統の板本の関係性、近世日本への伝来調査の結果を再確認した。中でも、『南宋志伝』と『北宋志伝』の挿入詩が十三首、馬琴『椿説弓張月』冒頭の全十五首の題詩の中に出典を明記されることなく借用されていること、この借用方法が『楊家府演義』の編纂者・紀振倫と酷似していること、そして、『北宋志伝』の注釈などに「楊家府等伝」等という関連書籍の存在が記載されており、馬琴が確実にそれを目にしているはずであること、などの点から『椿説弓張月』に二系統の「楊家将演義」小説が受容されているのではないかと推測するに至った。

更には、両作品に共通する設定やモチーフ、勧善懲悪の作品観などが、『楊家府演義』と共通しており、馬琴という人物が、自身が目を通し、作品を執筆する際に参考にした文献のすべてを正直に書き出すわけではないという点から、『椿説弓張月』に「楊家将演義」小説のうちの『楊家府演義』が受容されている可能性を予測し、考察をおこなった。『椿説弓張月』と中国白話に関する先行研究においては、『椿説弓張月』と『楊家府演義』の派生小説である『狄青演義』との間に受容関係がある、とする徳田武氏による論考に注目し、この先行研究から『狄青演義』と「楊家将演義」小説の成書過程を含む関係性や刊行順序などを論拠に、『椿説弓張月』に『狄青演義』を受容した可能性があるのであれば、『狄青演義』がその粉本とした『楊家府演義』にもその可能性があるのではないかと考えた。

48 「比武招親」は「花関索伝」(『成化歌唱詞話』)などにみられるが、松浦智子「「楊家将演義」における比武招親について―その祖形と傳承をめぐってー」『中国文学研究』31　早稲田大學中國文學會 2005 に詳しい。

そこで、徳田武氏の論考を参照し、『椿説弓張月』と『狄青演義』の関係に、『楊家府演義』がどれほど同じ同一性を見出せるのかについて、二系統の作品の設定やプロット、情節やモチーフについて、ひとつひとつ丹念に対比考察をおこなうこととした。具体的な作業としては、徳田武氏が『狄青演義』受容の論拠として指摘している点の全てを、『楊家府演義』のそれと対照させて確認をおこなった。徳田武氏が論拠とした点については、まず、馬琴が『狄青演義』に目を通したとされる記録は、『椿説弓張月』執筆の相当後の年代であることが判明した。次に、『椿説弓張月』と『狄青演義』は、確かに「一代記」であるという共通点があるものの、『椿説弓張月』に描かれているのは、源家三代の武勇と悲劇を描いた事跡であり、また、物語後半には妖術飛び交う荒唐無稽なプロットが存在することなどから、『北宋志伝』や『楊家府演義』と同じ「家将小説」として捉えてもよいのでは、との新たな視座を提案した。

さらに、徳田武氏がその共通点として挙げていた様々な設定やモチーフ、プロットの全てが、そもそも『狄青演義』の粉本であった『楊家府演義』にも全て当てはまることを確認した上で、実際に『椿説弓張月』と『北宋志伝』にはないが『楊家府演義』にはある共通点についても、設定やプロット、モチーフ、作品観についての具体例をあげて考察をおこなった。この一連の考察によって、徳田氏の論拠を超える具体的な論拠、例えば、『楊家府演義』の書名を馬琴に関連する史料に確認できた、等の成果は見られなかったものの、徳田武氏が論拠としている点と同等の論拠が『楊家府演義』にもあることを確認するに至った。

特に、『狄青演義』の刊行年からは、馬琴が『椿説弓張月』執筆以前に『狄青演義』に目を通していた可能性は、非常に低いと言わざるを得ないと判断した。この点も加味するならば、馬琴が『椿説弓張月』を執筆する以前に確実に日本へ渡来しており、且、江戸市中に確実に存在した『楊家府演義』を受容した可能性の方が、より高いと考えてもよいのではないかとの結論に至ったのである。この、『椿説弓張月』における『楊家府演義』受容の可能性については、今後、まだ多数存在する未確認の漢籍目録や蔵書目録、また、馬琴周辺の資料を更に精査する必要がある。その調査によって、『楊家府演義』や『楊家将演義』などの書目名を、当時の資料において確認することで、本稿で提示した『椿説弓張月』における『楊家府演義』受容を裏付けるより具体的な論拠として提示できると考えている。

以上の考察結果から、たとえ生きる時代も国も全く異なっていたとしても、『楊家将演義』の編纂者である紀振倫と『椿説弓張月』の作者である曲亭馬琴には、人生に対するまなざしや刊行書籍に込める執筆編纂意図に共通する点が多く、その受容を想定し得る可能性として提示するものである。

平原　真紀（ひらはら　まき）Hirahara, Maki
東京外国語大学　大学院国際日本学研究院　特別研究員

付記

本論文は、2021年3月に東京外国語大学大学院総合国際学研究科へ提出した博士論文の一節を基として、大幅な修正を施したものである。

主な板本・テキストと参考文献一覧

主な板本・資料・目録など

・国立国会図書館所蔵経国堂『玉茗堂批點繡像南北宋志傳』
・東北大学所蔵維経堂『玉茗堂主人按鑑批點南北宋志傳』
・国立故宮博物院『楊家府世代忠勇演義志傳』
・国立国会図書館所蔵『鐫出像楊家府世代忠勇演義志傳』

・曲亭馬琴・高山蘭山編訳「新編水滸画伝」『水滸画伝』朋友堂文庫朋友堂書店 昭和2年
・国立国会図書館所蔵・春江堂『椿説弓張月』 1911年
・瀧澤馬琴『惜字雑箋』 1802‐1838（早稲田大学所蔵）
・孫楷第『中国通俗小説書目』作家出版社 1957.1
・大塚秀高『増補中国通俗小説書目』汲古書院 1987.5 増補

ほか

主な参考文献

・坪内逍遥・水谷不倒共編『近世列伝体小説史』上下巻（暁霞処士「曲亭馬琴」を含む）春陽堂 1897.5
・衣田学海『椿説弓張月細評』帝国文庫39・1899
・藤岡朔太郎「近代小説史」大倉書店1917.1
・常征『楊家将演義史事考』天津人民出版社1920
・島崎藤村「馬琴の研究」藤村作・新潮社版日本文学講座第十巻所収　昭6(1931)
・麻生磯次『江戸文学と中国文学』三省堂 昭21.5.1
・後藤丹治校注『椿説弓張月 上 岩波書店1958.8
・高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集27・筑摩書房1960.8
・中村幸彦『中村幸彦著述集　第５巻』中央公論社　昭57
・後藤丹治校訂『椿説弓張月』上下巻・日本古典文学大系・岩波書店1958.8‐1962.1
・高藤武馬訳『椿説弓張月』古典日本文学全集27・筑摩書房1960.8
・大庭脩著者兼編輯『江戸時代における唐船持渡書の研究』　関西大学東西学術研究所昭和41.11
・大庭脩著者兼編輯著『江戸期における唐船持渡書の研究』関西大學東西学術研究所　昭42
・中村幸彦「椿説弓張月の史的位置 (滝沢馬琴)」『文学』36 1968.3
・諏訪春雄・日野辰夫『江戸文学と日本』毎日新聞社　昭52.2.10(1977)
・中野三敏「漢文劇作の展開」『江戸文学と日本』毎日新聞社　昭52.2.10(1977)
・大庭脩『江戸時代の日中秘話』東方選書5　東方書店1980.5
・麻生磯次『滝沢馬琴』人物叢書・日本歴史学会編集・吉川弘文館1987.10（初版昭18）
・高田衛「馬琴・南北における一典拠」『都大論究』25 .1988
・徳田武「『椿説弓張月』と『狄青演義』」『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店　昭62.5
・土岐和美「読本における『水滸伝』の受容-『八犬伝』及び『八犬伝』以前の読み本を中心に-」『古典研究』16 1989
・『滝沢馬琴集』全20巻・帝国文庫1990
・大高洋司「『椿説弓張月』論―構想と考証―」「読本研究」第6輯上套、1992.9
・青木稔弥ほか編・横山邦治監修『読本研究文献目録』溪水社 1993.10
・中野三敏『江戸の板本』岩波書店1995.12
・高木元「江戸読本の形成―貸本屋の出板をめぐって―」『文学』56『江戸読本の研究』 1995
・大庭脩『漢籍輸入の文化史―聖徳太子から吉宗へ―』研文出版1997.1
・上田望「講史小説と歴史書(2)―『残党五代史演義』、『南宋志伝』構造と変容―」『東洋文化研究所』第137冊1999.3
・橋本眞一「曲亭馬琴伝記小攷－曲亭馬琴旧蔵本『鎖国論』・石川畳翠旧蔵本『松窓雑録』について」『読本研究新集』第二集・読み本研究の会・翰林院書房2000
・大庭脩『漂着船物語―江戸時代の日中交流―』岩波新書2001.8

・井上進『中国出版文化史』名古屋大学出版会2002.1
・小松謙『中国歴史小説研究』汲古選書　平成13
・大高洋司「『椿説弓張月』の構想と謡曲「海人」」「近世文藝」79、2004.1
・大木康『明末江南の出版文化』研文出版2004.5
・常毅「元明期"楊家将"戯曲小説研究」『暨南大学』2005
・松浦智子「「楊家将演義」における比武招親について―その租形と傳承をめぐってー」『中国文学研究』31早稲田大學中國文學會2005
・岡本勝・雲英末雄編『新版近世文学研究事典』おうふう2006.2
・橋本眞一「『椿説弓張月』論」『日本文学研究』(46) 大東文化大学2007.2
・今田洋三『江戸の本屋さん―近世文化史の側面』平凡社ライブラリー 2009.11
・中野三敏『江戸文化再考―これからの近代を創るために』笠間書院2012.7
・菱岡 憲司「傀儡子から魁蕾子へ―馬琴異称にみる執筆意識の変化―」『近世文藝』日本近世文学会 2011
・平原真紀「小説『楊家将演義』再考―《北宋志伝》と《楊家府伝》」『中国俗文学研究』中国俗文学研究会 2013.4
・平原真紀「明刊本《楊家将演義》小説の基本問題―《北宋志伝》と《楊家府伝》の二系統とその対比―」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 第20号 2014.1
・大高 洋司「八戸南部家の読本収集」『読本研究新集』6 2014.6
・大塚秀高「『楊家将演義』前後の歴史小説」『楊家将演義 読本』2015.6
・平原真紀「明刊『北宋志伝』板本による楊家将小説の完全邦訳」『東方』2016.1
・高橋智『海を渡ってきた漢籍―江戸時代の書誌学入門』日外アソシエーツ2016.6
・大塚秀高「歴史物語の育成と発展―高家将物語を中心に」埼玉大学紀要教養部2017
・平原真紀「二系統の明刊本「楊家将演義」小説における共通底本の可能性―『北宋志伝』と『楊家府演義』の二系統をその対象に―」『樹間爽風』和漢韻文研究会2021.12.25
・平原真紀「近世日本に於ける「楊家将演義」小説の伝来」『東京外国大学国際日本学研究』2021.3

ほか

主なデジタル資料ほか

・板坂則子「曲亭馬琴研究文献論文」(1988~1997)『専修国文』(通号 64)1999.01
国立国会図書館デジタルhttp://id.ndl.go.jp/bib/000000013618
・専修大学内人文系データベース
http://www.senshu-u.ac.jp/School/kokubun/kotengakka2/itasaka-bunken.htm

ほか

平林たい子「敷設列車」論

―生政治の視座を通して―

A Study on Taiko Hirabayashi's "Laying Train": From the perspective of Biopolitics

楊　佳嘉

This paper is a rereading of Taiko Hirabayashi's novel "Laying Train" from the perspective of biopolitics. There is a vertical hierarchy of Japanese as "imperial vassals" and Chinese laborers who are treated like animals in the Japanese colony "Manchuria" in this fiction. However, the relationship between the Chinese and the Japanese is not absolute binary opposition, but it fluctuates between the binary opposition and the similarity as the story progresses. Though there are significant ethnic and class differences between the two, the desire to save lives in the event of the natural disaster such as floods is shared to some extent. Because of plague, the lowest-ranking Chinese laborers were abandoned and treated as "homo sacer." The Japanese who work at the laying site are higher than them, but if a flood occurs, they may also be abandoned by the empire, making them become potential "homo sacer." The distinction between Japanese and Chinese as "homo sacer" varies according to the intersection of ethnicity and class. In this novel, by depicting such a complex relationship between the Chinese and the Japanese, Taiko revealed the principle of biopolitics in the Japanese colony "Manchuria", that anybody might structurally become a "homo sacer" (more or less). Clearly, "laying train" is a work that reveals the structure of biopolitics in the modern Japanese colony "Manchuria". Not only that, but Taiko pointed out the possibilities of a life community in which Chinese laborers are solidarity based on the "precarious life". Therefore, we found Taiko's "flexible internationalism" concept, which re-examines the greater universal problem of life by paying attention to the position of the lowest level laborers. It is Taiko's attempt to transcend the ideology of contemporary proletarian literature where class struggle is an absolute value.

【キーワード】平林たい子、「敷設列車」、生政治、「満洲」、苦力
Taiko Hirabayashi, "Laying Train", biopolitics, "Manchuria", coolie

はじめに

「敷設列車」は、平林たい子が1929年12月に『文藝戦線』に発表した小説である。この作品は「満洲」中北地域にある洮昂鉄道[1]の敷設現場を舞台として、そこで酷使された中国人労働者の苛酷な生存と労働の状況、そして彼らの抵抗を描いた物語である。作品の前半は、鼠の仕業によって発生した「盗難」事件をめぐる日本人と中国人の揉め事が描かれる。「逃亡犯人」を見つけようとした警務部員が中国人に発砲する事件にまで発展し、それを契機として、中国人労働者たちはストライキを計画する。さらに、敷設

1　洮昂鉄道：洮南（現在は中国吉林省白山市にある）より昂々溪（現在は中国黒龍江省チチハル市に位置する）に至る鉄道であるが、終始端駅は四洮鉄道の洮南駅及び中東鉄道の昂々溪駅とは各々数キロメートルの距離にある。この鉄道は 1924 年 9 月 3 日に奉天省当局と南満鉄道との間に締結した『洮昂鉄道建設請負契約』により 1925 年 6 月末に工事に着手し、1926 年 7 月はじめに工事を終えたものである。(南満洲鉄道株式会社庶務部調査課『パンフレット第六十一号　満蒙に於ける鉄道の概要』、南満洲鉄道株式会社、1929.6、p.14。)

現場の衛生管理の不備によって中国人の間にワイルス氏病の伝染が広がり、死者も出る。しかも、その死体は燃やしただけで放置され、鼠の餌食になる。病人の治療と労働時間の制限を要求するべく、中国人労働者の一部がストライキを実行に移すが失敗に終わる。最後に、洪水が来るという情報が入る。それを警戒した中国人労働者は、水害を回避し病人を入院させるために引き返すことを要求するが、日本人技師にそれを受け容れる意志がないと見て取り、自分達だけで列車を引き返す計画をたてる。決行の日、彼等は団結し、日本人監督たちを捕縛するとともに敷設工事の起点の方向へ機関車を出発させていく。作品内の時間は1924年6月と設定されており、実際の洮昂鉄道の建設より一年早い[2]。事実を背景としているがフィクションであり、洮昂線でのストライキは全てたい子の創作である。

同時代評においては、この作品についての評価が分かれている。高評価なものとしては、例えば島影盟がこの作品における「ガッシリ」した構造や「搾取する者と搾取されるものとの対立」を端的に表現したことを高く評価し[3]、広津和郎はこの作品を「プロレタリア芸術の成長の上に、十分な功績をもっている」と位置づけている[4]。また、板垣直子は「敷設列車」を平林たい子の代表作として取り上げ、「氏は単に女流作家の中の第一人者である許りでなく、男子の作家達と並べても、群を抜いている」と賞賛する[5]。一方、十時三郎はこの作品における文章の難しさに閉口するといい、それを女性作家の創作の傾向としながら、「イデオロギッシュに何らの発展をも示さなかった」という文戦派の思想的限界として論じた[6]。また、山村梁一はこの作品における芸術的な描き方に「賛成」せず、たい子の「施療室にて」(1927年9月)のような「女性としては粗削り過ぎる位の表現と内容的なもの」への期待を見せている[7]。ほかに、雅川滉はこの作品の表現を新しい芸術形態として高く評価する一方、「藝術的粉飾」はプロレタリアートの「示威運動に対して無力である」と感じており、作品における心理的描写の足りなさを指摘した[8]。まとめると、この作品は1930年前後の文壇で注目され、作品の完成度と芸術性が高く評価されたにもかかわらず、プロレタリア文学としては芸術的な描き方の有効性と効果が問われ、評価が分かれたといえる[9]。

先行研究は次のようにまとめられる。戦後まもなくこの作品は再注目されており、作品の描き方の特徴が主観と客観の統一にあるとされ[10]、同時代の「プロレタリア文学の到達した高い一つの水準」[11]として、あらためて評価された。1980年代には助川徳是が「敷設列車」を含めたたい子の初期作品の表現の特徴を「広大な眺望」の視点とみるとともに、そこにはたい子の「原初的な自然性とか、地母神的な感性」という精神の型があり、政治の優位性を重視するナップ派とは一線を画していると評価している[12]。2000年以降は、この作品における反帝国主義と反植民地主義の性格が注目されてきた。田中益三は「敷設列車」を反帝小説というプロレタリア文学の公式による産物としつつ、異民族との連帯の可能

2　それについて、岡野幸江はたい子の単純なミスの可能性を指摘している（岡野幸江『平林たい子 — 交錯する性（ジェンダー）・階級（クラス）・民族（レイス）—』、菁柿堂、2016、p.144、注 11)。
3　島影盟「プロレ派の作品下　十二月創作評（3)」『やまと新聞』朝刊、1929.12.12、第 1 面。
4　広津和郎「文芸時評」、『改造』12-3、1930.3、p.174。
5　板垣直子「新興女流作家」、『女人芸術』3-9、1930.9、p.98。
6　十時三郎「文芸時評　敷設列車（1)」、『萬朝報』、1929.12.3、第 3 面。
7　山村梁一「十二月の文戦作家」、『文芸戦線』7-1、1930.1、pp.127-128。
8　雅川滉「独断的批評六箇條（十二月創作月評)」、『三田文学』5-1、1930.1、pp.80-81。
9　その背景として、1929 年の文壇を賑わした文芸の政治的価値、芸術的な価値をめぐる議論において、政治的価値一元論が最終的に勝利を占めたことがある。また、作家のジェンダーや所属する芸術団体の関係によって評価にバイアスがかかっていることも考えられるだろう。
10　小原元『批評の情熱』、雄山閣、1948、p.73。
11　壷井繁治「平林タイ子論」、『新日本文学』7-6、1952.6、p.128。
12　助川徳是「鳥瞰された時間 —— 平林たい子の初期四作について——」、『平林たい子研究』（宮坂栄一編)、信州白樺、1985、p.16。

性を夢想させ植民地の構造それ自体を指弾する作品として位置づけた[13]。岡野幸江は「満洲」の最下層労働者に焦点を当てて、その民族的、階級的主体の回復を主題化した点に注目し、1920年代の植民地最前線を切り開いていった日本の侵略行為を浮かび上がらせた作品であると述べている[14]。さらに、李雁南は語り手の位置に注目し、主体性のある中国人苦力の表象にたい子の民族を超え階級に基づいたインターナショナリズムの姿勢を見出している[15]。郭璇はたい子がこの作品で巨視的な視点で苦力を描き、彼らに〈主体性〉を与えているとし、日本人監督たちも苦力たちも等しく帝国主義の犠牲者となるという実相を暴き出したと指摘する[16]。

以上にまとめたように、近年の先行研究では作品の反帝国主義と反植民地主義の性格が注目されており、作品における中国人苦力の主体性の問題も指摘されるようになっている。ただしこれらの論では、中国人と日本人の関係性を、搾取される者と搾取する者として対立的に理解するか、あるいは帝国主義とその犠牲者という枠組みを用いて双方を等しく犠牲者として同一化しており、いずれにしても二項対立的な理解となっている。それに対して論者は、「敷設列車」を含めた平林たい子の「満洲」関係の物語の特徴として、植民地における中国人と日本人のそれぞれの内部の差異と分断が丹念に描かれていることに注目している[17]。本論では、「敷設列車」にも、宗主国の人／被植民者のような二項対立的構図や、民族的な差異を無化して階級のみを前景化する単純なインターナショナリズムの構図ではなく、日本人と中国人の差異が浮き彫りにされると同時にそれぞれの内にも決して同一化できないものが存在するという、異なる力学が複数的に交差する抑圧のメカニズムが描出されていることを明らかにしたい。

具体的には、作品における複層的な対立の構図（日本人と中国人の差異、日本人の内部の差異と分断）を明らかにした上で、生政治の視座からそこにおける中国人の「ホモ・サケル」(homo sacer)[18]としての生とそこからの主体性の回復を、彼らの抵抗のプロセスを通して分析する。作品における生政治の構造を明確にすることで、平林たい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉の思想を明らかにしたい。同時代のプロレタリア文学において唱えられた国境を超えたプロレタリア階級の団結という大枠の理念ではなく、日本の植民地「満洲」[19]における各階層の日本人と中国人の間における様々な差異を認めた上で示される、最底辺に置かれた中国人労働者の生命共同体への共感があることを明らかにし、それを〈柔軟なインターナショナリズム〉として読み解く。

13　田中益三『長く黄色い道 —— 満洲・女性・戦後』、せらび書房、2006、pp.32-42。
14　同注 2、岡野前掲書、pp.128-145。（初出：岡野幸江「平林たい子と満洲 ——「敷設列車」から見る 1920 年代」、『世界文学』120、2014.12、pp.20-27。）
15　李雁南『在文本与現実之間 —— 近現代日本作家笔下的中国』、北京大学出版社、2013、pp.91-104。（初出：李雁南「超国界与超民族的階級認同 —— 昭和初年日本無産階級文学中的中国労工形象」、『広東教育学院学報』26-6、2006.12、pp.38-43。）また、李は『錯綜する人と空間 —— プロレタリア作家の中国像』（有信堂高文社、2021）においても「敷設列車」に言及している。
16　郭璇「平林たい子の「敷設列車」における「苦力」表象 ——プロレタリア文学と「満洲」の労働者へのまなざし——」、『比較文化研究』141、2020.10、pp.93-104。
17　その特徴は「敷設列車」のみならず、「投げすてよ！」や「施療室にて」などの作品においても見られる。詳細は拙稿「平林たい子と彼女の「満洲」体験物語 —— 作品における空間の意味と機能をめぐって——」（『北東アジア研究』32、2021.03、pp.1-18）を参照されたい。
18　この「ホモ・サケル」(Homo Sacer) とは、ジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben）によって提出された概念である。この概念についての説明は後述する。
19　作品が発表された 1929 年当時の状況からして、満鉄による鉄道建設によって日本の帝国主義が拡大している満鉄付属地域であろう。

1. 複層的な抑圧のメカニズムの展開 ―― 鼠の仕業を通して

はじめに、作品における民族と階級の差異によって構築された複層的な対立の構図を抽出しておく。この作品では、様々な職種の中国人労働者と日本人の職員が登場する。中国人労働者は、ボルト締めや犬釘打ちの仕事をする工夫(28人)と、単純な肉体労働に従事する苦力(400人あまり)の二種類に分けられている。日本人の中には、中国人労働者を監督する現場監督や、中国人労働者の生活空間を管理する警務部員のほかに、事務関係者、技手、技師、委託医などがいる。それぞれの職種の間の差異とヒエラルキーは、次のような箇所に巧妙に示されている。引用したのは、日本人が泊まっている宿営車で、委託医の山田と技手の伊東の間でなされた会話である。

> 「君、支那人の盗癖って奴にゃ参ったねえ。さすがの僕もとうとう洗面所の台に置いたベルベット石鹸を昨夜中にとられてしまったよ」／「僕も昨日あそこで歯ブラシをとられた。しかし、ありゃあ鼠の仕業だよ。」／伊東はやや不機嫌に答えた。彼には山田の派手な靴下が堪らなく軟弱に見えた。大きく言えば日本という祖国の食糧問題、人口問題の解決の戦士として、軍人に勝るとも劣らない使命をもってこの蒙古の野に出張している帝国臣民が、ハルビンのダンスホールに通う英国人の利権屋の様なあの靴下は何だ！彼は故郷の下関の連隊で工兵伍長だった。(p.285)

山田は歯ブラシが無くなったのを中国人に盗まれたのだと勝手に判断し、技手の伊東に不平をこぼした。しかし、伊東は「やや不機嫌」にそれは「鼠の仕業だ」と返事をした。その不機嫌な態度は、彼と山田の間の差異と分裂を示している。「工兵伍長」の出身で、軍人という素性を持つ伊東は技術力を生かして「満洲」の鉄道建設の現場で仕事をしている人間である。彼からすれば、「英国人の利権屋の様なあの靴下」を履いている山田は「帝国臣民」として「満洲」で働く日本人に相応しくないことは明らかであろう。ここで、伊東と山田の間の職種による差異とヒエラルキーが描かれることで、日本人内部の二項対立の関係が現れている。

また、「盗難」の話は食堂車においても出てくる。次に着目したいのは、この場面において日本人は何の根拠もなく盗難を中国人の癖と見なしていることである。

> 食堂車でも盗難の話が出た。油がにじみ出ている吊ランプの壺の下で、彼等は帽子を被った儘飯をかっ込んだ。そして鼠の仕業を人間の仕業の様に言う事に興味を覚えた。(中略)支那人は子供が大きくなると先ず何よりも先に物を盗む方法を教えると言う話が出た。
> 「丁、お前も教わったか」
> 入れ歯をガクガク動かしていた連絡係の畑が給仕のために立っている×××[20]に言った。
> 「不如(まさか)！」
> 「丁は苦笑した。皆笑った。」(p.285)

食堂車で中国人は「子供が大きくなると先ず何よりも先に物を盗む方法を教える」という話題が出ており、連絡係の畑が給仕の丁に「お前も教わったか」と聞き、丁が中国語で「不如」(まさか)と返事し、苦笑する場面である。給仕が付いている食堂車という場所であるから、そこで食事をするのは日本人だろう。丁の苦笑に対して食堂車の皆も笑った。その笑い声には「鼠の仕業を人間の仕業の様に言う事に興

20　伏せ字。「支那人」。

味を覚えた」という面もあるかもしれないが、食堂車の日本人の中国人労働者に対する無意識的な見下す視線が感じられる。

さらに、現場には、盗難を鼠の仕業であると知りながらも、わざと中国人のせいにした日本人もいる。

> 「兎に角、三号の宿営車の張ってやつに注意していて下さい。あいつの顔は、ありゃ普通の支那人の顔じゃないですよ。盗癖のある顔だ。たしかに」
>
> 鮫島は敷設機の方へ歩き出し乍ら庶務の笹島に囁いた。彼は平生自分に敬意を表さない張に対してある憎しみと怖れをもっていたので、盗難を鼠のせいにしないで、そんな風に言いたかった。(pp.285-286)

現場監督の鮫島は、「自分に敬意を表さない」工夫の張の顔を「盗癖のある顔だ」と庶務の日本人に伝え、張の行動に対して注意を喚起する。食堂車の日本人の中国人労働者に対する見下す視線が無意識的なものであるといえるならば、現場で中国人に対して意地の悪いことを言う鮫島は、日本人としての優越感を自覚して中国人を軽蔑し、さらには従順ではない中国人に悪意を持っているといえよう。

壷井繁治は、「鼠の仕業を中国人労働者たちの盗癖にすり替え」て、彼等を鼠以下に取り扱う日本人の描写を通じて「日本の植民地政策の本質が典型的に描きだされている」と指摘した[21]。ただし、微分化すればこの作品におけるヒエラルキーの構図はより複雑になる。この作品における民族と階級の力学は重層的で、大きくいえば、「帝国の臣民」としての日本人とそうではない中国人という垂直的なヒエラルキーで維持されているが、日本人内部においても職種によって不均衡な力関係が存在しており、それは伊東の山田に対する不機嫌な態度を通してほのめかされている。中国人労働者は民族と階級という二重の抑圧のメカニズムによって、最下層におかれている。したがって、異なる力学によって複層的に課されたヒエラルキーが「敷設列車」において展開されているといえよう。

2. 曖昧化された人間と動物の境界 ――「ホモ・サケル」となる存在としての中国人労働者

では、最下層に置かれた中国人はどのように生存しているのか。本節では、彼らの生活と労働環境の描き方に注目し、彼らの生の有様を確認しながら、帝国における彼らの位置づけを明らかにしたい。まず、彼らの生活環境を見てみる。

> 土匪襲来の噂を、十日に一度ずつ連絡して来る後の建築列車が運んで来た。四五日前から装甲車の四角な鋼鉄の蓋が吊上がってあいた。夜になると二つの窓からライオンの目の様な探照灯が光り出した。それは土匪への防備の意味も三分は含まれていたが、七分はいよいよ苦しい作業にさしかかって来た苦力達の逃亡を防ぐためである。(p.282)

レール敷設の現場では、苦力達の逃亡を防ぐための「ライオンの目の様な探照灯」が用意され、夜になると光り出したと描写されている。「ライオンの目の様な」という比喩は、権力者が猛獣であるライオンのように、苦力達を監視することを意味しているだろう。また、警務部員は彼らに「飛出されないため」に用心して、「宿営車の扉に外から錠を下げて」いる(289頁)。彼らの生活環境において、警務部員は宿営車の扉の開閉や錠の上げ下げなどを通して絶対的な権力を持っている。つまり、労働時間であるか否

21　同注 11、壷井前掲論、p.127。

かを問わず、中国人労働者達は監視されている状態で生活し、この先の十ヶ月も「監獄の壁」(293頁)の中に置かれるような状態だと予見できるのである。

しかも、監視された状態であるのみならず、作品においては中国人労働者と動物との境界線が曖昧化されたり中国人が〈動物〉[22]化されたりする表現が多く現れている。たとえば、鼠が作品の中で多くの場面に出てくるが、中国人労働者の労働と生活の空間に頻繁に乱入することを描いた場面に注目したい。

> 一人が材料車の上へハンマーを探しに行っている間に鼠は彼等の注意と注意との間を稲妻の様に隙をうかがって逃げた。／彼らは理由なく、鼠にも劣った人間の様に自分のことを考えた。(中略) ／すると、毒瓦斯の様な温気が広々とした蒙古の大気の中へ快く散って行く。彼等はそれから水浴や煽風機の夢を見ながら朝まで一団りの豚肉みたいに崩れて眠るのである——鼠はその扉口から侵入した。(pp.284-285)

鼠はすばやく中国人労働者の労働空間から逃げたり彼らの泊まっている宿営車の扉から侵入したりし、公私にわたり監視される彼らよりも行動しやすい。それゆえ彼らは、自らを鼠にも劣る存在だと感じている。また、彼らが仕事をする時、「蠅の様に散って自分の部署」にとまると描かれ(287頁)、「炭酸ガスがいつも充満していた」(284頁)宿営車で休憩している時は、「一団りの豚肉みたいに崩れて眠る」と描かれている。こうした比喩を重ねることで、中国人労働者が人間よりも、動物に近い状態に置かれていることが示されているのではないか。さらに、警務部員が犯人を探す時には、囚人に対して「監獄語」である「雑品」という言葉を使い、中国人を「鼠の様に」と乱暴に取り扱っている[23](290頁)。つまり、中国人労働者と動物の境界線は曖昧となり、彼らが動物のように働き、生活していること、また動物のように扱われていることが示されている。端的にいえば、中国人労働者は日本の植民地主義において〈動物〉化された他者なのである。

また、中国人労働者は〈動物〉化されるだけでなく、殺されてもよい、病気で死んでも構わないような存在として描かれている。具体的な場面としては、彼らが労働の現場において「現場監督に乱打され」(287頁)ることや、宿営車の前で警務部員に勝手に銃で撃たれたことなどが挙げられる。次の引用は「逃亡犯人」を探す際に、警務部員がある工夫に発砲した場面である。

> たてかけてある銃を、ある気持をもってじいっと見つめていた若い工夫があった。どなっている途中でフッと警務部員はそれに気がついた。彼にはそれがあまりに重大な発見だったので反射的にスッと視線をそらした。／「こいつだな。逃亡犯人は」／彼は何故ともなくそう思った。外らした視線に通じる神経の底の方で、銃身に蛇の様に巻きついている、その男の白熱光の様な強い視線をはっきり感じることが出来た。今にもその視線がクレーンの様に銃を巻き上げてしまいそうだ。／彼はある頂点にいる瞬間を感じた。／次の瞬間彼は咄嗟に×[24]をとり上げた。そして××[25]をその工夫のいる方へ向けた。／(一行削除) ／それは過失であったか故意であったか彼自身にもわ

22　ここでの〈動物〉の意味は、生物学における動物の意味ではなく、人間でありながらも動物同然あるいは動物以下のような存在とみなすことである。
23　この意味で、この作品における鼠という記号は監獄的な空間の境界線を自在に侵犯する可能性をもった表象であると同時に〈動物〉化された他者表象でもあるという両義性を持っている。
24　伏せ字。「銃」。
25　伏せ字。「銃口」。

からない。彼はただ埃の渦いている地面に動いている肉体を見た。それが幻影の様でもあった。(中略)／×××[26]た男は×××[27] ってうめいていた。(pp.290-291)

ここには、銃を恐れず「白熱光の様な強い視線」で銃を「じいっと見つめていた」若い工夫が描かれている。そのせいで、警務部員はこの若い工夫は「逃亡犯人」だと「何故ともなくそう思」い、彼に発砲した。「それは過失であったか故意であったか彼自身にもわからない」というところからは警務部員がはっきりした殺人の意志を持っていなかったと読める可能性があり、帝国の権力の射程が満鉄という支配装置を通して警務部員の内部まで届きうることがわかる[28]。本論で注目したいのは、警務部員に殺人の意志があるかどうかということではなく、警務部員と中国人労働者の間の権力関係である。つまり、中国人労働者にとって警務部員は絶対的な権力を持っているのである。確実な根拠もなく恣意的に「逃亡犯人」を決めて、銃で撃つという行為の描き方を通して、中国人労働者は殺されてもよい存在として描かれている。

さらに、会社の衛生管理の不備により、多くの中国人労働者がワイルス氏病に感染したことも無視するわけにはいかない。

遂に二人の死人が出た朝病人は百九十人に達した。出発の敷設車の上には工夫の姿がまばらになった。しかし、列車は髯の様に散る黒煙を吐いて威丈高に出発した。それは充ちあふれる戦闘意識をもった戦闘艦の姿に見えた。／風の方向が変った。一町程離れた地点で石油を掛けて二個の死体をやいていた煙がす早く地面を這った。(中略)／焼けのこった死体は、地面の起伏の一つになって突起していたが、一夜のうちに鼠のためにその起伏はなくなってしまった。(p.295)

ここでは、「黒煙を吐いて」戦闘意識を持っているように出発する敷設列車と、焼け残った死体が対照的に描かれている。その描き方には、「満洲」における日本の鉄道帝国主義の表裏が示されている。表はひたすら前進する戦闘艦のような敷設列車であるが、その裏には死んだ名も無きの中国人の労働者がいる。感染した人々は病院へ送られることなくほぼ放置されたような状態であり、次第に死んでいくのである。死体は現場で焼かれ、最後には土と一体になる。この前進する敷設列車は、岡野が指摘しているように、「最前線としての「満蒙」という地」を切り開く、日本の「侵略の尖兵のメタファーとして」機能している[29]。日本人が見るのは、鉄道の建設に伴う帝国の光栄のみであり、その以外のものではない。死んだ中国人労働者は人々に記憶されず、使い捨て可能な生として「満蒙」の大地の一粒の土となるのみである。

ジョルジョ・アガンベンは近代の政治的文化における生政治の構造を分析し、「ホモ・サケル」という概念を提示した。「ホモ・サケル」というのは、「犠牲化不可能」であると同時に殺害可能である生であり、「聖なる生」(sacred life)あるいは「剥き出しの生」(bare life)と説明されている。このような生は、政治的なビオス(bios)[30]でも自然的なゾーエー(zoē)[31]でもなく、ゾーエーとビオスが包含しあい排除しあう

26　伏せ字。「射たれ」。
27　伏せ字。「はらば」。
28　前掲同注 2、岡野論、p.142。また、郭は警務部員も「『意識』を操縦され、権力側に翻弄される哀れな存在として描かれている」と主張する（前掲郭論、p.101)。
29　同注 2、岡野前掲書、p.143。
30　ビオス（bios):それぞれの個体や集団に特有の生きる形式、生き方を指す。
31　ゾーエー（zoē):ビオスに対して、生きているという単なる事実を表現している言葉である。

ことでお互いを構成する不分明な地帯におかれ、また主権圏域(sovereign sphere)[32]に「捉えられる」のである。「ホモ・サケル」の生の形式は、ある共同体に排除を通じて包含されているのであり、彼らにとっては、彼ら以外のすべての人間が主権者として振る舞うような者である。彼らの生は共同体を維持するために必要だが、法的保護の外に投げ出されている。このような主権と「剥き出しの生」との〈排除を通じての包含〉の関係は、近代における政治の構造の特徴であり、社会の全ての人は構造的に潜在的な「ホモ・サケル」であるとアガンベンは主張している[33]。前述したように、「敷設列車」における中国人労働者は日本帝国の鉄道建設に必要な存在であるが、動物と人間という自然と文化のあいだの不分明な地帯に置かれており、彼らの生は法的保護の外に投げ出され「剥き出しの生」へと格下げされているといえよう。

したがって、生政治の視座からすると、異なる力学が複層的に課した抑圧のメカニズムが機能している日本の植民地の枠組みの中では、中国人労働者は日本の植民地主義における〈動物化〉された他者として存在し、日本帝国という共同体から排除され、主権的圏域に捉えられた否定的な対象となる。日本人内部では下層である現場監督や警務部員らが彼らの生殺与奪権を持っているように、彼らにとっては、すべての日本人が主権者である。しかも、彼らは死んでも帝国のために「犠牲化」される可能性がない。つまり、「ホモ・サケル」となる存在と言わざるを得ないのである。

3. 使い捨て可能な生から「不安定な生(プレカリアス)」(precarious life)[34]の連帯へ——命を守るための生命共同体の形成

ただし、平林たい子は中国人労働者を「ホモ・サケル」として描くことを通して日本帝国の鉄道植民地主義における生政治の構造の本質を告発するにとどまらず、中国人労働者が機関車を奪取するという虚構を設定して、「ホモ・サケル」である中国人に生き延びる希望を与え、より普遍的な生の問題を問い直している。本節では、中国人労働者と日本人の動的な関係を分析し、中国人の抵抗の難しさに注目しつつ、彼らがどのように抵抗したかを問うていく。なぜ最初のストライキは失敗したのかと、困難にもかかわらず最後には機関車を奪取するまでに至ったプロセスを分析することによって、命を守るということは彼らが最後に団結して抵抗する際の最も重要な動機であったことを指摘したい。

まず、中国人労働者と日本人の動的な関係を見る。前述したように、委託医の山田や、監督の鮫島、警務部員などの多くの日本人の視線からは、中国人労働者は〈動物〉化された否定的な他者であるとはいえ、決して従順で支配されやすいわけではない側面も描かれている。たとえば、張という工夫のような監督に敬意を払わない人、監督の乱打に対して肉体で抵抗する人々、銃を怖がらず強い視線で警務部員を睨む人、ユーモアのある話で不満を言う老人、銃に撃たれた同胞を見て一斉に警務部員を罵倒する多数の労働者など、強い反抗心を示す中国人が表象されている[35]。一方の日本人は中国人を軽蔑しながらも、その反抗心を決して無視することができない。なぜならば、中国人は彼らにとって工事を進める必要な存在であり、また、〈動物〉化された体格の大きい中国人は彼らの恐怖の対象ともなるからである。そのことを、語り手は暴き出している。例えば、鮫島は張に対して「憎しみと怖れ」(286頁)という複雑な感情を持っており、警務部員は自分の体格より大きい中国人労働者を怒鳴りながらも、心の中で「も

32　アガンベンによれば、主権圏域とは殺人罪を犯さず、供犠を執行せずに人を殺害することのできる圏域のことである。

33　ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳『ホモ・サケル —— 主権権力と剥き出しの生』、以文社、2003。(原著：Giorgio Agamben, Homo sacer: Il potere sovrano e la nuda vita, Torino: Einaudi, 1995.)

34　ここで使う「不安定な生(プレカリアス)」(precarious life) はジュディス・バトラー(Judith Butler)によって提出された概念である。

35　中国人の主体性についての詳しい分析は、前掲郭論を参照されたい。

う鉋屑の様にくるくる巻いてしまった何か」(289-290頁)を感じると語られている。つまり、中国人労働者は構造的に日本人以下に置かれ、軽蔑されながらも、同時に日本人に脅威を感じさせる存在ともなっている。

小説の冒頭近くで、三人の工夫が十人ほどの現場監督に乱打された際に、それを見た工夫たちが我慢しかねて最初に彼らは監督を「麻の空き袋の様に地面に打っ倒れるまでたたきのめ」(288頁)すという出来事があるが、これは盲目的な肉体による抵抗といえる。その後、ある工夫が警務部員に銃で撃たれた後、「人に雇われて働く者の本能で」(291頁)一部にストライキの計画が企てられる。とはいえ、この時には、多くの苦力たちはストライキに関心を寄せておらず、リーダーの張が話している「言葉の意味もわからない」(292頁)。と言うのは、毎日酷使される苦力たちは疲労のために考える余裕もないからだ。ここには、中国人労働者内部における差異と分裂が現れている。張は「決して監督に気付かれちゃ駄目だよ」と慎重に事を進めようとしているが、集まった二十八人の中にすら「消極的で、我慢強い、生活欲の弱い」人間が含まれていた(292頁)。とはいえ、ワイルス氏病による死者が遂に発生したことで、中国人労働者はいよいよストライキを実行しようとする。しかし、工夫と苦力の間に十分な意思疎通ができず、ストライキはうまくいかなかった。その後、リーダーの「張のうしろに、一人の警務部員がいつも跟きそうことに」(296頁)なり、監視が厳しくなっただけである。ここまでの展開では、中国人がストライキを実行する際の難しさが強調されている。前述したように中国人内部には差異が存在しており、意思疎通そのものが難しい。また、監視が強化された状況の中では、彼らはストライキを実行することはもとより、打ち合わせする機会さえもなくなった。ストライキの計画が失敗した後は、「苦力の間には決定的に戦うだけの勇気も持てず」(297頁)という状況になり、ストライキを成功させることはほとんど不可能なのである。

そのなかで今一度中国人労働者たちが立ち上がる契機となったのは、洪水が襲来するという情報だった。それによって、中国人内部の分裂が解消され団結していくのである。今回は常に警務部員に監視されている張ではなく、賢という「大人しい工夫」が、「洮南へ引き返し水害」から避難し、「病人を全部×[36]鉄道株式会社病院へ入れること」という単純な要求を口頭で提出する。この要求は、「苦力の熱意な支持」をも得たものだった(298頁)。日本人の命にも関わるので、今回は日本人も「洮南へ引き返したい」という気持ちを持っている(298頁)。ただ、圧迫してくる者に対して「あくまで力で対して要求を通そう」とした中国人労働者の闘争とは異なり、彼らは「上役達の同情や理解で自分達の要求をとおそうと考えた」(298頁)。これまでと異なるのは、日本人と中国人の間における二項対立の関係が揺らぎ始めていることだ。立場は異なるが、生命を守るという類似した気持ちがある程度共有されているといえる。しかし、彼らの希望は砕けた。

> 「君達あ一体、この国家的な仕事を一私人の人情や情実で棒に振ろうっていうのかね。洪水が何だね。苦力が何だね。契約期間内に完成するかしないかという×[37]鉄道株式会社の肩にかかっている重大な問題の前に、一体そんなことが、どれだけの価値を持っているというんだい！」／技師はそういう言葉を感覚する右の耳が熱くなった。電話はそのあとで、「もし洪水が出るとすれば材料や既設線の損害を少なくする用心をする様に」と命令した。(中略)彼は叱責されて勇気づいた。(p.298)

36　伏せ字。「M」か。
37　伏せ字。「M」。

ここでは、中国人労働者の要求が拒否されたのみならず、日本人職員も上司に「叱責」されている。上役はレール敷設という「国家的な仕事」の利益を絶対的に優先させなければならないと要求をはねのける。つまり、国家的利益の前にはたとえ洪水で人命が失われることがあっても大したことではないということである。換言すれば、人命を奪う自然災害を前にしても、日本人内部におけるヒエラルキーの差異は依然として解消できず、中国人はいうまでもなく、技師レベルの日本人であっても国家に捨てられる生となる可能性が浮上したということだ。この点について、郭は「日本人監督たちも苦力達も等しく帝国主義の犠牲者となっている」と論じ、両者の関係が二項対立から同一化へと変化すると捉えている[38]。しかし、それは果たして同一化といえるものなのか。第2節で論じたように、洪水とは関係なく中国人労働者はすでに「ホモ・サケル」として最下層に貶められた存在となっていた。この時一部の日本人は「ホモ・サケル」となる可能性はあったが、洪水だけでなく疫病にも襲われている中国人とはやはり異なる優位な生存状況にある。両者の間の差異は簡単に解消されるものではなく、安易に同一化することはできないだろう。

小説の終盤で、中国人労働者たちは自分の要求が認められないと見てとり、公式的なストライキではなく、「監督に不意打を食わせて自分達だけで列車を引き返す方法」を考えはじめる（299頁）。

> 朝まで無気力で大人しかった支那人達の肉体の上には、何か夥しい変化がやって来た様にしか日本人には見えなかった。忽ち電話線が切られて触角のようにブラ下った。新しい××××[39]は走って行って監督達の宿営車の前に銃をかついで立った。その中にはロープで縛られて／（二行削除）（p.299）

そして、団結した中国人労働者は、警務部員の銃を奪い、電話線を切り、監督をロープで縛りあげる。それは、これまで〈動物〉化されてきた中国人労働者が、監督たちを制圧する行為が描かれている。その行為性は、「ホモ・サケル」へと格下げされた中国人労働者が「剥き出しの生」から主体性を取り戻すことを意味しているだろう[40]。構造的に「ホモ・サケル」となる中国人労働者と日本人監督の力関係が、中国人労働者たちの叛逆するプロセスにおいて逆転したのである。

この二度目の蜂起について、従来の論は彼らの成功した結果のみを重視し、ブルジョアに対するプロレタリア階級の勝利として、階級に基づく二項対立の枠の中で評価する傾向がある[41]。異国の労働者の抵抗が描かれたこの作品において階級の問題を無視するわけにはいかないが、前述したように、作品における日本人と中国人の関係は植民者／被植民者、ブルジョア／プロレタリアのような単純な二項対立の関係ではなく、彼らの抵抗も、単に搾取に対するものだけではない。彼らが機関車を奪取するまでのプロセスからは、ワイルス氏病と洪水によって命が脅かされる危険な状況こそが、彼らが最後に団結して抵抗する最も重要な契機となったと考えられる。そのプロセスにおいて、中国人労働者たちは使い捨て可能な生の条件に基づき、水害からの避難と病人の救護を目的とし、命を守る生命共同体[42]を形成している。作品の最後は機関車を奪取した中国人労働者たちの勝利が示されているが、それだけではな

38　同注 16、前掲郭論、p.101。
39　伏せ字。「警務部員」か。
40　アガンベンの「ホモ・サケル」という概念は主体性の回復が見込まれるものではない。しかし、たい子の小説では、中国人の蜂起という虚構の設定を通して「ホモ・サケル」のような生から主体性を回復する方法が示されていると考える。
41　たとえば、前掲李雁南論。
42　ここでいう生命共同体とは、疫病や自然災害の前にして、生命の安全を最優先に自分たちの命を守ることを共同目標として発生した連帯関係である。

く、「病人をのせた幾つもの宿営車が次々に運動を後へ伝えて行った」(300頁)とあるように、病人を乗せた機関車であることを強調している。逆戻りする列車と病人への注目と配慮の描き方は、第2節で論じた「黒煙を吐いて威丈高に」前進する列車と焼け残った死体の描き方とは対照的である。結末において中国人労働者が団結して逆行させた列車はすでに「日本の侵略の尖兵のメタファー」から、人の命を救う列車へと書き換えられた。そこには、たい子の植民地「満洲」における最下層労働者の生への嘆きと救済の希望が託されている。

同時代のプロレタリア文学の中では、外国からの資本主義の侵略に対する中国人のストライキや蜂起などが、階級というアイデンティティに基づく団結として、搾取するものと搾取されるものという二項対立を用いて描かれることが多い。たとえば、同じ文戦派に所属している前田河広一郎は『支那』という小説の中で、中国人の闘争における真理は「世界には、搾取する者と、搾取される者との二つの階級しか存在しないという、頗る古くさい事柄であった」[43]と描いている。また、同時期の小林多喜二の「蟹工船」においても、「プロレタリア、一番偉い」[44]というように階級闘争という革命運動の理想と理論が労働者たちの頭に植え付けられ、彼らの覚悟や反抗が発生するプロセスがクローズアップされている。しかし前述したように、「敷設列車」において、労働者の団結を生み出した最も重要な原因は、階級闘争というイデオロギーではなく、疫病や洪水など命が奪われる状況[45]、つまり使い捨て可能な存在となる生の条件によるものである。「消極的で、我慢強い、生活欲の弱い」(292頁)中国人労働者の大部分は、ストライキがどういう意義をもつのかもわかっていなかった。彼らは、疫病と洪水に襲われるという生の条件に触発され、生き延びるために自発的に団結するのだ。それは、張や賢という代表者が最後には後景化され、その代わりに多くの名も無き中国人労働者たちが自律的に協力して、機関車を動かし出すことを通して描かれている。ここに、従来の階級闘争という指導理論の枠におけるプロレタリア運動と組織のあり方を突き破っていくようなたい子の挑戦が見られるだろう[46]。

ジュディス・バトラーは、生政治の問題を問う際に「不安定性(プレカリティ)」(precarity)という概念を提出している。「不安定性(プレカリティ)」は差別的に配分されており、侵害、暴力、そして死などの苦境に陥る人々は「適切な保護や救済がなければ、病気、貧困、飢餓、立ち退きの、そして暴力への可傷性(ヴァルネラビリティ)の、高いリスクに苦しむことになる」と指摘されている[47]。本論で論じたように、「敷設列車」における中国人労働者の生の有り様は、差別的に侵害、暴力、死に曝され、暴力、病気、災害への可傷性の高いリスクに苦しむ「不安定(プレカリアス)な生」だと言えよう。したがって、この作品の中国人労働者が最終的にはリーダーなしで自然に団結し、機関車を奪取して、病人を乗せて逆行するという描き方は、労働条件の改善よりも普遍的な生の問題を重要視したものだ。そこには、疫病と自然災害に曝されながらも救護されない、多重的で可傷性の高いリスクに苦しむ中国人労働者たちの「不安定(プレカリアス)な生」への連帯に対するたい子のまなざしが注がれている。それは、階級闘争を最優先する同時代のプロレタリア文学における概念上のインターナショナリズムとは

43　前田河広一郎『支那』、春陽堂、1932、p.214。(初出:『中央公論』、1929年3月～9月号連載。)
44　小林多喜二「蟹工船」、『小林多喜二全集　第二巻』、新日本出版社、1982、p.295(初出:『戦旗』、1929年5月～6月号連載)。
45　鼠の表象と同じように、この作品における疫病や洪水といった記号も境界侵犯的なファクターであり、生命を脅かすものであると同時に、支配と被支配の境界を越境する可能性を表す両義的な表象だといえよう。
46　この作品を発表した後、たい子は1930年6月に、労農芸術家連盟を脱退することを声明した。以降は芸術団体に加盟せず、労農派を支持し、プロレタリア文学運動主流として勢力を拡大した共産党系のナップに対抗意識を抱いており、またジャーナリズムに迎合せず、自分の文学に真面目でありたいという希望を示している。(阿部浪子「平林たい子年譜」、『平林たい子全集12』、潮出版社、1979、pp.346-348。)
47　ジュディス・バトラー著、佐藤嘉幸、清水知子訳　『アセンブリ ―― 行為遂行性・複数性・政治』、青土社、2018、p.47。(原著:Judith Butler, Notes Toward a Performative Theory of Assembly, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2015.)

異なる、「不安定（プレカリアス）な生」の状況を最も重要な問題とするたい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉と言えないだろうか。労働者のプロレタリアートとしてのアイデンティティより、死に曝される生の問題と生命の救護こそが連帯を生み出していく「敷設列車」の根底に、たい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉の思想を見出したい。

おわりに

本論文は「敷設列車」について、「帝国の臣民」としての日本人、動物の様に扱われた中国人という垂直的なヒエラルキーの関係で維持されている日本の植民地「満洲」の枠組の中における複層的な構図を示した上で、中国人労働者が構造的に「ホモ・サケル」としての存在となりつつも、使い捨て可能な生の条件に基づいて団結し、機関車の奪取を通して主体性を取り戻すという物語の構造と意味づけを明らかにした。

「敷設列車」は近代日本の植民地「満洲」における生政治の構造を暴き出す作品として捉えられる。とくに、作品における中国人と植民地で働く日本人の動的な関係の描き方を分析することによって、両者の関係は絶対的な二項対立でも、逆に同一化可能なものでもなく、物語の進行によって二項対立と同一化の間で揺らぐものであることが明らかになった。例えば、両者の間に越えられない民族と階級の差異が存在する一方、洪水という自然災害を前にして命を守りたいという気持ちはある程度共有されている。最下層に位置づけられた中国人労働者は厳しい労働と生存条件の中で疫病に襲われ、使い捨て可能な生としてすでに顕在的に「ホモ・サケル」として扱われていた。敷設現場で働く日本人は、彼らより上位にいながらも、もし本当に洪水が来たならば、国家に捨てられる可能性もあり、潜在的な「ホモ・サケル」と言える。ただ、注意しておくべきなのは、民族と階級の交差性によって日本人と中国人の「ホモ・サケル」となる境目は異なることだ。中国人と敷設現場で働く日本人とのこうした複雑な関係を構築した平林たい子は、1929年の時点ですでに、誰もが構造的に「ホモ・サケル」となる可能性（程度の差はある）があるという日本の植民地「満洲」における生政治の原理を示した。

それのみならず重要なのは、「敷設列車」において、最下層に位置づけられ、差別的に侵害、暴力、死にさらされる中国人労働者たちが「不安定（プレカリアス）な生」という生の条件に基づき連帯するという生命共同体の可能性が示され、現実的に抵抗することが難しい「ホモ・サケル」のような人々に主体性を回復する方法が提示されていることだ。そこには、異民族の最下層労働者という立場、彼らの生存を脅かす過酷な生存条件に注目し、より普遍的な生の問題を問い直すたい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉の思想が見られる。それは、階級闘争を絶対的な価値とした同時代のプロレタリア文学における概念上のインターナショナルなまなざしとは異なる、階級闘争のイデオロギーの枠を超越しようとするたい子の試みであろう。

楊佳嘉（ようかか）YANG Jiajia
名古屋大学人文学研究科 博士候補研究員

付記

本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：18J13050）の助成による研究成果の一部であり、日本社会文学会2021年度春季大会での口頭発表に基づくものである。会場の内外で貴重な意見を賜った方々に感謝申し上げる。本論文における「敷設列車」の本文の引用は、『平林たい子全集1』（潮出版社、1979）による。本文を引用する際に、旧体字、旧仮名を適宜現行のものに改め、傍点、ルビを省略し、頁数のみを示した。なお、戦前の文献を引用する際の表記も同様の基準を用いた。引用内の「／」は改行を、「（中略）」は中略を意味しており、下線は筆者によるものである。また、伏せ字については、『日本プロレタリア文学集・21 婦人作家集（一）』（新日本出版社、1987）と『〈外地〉の日本語文学選2　満洲・内蒙古/樺太』（黒川創編、新宿書房、1996）を参照し、注にて補った。さらに、本論文における「満洲」と「満蒙」は歴史用語として用いるものである。

参考文献

ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳『ホモ・サケル――主権権力と剥き出しの生』、以文社、2003年。（原著：Giorgio Agamben, Homo sacer: Il potere sovrano e la nuda vita, Torino: Einaudi, 1995.）

阿部浪子「平林たい子年譜」、『平林たい子全集 12』、潮出版社、1979年。

板垣直子「新興女流作家」、『女人芸術』 3巻9号、1930年9月。

小原元『批評の情熱』、雄山閣、1948年。

岡野幸江『平林たい子 ――交錯する性（ジェンダー）・階級（クラス）・民族（レイス）――』、菁柿堂、2016年。

郭璇「平林たい子の「敷設列車」における「苦力」表象 ――プロレタリア文学と「満洲」の労働者へのまなざし――」、『比較文化研究』第141号、2020年10月。

黒川創編『〈外地〉の日本語文学選2　満洲・内蒙古/樺太』、新宿書房、1996年。

島影盟「プロレ派の作品下　十二月創作評（3）」『やまと新聞』朝刊、1929年12月12日。

助川徳是「鳥瞰された時間 ―― 平林たい子の初期四作について――」、『平林たい子研究』（宮坂栄一編）、信州白樺、1985年。

田中益三『長く黄色い道 ―― 満洲・女性・戦後』、せらび書房、2006年。

雅川滉「独断的批評六箇條（十二月創作月評）」、『三田文学』 5巻1号、1930年1月。

壷井繁治「平林タイ子論」、『新日本文学』 7巻6号、1952年6月。

十時三郎「文芸時評　敷設列車（1）」、『萬朝報』、1929年12月3日。

南満鉄道株式会社庶務部調査課『満蒙に於ける鉄道の概要』（パンフレット第六十一号）、南満鉄道株式会社、1929年6月。

『日本プロレタリア文学集・21 婦人作家集（一）』、新日本出版社、1987年。

ジュディス・バトラー著、佐藤嘉幸、清水知子訳 『アセンブリ ―― 行為遂行性・複数性・政治』、青土社、2018年。（原著：Judith Butler, Notes Toward a Performative Theory of Assembly, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2015.）

広津和郎「文芸時評」、『改造』 12巻3号、1930年3月号。

前田河広一郎『支那』、春陽堂、1932年。

山村梁一「十二月の文戦作家」、『文芸戦線』 7巻1号、1930年1月。

楊佳嘉「平林たい子と彼女の「満洲」体験物語 ―― 作品における空間の意味と機能をめぐって――」、『北東アジア研究』第32号、2021年3月。

李雁南『在文本与現実之間 ―― 近現代日本作家笔下的中国』、北京大学出版社、2013年。

李雁南『錯綜する人と空間 ―― プロレタリア作家の中国像』、有信堂高文社、2021年。

水上勉文学における「満洲娼婦」像の生成
―「からゆきさん」から朝鮮人「娼婦」へ―

The Creation of the Image of "Prostitutes in Manchuria" in the Literature of Tsutomu Mizukami's Works: From "Karayuki-san" to Korean "prostitutes"

楊　柳岸

This paper will focus on the image of "Prostitutes in Manchuria" that emerged in Tsutomu Mizukami's Manchuria related works from the 1970s to the 1980s. With the spread of the Empire of Japan's colonial rule, this group of women who lived in a low-class society, had to move from Japan to Manchuria, where they also had no choice but to make a living with their own bodies. Although the realistic image of "Prostitutes in Manchuria" is difficult to be recorded in off-icial records, the Manchuria related works of Mizukami's literature are a series of novels that can restore the reality of these women.

The Licensed Prostitution, a systematic exploitation that surrounds prostitutes, depicted in Mizukami's literature of the 1960s, as well as the structurally sexual exploitation of women as physical tools, was reinforced during the war. Whether it was a Japanese prostitute who had been going to Manchuria and transformed herself into "Karayuki-san", or a Korean prostitute who was the predecessor of "comfort woman", the essence carries sexual comfort of the war.

Then, from Mizukami's works since the 1970s, this image caught between the *double fetters of class and sex*. Particular in The Moon of Shenyang, the image of the Korean prostitute bound by the triple fetters of class/sex/ethnicity is brought to light. Therefore, it can be said that The Moon of Shenyang is the work that sums up Mizukami's "realistic experience of Manchuria". The "Prostitutes in Manchuria" fictionalized by Mizukami's own creative consciousness, is the crystallization of his questioning of the essence of Manchuria.

However, we should not only evaluate this novel in a positive way. In The Moon of Shenyang, the prostitute was lyrically formed as the narrators' mother. While the narrators sympathize with prostitutes, they're also the males who buy their bodies, and the prostitute never escapes the gaze of the male dominant. It's because there is a major problem: the narrators of the female prostitute are absent. In other words, the male narrators of Mizukami's Manchuria related works don't recognize the prostitute in Manchuria as an entity with her own personality, but instead use her in a way that suits the convenience of men.

【キーワード】「満洲」、「遊廓」、「娼婦」像、からゆきさん、植民地主義
Manchuria, Red-light District, Image of Prostitutes, Karayuki-san, Colonialism

はじめに

『フライパンの歌』(1948)以後、長く沈黙していた水上勉(1919-2004)は、日本共産党内部の非合法な地下組織「トラック部隊」を題材とした『霧と影』(1959)、当時まだ「奇病」と見なされていた水俣病を題材にした『海の牙』[1](1960)によって、松本清張と並ぶ社会派推理小説作家として再出発した。その

1　『海の牙』は推理小説の形をとり、九州水俣に発生していた公害病の被害者の置かれた立場を訴えてみた作品であり、「第 14 回日本推理作家協会賞　長篇賞」を受賞した。

後、自伝的かつ純文学的な傾向を打ち出すようになった水上は、『雁の寺』(1961)で第45回直木賞を受け、人気作家としての地位を確立する。

1948年から2004年までの長期間にわたって作家活動を続け、多様な作品を発表し、多くの読者を獲得した水上勉の文学を形成する骨格を一言で言い表すならば、社会の下層を生きる人々への深い共感ではないか。なかでも水上は、運命に翻弄され、社会の底辺で生きる「女性」たちへの「視線」を作品に絶えず織り込んでいる。

水上勉文学における下層社会を生きる「女性」への眼差しは、水上が幼くして禅寺へ預けられた孤独感に起因する「母親願望」や「母恋い」の反映として作家論的に解釈されてきた。そのことは木村光一[2]をはじめとする論者によって従来しばしば指摘されてきた。しかし、このように水上勉文学における下層社会を生きる「女性」を「母」の代理的存在と解釈することには限界がある。なぜなら、1970年代を境として、水上は「満洲」を舞台にした作品を次々と発表し、一連の「満洲」関連作品においては、例外なく「満洲」の「娼婦」(以下は「満洲娼婦」)を描いた。こうした「満洲娼婦」は、水上の故郷への慕情とつながる原体験的な「母」の表象から遠い「異郷」の「女性」たちだからである。では、「母恋い」の反映としてではない「娼婦」像ないし「満洲娼婦」像を、水上勉文学のなかで改めてどのように位置づけるべきだろうか。むしろ「満洲娼婦」は水上の戦争期の「満洲実体験」に基づいて造形されたものであり、十数年にわたって発表され続けた「満洲娼婦」語りには、水上自身の「母恋い」あるいは戦争体験の告白という作家論的意義に留まらず、「娼婦」ないし「女性」をめぐる社会構造に関わる問題意識が潜んでいるのではないか。

本稿の第一の目的は「大連逢阪町」(1979)から始まり長編『瀋陽の月』(1986)でピークに達する水上勉文学の「満洲」関連作品に注目し、いかに水上が公的記録や歴史に残ることが難しい「満洲娼婦」の実像を小説の中に盛り込んでいるか確認することである。「満洲」関連作品として唯一の長編小説である『瀋陽の月』に着目し、前作「瀋陽の半月」[3]という短編小説が加筆によって『瀋陽の月』に変貌した経緯を手掛かりに「満洲娼婦」像を分析する。そして、「満洲娼婦」像を集積し、その変遷を辿ることによって、水上の「娼婦」ないし「女性」をめぐる社会問題の射程を改めて考察することが第二の目的である。

そこで、まずは本稿の第1節で1960年代の水上勉文学に描かれた「娼婦」像を整理し、「母恋い」の反映ではない下層社会を生きる「女性」たちを取り巻く社会構造やコンテクストを分析する。そして、第2節では1960年代の水上勉文学に見られる「女性」あるいは「娼婦」たちの表象が、1970-80年代の「満洲」関連作品ではどのように持続あるいは変化しているのかを辿るために「満洲娼婦」像を整理する。

1. 1960年代の「娼婦」像——男性を「救済」する役割

直木受賞作『雁の寺』並びに『五番町夕霧楼』『越前竹人形』を代表とする初期作品群は、水上が自らの「遊廓」経験に基づき、京都、越前(福井)を舞台にしたものである。その中に登場する「女性」の多くは「賤業婦人」「醜業婦」とも呼ばれる「娼婦」である。従来の研究では「娼婦」たちは、男性の視線から繰り返し美化されて描かれており、「母親憧憬」や「救済」などのキーワードと結び付けられてきた。たとえ

2 「人はそういう主人公たちの容貌や、体形、そして絶えず上眼づかいに他人を見る、おどおどしたひっこんだ眼に、軽い優越感を覚えたあと、まるでその代償ででもあるかのように、彼らに清らかで美しい心を与えようとする。里子に対する慈念の、母親に対するような思慕。夕子に対する正順の、実の妹に対するようなやさしさ。そして、喜助の玉枝に対する母親憧憬。それぞれのなかに純粋な動機を、いや、純粋さしか見つけずに、水上勉さんのこれらの作品を、叙情的という言葉でくくり、その主人公たちの秘めた心に甘美なものを覚えたりする人が多い」木村光一「母親願望とその異形な愛」水上勉全集月報 2、1976 年、6 頁。

3 水上勉「瀋陽の半月」『新潮』1986 年新年号。

ば、『雁の寺』において、慈念は桐原里子[4]に対して、「母親思慕」が混在する感情を抱いている。他には、『五番町夕霧楼』において、片桐夕子は心から吃音で孤独な櫟田正順を相手にしている。『越前竹人形』において、喜助は玉枝を母のように愛している。いずれも「娼婦」が劣等感を抱く男性を「救済」する役割を担っていると読まれてきた。男性を慰謝し、情緒を引き立てるキャラクターとしての「女性」あるいは「娼婦」でしかない。そのことは、谷川健一が「水上勉は作中人物たちの行為をつうじて訴えねばならぬ主張を、登場人物の背景や過去や環境など輪郭の描写の努力に解消してしまっている」[5]と批判したように、1960年代の水上勉文学において造形された「娼婦」たちは、十分な社会的リアリティーをもった存在として浮かんでこないという問題点があることが否めない。1960年代の水上勉文学に語られた「娼婦」を社会学的コンテクストから解釈した岩淵宏子は、『五番町夕霧楼』のヒロインである夕子というキャラクターの造形は「伝統的な遊女の水脈にのって描き出された女性」[6]であると指摘した。また、谷川健一[7]が『越前竹人形』を草双紙風な作品と捉え、近世的な「娼婦」像を玉枝に見出しているように、1960年代の水上勉文学に語られた「娼婦」は近世風を受け継ぎ、伝統的、哀しいというイメージが強く、戦後の下層社会を生きる「女性」たちのリアリティーが十分に反映されているとは言い難い。

前掲の三作に描かれた「娼婦」たちはいずれも貧しい出自で、家族、恋人のために体の自由を失い、更には命までも犠牲するというフィクションにおける悲劇性を引き立てるためのキャラクターとしてしか機能していない印象がある。たとえば、『五番町夕霧楼』は、1950年に起こった実際の事件である「金閣寺放火事件」を下敷きにしたものであるが、水上がその物語の中心に据えたのは1958年の「売春防止法」施行まで存在していた京都・五番町の「遊廓」を舞台に、母の医療費をつくるために、「妓楼」に売られてきた夕子と鳳閣寺の学生僧である正順との悲劇関係である。また、『越前竹人形』では、竹細工職人である喜助は父が亡くなった後、芦原温泉の「遊廓」の「娼婦」玉枝を嫁として家に迎えた。しかし、喜助は玉枝を母親のように崇め、夫婦関係を拒絶したあげく、間接的に玉枝の死を導いた。

天野知幸は作品と戦後の廃娼運動との繋がりを提起し、五番町と樽泊の空間的な関係性、性産業をめぐる時代背景に注目し、『五番町夕霧楼』を歴史的なコンテクストから紐解いた[8]。天野によると、水上が『五番町夕霧楼』の物語時間を「金閣寺放火事件」が起こった1950年から1年後にずらしたのは、「売春防止法案」可決を目前に控えた時期に意識的に設定しようとしたからである。このように見てくると、『五番町夕霧楼』は、「廃娼運動」という現実的なコンテクストを多分に持っていると読み替えることができる。

また、「廃娼運動」という現実的なコンテクストは夕子と同じ「妓楼」の「娼婦」敬子の行動からも透けて見える。「敬子は本棚から、新しく配達されてきた令女苑をとり出し、ぺらぺらと目次を繰って、巻頭の女性評論家が発表している、廃娼問題と現代風俗なる一文に興味をもって、読み入れっていた」[9]という行動から『五番町夕霧楼』における「廃娼運動」という歴史的・社会学的なコンテクストはうかがえる。旧制の女学校出身で、短歌を雑誌『令女苑』に投稿する敬子は「娼婦」という身分であるにも関わら

4　『雁の寺』のヒロイン桐原里子はもともと画家の「妾」で、後には住職・慈海に囲われる「匿女」となった作中で里子の過去詳しく記述されていないが、里子と慈念との対話などから「酌婦」（即ち「私娼」）であったと推測できる。
5　谷川健一「水上勉著『越前竹人形』草双紙風な読物　環境の上に温まる人物たち」『日本読書新聞』1227号、1963年10月7日。
6　岩淵宏子「『五番町夕霧楼』」『国文学：解釈と鑑賞』61（2）、至文堂、1996年、88頁。
7　谷川健一「水上勉著『越前竹人形』草双紙風な読物　環境の上に温まる人物たち」（『日本読書新聞』1227号、1963年10月7日）を参照。
8　天野知幸「戦後の京都と「赤線」の町：水上勉「五番町夕霧楼」論」（京都における日本近代文学の生成と展開）『佛教大学総合研究所紀要』2008(1)、2008年、161-176頁。
9　水上勉『五番町夕霧楼』角川文庫、1996年、146頁。

ず、新時代の女性としての性格を同時に持っている興味深い人物である。夕子や敬子が体現するのは、たとえ彼女たちの生きる「遊廓」という場が「廃娼運動」の大きなうねりに巻き込まれたとしても、自らの性を売り、貧しい実家へと送金せざるえない運命を逃れられない下層社会を生きる女性たちの姿である。

ここまでの論をまとめると、1960年代に水上勉文学においては『五番町夕霧楼』の「娼婦」像だけは、「売春防止法」の実施前の「娼婦」たちの実情が反映されているといえる。では、他の二つの作品における「娼婦」像を社会学的なコンテクストから再検討することは可能であろうか。

本節で注目している『雁の寺』(1961)、『五番町夕霧楼』(1962)、『越前竹人形』(1963)は、いずれも戦後に執筆された作品であるが、それぞれ『雁の寺』は1933年の秋から11月、『五番町夕霧楼』は1951年の初秋、『越前竹人形』は1922年の秋末から1925年を物語の舞台にしており、意図的に戦争時期をずらすという時代設定は興味深い。特に『越前竹人形』の物語の時間が大正時代に設定されていることに注意しなければならない。なぜなら、大正時代という設定は、当時厳しく禁じられていた堕胎に関わる堕胎罪体制[10]に繋がっているからである。水上は、堕胎を玉枝の悲劇を招く原因としている。堕胎罪について、「大正十三年当時は、現今のように堕胎ということが大ぴらに出来なかった。胎児を堕す場合は症状を役所に届けねばならない。産婆に依頼して胎児を闇に葬るようなことがあれば、産婆自体も営業停止を喰う、きびしい取締法規が出来ていて、妊婦もまた刑罰をうけた。人命をそれほど尊重したせいであろうか」[11]と作中で詳しく解説されている。このように大正時代という時代や堕胎罪というコンテクストの面から『越前竹人形』は従来あまり着目されてこなかった。

重要なのは、堕胎罪が人命を尊重するためではなく、むしろ女性の権益の無視と生殖の権利の搾取を前提に制定された点である。それは、藤目ゆきが「性と生殖の不自由で、公娼制度―堕胎罪体制と同様に、それは階級、民族、性の支配の結果を被支配大衆の側に負わせる、性―生殖に対する反人民的統制の体制でもあったのである」[12]と指摘したように、堕胎罪とは特に女性の「性」への支配を強化するものでしかない。『越前竹人形』では、堕胎罪というコンテクストの面から女性とりわけ「娼婦」たちを取り巻く制度的な抑圧状態が下地になっているといえるのだ。

したがって、水上勉文学における1960年代の「娼婦」像はフィクションにおける悲劇性を引き立てるためのキャラクターとしてしか機能していない印象がある。以上のように、歴史的・社会的コンテクストに注目すると、近代公娼制度下の「娼婦」たちの断片が浮かび上がってくるのである。しかし、1960年代の水上勉文学は戦時下の「娼婦」たちを描いていないという大きな空白が残されたままである。手放しで水上の創作態度をリアリティーが含まれているからといって称えることはできないだろう。堕胎罪に疑問を覚えた水上であっても、娼婦の生存権を奪い、制度的な搾取を行う「公娼制度」を、そもそも正面から批判していないことにも留意が必要である。この時期の作品群における「娼婦」は、男性の視角で上からの目線によって語られており、例外なく、女性たちの身体も精神も男性の付属品でしかない。つまり、水上は、「娼婦」に表面的に共感するに止まり、その裏の社会制度などの真実を暴くことを回避している。言い換えれば、水上による1960年代の「娼婦」像は、現実の厳しい生存状況から分離され、美化され、造形されたフィクションなのである。では、1960年代で見られた「娼婦」たちの表象が、

10　明治政権は、政権樹立の始発から、堕胎を厳禁し、生まれた子どもはあまさず戸主（家長）のもとに戸籍に登録し把握、家長による届出――官許によって成立する婚姻以外の性交に対しては、一方に姦通と婚外児（私生児）の出生に対する法的差別化を行ない、他方には公娼制度を整備して国家管理売春の体系をつくり出した。（藤目ゆき『性の歴史学―公娼制度・堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、1998 年）

11　水上勉『雁の寺・越前竹人形』新潮文庫、2005 年、223 頁。

12　藤目ゆき『性の歴史学―公娼制度・堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、1998 年、420 頁。

1970-80年代の水上勉文学ではどのように持続あるいは展開しているのだろうか。

2. 1970-80年代の「満洲娼婦」像——戦時下の構造的搾取

1960年代の水上勉は、青少年時代に小僧生活を送った禅寺体験や「遊廓」体験に基づいて語り続ける一方で、還俗した後「満洲」で経験した戦争体験については終始暗黙したままだった。水上は戦争を語ることを意図的に回避していたといえる。

しかし、1970年以降、水上は小説の技法を練り、新たなジャンルや題材を試み始め、流行作家の枠を突破しようと図っている。その過程で幾つもの「満洲」関連作品が発表された。「満洲」とは、日本が現在の中国東北部で戦争を起こして建てた、傀儡政権「満洲国」(1932-1945)の略称である。水上と「満洲」との接点は、日中戦争が始まった翌年の1938年に遡る。19歳の水上は神戸から移民船「はるびん丸」に乗って「満洲」に渡り、奉天(瀋陽)の国際運輸会社で「苦力監督見習」という職に就いた。しかし、同年11月喀血で入院した。翌年2月に日本へ戻り、故郷の若狭で病気療養していた間、文学作品を耽読したことで小説家への道を踏み出すに至った。つまり、生涯最初の「異国体験」である「満洲体験」は僅か半年間にすぎなかったが、水上の作家生涯の起点となった出来事だと言える。そうした重要な体験であったにもかかわらず、「満洲体験」は、水上が『フライパンの歌』(1948)で文壇にデビューしてから長い時間が経過しても、作家自身によってあまり語られていないままであったため、「水上勉の空白の時代」と呼ばれている[13]。

改めて水上勉文学全体を総覧すると、1970年代を境に水上が「満洲」を語り始め、自らの「満洲」体験を基底にした「満洲」関連作品を次々と創作したことが分かる。こうした作風の転換をもたらしたのは1972年に日本と中国との国交関係が緩和された外交上の出来事と関わっていることを見逃してはいけない。つまり1970年代以降に展開する「満洲」関連作品は、日中文人交流が回復された胎動期の世間の風潮と水上の中国再訪の体験を踏まえているのだ[14]。

下記の【表1】は拙稿に改変を加え、水上の「満洲」を素材にした作品を羅列したものである。

【表1】水上勉文学における「満洲」関連作品一覧表(筆者作成)

作品名	発表年	語られたマイノリティー・グループ	「満洲」空間	ジャンル
「大連逢阪町」	1979 年	「満洲娼婦」	大連	短編小説
「小孩」	1979 年	「中国人苦力」	瀋陽	短編小説
「大連港駅」	1980 年	「満洲」移民団	大連	短編小説
「黄色い写真」	1981 年 3 月	「中国人苦力」	瀋陽	短編小説
「瀋陽の空」	1981 年 3 月	「中国人苦力」「満洲娼婦」	瀋陽	短編小説
「奉天北市場」	1985 年 5 月	「中国人苦力」	瀋陽	随筆
「瀋陽の半月」	1986 年 1 月	「中国人苦力」「満洲娼婦」「中国残留孤児」	大連、瀋陽	中編小説
『瀋陽の月』	1986 年 11 月	「中国人苦力」「満洲娼婦」「中国残留孤児」	大連、瀋陽	長編小説
「瀋陽にて (一)」	1987 年 4 月	「中国人苦力」	瀋陽	エッセイ
「瀋陽にて (二)」	1987 年 4 月	「満洲娼婦」	瀋陽	エッセイ
「大連にて」	1987 年 4 月	「満洲娼婦」「中国残留孤児」	大連	エッセイ

【表1】に示されているように、水上が「満洲」について十数年にわたって書き続けた「満洲」関連作品

13　岩波剛『瀋陽の月』解説、新潮社、1986 年、174 頁。
14　これに関しては既に拙稿「水上勉『虎丘雲巖寺』における「中国」—1970 年代の日本人作家の「中国訪問」を入り口に—」(『Quadrate：クァドランテ : 四分儀 : 地域・文化・位置のための総合雑誌』(23)、2021 年、167-185 頁)で論じた。

の系譜において、語りつづけたマイノリティー群体において顕著なのは「中国人苦力」「中国残留孤児」「満洲娼婦」である。次に示す【表2】は、水上の作品から「満洲娼婦」への言及が見られる主要な作品を整理したものである。

【表2】水上勉の「満洲」関連作品における「満洲娼婦」一覧表（筆者作成）

作品名	発表年	「満洲」の「遊廓」「私娼窟」	登場する「満洲娼婦」
「北市場の女」 （「満洲娼婦」を少し言及したが、「満洲」を意図的に回避する傾向があり、本格的な「満洲」関連作品と言えない）	1963 年	奉天（瀋陽）・北市場の妓楼「埼玉軒」	「娼婦」・楠まつ枝（24 歳） 和歌山に生まれ 17 歳まで大阪にいた 20 歳で「満洲」へ
「大連逢阪町」 （水上勉の「満洲」関連作品の最初作）	1979 年	大連・逢阪町・金水楼	「娼婦」・ヒナ子 （本名：宮本さき） 九州の飯塚という炭坑町出身
瀋陽の空	1981 年 3 月	奉天（瀋陽）・柳町にある「私娼窟」	「私娼」・中井ハルヱ 北九州の飯塚出身 父母もおらず 血縁の者もいない
☆「瀋陽の半月」 （実験作）	1986 年 1 月	大連・蓬坂町[15]	朝鮮人「娼婦」（名前知らず） 日本人「娼婦」・うた子（九州出身）
		瀋陽・柳町	日本人「娼婦」・浦野はつ枝（九州出身）
★『瀋陽の月』 （「満洲」関連作品の成熟作）	1986 年 11 月	大連・蓬坂町 日本人経営の「筑前家」	朝鮮人「娼婦」（平壌出身、21 歳だという。李だとか、羅とかいった朝鮮人の女性名） 日本人「娼婦」・うた子（九州出身）
		瀋陽・柳町（北市場の近く）の「きりん」	日本人「娼婦」浦野はつ枝（「生まれは九州福岡県で遠賀川と彦山川の合流する直方近くの二本松だといっていた。付近にいくつも小さな炭鉱があって、父親は鉱夫だったが、はつ枝が十一歳の時に離婚、母はべつの炭鉱飯場でべつの男に嫁し、父は行方不明になった」[16]

【表2】で整理したように、水上勉文学における「満洲娼婦」の初登場は、1963年の「北市場の女」という短編に遡る。この作品は、「ここは奉天でも、外城にちかいごみごみした日本人町だったが、安っぽいトタン屋根の二階家のならんだ遊廓がならんでいた。そこで娼婦をしていたまつ枝という女とのいき

15　歴史上実在した地名は「逢阪町」であったが、「瀋陽の半月」『瀋陽の月』両作では「蓬坂町」となっている。
16　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986 年、144-145 頁。

さつを書こう」[17]という書き出しから始まる。しかし、この「娼婦」の描写は曖昧な輪郭と性格しか持っていない。1979年の「大連逢阪町」に至ってようやく、「妓は二十七だといったが、細面の気弱そうな顔だちで、首がながかった」[18]というように、正面から「満洲娼婦」が語られ始めた。1986年の『瀋陽の月』は、水上が1985年にかつて「満洲」であった中国東北部を再訪した実体験に基づき、「大連逢阪町」を底本に、「瀋陽の半月」に加筆修正を経て書き上げたものである。つまり『瀋陽の月』は、長い年月にわたり水上が「満洲語り」を積み重ねてきた結果結実した円熟作だと位置づけられる。言うまでもなく、上記の【表2】で示した70年代から80年代の「満洲娼婦」像は、前節で整理した60年代の「娼婦」像の特徴を一部踏襲しつつも、新たな変貌を見せている。

したがって、次節以降、主に「瀋陽の半月」から『瀋陽の月』への加筆を中心に、水上勉文学における「満洲娼婦」像という表象の変遷を明らかにする。それを踏まえて、植民地主義的な観点から、「満洲」関連作品の成熟作である『瀋陽の月』に登場する「娼婦」たちの複層的な意味を捉えたい。

2.1「満洲遊廓」――「日本帝国」から移植された「空間」

「瀋陽の半月」においても、『瀋陽の月』においても、「ぼく」は「満洲」に到着した夜、大連の「遊廓」で登楼する。日本による「満洲」への公娼制度移植は、日露戦争期の日本軍による「買売春」管理を出発点としていた。その産物は「満洲」の各都市にある「遊廓」である。橋谷弘によると、日本の植民地都市を特徴づけたのが、神社と遊廓だった[19]。また、橋谷[20]が指摘したように、日本の植民地のもう一つの特徴は「遊廓」には日本人「娼婦」が多数存在していたということである。欧米植民地にも売春女性はいたが、支配側出身の女性が売春女性になる例はすくなかった。その意味で、植民地への日本式性売春の移植は、近代日本の移民現象の特質を示している。言い換えれば、「満洲遊廓」は、「日本帝国」の「遊廓」という社会構造がそのまま植民地都市空間にも深く浸透した証しである。つまり、「満洲遊廓」とは「日本帝国」の植民地主義のシンボルでもあったのだ。水上の「満洲」関連作品に描かれた「満洲遊廓」は、かつて歴史に実在した大連・逢阪町と奉天・柳町である。「満洲」関連作品の最初作である「大連逢阪町」の中に見られる「満洲遊廓」についての細部の描写は以下のようになっている。

> 遊廓は島のように、うしろの一角に灯をのこして、空にむけて、レコードの音や、人声をはじかせて遠ざかった。右手に巨大な寺の建物が空あかりの下に黒くうかんでいた気がする。あれは日本の寺院だったのだろうか[21]。(「大連逢阪町」)

引用では、「ぼく」は「満洲」にいるはずなのに「日本の寺院」があるように錯覚する。このように、「満洲遊廓」は列島日本を離れた大陸にありながら、陰画的な空間として、宗主国による支配の影を終始落としている。また、「大連逢坂町は、当時国をあげての満州侵略に血道をあげていた日本の、軍人も、商人も、移民隊員も、一どは下船しなければならぬ港町の遊廓だった」[22]と書いた水上が、植民地都市であった大連に存在した逢坂町という「遊廓」の実名を明確にして、侵略の真実を明言した点からも、「大連逢阪町」という小説を植民地主義の文脈から改めて取り上げる必要がある。

17　水上勉「北市場の女」『告白　わが女心遍歴』河出書房新社、1963年、44頁。
18　水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、18頁。
19　橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年、82－83頁。
20　橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年、82－83頁。
21　水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、31頁。
22　水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、33頁。

当時、宗主国である日本に支配される植民地であった「満洲」においては、日本独自の性売買システム―公娼制「娼婦」だけではなく、「遊廓」という空間の設置までも支配者側からの文化制度がそのままの形で移植されていたのである。つまり、「満洲」の「遊廓」はあくまでも宗主国に抑圧されたという事実を示す空間の縮図だともいえる。当時、入植側であった日本の「遊廓」が「満洲」に移植されるのにともなって、日本人「娼婦」が移民として「満洲遊廓」へ入っていっただけではなく、朝鮮からも「娼婦」が大勢「満洲」に越境して「遊廓」へ入るという結果をもたらすことになった。このような宗主国の支配の構図が植民地においても反復されていることに関する金富子の言葉[23]を借りると、「買春宗主国(日本)の男性―売春宗主国(日本) /植民地(朝鮮)の女性の身体」という構図でまとめられる。これは、「満洲遊廓」の内実は移動式の性売買施設であり、場所は変わってもあくまで支配する男性と搾取される女性という構図は変わらない構造的搾取を端的に示しているが、被支配者側には宗主国の女性だけではなく植民地の女性が加えられていることが最も重要である。つまり、「満洲遊廓」の内部には日本国内の「遊廓」にある「男性―女性」「買春―売春」のみではなく、「宗主国男性―植民地女性」「宗主国男性―宗主国女性」という支配／被支配の関係も潜んでいる。性の支配的構図は水上の「満洲」関連作品に投影されているだろうか。では、それはどのように描かれているだろうか。次節から辿っていきたい。

2.2「満洲娼婦」の造形――「からゆきさん」の二重の桎梏

近代日本の女性たちと「満洲」の関係を論じた加納実紀代が「宣教師によって先導されたヨーロッパとちがって、近代日本の海外膨張は、女に始まり女に終わったといえる。それがもっとも典型的なかたちで行なわれたのが満州だった。それだけに、彼女たちは、近代日本の矛盾を集約して背負わされてもいる」[24]と指摘したように、「満洲国」が建てられた後、日本帝国主義の植民地支配・侵略の広がりと深まりとともに、自分の体で稼ぐしかない日本の下層社会を生きる女性たちは「公娼」か「私娼」かを問わず日本から「満洲」へと移動していった。本稿では、こうした日本帝国主義の植民地支配の広がりとともに日本から「満洲」へと移動して自分の体で生計を立てるしかない下層社会を生きる女性たちの群体を「満洲娼婦」と呼ぶ。では、そのような「満洲娼婦」たちの実像は水上勉文学においてどのように描かれているだろうか。まず、次に示す二つの引用を見ていきたい。

> 大連には四十万の日本人が移住していた記録は、もぐり業者の世話による水商売の女たちも移住していて風俗営業が繁昌したことを証すのである[25]。(「瀋陽の半月」)

> 大連には四十万の日本人が移住していた記録は、もぐり業者の世話による水商売の女たちで風俗営業も繁盛したことを暗示するのである[26]。(『瀋陽の月』)

以上の「瀋陽の半月」と『瀋陽の月』からの引用はほぼ同じ内容であるが、いずれも当時の「満洲」における水商売ないし性風俗産業の盛況を物語っている。また、水上の記述から「渡満」する日本の下層社会を生きる女性たちと「もぐり業者」即ち斡旋業者との依存関係が見えてくる。「満洲娼婦」という群体が自然発生的に生じたのではなく、「もぐり業者」という女性の体を商品化する男性たちの存在が浮かび

23　金富子・金栄『植民地遊廓――日本の軍隊と朝鮮半島』吉川弘文館、2018 年、24 頁。
24　加納実紀代「満洲と女たち」『近代日本と植民地 5・膨張する帝国の人流』岩波書店、1993 年、201 頁。
25　水上勉「瀋陽の半月」『新潮』1986 年新年号、11 頁。
26　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986 年、13 頁。

上がってくることは興味深い。

当時、日本から斡旋業者を通して移動し、大連、奉天、新京などの「満洲」の各主要都市に散在していた「満洲娼婦」という群体は、一体どのくらいの人数に及ぶのだろうか。その実際の数は、現在まで僅かに残っている公式の記録より少なくないだろう。例えば、「瀋陽警察庁管内妓女検黴成績表」(1935) [27] によると、当年の瀋陽市内の「娼婦」の公式に把握されている人数は既に1800人に達した。更に、在籍の「公娼」の以外に、「瀋陽の空」において、「いかがわしい安呑屋や、淫売窟、最下級の娼婦たちが客をひく家があった」[28]と暗示されているように、公式の記録に残っていない「私娼」「酌婦」「芸酌婦」などの名目で性を売る女性の人数は計り知れないだろう。水上の「満洲」関連作品を読みながら、どのように「満洲娼婦」という非公式の群体が形成されることになったのかを考証し、そして公的な記録からは浮かび上がってこない「満洲娼婦」の実態を探りたい。

注目すべきことは、水上の「満洲」関連作品に登場する「満洲娼婦」が最初の和歌山出身の設定から九州の飯塚出身に統一されているという設定への変化である。しかも、1960年代の作品群における「娼婦」像には、こうした特定の出身地を与えられた人物はいなかった。ここには水上の意図的な設定の変化があるように思われる。特に注意すべきことは、『瀋陽の月』に登場する「娼婦」はつ枝の生まれが単に九州という地名で示されるのみではなく、むしろ「父親は鉱夫だった」[29]と炭鉱についても詳しく述べられていることである。更に、「時代は戦争昂揚期に入っていたから、石炭生産も景気がいいはずなのに、政府の方針一つで、波のあるのは当時だけにかぎらない。飯塚や田川あたりで水商売を転々していたらしいが、口入屋の世話で、集団渡満してきた」[30]と、はつ枝などの日本人「娼婦」の過去と、斡旋業者を通して「渡満」した経緯までが細かく語られている。このように、水上勉文学に登場する九州の飯塚という炭坑町出身の日本人「娼婦」たちは、「からゆきさん」と呼ばれる群体に繋がると推測できる。

1976年、森崎和江が「からゆきさん」そのものをタイトルにするノンフィクション作品を出版した。森崎は50年代から炭鉱町でサークル運動をしており、炭坑労働に関する著作を多く持っていた。「からゆきさん」は九州で使われていた言葉で、主に明治、大正、昭和時代、日本から海外へと移動して、売春を主な収入源としていた日本人女性を指す。「からゆきさん」の多くは、農村、漁村などの貧しい家の娘たちであった。彼女たちを海外の娼館へと橋渡ししたのは斡旋業者、女衒たちである。実際には、昭和時代、よく知られていた東南アジア、ロシアの以外に、「満洲」も「からゆきさん」たちの渡航先であった。その背景の一因は交通の便利さである。北九州に位置する福岡港・門司港は当時、日本大陸と「満洲」の玄関口であった大連を行き来する際の要港であった。この港から九州北部出身の「からゆきさん」が「渡満」することは容易であった。鈴木貞美は『満洲国―交錯するナショナリズム』においても、「満洲」における「からゆきさん」に少し言及している[31]。

現在、「からゆきさん」の実態はかなり明らかになってきている。しかし、第二次世界大戦直後、彼女たちの存在は一般に知られないままになっていた。1970年代、水上と同じく福井ゆかりの女性史研究家山崎朋子を筆頭に「からゆきさん」の実態調査が始まる。研究者たちが、関係者への聞き取り調査と当時の新聞記事などの資料調査をもとにして著した幾つかの作品をきっかけに、「からゆきさん」と呼ば

27　瀋陽警察庁衛生科編『瀋陽警察衛生年鑑・康徳2年』1936-1937年、62頁。
28　水上勉「瀋陽の空」『北京の柿』潮出版社、1981年、64頁。
29　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、144-145頁。
30　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、145頁。
31　「「女の稼」は、水商売、特に売春を指していわれた。一九世紀後半、島原・天草でいう「からゆきさん」(娘子軍とも)は、多く南方への出稼ぎを指し、(中略)だが、北方へもかなりの数がでていた」(鈴木貞美『満洲国―交錯するナショナリズム』平凡社、2021年、173頁)。

れる海外売春婦群体が世間に注目されるようになった。1972年、山崎朋子のノンフィクション作品『サンダカン八番娼館―底辺女性史序章』が出版された。1974年、この作品を映画化した『サンダカン八番娼館　望郷』が公開された。この映画で北川サキを演じた田中絹代は、第25回ベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞した。

「からゆきさん」が世間で注目を集める1970年代が、ちょうど水上が「満洲」関連作品を多く出版した時期と重なることは見逃してはいけない。1979年の「大連逢阪町」以降の「満洲」関連作品に登場する「娼婦」はすべて九州出身という設定に統一されていることは前文に述べたが、この設定の変化には、1970年代以降の山崎朋子らによって「からゆきさん」という群体が歴史のなかに葬られることなく世間から注目されるようになったことが契機となっていると推察される。つまり、山崎朋子らが浮かび上がらせた「からゆきさん」という群体から影響を受けて、水上は「大連逢阪町」から80年代の「満洲」関連作品において素材として取り入れた可能性が高いと推測できる。

『サンダカン八番娼館』においてサキは、「渡満」したのは幼友達であるヤスヨさんに「こげなところで真っ黒なって百姓してとなんて、あんたは馬鹿な。うちと一緒に、満州へきたんか―」「満州は、南洋と違うて寒かばって、内地の人間がどしどし渡って行っとって、満人や支那人ば働かして、去年より今年、今年より来年と開けていく土地じゃけん、気楽じゃし、お娼売で無うしても銭がころころ儲かると言うもんな」[32]と誘われたからである。サキと同じく、水上の「大連逢阪町」におけるヒナ子も「あんた知ってる、九州の飯塚ってとこ。炭坑町よ。フデミさんとね、同じ町内だったし、一しょにきたんだけどね……あの人、奉天の方が稼ぎがよかって、すすめるひとがいたんで……やっぱ、そのひとも九州のひとだったけどね……」[33]という理由で「渡満」したのである。このように、水上の「満洲」関連作品において九州の炭鉱出身という設定が与えられた越境する出稼ぎ日本人「娼婦」たちは「からゆきさん」のバリエーションの一つといえるのだ。

そもそも、出稼ぎは「からゆきさんたち」の一キーワードで、主体性を帯びているように聞こえるが、越境する出稼ぎ売春婦である「からゆきさん」の像には、前節で確認したように場所は変わっても、あくまで支配する男性と搾取される女性という性の支配的構図が色濃く投射されているといえる。『サンダカン』の副題に「底辺女性史序章」とあるように、彼女たちは日本国内においても、底辺にある貧困な群体であった。また、山崎が「かつて天草や島原の村々から売られて行った海外売春婦たちが、階級と性という二重の桎梏のもとに長く虐げられてきた日本女性の苦しみの集中的な表現である」[34]と指摘したように、彼女たちは詐欺によって、あるいは家父長制の抑圧の下で苦しい境遇に陥ったため、「身売り」をせざるをえなかったのである。つまり、「からゆきさん」とは「階級と性という二重の桎梏」によって生じた群体なのである。

橋谷も『帝国日本と植民地都市』において、「九州から東南アジアや中国へ渡っていった「からゆきさん」の例をあげるまでもなく、日本女性が明治初期から海外に売春婦として流出していたことはよく知られている。植民地都市もその例外ではなかった」[35]と述べている。水上勉文学の「満洲娼婦」に注目する本稿において重視しなければいけないのは、「渡満」した「からゆきさん」たちは植民地支配を含めた多重桎梏に束縛されていたことである。当時の日本社会では生きにくい問題を抱えていた彼女たちは家庭の犠牲者であった。植民地を生きる場とする「からゆきさん」たちは性的な対象として、日本国家の

32　山崎朋子『サンダカン八番娼館――底辺女性史序章』筑摩書房、1975年、134頁。下線引用者。
33　水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、22頁。下線引用者。
34　山崎朋子『サンダカン八番娼館――底辺女性史序章』筑摩書房、1975年、8頁。
35　橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年、94頁。

採った侵略政策の犠牲者でもあった。更に、引き揚げた後の彼女たちの境遇は想像に難くない。多数の日本人「娼婦」は再び「棄民」された。一方、以下の引用のように、「満洲」関連作品に描かれた日本人「娼婦」たちは例外なく現実を冷静に認識しており、異国で家族や国を理想化することを断念している。

思うようにゆかないいらだたしさを噛みしめ、内地へ帰りたい心を封じこめた貧しい女の、必死な喘ぎがその顔に充満していた。宮本さきのあばら骨の出た胸には、炭坑町からもってきたわずかなぬくもりがのこっていた[36]。

(「大連逢阪町」)

「飯塚へは帰らないの」
私はもう一ど寄っていった。
「誰もいないもん。会いたい人がいるんなら、帰ってもいいけどさ、そんな人はいないもん」[37]

(「瀋陽の空」)

以上の引用にも示唆されたように、「渡満」した日本人「娼婦」たちの中には、自らの意志で「渡満」した人が少なくないが、彼女たちは故郷と国を捨てる覚悟をしたのである。水上の60年代の作品群における「娼婦」は家族観念が強く、家族のために自らを犠牲にするだけなく、家族との連帯感を保っている傾向がある。例えば、『越前竹人形』の玉枝が臨終の際に残した遺言には喜助への憎みは少しも記されておらず、人の世での生活を名残惜しんでいることがうかがえる。それに対して、「渡満」して「娼婦」となった日本人女性たちは植民地都市である「満洲」において、宗主国である日本の「娼婦」でありながらも、同胞に身売りをして僅かな稼ぎを得るだけで、『満洲国国歌』[38]にある「新天地」「新満洲」などの宣伝に釣り込まれ、下層階級からは依然として逃れられない。更に、より残酷な史実としては、引き揚げ時、彼女たちの大多数が国境地帯に放置され、「残留婦人」となったり、「慰安婦」となったりした。また、加納実紀代が、「「からゆきさん」、「大陸の花嫁」、「大陸の母」という満州に関わりをもった女たちをみるとき、近代日本の女性差別と、それにもとづく女性利用が見える。売買春を公認していた近代日本では、女たちは「良妻賢母」と「娼婦」に分断され、男の性的快楽の手段か、子産みの道具、さもなければ男を慰撫する「母性」的存在とされてきた」[39]と指摘したように、たとえ遠い国へ行ったとしても、彼女たちを取り巻く抑圧の構図や制度的な搾取である「公娼制度」、そしていわゆる女性は身体的な道具としての価値しか認められない状況は、第1節で確認したように1960年代の水上勉文学でも主題になっていることであるが、明治初期から戦時下においても変わっていない。

ここまで見てきたように、水上の「満洲」関連作品において造形された「満洲娼婦」の像は、自分の身を売ることを余儀なくされる家庭環境という階級的貧困、近代以降の女性の性の支配的構図、つまり「階級と性という二重の桎梏」によって虐げられている群体であり、そうした彼女たちの辛苦を反映しているのである。

2.3「満洲」の朝鮮人「娼婦」——三重の桎梏

水上勉の「満洲」関連作品のなかで最も成熟した小説である『瀋陽の月』は、水上が「満洲娼婦」への視線や思考を最も全面的に反映できた作品だと言える。引き続き『瀋陽の月』を中心に、植民地都市である

36　水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979 年、33 頁。下線引用者。
37　水上勉「瀋陽の空」『北京の柿』潮出版社、1981 年、75 頁。下線引用者。
38　『満洲国国歌』：一部の中国語歌詞：天地内有了新満洲、新満洲有了新天地、顶天立地无苦无忧、造成我国家。
39　加納実紀代「満洲と女たち」『近代日本と植民地 5・膨張する帝国の人流』岩波書店、1993 年、219 頁。

「満洲」における「娼婦」像について考察するが、本節のねらいは「娼婦」間に存在するヒエラルキーを明らかにすることである。

『瀋陽の月』において、「赴任地の都合でたった五日しかいなかった大連滞在中に、当時、日本人のあいだでも、三流と言われていたはずの売淫街逢坂町に登楼したことなど自慢にもならぬが」[40]という一文において明確に示唆されているように、大連に幾つかある「満洲遊廓」や「私娼窟」などの色町においても、一流や三流といった階級の差が存在している。つまり、植民地にされた「満洲」における「遊廓」は、宗主国に投射された陰画的な空間として、日本大陸における「格差」が「満洲遊廓」の内部にそのまま移植された場だといえる。実際に『瀋陽の月』で示されている「三流」とされる「売淫街阪町」には、多くの朝鮮人「娼婦」が集まっている。同じく「娼婦」であっても、朝鮮人「娼婦」の地位は日本人「娼婦」より低く、ほとんど公式な記録に残ることはない「私娼」である場合が多かった。

前掲の【表2】で整理したように、「瀋陽の半月」と『瀋陽の月』において、それまでの水上の「満洲」関連作品には見られなかった朝鮮人「娼婦」がはじめて登場した。また、両作の原文を比較すると、『瀋陽の月』において朝鮮人「娼婦」についての描写が大幅に加筆されたことが確認できる。

次に、『瀋陽の月』における朝鮮人「娼婦」の描写を二つ引用する。

> 帰りしなに、妓は洗滌をすませてきたままの下着もつけぬシュミーズきりの腰をひねって、ふとんの上から鏡台へ手をのばし、ひき出しから輪ゴムでしばった名刺の束をとりだしてみせた。輪ゴムをはずしながら、「日本人たくさん来て、わたしを抱いてゆくよ」といった。ぼくは、ゆくよという妓のひびきに、よく売れることのよろこびを語っているふうではあるけれども、淋しさがただようのに気をとられた[41]。

> 平壌出身の妓には、一夜きりの他国人のはずだが、名刺を置いてゆくからには、やさしい契りがあったにちがいなかった[42]。

実はこれら二つの引用にある、「娼婦」が一度きりの客の名刺を集めているという設定は、「大連逢阪町」に既に書かれたものの変化形なのである。ただ、「大連逢阪町」においてそれは、日本人「娼婦」宮本さきが行っていたという違いがある。

> さきは、腹這いになって、片手を鏡台にのばし、ひきだしをあけると、手さぐりで紙の束をつかんでだした。見ると、ゴムバンドでとじられた百枚近い名刺の束だった[43]。(「大連逢阪町」)

以上、『瀋陽の月』と「大連逢阪町」の「娼婦」の描き方を比較すると、こうしたプロットの設定と人物をすり替えるということが語りの手法として重要であると同時に、水上の「満洲娼婦」語りにおける推移、構築の過程を傍証できる一例になるだろう。名刺を収集することは一見無意義な行為に過ぎないが、それは暗喩的な意味を持っているのではないか。

40　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、15頁。
41　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、24頁。
42　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、24-25頁。
43　水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、24頁。

遠い大連にきて、朝鮮人女性の働く部屋で、輪ゴムに括られた数多い日本人の名刺に、ぼくが大人びた感懐をもって不思議はない。どこにゆきずりの客の名刺をていねいに保存していた妓がいたろうか。しかも、その名刺を、他意なげに、さしだしてみせた妓がいたろうか。日本の字がよめぬということから、名刺への思いもちがうところがかりにあったとしてもだ。妓にとって、客は異国の人で、先を急いで去った人である[44]。

以上の引用で語られているように、日本人「娼婦」が商売の手段として名刺を集める可能性はあるが、日本語も読めない朝鮮人「娼婦」が名刺を収集して他人に見せる行為は日本人男性の客を喜ばせることに価値があるからである。これも、植民地である朝鮮が宗主国である日本に長く抑圧されていた歴史と呼応している。また、『瀋陽の月』には、それ以前の叙事的な「満洲」関連作品より、強い抒情性が賦与されていることも見逃せない。特に「ぼく」の朝鮮人「娼婦」との出会い、交際について濃密な描写がある。例えば、作品において、「ぼく」が朝鮮人「娼婦」に「鴨緑江節」[45]を歌うシーンがある。

「朝鮮とシナと境のあの鴨緑江、ながす筏はよけれども、雪や氷にとざされてヨォーあすはまた新義州につきかねる、アア、チョイ、チョイ」とうろおぼえを自信なげにまねてみせた。妓は首すじの静脈をうごかして、大きくわらった。小さびしい顔だちだと思った[46]。

この「鴨緑江節」は大正時代から日本全国的な流行になり、戦前の日本人にとって朝鮮の「鴨緑江」という河の名前は馴染み深い固有名詞となった。湯朝竹山人の『小唄夜話』[47]によると、当時、「鴨録江節」は朝鮮各地に流行して、花柳界はいうまでもなく、紳士、官吏から商人、小僧までの幅広い人に唄われていた。小野塚久平の『満鮮旅行日記』[48]においても、平壌で朝鮮「妓生」が日本語で「鴨録江節」を唄う場面の記述がある。また、地理的な面から言うと、「満洲」から日本に帰還する人々の大半は鴨緑江を渡って故郷に戻るため、鴨緑江は朝鮮出身の「娼婦」だけではなく、「ぼく」のような「満洲」に出稼ぎに来た日本人にとっても、「帰郷的」なメタファーとしての意味がある。

異郷者同士である「ぼく」と朝鮮人「娼婦」は望郷の思いを唄に託し、「故郷の喪失」の心境を言い表し、各自の内面にある「満洲国」に抗する「望郷意識」「王道楽土」いう夢の虚しさ、儚い幻想に過ぎなかった「満洲」の実態を唄にのせて表出したのである。また、「ぼく」と朝鮮人「娼婦」は異郷者に滞在する者同士だけではなく敵対国の人間同士でもあるが、二人が不思議な親近感を持ったことが次の引用部からもうかがえる。

ぼくは、その夜、彼女の部屋で、二時間ばかりいて言葉もあまり通じないままに何やかや平壌のことや、若狭のことなど話しあってすごし、夜もふけていたと思ったが、馬車で帰った[49]。

上の引用のように、植民地である朝鮮の平壌出身の「娼婦」と宗主国である日本の若狭出身の「ぼく」

44　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、25頁。
45　俗謡の一つであり、鴨緑江に出かせぎに行った筏師に唄われて日本各地に伝わり、大正時代、流行歌として親しまれた。
46　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、23頁。
47　湯朝竹山人『小唄夜話』新作社、1924年、79頁。
48　小野塚久平『満鮮旅行日記』1930年、29頁。
49　水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、30頁。

は、「満洲」の「遊廓」という周辺的な空間のなかで、お互いの境遇を語り合うことができる。「ぼく」にとっての朝鮮人「娼婦」とは、必ずしもヒエラルキーの最下層に置かれ、搾取されるだけの存在ではなく、むしろ「ぼく」も朝鮮人「娼婦」も「故郷」を喪失しているという意味で中心性を欠いており、周辺的空間のなかで生きる者同士の連帯感を抱く存在である。

朝鮮は日本に支配された植民地であり、「満洲」に隣接した辺縁的な空間でもある。当時、朝鮮とりわけその北部は、日本大陸から「満洲」への中継地点としての役割を担った場所である。藤永壮[50]によると、早くも1920年代の半ばまでには、植民地朝鮮から「満洲」への女性売買のルートが既に確立されていた。しかし、かつての「満洲」で生きた朝鮮人「娼婦」の女性像を現在知ることはできない。水上は朝鮮人「娼婦」という歴史的な記録にその実態が残りえない人物像を加筆することによって、この「満洲」の「遊廓」の輪郭により周辺的な様相を与えた。こういう点で『瀋陽の月』は、水上の「満洲」関連作品のなかでも、最も成熟した作品だと言えるのだ。前節で、水上の「満洲」関連作品において造形された「満洲娼婦」の像は、「階級と性という二重の桎梏」によって虐げられている日本人の「満洲娼婦」たちの辛苦が反映していると述べたが、『瀋陽の月』の朝鮮人の「満洲娼婦」の造形においては、さらに階級と性という近代的な女性の性を搾取する構造に加えて、植民地主義という国家間のヒエラルキーも加えられている点で、「階級／性／民族という三重の桎梏」によって虐げられる朝鮮人「娼婦」の像を浮かび上がらせているのだ。

おわりに――「満洲娼婦」を語ること

本稿では、水上の1970年代から1980年代の「満洲」関連作品で浮かび上がってくる「満洲娼婦」像は、日本帝国主義の植民地支配の広がりとともに日本から「満洲」へと移動して自分の体で生計を立てるしかない下層社会を生きる女性たちの群体であり、そのような「満洲娼婦」たちの実像は公的な記録に残ることは難しい存在であるが、水上勉文学の「満洲」関連作品とは自分の体を売るしかない女性たちの実態を復元することができる小説シリーズであることが見えてきた。

本稿の第1節では1960年代の水上勉文学に描かれた「娼婦」像を整理し、「母恋い」の反映ではない下層社会を生きる「女性」たちを取り巻く社会構造やコンテクストを分析した。彼女たちを取り巻く抑圧構図や制度的な搾取である「公娼制度」、そして女性が身体的な道具としての性的搾取される構図は、戦時下になってより強化される。第2節でみてきたように、「渡満」した「からゆきさん」の変身である日本人「娼婦」であっても、「慰安婦」の前身である朝鮮人「娼婦」であっても、本質は戦争の「性的な慰安」を担っている。

1970年代以降の水上の「満洲」関連作品において造形された「満洲娼婦」の像は、自分の身を売ることを余儀なくされる家庭環境という階級的貧困、近代以降の女性の性の被支配的構図――つまり「階級と性という二重の桎梏」――に挟まれている群体であり、そうした彼女たちの辛苦が反映しているのである。特に、『瀋陽の月』の朝鮮人の「満洲娼婦」の造形においては、さらに階級と性という女性の性を搾取する近代的構造に加えて、植民地主義という国家間のヒエラルキーも加えられ、「三重の桎梏――階級／性／民族――」を反映した朝鮮人「娼婦」の像を浮かび上がらせている。したがって、『瀋陽の月』は、水上の「満洲語り」の試行錯誤を重ねた成果であり、自らの「満洲実体験」に対する総決算的な作品でもある。作中にて、水上自身の創作意識が工夫によって虚構化された「満洲娼婦」は、水上が「満洲」の本質を問う結晶である。

50　藤永壮「日露戦争と日本による「満州」への公娼制度移植」『快楽と規制：近代における娯楽の行方』、大阪産業大学産業研究所、1998年。

しかし、手放しで『瀋陽の月』を評価してはいけない。『瀋陽の月』では「娼婦」はつ枝が「ぼく」の母役として抒情的に造形された。また、「ぼく」は日本人であれ、朝鮮人であれ、「娼婦」に共感する一方、彼女たちの身体を買う支配する側の男性でもあるため、そうした男性という支配者側からの視線を脱することはない。ここには、女性「娼婦」の語り手の不在という大きな問題がある。この、女性の「満洲娼婦」の立場からの語りが全くないことについては、加納実紀代が「女が、一人の人格をもった存在、さまざまな欲求と可能性をもった主体とはみられず、男の都合にあわせて切りとられ、利用された」[51]と表現していることを借りれば、水上の「満洲」関連作品の語り手である男性が「満洲娼婦」を「一人の人格をもった存在」として認識せずに「男の都合にあわせて切りとられ、利用している」という批判を加えることもできるだろう。そうした男性の語りの限界性については、山崎朋子『サンダカン八番娼館―底辺女性史序章』あるいは、森崎和江『からゆきさん』における女性を主体とした語りとの比較を通して検討することを今後の課題としたい。

楊　柳岸（よう　りゅうがん）YANG, Liuan
東京外国語大学博士後期課程

参考文献

水上勉、1963、『告白　わが女心遍歴』河出書房新社.
水上勉、1979、『虎丘雲巖寺』、作品社.
水上勉、1981、『北京の柿』潮出版社.
水上勉、1986、「瀋陽の半月」、「新潮」83（1）.
水上勉、1986、『瀋陽の月』、新潮社.
水上勉、1996、『五番町夕霧楼』角川文庫.
水上勉、2005、『雁の寺・越前竹人形』新潮文庫.
森崎和江、1976、『からゆきさん』朝日新聞社.
山崎朋子、1976、『サンダカン八番娼館――底辺女性史序章』筑摩書房.
大江志乃夫・浅田喬二・三谷太一郎・後藤乾一・小林英夫・高崎宗司・若林正丈・川村湊編、1993、『近代日本と植民地5・膨張する帝国の人流』岩波書店.
廣末保、1997、『悪場所の発想』影書房.
藤目ゆき、1998、『性の歴史学――公娼制度・堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版.
倉橋正直、2000、『北のからゆきさん』共栄書房.
橋谷弘、2004、『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館.
金富子・金栄、2018、『植民地遊廓――日本の軍隊と朝鮮半島』吉川弘文館.
鈴木貞美、2021、『満洲国――交錯するナショナリズム』平凡社.

51　加納実紀代「満洲と女たち」『近代日本と植民地 5・膨張する帝国の人流』岩波書店、1993 年、219 頁。

『万葉集』歌の序詞の翻訳について
―ドイツ語訳と英訳における方法と歴史的な変遷―

About Translations of Preface (jokotoba) in *Manyōshū* Poems
– Their Methods and Historical Change in German and English Translations–

フィットレル・アーロン

In this thesis we pursue the Manyōshū translation history's ca. 150 years and consider about translation methods of waka poetry's preface (jokotoba) in 13 of English and 5 of German translations. We pick up prefaces which connects to the poem's human narrative with sound repetition or pivot word (kakekotoba). In the analysis of translations we show some representative translation methods, especially translator specific or innovative ones. In these translations we focus on Edwin A. Cranston's and H. Mack Horton's translation which convey expression methods and functions of prefaces with sound repetition or pivot word most accurately. Otherwise, we notice that in German translations there are more examples of translation method by which preface and human narrative are not connected nor grammatically neither formally. We suppose that there is in the background the difference of German and English poems using depiction of natural feature.

【キーワード】『万葉集』、和歌、序詞、英訳、ドイツ語訳

Manyōshū, Waka poetry, Preface (jokotoba), English translation, German translation

1. はじめに

序詞は『万葉集』の多くの歌にも用いられる日本最古の和歌の修辞法のひとつである。周知のとおり、景物などの物象叙述が人事の内容を導く形になっているが、こういった序詞の人事の部分とのつながり方は譬喩（以下、譬喩式と称する）と掛詞（以下、掛詞式と称する）と同音類音反復（以下、同音類音反復式と称する）との3種類である。この中で特に掛詞式と同音類音反復式の2種は、日本語の語彙と音声に基づくものであるため、外国語に翻訳する際、最も困難なものである。日本古典和歌を近現代の西洋の諸言語へ翻訳すると、文化的、時代的差異が大きい。その差異が翻訳、受容にどのように現れるのかを明確にするためには、同音類音反復式と掛詞式の序詞といった日本特有の和歌の修辞法の翻訳を見ることが、有効な手段のひとつではないかと思われる。本稿では、この2種類を中心に、『万葉集』歌の英訳とドイツ語訳における方法や傾向性について検討する。

翻訳には様々な方法があり、翻訳者にも独自の翻訳観がある。本稿では、『万葉集』の序詞の翻訳の実態を幅広く把握するため、なるべく全ての翻訳方法の例を取り上げる。なお、多くの翻訳から例を選出するにあたっては、日本の古典和歌や日本文化の海外における正しい理解の観点から、原典の特徴がより正確に伝達されている例であるかどうかに留意した。その他、事例の選出には、時代による翻訳方法の発展と推移、また各翻訳者の個人的な特徴や翻訳態度が理解できるものであるのかも条件とした。時代による翻訳方法の推移に関しては、その方法が初めて用いられた事例を取り上げ、また翻訳者の特徴に関しては、当該翻訳者の翻訳に多く認められる手法の例を紹介する。

ところで、外国語訳をする際、言語的特徴と文化的背景のみではなく、日本における研究も影響を与えることはいうまでもない。序詞の物象と序詞がかかる人事の叙述の内容的な関係については、日本国

内の研究においても多くの考察がなされてきたが、なかでも白井伊津子の分類[1]が最も詳細であると考えられ、本稿でもこの分類を基にして分析を進める。白井は序詞と人事の部分の関係を、それが顕わであるか否かによって以下の4種類に分けた。

A　音の関係と意味の関係のいずれもが顕わな例
足常　母養子　眉隠　隠在妹　見依鴨[2]
たらつねのははがかふこのまよごもりこもれるいもをみむよしもがも（2495）
B　音の関係が顕わな例
路後　深津嶋山　蹔　君目不見　苦有
みちのしりふかつしまやましましくもきみがめみねばくるしくありけり（2423）
C　意味の関係が顕わな例
湊入之　葦別小船　障多見　吾念君尓　不相頃者鴨
みなといりのあしわけをぶねさはりおほみあがおもふきみにあはぬころかも（2745）
D　音の関係と意味の関係のいずれもが顕わでない例
真野之浦乃　与騰乃継橋　情由毛　思哉妹之　伊目尓之所見
まののうらのよどのつぎはしこころゆもおもへやいもがいめにしみゆる（490）

この中で今回問題にする掛詞式と同音類音反復式のものはAかBのいずれかに分類される。第1章の分析では、原典における序詞と人事の叙述との関係を示すとき、この（A）と（B）を用いる。

『万葉集』歌の外国語訳は長い歴史を持ち、19世紀後半からドイツ語や英語に翻訳されている。ドイツ語への全訳はないものの、万葉歌の最初の欧文訳はドイツ語訳であり、19世紀後半から現在まで12種の抄訳が作成されている。もっとも、ドイツ語訳の大半は学位論文や研究書などの学術的な著作、あるいは古典文法の教材の中の翻訳であり、『万葉集』の歌を一般読者に紹介し、韻文としての鑑賞を目的とする翻訳は比較的少ない[3]。音の関係が顕わな序詞を持つ歌の翻訳も含まれている翻訳はその中の5種である。一方、英語の全訳は2種あり、1種は音節数や韻律や表現を考慮した文学的な翻訳である。残る1種は散文の意訳であるため、今回取り上げない。この他、掛詞式と同音類音反復式の序詞を持つ歌も翻訳されているものは、研究書の中の文学的な翻訳も含めて11種ある。よって、序詞を持つ歌を含む文学的な英訳は12種ということになる。本稿では以上の5種のドイツ語訳と12種の英訳を時代順に取り上げ、その中の同音類音反復式と掛詞式の序詞の翻訳方法について紹介し、その歴史的な変遷を見ていきたい。そこには歴史的な変遷も認められるとはいえ、1.に見るとおり、各翻訳者の態度による差異も見出せる。ところで、英語とドイツ語も同じゲルマン系の言語であり、英語圏とドイツ語圏の詩歌には共通点が多いものの、差異も多少認められ、その差異は和歌の翻訳にも現れる。また、英訳では一般読者を対象とした翻訳書が多く、ドイツ語訳の大半は日本文学史や研究書などの学術的な文献の中の翻訳であり、これに起因すると思われる差異も見出せる。

なお、『古今集』以降の序詞の英訳とドイツ語訳については、稿者はすでに論じており、翻訳方法につ

1　白井伊津子「序歌の意味と形式」（『萬葉』第181号、2002年7月）、後に、白井伊津子『古代和歌における修辞』（塙書房、2005）後篇第7章、261～285頁
2　特に断りのない限り、和歌の本文は日本文学Web図書館所収『新編国歌大観』による。
3　『万葉集』のドイツ語訳について拙稿「『万葉集』のドイツ語訳について―1930年代以降の翻訳を中心に―」（伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル8.0』2021年3月、11～57頁、https://genjiito.org/journals/08-2/）に概観した。

いても分類を試みた[4]。今回の分析も基本的にこの分類に基づくが、『万葉集』の序詞は人事の叙述との関係から見て平安時代以降の序詞とは多少異なり、序詞と人事の部分の内容的な関係が翻訳でどのように保たれているのか、あるいはどのように変わったのかについてより明確にするため、白井による上記のA ～ Dの分類も取り入れ、それぞれの歌の原典における序詞と人事の叙述との関係を示す基準としておきたい。

2.『万葉集』歌のドイツ語訳と英訳における同音類音反復式と掛詞式の序詞の翻訳

『万葉集』のドイツ語訳と英訳は早く19世紀後半から始まり、最新の翻訳は21世紀のものであるが、ドイツ語圏と英語圏における『万葉集』への関心は現在も高いといえよう。万葉歌のドイツ語訳と英訳において、同音類音反復式と掛詞式の序詞はどのように捉えてきたのかについて、以下に見ていきたい。

2.1 プフィッツマイヤーによるドイツ語訳(1872年)

『万葉集』歌の最初のドイツ語訳は、最初の外国語訳でもあった。その翻訳は、他にも多くの日本古典文学作品のドイツ語訳を作成したアウグスト・プフィッツマイヤー（August Pfizmaier, 1808 ～ 1887）による216首である[5]。プフィッツマイヤーは言語学者で、万葉歌の翻訳の目的も、主に日本語の語源研究などに活用することであったと考えられる。多くの歌に注を付けるが、そのすべてが語釈と語形の説明であり、言語学的な観点から『万葉集』のテキストを分析していたことがわかる。プフィッツマイヤーは和歌のそれぞれの句を縦棒で分けて明確にするが、翻訳は極めて直訳的で、韻文として鑑賞できるものとはいいがたい。プフィッツマイヤーの翻訳はヨーロッパの日本学の黎明期のもので、『万葉集』の底本も含めて、参照できた日本関連の文献が限られていた。そのような状況で1000年以上前の日本語で書かれた文章の翻訳にあたって、誤解と誤訳がしばしば見られることは当然であり、序詞も充分に理解できていなかったことが翻訳からわかる。次の例のように、序詞を心情の背景である修辞と見ておらず、心情叙述の対象は、原典では序詞となっている景物自体であると理解している翻訳が複数件見出せる。

> 草香江之（クサカエノ）　入江二求食（イリエニアサル）　蘆鶴乃（アシタツノ）　痛多豆多頭思（アナタツタツシ）　友無二指天（トモナシニシテ）[6]（575）
> Der an der Bucht des Flusses｜von Kusa-ka Nahrung suchende｜Storch des Schilfrohrs｜ist schmerzlich abgeschnitten,｜da er keine Gefährten hat.（Pfizmaier, 1872, S. 34）
> 〔クサカの入江に餌を探っている葦のこうのとりは痛いほど隔絶されている、彼は相手がいないので。〕

この歌では、4句目以降が詠歌主体の心情であるものの、プフィッツマイヤーによる翻訳では、鶴（翻訳ではこうのとり）の心情であると誤解されている。西洋詩にも、景物で心情叙述の背景を作るという

4　拙稿「同音反復式の序詞の翻訳に関する一考察―『古今集』と『新古今集』と『百人一首』歌を例に―」『人文』第16号、学習院大学、2018年3月、241（102）～ 276（67）頁

5　Pfizmaier, August: *Gedichte aus der Sammlung der zehntausend Blätter*〔万葉集の詩〕Kaiserliche Akademie der Wissenschaften, Wien, 1872.　また、プフィッツマイヤーと2.3のフローレンツ、2.5のロレンツェンによる万葉歌のドイツ語訳について加藤耕義「万葉集の早期ドイツ語訳」（『万葉古代学研究年報』15、17 ～ 44頁）が詳しい。なお、文献によってプフィッツマイヤーの片仮名表記として「フィッツマイヤー」や「プフィッツマイエル」なども見られる。

6　原文はプフィッツマイヤー訳所収の原文である。

方法があり、特に民謡の冒頭によく見られる、多く景物描写である前置きが日本の古典和歌の序詞に類似する[7]。したがって、プフィッツマイヤーが、この箇所はこのような修辞であることに気づかなかった原因は、西洋人にとって完全に未知の修辞法であったからではなく、おそらく対象が明示されないという日本語の表現方法によるものと思われる。525番歌の翻訳においても、「あしたづの」に見られる「の」が主格で、「ともなしにして」という叙述はその述語であると見ていたのであろう。もっとも、「隔絶されている」(…ist schmerzlich abgeschnitten)という表現に見られる「abgeschnitten」(「abschneiden」の過去分詞形)は「切り取る」や「短く切る」という意味もある。このように葦の縁語となり、興味深い訳し方である。

また、プフィッツマイヤーの翻訳の中には、序詞と人事の関係が正しく理解されており、原典における機能が翻訳で伝わるといえる例も見出せる。

> 河上乃(カハカミノ)　伊都藻之花乃(イツモノハナノ)　何時何時(イツモイツモ)　来益我背子(キマセワガセコ)　時自異目八方(トキジクメヤモ)(491)
> An der Flusses Ufer｜die Blüthen der Pflanze „Wann?"｜wann, o wann｜kommen sie? Mein älterer Bruder,｜die Zeit wird ihn trennen.(Pfizmaier, 1872, S. 7–8)
> 〔川岸に、「いつ」草の花、いつ、いつあなたが来るのか。私の兄よ、時が分かれてしまいそうだ。〕

上記の吹黄刀自の歌の翻訳でプフィッツマイヤーは序詞と人事の叙述を繋げず、二つを並べるのみである。また、下線部のように、花の名前に含まれる「いつ」をそのまま訳出することによって、原典の同音反復も伝わる。このような表現方法の場合、『万葉集』原文では表記が異なるものの、「いつも」という語が植物の名前に含まれているため、理解しやすいと思われる。しかし、歌の内容が正しく伝えられているかといえば、決してそうではない。原典の「いつも」に相当する部分は「wann(いつ)」と訳出されており、詠歌主体が相手に問いかけている形となっている。また、5句目の翻訳も原典と異なっている。さらに、他の歌の翻訳と同様、プフィッツマイヤーは「背子」を兄という意味に誤解しており、「妹(いも)」も現代の意味である妹(いもうと)という意味に誤解して、翻訳している。

2.2 チェンバレンによる英訳(1880年)

チェンバレンの和歌翻訳には、受容する側である英語圏の詩の形式や技法を用いて翻訳を作成し、西洋の詩の形式を取り入れて、翻訳和歌に題名を付けるという特徴があり、欧文訳の中で、プフィッツマイヤーのドイツ語訳と性格が対照的である。1880年に刊行されたThe Classical Poetry of the Japanese(Trübner & Co., Ludgate Hill, London, 1880)というアンソロジーでは、長歌64首と短歌6首が翻訳され、その中に同音類音反復式の序詞を持つ歌も4首含まれている。

アンソロジーの序文にチェンバレンは、序詞について次のように説明する。

> 「序(Preface)」は長い「枕詞(Pillow-word)」で、詩に入れられたひとつのセンテンスを含む場合があり、その後に続く内容とは関係がなく、聞き心地の良い導入(introduction)だけである。この装飾は主に最初期の詩歌に限定され、これに対して「枕詞」はどの時代にも盛んであった。[8]

7　このような景物描写による民謡の前置きと和歌の序詞の比較について拙稿「日本の古典和歌における序詞とヨーロッパの民謡の〈物象序〉について」(『人文』第20号、学習院大学、2022年3月、81～108頁)に論じた。

8　Chamberlain, Basil Hall: *The Classical Poetry of the Japanese*. Trübner & Co., Ludgate Hill, London, 1880, p. 5　なお、特に断りのない限り、翻訳書と和歌の外国語訳の日本語逐語訳は稿者による。

ここから、チェンバレンは、序詞は人事の部分と内容的な関係を持たないと捉えていたことがわかる。もっとも、和歌の翻訳では人事の部分との内容的なつながりを明確にした方法で序詞を訳出する。3258番歌に、「松根　松事遠（まつがねの　まつこととほく）」という箇所があるが、序詞である「松根」とそれがかかっている人事の叙述との間に音の関係のみが顕わである（B）。チェンバレンは次のように訳す。

> Like to the pine-trees I must stand and pine, （Chamberlain, 1880, p. 32）
> 〔松の木を〔恋い慕う〕ように私は立って恋い慕わなければならず、〕

同音反復（まつ）は英語の同音異義語である「pine」によって復元し、松の木を恋い慕うという内容を補うことによって「like」という語でつなげるという形で内容的な関係を構築する。稿者はこのように、原典にない、序詞の内容と人事の内容との間に共通性を構築する語句を補い、「〜のように」（英語の場合は「as」または「like」、ドイツ語の場合は「wie」、「als」または「gleich」）という表現でつなげる方法を、注4の拙稿で「直喩の創作」と称している。これは、『万葉集』と『古今集』以降の序詞の英訳とドイツ語訳にも最も多く使用されている方法のひとつである。

いま1例、家持の4113番歌の序詞を取り上げる。

> ……開花乎　移侶見流其等尓　那泥之古我　曽乃波奈豆末尓　左由理花　由利母安波無等……
> ……さくはなをいでみるごとに　なでしこが　そのはなづまに　さゆりばな　ゆりもあはむと……

And see them flow'ring, but I think	そしてそれらが咲いているのを見て、思う、
On when I'll see my lily spouse,	いつ私の百合〔のような〕嫁を見るのかと、
My spouse as fair as any pink.	私の撫子のように美しい嫁を。

（Chamberlain, 1880, p. 43）

この歌では、引用部分の直前に、詠歌主体が自分の慰めのために各種の花を植えたとあり、その花の描写から「由利母安波無等」以降の人事の叙述に内容的にもつながるため、音と意味の関係も顕わである（A）と思われる。チェンバレン訳では、原典の「ゆり」という同音意義語による反復を、別の語である「spouse」の反復で復元し、波線部の「lily」は、美しい花であり、原典に見られる「はなづま（花妻）」のように詠歌主体の妻を思わせる百合を隠喩的に用いて景物と人事の関係を反映させる。

2.3 フローレンツによるドイツ語訳（1894年、1906年）

チェンバレンの英訳が発表されてからしばらくして、19世紀から20世紀にかかる時期の代表的な日本学者であるカール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865 〜 1939）によるドイツ語訳も刊行された。それは『東の国からの詩人たちの挨拶―日本の詩―』[9]というアンソロジーでの翻訳である。これは多くの挿絵などの装飾を含み、一般読者に日本の韻文を紹介する目的で作成されたアンソロジーで、『万葉集』から35首の和歌（主に長歌）が採録されている。翻訳歌の詩形は5-7調ではなく、西洋の詩形であり、各歌に題名を付け、チェンバレンと共通する性格を持つ。同音類音反復式と掛詞式の序詞が見られる歌として、3258番の長歌があげられる。

9　Florenz, Karl: *Dichtergrüsse aus dem Osten: japanische Dichtungen*. Amelangs Verlag, Leipzig, 1894.

……松根　松事遠　天伝　日之闇者　白木綿之　吾衣袖裳　通手沾沼
……まつがねの　まつこととほみ　あまつたふ　ひのくれぬれば　しろたへの　わがころもでも　とほりてぬれぬ
Gleich einer Trauerweide muss ich trauern
Dieweil die Abendschatten niedersinken.
Ach, meine langen, schneeig weissen Aermel
Sind schon durchnässt vom vielen Thränentrinken.（Florenz, 1894, S. 20）
〔枝垂れ柳のように私が悲しまずにはいられない/その間夜の影が下りてくる。/ああ、私の雪のように白い袖が/もう多くの涙で濡れている。〕

原典では「松」と「待つ」という同音意義語の反復となっているが、内容的なつながりは顕わでない(B)。翻訳でも二重下線部のように同音反復が復元されている。「悲しい柳」という意味である枝垂れ柳のドイツ語名(「Trauerweide」)を活用することで同音反復を実現させつつ、原典の「松」を柳に、「待つ」を悲しむことに置き換える。この例では、表現方法は反映されているものの、創作度が強いと言わざるを得ない。さらに、下線部のように、「〜のように」という意味の「gleich」を用いて直喩を創作する。同音類音反復式の序詞の翻訳方法もチェンバレンと類似し、それを踏襲しているのかもしれない。

フローレンツは『東の国からの詩人たちの挨拶』を出版した12年後、『日本文学史』[10]を著わした。そこで、日本詩歌の修辞法の中で、序詞について次のように説明する。

序は、一つの言葉、或ひは一つの言葉の一定のシラブルに対する、全文章或ひは文章の結合から成立してゐる修飾的な形容詞である。その内容は、当該の限定詞(Bestimmungswort)に対する形容詞としてのみあるので、詩の関連からは全く孤立的に切断されている。序は拡大された枕言葉である。(中略)吾々のヨーロッパ的な趣味は、このやうな修飾手段を、余りにも形式的で外的であり、余りにも無関係にもつて来られたものであり、芸術的統一を妨げるものとして、放棄する。[11]（Florenz, 1906, S. 26）

つまり、西洋の考え方から見ると、序詞は形式的なものであり、和歌の人事に関わる内容と直接関連しないため、「芸術的統一(künstlerische Einheit)」を妨げるものとしてフローレンツには受け入れられなかったようである。『日本文学史』では『万葉集』から104首の和歌を翻訳しているが、序詞を持つ歌は4首のみで、同音類音反復式の序詞を持つ歌は次の1首のみである。

多都我奈伎　安之倍乎左之弖　等妣和多類　安奈多頭多頭志　比等里佐奴礼婆
たづがなきあしへをさしてとびわたるあなたづたづしひとりさぬれば(3626)

Nach dem schilfbewachsenen Ufer	葦が生えている浜へ
Ziehen Kraniche in Schwärmen;	鶴が群がって飛んでいく。
Ach! und einsam und verzweifelnd	ああ！独りで、不安に
Muss die Nächte ich vertrauern.	私は夜々嘆かなければならないのだ。

（Florenz, 1906, S. 111）

10　Florenz, Karl: *Geschichte der Japanischen Litteratur*. Amelangs Verlag, Leipzig, 1906.
11　日本語訳はカール・フローレンツ『日本文学史』（土方定一・篠田太郎共訳、楽浪書院、1936、56 〜 57 頁）による。

4行詩に仕立てた翻訳で、1~2行目が序詞部分、3 ～ 4行目が心情部である。両者の関係を明確にせず、並べて翻訳し、「;」で分離するのみである。同音反復は復元されていないため、序詞と心情部との間で内容面でも音声面でも関連が明確でなくなるが、内容的な関係は原典においても顕わでなく、この点ではこの序詞の原典における機能を伝えるといえよう。もっとも、この歌の景物である鳴く鶴が、詠歌主体の嘆きを暗に思わせる趣向であり、序詞を過度に形式的で表面的な装飾であると評価したフローレンツにとっても受容しやすかったという面もあると思われる。

2.4 ディキンスによる英訳(1906年)

ディキンス(Frederick Victor Dickins)は日本古典文学のアンソロジー[12]に、『万葉集』のほとんどの長歌とそれらの反歌、またいくつかの他の短歌を翻訳した。題名を付し、翻訳歌を英詩の詩形に仕立てる点でチェンバレンと共通する傾向である。3258番歌の「松」と「待つ」もチェンバレンと同じく「pine」を活用して訳出し、直喩の創作を用いた例もあるが、ここにはチェンバレンの翻訳に見られなかった方法をとる1例をあげたい。

……上瀬之　年魚矣令咋　下瀬之　鮎矣令咋　麗妹尓　鮎遠惜……
……かみつせの　あゆをくはしめ　しもつせの　あゆをくはしめ　くはしいもに　あゆををしみ……（3330）

in the upper waters	上の水の方に、
fine fish the birds are let,	鳥[13]に美味しい魚を、
in the lower waters	下の水の方に
fine trout are let to	美味しい鮎を
swallow–	喰わせる。
and fine my love too,	そして私の恋人も美しく、

(Dickins, 1906, pp. 210–211)

ここでは下線を付した「fine」という語の複数の意味を活用して、同語反復によって原典の同音反復を復元する。また、ディキンスはこの歌に直喩ではなく、並列(「and」)を用いて内容的なつながりを明確にする。原典においては音の関係のみが顕わである(B)この箇所の翻訳として、直喩の創作に比してより内容的なつながりがはっきりしておらず、注目すべき工夫である。

2.5 ロレンツェンによるドイツ語訳(1927年)

アルフレート・ロレンツェン(Alfred Lorenzen)はフローレンツの弟子であり、ハンブルク大学に提出した学位論文は『万葉集』に関するものである。その学位論文中では、特に人麿について取り上げ、人麿の歌を87首翻訳している[14]。

論文の中で『万葉集』歌の修辞技法についても書くが、枕詞と序詞について、次のように述べる。

12　*Primitive & Mediaeval Japanese Texts*. Translated into English with Introductions Notes and Glossaries by Frederick Victor Dickins, C. B. Clarendon Press, Oxford, 1906.
13　和歌で前述の鵜のこと。
14　Lorenzen, Alfred: *Die Gedichte Hitomaro's aus dem Manyōshū: in Text und Übersetzung mit Erläuterungen*〔万葉集の人麿の詩―テキストと翻訳と注釈―〕Veröffentlichungen des Seminars für Sprache und Kultur Chinas an der Hamburgischen Universität, Heft 1, L. Friederichsen, 1927.

> ジョ、序言（Vorreden）は（稿者注―枕詞と）同じ種類の修辞に属し、完全な文からなり、形式は枕詞に比して必ずしも決まったものではない。これらは多く譬喩を含む。（Lorenzen, 1927, S. 76）

要するに、序詞の比喩的な役割を指摘する。また、枕詞と序詞の詩全体、つまり人事の叙述との関連について以下のように述べる。

> この瞬間的で個人的な外界から来る緊張感といった感情の世界[15]に、ひとつひとつの言葉の詩全体における論理的な関係性が後退するほどまでに重点が置かれている。しかし、枕詞によってこのように論理性が後退すると、心理描写が前面に出され、詩人の本来の姿勢が表されるようになる。（Lorenzen, 1927, S. 78）

フローレンツと同じく、枕詞と序詞の内容が人事の叙述と論理的につながらないことに関して違和感を覚えていたが、これらの修辞法によって心情が強調されるという機能にも注目する。

枕詞と序詞の譬喩的な意味合いに触れるロレンツェンは、序詞の翻訳において直喩を用いることが多い。同音類音反復式の序詞の場合も同様であるが、同音類音の繰り返しを復元する例も見出せる。

> ……（9）玉藻成　（10）靡寐之児乎　（11）深海松乃　（12）深目手思騰……
> ……たまもなす　なびきねしこを　ふかみるの　ふかめておもへど……（135）
> 12 Indem ich meine Liebe vertiefe,
> 11 tief wie das Tiefseegras, liebe ich zwar
> 10 das Mädchen, mit dem ich geschlafen habe angeschmiegt,
> 9 wie sich das schöne Seegras anschmiegt.（Lorenzen, 1927, S. 17）
> 〔（12）私の恋を深める、（11）深海の藻のように深く愛している、（9）綺麗な海藻が寄り添うように（10）寄り添って寝ていた女子を。〕

ここでは省いたが、ロレンツェンはローマ字で歌の原文もあげ、その行頭に行番号を付している。翻訳でも、どの行の翻訳に対応するのかを明確にするため、同じ番号を行頭に付ける。今回取り上げた135番の長歌は人麿が妻と別れたときの詠で、下線部の「ふかみる（深海松）」という海藻の名が同音によって「深めて」にかかる。また、この場合は同じ「深」という言葉は人事の叙述にも見られることにより、内容的なつながりも認められる（A）。ロレンツェンは12行目にあたる心情部の翻訳にも、11行目の序詞部分の海藻名の翻訳と直喩の中にも「深い」という言葉を入れる。一方、行番号からも明らかなように、翻訳では序詞が心情部の後に来るため、序でなくなり、普通の譬喩、直喩に変じている。

2.6 岡田による英訳（1935年）

日本人として最初に『万葉集』歌を英語に翻訳したのは英文学者の岡田哲蔵（1869 ～ 1945）である。岡田の翻訳[16]には、短歌が圧倒的に多く、同音反復式と掛詞式の序詞がある歌も4首翻訳したが、新しい

15　ロレンツェンはこの叙述の直前において、和歌の一方には、和歌における描写と表現を生み出す、詠歌主体の個人的な体験につながる認識された世界があり、もう一方には瞬間的な心的緊張感があると述べている。

16　*Three Hundred Poems from the Manyōshū. Poetical Collection of Early Japan*. Selected and Translated by Tetsuzō Okada. Seikansō, Tokyo, 1935.

翻訳方法は見られない。音の関係のみが顕わである同音反復式の序詞(B)を持つ大伴旅人の575番歌は次のように翻訳する。

草香江之　入江二求食　蘆鶴乃　痛多豆多頭思　友無二指天
くさかえのいりえにあさるあしたづのあなたづたづしともなしにして
Like a lonely crane that seeks its food　自分の餌を探している孤独な鶴のように、
At the Bay of Kusaka,　クサカの浦で、
Restless I shall feel without a friend.　友をなしにして私は不安に感じなければならない。

波線を付した「lonely」という語を加えることによって、詠歌主体と鶴との間に共通点を構築し、「like」を用いて直喩を創作している。

2.7 日本学術振興会による英訳(1940年)

次の『万葉集』歌の英訳も日本における著作で、1940年に日本学術振興会が刊行したもの[17]である。多くの万葉研究者や和歌研究者による著名な翻訳書で、『万葉集』の英訳の中で代表的なもののひとつである。The Nippon Gakujutsu Shinkōkai Translation of One Thousand Poemsという副題にもあるとおり、1000首の万葉歌を翻訳し、その中に同音類音反復式と掛詞式の序詞を持つ歌も数首含まれている。『万葉集』やその時代を紹介する詳細な序文に、序詞(introductory verse)はよくメタファーを通して現れること、また序詞とそれがかかっている内容の間に論理的な関係がないことについて言及する。さらに、『万葉集』全体にわたって「as」または「like」(「〜のように」)のような接続句がない形で序詞と人事の部分が並べられているということも述べる。原典でも直喩的な関係(音と内容のいずれも顕わな例)が認められる歌の場合、直喩として訳出することは当然であり、前述の翻訳にも見た直喩の創作の例も若干見られる。一方、音のみに関係がある歌の場合、序詞と人事の部分を強引に結びつけることを避けて工夫する傾向が強い。例えば以下のような興味深い対処法が見出せる。

石上　振乃山有　杉村乃　思過倍吉　君尓有名国
いそのかみふるのやまなるすぎむらのおもひすぐべききみにあらなくに(422)
Unlike the growth of the sugi, the 'pass'-trees,
On Furu's hill at Isonokami,
He is no such prince
As will pass from my mind! (Nippon Gakujutsu Shinkōkai, 1940, p. 25)
〔イソノカミのフルの丘のスギ、「過ぎる」木の茂みとは違って、彼は、私の思いから過ぎ去るほどの皇子ではないよ!〕

序詞と4~5句の人事の叙述の間に、音の関係のみが顕わである(B)。翻訳者は、「杉」と「過ぐ」の類音反復は、下線部のように「杉」という木の名前を日本語の「過ぐ」の意味を基にして翻訳し、二重下線部のとおり、同語反復で復元する。また、「スギ」について脚注が施され、杉という木についての説明と、「過ぐ」

17　*The Manyōshū. The Nippon Gakujutsu Shinkōkai Translation of One Thousand Poems*. Published for the Nippon Gakujutsu Shinkōkai by the Iwanami Shoten, Tokyo, 1940.(稿者は1965年刊(Columbia University Press, New York and London)のものを参照した。)

が出てくる歌によく序詞となるという説明が見られる。一方、波線を付した「unlike」(「～とは違って」、「～に対して」)という語によって、景物と人事の内容の間に対比関係が構築される。この序詞は、原典では音のみが顕わであり、内容的な関係は潜在している(B)ものの、翻訳では明確にされていることによって、序詞とそれがかかっている部分との関係性の解釈を限定することに問題があるといわざるを得ない。

2.8 安田による英訳(1960年)

ケネス安田も、『万葉集』の短歌100首を英語に翻訳している[18]が、これは、英訳を5行に分け、原典の字数構成を基にした5-7-5-7-7の31音節で翻訳した最初の作品である。同音類音反復式と掛詞式の序詞を持つ歌は合計3首翻訳されており、新しい、または特殊な翻訳方法は見られないが、掛詞式の例である舎人娘子の次の歌の翻訳は注目に値する。

丈夫之　得物矢手挿　立向　射流円方波　見尓清潔之
ますらをのさつやたばさみたちむかひいるまとかたはみるにさやけし(61)

For a warrior	武士にとって―
with the arrow to his bow,	彼は弓に矢を持ち、
carefully aiming--	慎重に構える―
how clearly this Target Bay,	なんてはっきりと、この的の浦、
Matokata, lies in view.	マトカタが目の前に広がっているのだ。

(Yasuda, 1960, p. 75)

安田の翻訳では、3行目の行末に「―」を付けることによって、序詞とそれがかかる部分を明確に分けていると見られる。原典における「丈夫」は序詞の物象の一員であるのに対して、翻訳では円方(的方)を眺める主体と変わり、詠歌主体はその「丈夫」と一体になるのか、あるいは第三者として「丈夫」の様子を想像していることになるように思われる。また、翻訳者はここにも注を施し、最初の3行は円方を導く「joshi」(序詞のこと)であり、巧みに使われて急な驚きを招く効果がある詩的表現であること、また「主想」(main statement)は、円方がはっきり見えるほど天気がよい日であることであると説明する。

2.9 本田による英訳(1967年)

韻文形式のもので、最初に『万葉集』のほぼ全ての歌を収録する英訳は本田平八郎の著作[19]である。英文学者である本田は『万葉集』に先立ち、『古今集』と『新古今集』と『百人一首』の全英訳も著わしたが、修辞法の翻訳に関しては、特に内容的に直接関係が見出せなかった物象叙述を省略し、人事の文脈のみを訳出する傾向が強い。そのため、同音反復式と掛詞式の序詞の中で音の関係のみが顕わであるもの(B)に関しても、おおむね同様である。たとえば、次のような例があげられる。

18　*Land of the Reed Plains* (葦原の国). *Ancient Japanese Lyrics from the MANYOSHU with interpretive paintings by SANKO INOUE, translation & commentary by KENNETH YASUDA.* Charles E. Tuttle Company, Rutland, Vermont & Tokyo, Japan, 1960.

19　*The Manyoshu. A New and Complete Translation by H. H. Honda.* The Hokuseido Press, Tokyo, 1967.　ただし、題名には「全訳」とあるにもかかわらず、類似する発想の歌２首ある場合、片方を翻訳する傾向があり、実際に全訳ではない。

足檜木之　山菅根乃　懃　吾波曽恋流　君之光儀乎
あしひきのやますがのねのねもころにあれはぞこふるきみがすがたに（3051）
My dear, how I love you--　私の愛しい恋人よ、なんて君を愛しているのだ―
you so fair and true!　君はあれほど美しく、誠実なのだ！
（Honda, 1967, p. 227）

音と内容の相関も重要な意味を持つ日本の古典和歌の本質が伝わらなくなることはいうまでもないが、上の歌は巻12の「寄物陳思」のものであり、本田訳のように物象叙述が含まれなくなると、このような歌の特徴である「寄物」部分が姿を消すことになってしまう。

しかし、本田は全ての物象叙述を省略したわけではなく、訳出した音の関係のみが顕わである序詞（B）を持つ歌の翻訳の中、以下のような興味深いものも見られる。

潮葦　交在草　知草　人皆知　吾裏念
みなとあしにまじれるくさのしりくさのひとみなしりぬわがしたもひは（2468）
As can be known
the grass among
the seaside reed,
so all men read
my constant mind.（Honda, 1967, p. 195）
〔浜辺の葦の中の草が知られるように、私の途切れない思いもどの人も読みとる。〕

序詞と心情部の間に内容的な関係が一見見出しにくい歌であるが、本田訳では下線部のように、葦の中に生える草（知草）と詠歌主体の思いとの間に共通点を構築し、直喩関係を創作する。これまで見てきた翻訳にも多く見られる方法であり、本田訳に他にも複数件見出せるが、興味深いのは同音反復の復元である。これは二重下線を付した「reed」と「read」という類音の2語である。この二つの単語を、隣接する二行の行末に置き、平韻によって類音反復に仕立てるのである。たとえ「read」が過去形であるにしても、視覚的に類音の関係が明確である。さらに、短歌形式の和歌を多く2行や3～4行の自由詩で翻訳し、押韻を仕立てる本田は、この歌を短い5行に分けて翻訳するうえ、韻を踏むことは3行目と4行目のみであることによって、原典にも一回的である類音反復をより明確に伝えるといえよう。その他、この歌の場合は、「原文はシリクサ（草の一種）とシリ（知る）という類似する言葉との遊びに基づく」という説明もつける。2行形式に訳された歌で、同じく平韻を用いて同音類音反復を復元すると見られる例は、本田訳に他にも見出せるが、これほど明確でなく、説明もないため、原典を知らない読者にとってはこういった効果は気づきにくいと思われる。

2.10 リービによる英訳（1981年）

アメリカの日本文学者で、現在法政大学国際文化学部教授であるリービ英雄（Ian Hideo Levy）は、『万葉集』全訳を計画したようであるが、現在まで完成しているのはその第1巻（巻1～5の英訳）[20]である。たとえば鏡王女の、藤原鎌足の求愛に答えた93番歌の翻訳が注目される。

20　Levy, Ian Hideo: *Man'yōshū. A Translation of Japan's Premier Anthology of Classical Poetry.* Volume One. Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1981.

玉匣　覆乎安美　開而行者　君名者雖有　吾名之惜毛
たまくしげおほひをやすみあけていなばきみがなはあれどわがなしをしも（93）

The jewelled box is easily opened,	玉の箱は簡単に開ける、
and the night, opening into dawn,	そして夜は、夜明けに開けて、
saw you leave. What of your name	あなたが出たところを見かけた。あなたの名が
if this be known?	知られれば何があるだろうか？
My regrets are for my own.	心配しているのは自分の〔名〕である。

（Levy, 1981, p. 84）

この歌の1 ～ 3句は掛詞式（「（玉匣）開けて」・「明けて（去なば）」）の序詞であり、序詞と人事の叙述の間に音の関係のみが顕わな例（B）である。外国語に翻訳する場合、このような重ね合わせの修辞をそのまま訳出することは困難である。そのためか、リービ訳では同語反復（二重下線部）を用いて、夜が明けることを、空が開いて太陽が現れるという形容によって表す方法で重ねの技法を補っている。また、序詞部分と人事の部分は接続詞「and」でつなげ、二つの部分の順序も保っている。ディキンス訳にも見たような訳出方法であるが、掛詞式の序詞の翻訳では早い例である。

2.11 須賀による英訳（1991年）

『万葉集』の文学的で韻文形式の全英訳の中で最新のものは神田外語大学の教授であった須賀照雄による翻訳[21]である。この翻訳は全ての短歌を、原典の形式を保った5行で5-7-5-7-7の31音節の形式で翻訳し、長歌も原典の句数と同じ行数で訳出し、5-7調も多少保っている。須賀によれば、日本文化特有の事柄や表現の翻訳についても、原典に忠実な翻訳によってその特色が最もよく理解され、文化交流が実現する、という[22]。

同音類音反復式と掛詞式の序詞を持つ歌も、さまざまな工夫をして翻訳しているが、大半は、直喩の創作（原典においても譬喩関係が認められる場合は直喩としての訳出）を用いており、次の例のように同語反復を取り合わせることも多い。

河上乃　伊都藻之花乃　何時何時　来益我背子　時自異目八方
かはのへのいつものはなのいつもいつもきませわがせこときじけめやも（491）

The flowers of weeds	水草の花が
By the side of the river	川辺に
Bloom at any time,	いつも咲いている、
So at any time, my dear,	そのようにいつも、私の愛しい人よ、
Call on me whenever you like.	あなたが好きなとき訪ねて来ておくれ。

（Suga, 1991, Part I, p. 238）

吹黄刀自の歌の2句目に出てくる「いつも」は「斎つ藻」で、神聖な水草であると考えられており、3句目の「いつもいつも」とは同音であることでつながるのみで（B）、内容的な関係ははっきりしているとは

21　*The Man'yo-shu. A Complete English Translation in 5–7 Rhythm*. Part I–III., by Teruo Suga. Kanda Institute of Foreign Languages, Kanda University of International Studies, Tokyo, 1991.
22　Part I, pp. 23–24.

いえない。あるいは神聖な水草は、詠歌主体にとってどれほど恋人のことが大事であるかということをイメージ付けるとも考えられるが、最終的には読者の想像に任されているといえよう。須賀の翻訳では、「いつものはな」も「いつも」咲いているということで、内容的なつながりを明確にし、序詞部分と心情部に同じ表現を繰り返すことによって、原典の同音反復を復元する。

他には今まで見てきた方法をとる翻訳も見出され、擬人法を用いて同音類音反復の序詞と人事の叙述をつなげる例も見られるが、紙幅の都合上、これまで見られず、注目される方法である、次のような言葉遊びの創作の例を取り上げるにとどめる。

淡海路乃　鳥籠之山有　不知哉川　気乃己呂其侶波　恋乍裳将有
あふみぢのとこのやまなるいさやがはけのころごろはこひつつもあらむ（487）
In Afumi Province,　アフミの国の
In the mountain Toko,　トコの山に
There runs the “Isaya”;　「イサヤ」が走っている。
Like the river you love me,　あなたは〔その〕川のように私を愛している、
Saying, “I-say-ye,” these days.　このごろ、「君に言うよ」と言って。
(Suga, 1991, Part I, p. 238)

原典においては、序詞に見られる「不知哉川」の名前に「いさ（知らず）」ということが含まれており、掛詞で人事の部分とつながる。地名に人事の叙述と関連する語が含まれていることにより、内容的なつながりも認められる（A）。須賀は、内容的な関係はここでも直喩を表す「like」を使用して明確にするが、今回は地名の名前をそれが含んでいる意味で翻訳するのではなく、歌の内容を少し変えるものの、「いさや」に音声が類似する英語の表現である「I-say-ye」を加える。

2.12 クランストンによる英訳（1993年）

クランストン（Edwin A. Cranston）は、『日本書紀』や風土記の歌謡も含まれているアンソロジー[23]に、『万葉集』の歌も1329首翻訳した。彼の翻訳の詩形は原典の5-7調を正確に保ち、内容と修辞法の翻訳においても、原典の全てを伝達するように工夫している。それによって、この翻訳は万葉歌の英訳の中で、現在まで最も原典に近い翻訳であるといってよい[24]。

音の関係のみが顕わである序詞の歌（B）の場合も、序詞と人事の部分の内容的な関係を言葉の上では明確にしない形で同音類音反復を復元する例が見出せる。原典においては、同音類音反復または掛詞という音声のつながりが明確であるのみで、内容的なつながりは読者の想像に任されているが、大伴旅人の歌の翻訳はこの効果を伝達している。

23　*A Waka Anthology. Volume One: The Gem-Glistening Cup*. Translated, with a Commentary and Notes, by Edwin A. Cranston. Stanford University Press, Stanford, California, 1993.
24　万葉歌のクランストン訳についてはワトソン・マイケル「万葉集の英訳について」（『万葉古代学研究年報』15、97 ～ 111 頁）が詳しい。

草香江之　入江二求食　蘆鶴乃　痛多豆多頭思　友無二指天
くさかえのいりえにあさるあしたづのあなたづたづしともなしにして（575）

On Kusaka Bay	クサカ湾に、
Down by the inlet the reed cranes	河口の辺りで葦鶴が
Are scratching for food:	餌を探っている:
Bobbing, craning, uncertain,	心配して、首を伸ばして、不安にして、
So faltering without my friend.	私の友がいなくて、ひどく躊躇っているのだ。

（Cranston, 1993, p. 564）

草加江にあさる鶴の景物は、暗に詠歌主体の寂しさと心もとなさを思わせるが、序詞と人事を明確につなげるのは「たづ」という音の繰り返しのみである。クランストン訳では、目標言語の同音異義表現を活用し、名詞の「crane」（鶴）と動詞の「crane」（首を伸ばす）を用いて、同音反復を復元しつつ、詠歌主体の心情も正確に伝えている。このような方法は「pine」の場合に他の翻訳にも見られるが、他の表現に関しては極めて珍しい。さらに、多く直喩を表す「as」または「like」、あるいは並列を表す「and」を用いてつなげる翻訳に対して、クランストンは序詞部分の最後に「:」を付けることによって、二つの内容を明確に分ける。後者は次の門部王の歌の翻訳でも同様である。

飫宇能海之　塩干乃鹹之　片念尓　思哉将去　道之永手呼
おうのうみのしほひのかたのかたもひにおもひやゆかむみちのながてを（536）

Along the sea of Ou	オウの海のところに、
At low tide the beach lies bare:	干潮のとき浜辺が空っぽだ。
Barely enduring	長続きしそうにもない、
This one-sided love, shall I	この片思い、私は
Go yearning my long way?	恋い慕いながら長旅をするべきなのか。

（Cranston, 1993, p. 382）

『万葉集』の左注によると、この歌は門部王が出雲守であったときに詠まれたが、序詞に見られる飫宇の海は出雲国も海岸であるため、この点では詠者の境遇とつながりがある。しかし、景物と人事の内容的なつながりは明確にされておらず、「かた」という同音のみが顕わである（B）。クランストンの英訳では、類似する音の英語の単語を選択することによって、類音反復を構成する。しかも、序詞部分と人事の部分の境目に、隣接する2語が類音反復になっているため、より明確であるといえる。

2.13 アーノルト・カナモリによるドイツ語訳（1999年）

クランストン訳の数年後、『万葉集』歌のドイツ語への新たな抄訳も刊行された。それは、日本古典文法のドイツ語の教材シリーズの一冊で、『万葉集』の193首の和歌を選出したものである[25]。アーノルト・カナモリ（Horst Arnold-Kanamori）が古典文法の説明の基となる材料として『万葉集』から193首の歌を選出し、翻訳した。歌の翻訳は、短歌の場合は改行をしない形式であるが、「/」で5つの部分に分けられている。長歌の場合は改行している。著者のまえがきには、翻訳は新しく、先行する外国語訳を用いず、西洋の詩歌の観念にもとらわれないもので、読者に原典の新しい解釈の余地を残す、と翻訳態度について

25　Horst Arnold-Kanamori: *Manyôshû. Eine Auswahl*〔万葉集要解〕Klassisches Japanisch, 3, Satyr, 1999.

述べられている。

同音類音反復式の序詞が用いられている歌1首の該当部分の翻訳は以下のとおりである。

> 玉手次　畝火之山乃　橿原乃　日知之御世従　阿礼座師　神之書　樛木乃　弥継嗣尓　天下所知食之乎……
> たまたすき　うねびのやまの　かしはらの　ひじりのみよゆ　あれましし　かみのことごと　つがのきの　いやつぎつぎに　あめのした　しらしめししを……（29）
> Obwohl alle seit der Zeit
> da [Jinmu-]Tennō
> die Kashi-Ebene am Unebi-Berg
> regierte
> geborenen Tennōs
> nacheinander die Welt
> im Lande Yamato
> regierten
> （以下略）（Arnold-Kanamori, 1999, S. 17–18）
> 〔[ジンム]テンノウがウネビ山のカシ原を治めていたときから、次々と世に生まれてきたテンノウたちがヤマトの国を治めていたが……〕

下線を付した「樛木乃　弥継嗣尓（つがのきの　いやつぎつぎに）」では、「樛木乃」に「継嗣尓」が類音で続き、前者は後者にかかる序詞であると思われる。『万葉集』には他の歌にも、「つぎつぎ」にかかる「つがのきの」という表現が見られ、さらに5字からなることにより、むしろ枕詞的な、固定した修辞であるともいえる。しかし、「つぎつぎに」との内容的なつながりは顕わでない（B）とはいえ、栂の木が伸びていく、あるいは茂っていくことが暗に継続を連想させるということは考えられよう。アーノルト・カナモリは「樛木乃」がかかっているいる「弥継嗣尓」という部分を翻訳するのみであり、序詞（あるいは枕詞）を省略する。ちなみに、彼は、上記の引用部分にも見られる「玉手次（たまだすき）」という枕詞は訳出しておらず、他の歌でも枕詞を訳出していない。

2.14 ホートン（2012年）とダシー（2014年）による英訳

序詞を持つ歌も多く翻訳されている近時の英訳として、マック・ホートン（H. Mack Horton）の、遣新羅使を中心に8世紀の日本の海外への渡航をテーマとした研究書[26]の中の万葉歌の翻訳があげられる。論考の中では引用する和歌が韻文形式で翻訳されている。

序詞の翻訳方法として、今まで見てきた翻訳方法も多く用いるが、たとえば次のような、隠喩の創作も見られる。

26　Horton, H. Mack: *Traversing the Frontier. The Man'yōshū Account of a Japanese Mission to Silla in 736–737*. Harvard University Press, Cambridge and London, 2012.

多都我奈伎　安之倍乎左之弖　等妣和多類　安奈多頭多頭志　比等里佐奴礼婆
たづがなきあしへをさしてとびわたるあなたづたづしひとりさぬれば（3626）

Cranes cry out	鶴が叫び、
and fly forlornly	寂しく飛ぶ、
toward the rushes.	葦辺へ。
How forsaken one feels,	人はなんて寂しく思うのだ、
lying alone!	一人で寝ていると！

（Horton, 2012, pp. 20–21）

丹比大夫の挽歌で序詞は鳴いて葦辺の方に飛んでいく鶴の情景であるが、人事の叙述との内容的なつながりは明確ではない（B）。ホートンは下線を付した「cry out」と「forlornly」という、人間の行為と感情を表す語を加えて、擬人法によって和歌の後半に詠まれている哀傷の気持ちを思わせる。一方、序詞部分と心情部を文法的にはつなげず、原典のまま、それぞれをひとつの文として訳出するため、直喩ではなく、隠喩となると思われる。また、二重下線を付した、序詞と心情部にも見られる、類似する語の中の「for-」によって、同音反復も復元されている。

2014年、トークィル・ダシー（Torquil Duthie）も『万葉集』関連の研究書[27]を著わし、その中でも、引用した和歌を韻文形式で翻訳する。同音類音反復式と掛詞式の序詞を持つ歌も数首含まれているが、今まで見てきた翻訳方法をとっており、紙幅の都合上、今回は省く。

2.15 ヴィットカンプによるドイツ語訳（2014年）

『万葉集』歌のドイツ語訳の中で最新のものは、ロベルト・ヴィットカンプ（Robert F. Wittkamp）の翻訳である。ヴィットカンプは上代文学研究者で、ケルン大学で博士号を取得し、現在関西大学文学部ドイツ学専攻の教授である。『万葉集』歌の翻訳は、万葉歌の中の風景描写と記憶、また万葉仮名の字の用い方とその意味、字による言語遊戯をテーマとした2冊の膨大な研究書[28]の中に示されている。翻訳された歌の数は合計292首で、現在までで最多である。ヴィットカンプは自身の論に関して取り上げた歌を翻訳しているわけであるが、行数と音節数は原典の句数と字数に一致することを心掛けており、その翻訳は韻文として鑑賞できるものである。

同音類音反復式と掛詞式の序詞を持つ歌も多く翻訳しているが、ここではその中から2首をあげる。

27　Duthie, Torquil: *Man'yōshū and the Imperial Imagination in Early Japan*. Brill, Leiden, Boston, 2014. ダシー訳万葉歌について、ワトソンが注 24 前掲論文に紹介する。

28　Wittkamp, Robert F.: *Altjapanische Erinnerungsdichtung : Landschaft, Schrift und kulturelles Gedächtnis im Man'yōshū（萬葉集）*〔古代日本の記憶詩歌―萬葉集における風景、表記と文化的記憶―〕. *Prolegomenon : Landschaft im Werden der Waka-Dichtung*〔序説―和歌文学における風景の生成―〕Beiträge zur kulturwissenschaftlichen Süd- und Ostasienforschung, herausgegeben von Franziska Ehmcke und Andreas Niehaus, Bd. 5, 1., 2014、および *Schriftspiele und Erinnerungsdichtung*〔表記遊戯と記憶詩歌〕Beiträge zur kulturwissenschaftlichen Süd- und Ostasienforschung, herausgegeben von Franziska Ehmcke und Andreas Niehaus, Bd. 5, 2., 2014.

潮葦　交在草　知草　人皆知　吾裏念
みなとあしにまじれるくさのしりくさのひとみなしりぬわがしたもひは（2468）

Im Schilf an der Mündung	水門の葦の中に
Wildwachsene Gräser, dort	野生の草、そこに
Die Wissen-Gräser	知り草
Alle Leute wissen es	どの人も知っている
Meine heimliche Sehnsucht	私の隠された物思いを。

（Wittkamp, 2014, I, S. 139）

プフィッツマイヤーのドイツ語訳と本田の英訳に関して取り上げた491番歌に出てくる「いつもの花」ー「いつもいつも」という同音反復と同様、序詞の景物の名前に具体的に心情部の内容と関連する言葉、人事と直接関連する事柄が含まれている（A）。ヴィットカンプもプフィッツマイヤーと同じく、「しりくさ」をそのまま直訳することによって序詞と心情部とのつながりを明確にしており、原典に近い翻訳となっている。

また、翻訳の3行目が名詞（「Wissen-Gräser」）で終わり、その直後、4行目は心情部の翻訳に続くことで、二つの部分を文法的にはつなげないことも、原典を正確に伝えている。

吾屋戸乃　君松樹尓　零雪之　行者不去　待西将待
わがやどのきみまつのきにふるゆきのゆきにはゆかじまちにしまたむ（1041）

In meinem Garten	私の庭の
Auf die Kiefer, die Baum, der auf dich wartet,	君を待つ木である松に
Fällt Schnee, aber weggehen	雪が降るが、行くことが
Wie der Schnee, woll'n wir wohl kaum	雪のように、なかなかしようとせず
Und warten immer weiter	いつも待ち続けている。

（Wittkamp, 2014, I, S. 171）

原典の下線部は掛詞式、波線部は同音反復式の序詞である。前者は、詠歌主体の庭にある松をいうことから、詠歌主体の境遇との関連が認められる（A）が、後者の場合は、たとえば雪が消えていくことと詠歌主体が移動することとの間に共通点が想定できるにしても、内容的なつながりが明確であるとはいえず（B）、受容者の想像に任されている。ドイツ語では松の木に相当する言葉から待つことが連想できないため、「君を待つ木である松」というように、説明的な補足を翻訳に入れて訳出されている。また、歌についての説明に掛詞に触れる。同音反復式の序詞は破線で示した、「〜のように」という意味の「wie」を用いて、直喩で訳出するが、内容的なつながりとして、消えていくという、雪の性質を活用する。また、同音の繰り返しは「Schnee（雪）」という語の反復によって反映させると思われる。

2.16 マクミランによる英訳（2019年）

『万葉集』歌の最新の英訳は2019年に刊行されたピーター・マクミラン（Peter MacMillan）の『英語で味わう万葉集』（文藝春秋、2019）で、96首の万葉歌を翻訳する。音の関係のみが顕わである序詞の歌も2首の翻訳があり、ここでは東歌である3373番歌を取り上げる。

多麻河泊尓　左良須弖豆久利　佐良左良尓　奈仁曽許能児乃　己許太可奈之伎
たまがはにさらすてづくりさらさらになにぞこのこのここだかなしき（3373）

The pretty girl rinses cloth	美しい娘が衣を濯いでいる、
in the Tama River	タマ川に、
--more and more--	―もっと、もっと―
why does she seem	なぜ彼女が
so sweet and cute?（197頁）	あんなに愛しく、かわいく見えるのか？

この歌では「曝す」と「さらにさらに」という意味の「さらさらに」という言葉の類音反復で、序詞と人事の部分の音声上のつながりができる。一方、内容的な関係は顕わでなく（B）、多摩川に衣を曝しているのは、詠歌主体が思いを寄せている女性であることなどが想定できる。マクミラン訳では、3行目の「―」の間に入れた「more and more」という表現が、上の序詞部分と下の人事の部分にもかかるというように、文の構成の工夫によって内容的なつながりを伝える。これについては、当該歌に関する注に翻訳者自身が説明する。また、翻訳の中でも、序詞と心情部の連結部分となる3行目を「―」によって示し、構造が明確であるといえる。

3. 結び

『万葉集』の150年ほどの翻訳史を概観して、初期の翻訳では、序詞の人事とのつながりに関しては英詩、およびドイツ詩の特徴に合わせられる傾向が見られるにしても、音声のつながりの反映はすでに初期の翻訳に見出せる。もっとも、チェンバレンとディキンスの翻訳にも見られるとおり、内容的なつながりは、原典において明確でない場合も、翻訳では直喩や並列によって明確にされている。いうまでもなく、プフィッツマイヤーやチェンバレンやディキンスの時代には、翻訳者が参照できた文献も限られており、序詞に関する理解に限界があった。序詞と人事の叙述との間に内容的なつながりがないというチェンバレンの指摘もこれに起因すると思われ、著名な和歌研究者によって作成された日本学術振興会訳では、この修辞法が正しく理解され、直喩や接続詞などで簡潔に人事の叙述につなげる方法以外の訳し方も見出せる。また、序詞は過度に形式的で外面的であるというフローレンツとロレンツェンの指摘は、景物描写は独立性が低く、人間の感情などの人事を表す道具にすぎないという西洋の詩歌観を共通理解としているドイツ語圏や英語圏の人々にとって、人事に関する内容と直接的なつながりが音声によるもののみであるという和歌の修辞法は受け入れがたかったことを物語っていよう。

1980年までの40年間は、序歌の英訳は日本人によるものが刊行されたのみであり、ドイツ語訳は出ていないが、その間、西洋においても序詞の特質に関する理解が深まり、1.10.に見たリービ訳のような翻訳が作成されるようになった。しかし、大きな転換点となったのはクランストン訳の出現であった。本田は人事の内容と直接関わりのない（あるいはそうであると判断した）序詞を翻訳しない方針であり、須賀は『万葉集』と日本古典和歌の特徴を正確に伝達することを心掛けていた一方、直喩としての翻訳、および直喩の創作によって序詞と人事の関係を示している例が圧倒的に多い。それに対して、クランストンは英語圏の翻訳者として、英詩の特徴などにとらわれず、あえて和歌の修辞法や表現方法の特徴をありのまま英語で伝えることを目指していた。また、クランストンの次に取り上げた英訳であるホートン訳にも同じ傾向が見られる。原典の特徴とその背景をなす文化の正確な伝達を目指し、原文を

忠実に翻訳するという傾向が1960年代から英語圏において主流となった[29]が、人事の叙述とは音のつながりのみが顕わである序詞の本来の特徴を伝達する英訳として、クランストンとホートンの翻訳が最も原典に近い。

また、英訳とドイツ語訳を比較してみると、むろん、類似する翻訳方法と傾向が多く見られるが、若干の相違点も見出せる。そのひとつは、3626番歌のフローレンツ訳や2468番歌のヴィットカンプ訳にも見た、序詞と人事の叙述を文法的に、また内容的につなげない方法が、ドイツ語訳に比較的多いことである。英訳ではクランストン訳とホートン訳の数例を除いて、直喩としての訳出と直喩の創作をはじめ、内容的、または文法的な結びつきが見られるのに対して、ドイツ語訳では、序詞と人事の叙述をつなげずに並べるという例が目立つ。景物を用いる英詩では、直喩や擬人法などによって人事の叙述とつなげられており、形式上と内容上も密接な関係にある例が多いものの、ドイツ詩では、形式的に独立している景物描写も多く見られ、このような詩の場合、隠喩的な傾向が強い。このような、各国の詩の特質が序詞のそれぞれの言語圏における翻訳傾向にも影響を与えたと考えられる。また、ドイツ語訳では同音反復、または同語反復を用いる例が少なく、あったとしても「伊都藻之花（いつものはな）」（491）や「知草（しりくさ）」（2468）などのように、序詞の景物に人事の内容と直接関わる言葉が含まれている例に集中する。これは、近接する同語反復を避けるという、文章に関する西洋の美意識と関係があるのではなかろうか。

なお、『古今集』以降の和歌における同音類音反復式と掛詞式の序詞の翻訳と同様、『万葉集』歌の英訳とドイツ語訳の場合にも、時代と翻訳者を問わず、直喩としての訳出または直喩の創作の例がもっとも多い。これは、直喩が英詩にもっとも広く使用されていることの影響であると思われる。もっとも、英詩とドイツ詩にも様々な技法があり、少数ではあるが、人事との内容的な関係が顕わでない序詞に類似する例も散見される[30]。これを考慮すると、クランストンやホートンによる序歌の翻訳に見てきた表現方法は、目標言語の韻文としても自然であるといえよう。

さらに、万葉歌に見た例を、平安時代以降の和歌の同音類音反復式と掛詞式の序詞の翻訳と比較すると、傾向はそれほど変わらない[31]。要するに、『古今集』や『新古今集』や『百人一首』歌の場合も、早期の翻訳から直喩としての訳出、または直喩の創作が圧倒的に多いが、英訳とドイツ語訳においても、その割合が同じであり、序詞と人事の叙述とをつなげないという方法をとる例は比較的少ない。もっとも、平安時代以降の和歌では景物に関するイメージの固定化とその共通理解としての定着、および縁語表現の発展により、序詞と人事の叙述との関連にも相違が見られ、暗喩的な関係や縁語によるつながりが多くなる。このような相違は必ずしも全て翻訳に反映できるわけではないが、今後の翻訳において、同じ修辞法の性質の時代による変遷に着目することもひとつの課題となると思われる。

フィットレル・アーロン　FITTLER, Áron
早稲田大学高等研究所

29　Horton, H. Mack: *Making it Old: Premodern Japanese Poetry in English Translation. In.: Asia Pacific Translation and Intercultural Studies*. 2018, Vol. 5, No. 2, p. 168
(https://www.hmackhorton.com/uploads/1/1/9/8/119849044/horton_making_it_old_5_2019_new.pdf　最終閲覧2021年9月30日）日本の古典詩歌（主に和歌と俳諧）の英訳史についてはホートンのこの論文が詳しい。
30　注4の拙稿に、英詩としてはサリー伯ヘンリー・ハワード（Henry Howard Earl of Surrey, 1517–1547）の「ある恋する人の落ち着かない様子の描写」（*Description of the Restless State of a Lover*）というソングを、ドイツ詩としてはウルリッヒ・フォン・リヒテンシュタイン（Ulrich von Lichtenstein, 1200ごろ～1275）の作品をあげた。
31　注4の拙稿を参照。

多国籍の学生と芸人・教師による漫才ワークショップ
―「メディア日本語：メディアとメッセージ」授業における試み―

Improvisation "Manzai Workshop" by Multinational Students, Entertainers and Teachers: Attempt to Create a Unique Message in "Media Japanese" Class

鈴木　美加・島岡　学

This paper provides an overview of the "Manzai Workshop" featuring improvisational creative activities conducted in an online class entitled "Media Japanese: Media and Messages" in the fall semester of 2020, along with an analysis of the learning acquisition on the part of the participants. This workshop was situated to provide unique learning opportunities befitting the global transition to a knowledge-based society in this century and in response to the shift to online education during the COVID-19 crisis.

Japanese nationals and advanced-Japanese-level international students taking the "Media and Message" class, got involved in something called the “Manzai Workshop” held as part of the course. Students worked in pairs and learned how to create manzai, two-person stand-up comedy, routines in Japanese, along with multiple other languages. The workshop was conducted by both a professional manzai entertainer, as guest lecturer, and the instructor in charge of the class. Three collaborating guest entertainers assisted. An analysis of student comments about the workshop revealed that (1) the workshop changed their attitude toward manzai, as just "watching" is different than "creating and sharing" vis-à-vis learner satisfaction level, and (2) students experienced the joy of original multilingual manzai, which could be associated with the benefits of creative learning.

In conclusion, while the “Manzai Workshop” was a challenge online, it turned out to be a positive, creative opportunity for students. They were able to broaden their horizons and learn, experientially, about manzai, a cultural staple of Japanese humor.

【キーワード】漫才ワークショップ、漫才作り、多言語漫才、「メディア日本語：メディアとメッセージ」授業

manzai workshop, producing a manzai skit, multilingual manzai, "Media Japanese: Media and Messages" class

1. はじめに

本稿は2020年度秋学期の東京外国語大学国際日本学部専門日本語科目「メディア日本語２：メディアとメッセージ」授業（以下、「メディアとメッセージ」授業）」において実施した、即興的な創作活動を行う「漫才ワークショップ」の概要を示し、検討を行うものである。COVID-19の状況下のオンライン授業環境で、学生が情報の発信者としてメッセージを創り、共有する場として「漫才ワークショップ」を1コマ90分の授業で実施した。企画にあたり、授業担当教員（第一著者）は漫才創作とその楽しさの経験が、その後の受講学生の物事に向き合う姿勢や主体的な学びに活かされると予想し、ワークショップ実施可能性を検討した。一方、漫才のプロであるゲスト講師（第二著者）は、プロの芸人であり、漫才ワーク

ショップのノウハウと技術を有し、両者でワークショップを進めた[1]。当日は、受講学生とゲスト講師、授業担当教員、さらに日本語および他言語による漫才のできるゲスト（芸人）３名とのコラボレーションで、オンライン漫才ワークショップが実現した[2]。

以下に、まず、知識基盤社会と言われる現在の社会において求められる能力や学びについて述べ、次に、漫才の教育への活用による学びについて先行事例から見る。そのうえで、授業科目「メディア日本語」の概要とワークショップの背景について述べ、今回実践した漫才ワークショップの概要を示す。さらに、今回の漫才ワークショップにより得られた学びについて、受講学生による創作漫才の例と授業コメントをもとに検討する。

2. 21世紀における学びと漫才

2-1. 21世紀に求められる学びと本学学部科目

21世紀における社会の大きな潮流の1つとして、中島（2018）は、「境界線の消滅（Inter-/Cross/Anti-diciplinary」を挙げ、学びは「より総合的に、より創造的に、より実践的に」変化していくとする。20世紀には、学校に通い、卒業後に次の段階の学校、大学、さらに就職というように人生の流れが一方向的であったのとは大きく異なり、21世紀においては、「より尖った垂直軸を持ちつつ、ダイナミックに統合、自由に創造をしていく」ことに価値が置かれる（中島 2018）。学ぶ主体が独自の視点を持ち、学問領域や地域、組織などの枠を超えて、他者と連携することによって、「未来を創」り、「働」き、「生き」ていくこととなる。これらは、OECDの「OECD Future of Education and Skills 2030（Education 2030）」（OECD 2018、OECD 2020）[3]が示す「新たな価値を創造する力」、ATC21S（21世紀型スキルの学びと評価）プロジェクトの提案した「21世紀型スキル」（Griffin他 2012）の10のスキル、特に「創造性とイノベーション」、「コミュニケーション」などと関連づけて理解できる。自らの個性を育みながら、他者と相互作用をし、協働して問題や課題に創造的に取り組むことが期待されると言えよう。

2019年度に本学の組織再編により新設された国際日本学部では、「高度な言語運用能力」（日本語・英語等）や、「主体的に考え、行動し、発信する力」の涵養が重視されている（東京外国語大学 2021）。学部１～２年生は、専門の基礎となる導入科目（例「日本社会入門」「日本語学入門」）、協働実践科目（例「多文化協働科目」）を履修しながら、本授業を含む言語科目や教養科目を履修する。また、学部３～４年生は専門の概論科目や専門講義、演習などで専門領域について学び、合わせて言語科目（日本語、英語等）も履修する。言語科目では、日本語科目と英語科目が提供され、日本語が母語あるいは上級レベルの学生向けの日本語科目として、「メディア日本語」「クリティカル・リーディング」「アカデミック・ライティング」「キャリア日本語」科目が提供されている。

2-2. 教育への漫才の活用

「笑い」を教育に活用する事例報告がこれまでにもなされているが、漫才を教育に活用する実践はまだ少ない。井藤・田畑（2017）は、ある小学校の国語科の授業の取り組みとしての「漫才づくり」とその効果を示している。子ども同士が漫才を作り、地域での漫才大会のイベント開催により、子ども達の「コミュニケーション力」の向上、子ども同士の関係の円滑化、授業内の自発的な発言の増加、クラスの雰囲

1　本稿の執筆にあたり、「漫才指導」の部分を第二著者が、そのほかの部分を第一著者が担当した。
2　当日は、TA（ティーチングアシスタント）１名もオンライン授業運営サポート担当として入り、通信環境の悪い学生への対応を行った。
3　DeSeCo プロジェクトによって示された「キー・コンピテンシー」（Rychen 他 2003）から大きくバージョンアップしたものである。

気の活性化が認められたと述べる。関口・ドリュー（2020）では留学生に対する日本語のスピーチ授業として漫才指導を行い、普段は「まじめ」で「静か」な学生たちが人を笑わせる努力をした結果、「伝達する力」「表現する力」「オーバーな非言語表現」「会話の間」など座学や研究発表では表現できないコミュニケーション能力を身につけることができたと報告されている。

両者に示されているように、漫才では、相手（相方）と観客双方に配慮した言語、非言語のコミュニケーションが求められ、この配慮や対応が、前述の能力の向上に結び付いていると考えられる。さらには、これらの実践によるコミュニケーション能力の伸びや、相方（相手）との漫才作り、観客と「笑い」を共有する経験を通し、学ぶ主体である子どもや学生の内面、例えば、自らへの信頼感や自信、創造性にも良い影響を起こしている可能性も推察される。

3. 2020年度秋学期「メディア日本語」の概要

3-1. 前提：オンライン授業実施と履修学生

2020年度初め、新型コロナ感染症の拡大により、日本を含む世界各国の多くの学校において対面授業が実施できない状況であった。学びの意義や必要性が改めて問われると同時に、各学校教育段階の関係者にとって、児童・生徒・学生の学びを保障することが喫緊の課題となった。2020年度の本学秋学期（10 ～ 1 月）は、多くの留学生が来日できず、国際日本学部の授業は、本授業も含め、全科目オンライン実施で実施された[4]。

3-2.「メディアとメッセージ」の目標および内容構成

本節では、「メディアとメッセージ」授業[5]の概要を示す。本授業は、①さまざまなメディアや伝達されるメッセージの特性について、ニュースや記事、SNSメッセージ、映画などの実例の確認をしながら検討すること、②伝達されるメッセージ内容と方法（メディア）について、その構成や機能を分析すること、という二点に焦点をおき、実施している。

科目名称：「メディア日本語２」
授業題目：「メディアとメッセージ」
授業目標：伝えたい内容（メッセージ）が複数のメディア（手段）によってどう伝えられるのかを分析することができる。さらにそれらを日本とそれ以外の場合に分けて示すことができる[6]
受講学生：国際日本学部 1 ～ 4 年生[7]
（日本語母語学生29、非母語学生12名：東アジア 8 名、東南アジア 3 名、中東 1 名）
実施形態：オンラインZoom授業（2020年度秋学期には、通信環境の問題でオンライン同期型授業の接続に支障が生じるケースが、ほぼ毎回数名見られた。）

4　全学部共通の言語科目（GLIP 英語）については対面授業によるものもあった。
5　正式科目名称は「メディア日本語２」である。春学期に「メディア日本語１」があり、春開講の科目に「1」、秋開講の科目に「２」が付されている。
6　本科目の成績評価は、授業内活動・課題 40%、アクティブラーニング課題 20%、発表 20%、期末レポート 20%であった。（授業内活動の評価は、そのパフォーマンスの巧拙ではなく、積極的なかかわりや思考の深さ、授業参加により何を学び、思考したかに焦点を当てた。）
7　2020 年度の主な受講学生は学部 1 ～ 2 年生で、そのほかに言語文化学部・言語社会学部の日本課程に所属する 3 ～ 4 年生の学生数名が、必修・選択科目の代替科目として履修した。授業定員を当初 25 名としていたが、オンライン授業に切り替わり、履修学生の希望に配慮し、41 名の履修登録となった。履修上、個別の対応を要したり、通信環境の問題が生じたりする者もおり、毎回のオンライン Zoom 授業への出席は平均 36.2 名であった。

受講学生は日本語母語学生、日本語非母語学生ともに、日本語および英語の運用能力はCEFR B2レベル程度またはそれ以上で、日・英両言語ともにコミュニケーションが円滑に遂行できる。また、本授業開始時には、すでに１学期間以上、国際日本学部の必修科目や言語科目、専門入門科目を履修しており、大学のオンライン・システムの操作スキルと基本的なプレゼンテーション・スキルとをともに獲得していた[8]。

学期全体の授業は、第１～２回に現在のメディアの状況について検討した後に、第３～７回ニュースの分析[9]、第８～９回SNSメッセージの分析、第10～11回映画視聴・分析、第12回SNSメッセージあるいは映画の分析のまとめ、第13回漫才ワークショップでの漫才作り、第14～15回自ら伝えたいメッセージをどのような形式（音声、画像、映像等）で伝えるかに関する構想の発表・共有、と進めた。漫才ワークショップ受講時には、すでに、さまざまな手段によって伝達されるメッセージを分析する作業を行っており、メッセージの中に含まれる言葉や記号の機能、メッセージの一連の流れの特徴を分析する視点を得ていた。また、ほぼ毎回３名ほどのメンバーによるグループワークで、各メンバー自身の分析内容や考えを共有し、コメントをし合う作業にも慣れていた。「メディアとメッセージ」授業の各回の目標・内容を表１に示す。

表１「メディアとメッセージ」授業の各回の内容[10]

回	主なテーマ	授業日
1	・授業オリエンテーション	10月6日
2	・多様なメディア（マスメディア、SNSを含む）の特性を考える	10月13日
3	・ニュースを考える1（テレビ、動画サイト） ・ニュースを考える2（新聞記事）	10月20日
4		10月27日
5		11月3日
6		アクティブラーニング1 （自律型学習）
7		11月10日
8	・SNSでのメッセージのやりとりを考える：やりとり例の特性抽出	11月17日
9		12月1日
10	・映画を考える：ことばや映像が発するメッセージの検討	12月8日
11		12月15日
12	・漫才を考える：漫才の形式の理解と漫才づくり／分析	12月22日
13	・SNSまたは映画によるメッセージの分析	アクティブラーニング2 （自律型学習）
14	・自らのメッセージ構想を発表、共有する	1月5日
15		1月12日

3-3.「漫才ワークショップ」の位置づけと役割（授業全体の中での機能）

本授業では、伝達されるメッセージの分析をすることに加え、現在のメディア状況を踏まえ、メッセージを創る活動も行う。この活動により、授業内で、自分があるメッセージの発信者として、どう他者とかかわっていくか、いきたいかを、メッセージやメディアの特性を踏まえ、考える機会としている。年度当初は、このような活動として、グループ単位（３～４名）でのごく短い動画撮影とミニ上映会を予定していた。これは、本授業のテキストとした長谷川・村田（2018）の「映画１分間一発勝負」（p.147）と呼ぶワークショップである。グループ内で役割を決め、１分動画を撮影した後で、クラス全体で上映会

8　ほとんどの者は、学部必修科目「日本語学入門」、「日本史入門」、「多文化コラボレーション１」を履修済みであった。
9　ここでの「分析」とは、ある情報について、何らかの尺度や理論をもとに、その内容や要素を分類したり特徴づけをしたりすることを主に指す。専門領域の研究者が行う「分析」ではなく、専門に入る前の入門的な「分析」を意味する。
10　本講義で使用したテキストは、長谷川・村田（2018）『大学生のためのメディアリテラシー・トレーニングテキスト』である。テキスト内容、テキスト付属トレーニングシートあるいは教師作成課題によって、メディアにより伝達されるメッセージ分析を課した。

をするというもので、即興の映像制作とそれを見る面白さを、受講学生自身が体験する。映像に意味がなくても、その映像そのものと、それを見る側の共鳴が起こり、笑いが起きる。時間的制約の中での映像制作、映像の持つ「動き」の面白さへの気づき、が可能になるワークショップで、学生にとってはグループメンバーと協力して、映像を「とにかく」即興で作ってみること、さらに、それをクラス全体で視聴、共有して楽しむこと、の経験ができる。映像制作には、即興性と行動力、協調性などが、クラス全体での視聴・共有には、クラスメンバーとの「一緒に楽しむ」場の醸成への意識や行動が関与していると考えられる。

2020年度秋学期の学部授業すべてがオンライン授業となり、かつ、来日できない学生も多いことから、学期中の「映画１分間一発勝負」ワークショップの実施は現実的ではなかった。第一著者は、授業で学生主体のメッセージ作りと共有ができる場を作りたいと構想を練る中で、その時期に「漫才で覚える日本語」の授業を日本語学校や大学などの機関で実施すると同時に、日本語以外の言語による漫才も行っている第二著者と出会い、オンライン（Zoom）形式の本授業に第二著者を授業内講師（ゲスト講師）として招き、漫才ワークショップを開催することとした。当初予定の「映画１分間一本勝負」はスマホあるいはビデオカメラといったメディアの活用によるメッセージ制作と共有だったが、今回のオンライン授業での漫才ワークショップは、授業そのものがZoomによるオンライン形式であり、メディアによる仮想空間である授業の場における漫才作りとクラスでの共有となる。対面授業とは異なる点は多いが、メッセージとしての漫才のスクリプト（ネタ）を作り、演じ、クラスで共有する場を設定することにより、メッセージやメディアについて考え、創作する、また、味わう経験となると予想した。また、一連の活動は、即興性や行動力、協調性を育てるきっかけになるだろうと判断した。一方で、漫才にこれまでにあまり親しんでこなかった学生もおり、漫才作りは希望しない学生の存在も予想されたため、各自の希望で、当日漫才作りの代わりに、漫才の分析をするという選択肢も示した。分析を選択した場合は、漫才に関する資料あるいは論文（日高2018）、教育実践（関口・ドリュー 2020）に目を通し、漫才の構成や内容についての分析を行うこととした。

3-4. 漫才指導：漫才とは？＋ネタの作り方

「漫才」とは、ボケという滑稽なことを言う人とお客さんの視点に立ちストーリーを展開するツッコミの会話で笑いを生み出す話芸である。ボケとツッコミの自然な会話で笑いを生み出す（俗称：しゃべくり）ものである。漫才をする二人の姿を映さずに、会話の音声のみを聞いてもらい、笑わせる「ラジオ漫才」もある。学校教育などで漫才を取り入れた活動は、2020年以前にも実施・報告されていた（井藤・田畑2017、関口・ドリュー 2020など）。ここ二年ほどの間に国内外の大学や公的機関等でのワークショップが、第二著者の関わるものを中心に数多く行われるようになり、広がりを見せている。

ここで、第二著者が漫才ワークショップで指導する際の手順を紹介する。ワークショップには大きく４つのプロセスがあり、①コンビ名決めと挨拶練習、②ネタ紹介・解説、③ネタ作り、④漫才発表、となる。

①では、二人一組に分かれてコンビを組み、コンビを組んだら二人の特徴を組み合わせたコンビ名を決める。コンビ名が決まったら、「ど～も～」で始まる挨拶の練習をするのがスタンダードなパターンである。

例：アメリカ人(A)とベトナム人(V)の留学生がコンビを組んだ場合

A, V：「ど～も～」
A：「アメリカ人のジョンです」
V：「ベトナム人のグエンです」
A：「コンビ名は？」
V：「グッドモーニングベトナムです」
A, V：「宜しくお願いします。」

クラス全体で、全員分のコンビ名の紹介を終えてから、簡単な漫才を作成する。日本語非母語学生同士、あるいは日本語母語学生と日本語非母語学生が簡単な漫才を作成する場合、日本語非母語学生が日本語を勉強していて間違ってしまった日本語を漫才のネタにすると良い。

○よくある間違い例
・囚人と主人を言い間違える
・顔の鼻(はな)を穴(あな)と言い間違える
・掃除の「掃く」と「吐く」を聞き間違える
・メキシコ人を間違えてメキツコ人と書いてしまう。

ワークショップでの漫才作りのデモとして、よくある言い間違いをネタにした漫才の例を提示する。短くわかりやすいやりとりを示すのがコツである。

例 1
ボケ：日本では高いビルを飲みますよね？
ツッコミ：それビルじゃなくてビールでしょ。もういいよ。
　　どうもありがとうございました。

例 2
ツッコミ：ごめん、今からごはんを食べるので箸を取って。
ボケ：え？　新橋、丸子橋、それとも池尻大橋？
ツッコミ：ブリッジの橋じゃなくてチョップスティックの箸、
　　もういいよ。どうもありがとうございました。

例 3
ボケ：とても美しいイビキですね。
ツッコミ：それイビキじゃなくてヒビキでしょ。
　　もういいよ。どうもありがとうございました。

例 4
ボケ：ごめんなさい。今、ちょっと急いでいます。
ツッコミ：どうしたんですか？
ボケ：この後、猥褻な会議があります。
ツッコミ：それ、猥褻じゃなくて、大切でしょ。
　　もういいよ。どうもありがとうございました。

ネタオチと言って漫才の最後は関東だと「もういいよ。どうもありがとうございました。」で漫才は終わる。関西だと「もうええわ。どうもありがとうございました。」で終わる。台本も、自然な二人の会話が前提なので台本も書き言葉ではなく口語で書く。

3-5.「漫才ワークショップ」の目標および授業の流れ

本節では、2020年12月23日の「メディアとメッセージ」授業で実施した「漫才ワークショップ」について述べる。

○ワークショップ(授業)の目標
・漫才ワークショップを通して、漫才を体験し、その面白さを感じることができる。
・ワークショップをきっかけに、メッセージを伝える方法としての漫才について、考えてみることができる。

学ぶ側が心理的な安心感を保つ形でワークショップに参加することを前提とし、授業では受講学生が自ら、①短い漫才を作り、演じる、あるいは、②漫才の一部分を分析する、のいずれかを選ぶ形式とした。

受講学生がペアで漫才をつくる際、その漫才は日本語でも英語あるいはほかの言語でも可能とし、当日、講師からはチャレンジを促す意味で、日本語母語話者学生ペアは英語の漫才、日本語非母語学生ペアは日本語の漫才、日本語母語学生と日本語非母語学生のペアは日本語の漫才をつくるように勧めた。また、漫才分析を希望するペアは、ゲスト講師(第二著者)による資料の漫才例の分析、あるいは、事前にオンラインにより資料配付された関連文献の漫才の分析を行うよう指示した。当日の参加者31名(日本語母語学生23名、非母語学生８名)で、通信環境の問題のなかったペア14組すべてが漫才作りを選択、実施した。

○「漫才ワークショップ」授業の流れ

当日のワークショップの主な内容を時系列に表2に示す。ワークショップの主な流れは、以下の通りである。

①ワークショップを進めるゲスト講師(第二著者)を含むゲスト4名[11]による自己紹介にて、それぞれ日本内外での生活、仕事、留学経験など、その経歴や芸歴が話された。
②ゲスト講師が漫才の定義や「漫才で覚える日本語」や「お笑い輸出化プロジェクト」の取り組みについて述べた。
③ゲスト講師が日本語の簡単な漫才例を紹介・解説するとともに、ラジオ漫才や多言語漫才も紹介した。コンビ名のつけ方についてのヒントや例も示した。
④授業担当者(第一著者)がZoomでブレイクアウト機能を使い、自動的に学生ペアを設定した。
それぞれの学生２名ペア(コンビ)が、コンビ名を相談、決定した。

11　ゲスト講師以外のゲストの芸人３名は、ゲスト講師の相方（コンビ）でフランス語漫才ができる芸人のシラちゃん、スワヒリ語と英語の漫才ができる芸人 Ko さん、英語漫才ができるピン芸人で映画制作会社経営の経験が長いヘンリーイシイさんであった。今回ワークショップにボランティアとして参加、学生ペアが奇数の場合のコンビの相手役となり、また、学生の作った漫才ネタについて国外の視点も生かした肯定的なコメントをいただくといった協力を得た。

⑤クラス全体の場で、各ペアがコンビ名を紹介し合った。
⑥ゲスト講師・ゲストにより、多言語漫才のネタが紹介された。
⑦各学生ペアが、漫才作りあるいは分析を選択し、設定時間内に仕上げた。
⑧クラス全体で、すべての学生ペアがそれぞれの作った漫才を発表した。
⑨すべての発表が終わった後で、ゲスト講師とゲスト（芸人）から、発表作品についてのコメントがなされた。

授業では、2回のペアワークでZoomブレイクアウト・セッションを設定した。セッションの設定および学生のセッション移動で時間が必要となったものの、概ねスムーズなスケジュール進行となった。

表2　漫才ワークショップの流れ

授業開始からの時間（分）	各項目実時間（分）	授業活動	実施者
0-7	7	諸連絡（漫才ワークショップの学習目標、学期後半課題など）	授業担当者
7-15	8	①ゲスト講師を含むゲスト（芸人）4名の自己紹介	ゲスト4名
15-33	18	②講義「漫才とは？」	ゲスト講師
33-38	5	③ネタ見せ（日本語）・コンビ名決めのヒント解説	ゲスト講師
38-45	7	④コンビ分け・コンビ名決め（ブレイクアウト・セッション）	学生
45-56	11	⑤各学生ペアによるコンビ名発表	学生
56-61	5	⑥ネタ見せ（英語・スペイン語・フランス語）	ゲスト4名
61-71	10	⑦漫才作り（ブレイクアウト・セッション）	学生
71-86	15	⑧漫才発表	学生
86-90	4	⑨講評	ゲスト4名

学生ペア14組は、ネタ作りのセッション10分間という短時間の間に各々の作品を作り上げた。その後の「ネタ発表」では、ペアの個性と創意工夫が感じられる日本語の漫才6作品、英語の漫才8作品が発表された[12]。

4. 漫才ワークショップによる学び

4-1. 学生ペアの創作による漫才例

本節では、学生ペア（コンビ）による漫才作品の一部を紹介し、その内容について、文化や言語の観点から特徴を示す[13]。

本来、漫才は音声で聞き、順に繰り出される言葉を聞きながら味わうほうが、その面白さやユニークさがじかに伝わる。ここでは、作品のスクリプトを示すことで、実際の会話場面と聞き手の反応をイメージしていただき、面白さを感じていただきたい。3作品、英語漫才作品を紹介する。カッコ内にコンビ名を示す。なお、各漫才とも冒頭部分にコンビ紹介のくだりがあるが、ここでは省略する。

12　14組のうち1組は学生とゲスト（芸人）の組み合わせとなった。
13　ここで紹介した作品は、学生ペア（コンビ）から教育研究の目的による公開の許諾を得ている。

□作品 1（はんぺんバーグ）

A: Do you have the time?

B: No, I have no time for you!

A: Do you have the time?

B: You are so persistent, Go away!

A: もういいわ！

AB: Thank you.

□作品 2（キムチーズ）

A: Don't you want to eat pizza?

B: That's great~~~ Let's have a home party this weekend!

A: That sounds nice! I'll bring ワンピース.

B: You only have one piece!? We will not be full from just one piece.

A: But... I don't have so many ワンピース...

B: Then I'll buy it.

A: You will buy me a ワンピース!? That's so nice of you! I want a beautiful one!

B: A beautiful one!? What are you talking about!?

AB: Thank you very much~~~

□作品 3（たまごあんみつ）

A: Hey, do you know the さしすせそ that Japanese girls use?

B: Of course! It's さすが、知らなかった、すごい、センスいい、and umm… 忖度します!

A: No! that's the word that a congressman gets in trouble!

作品 1 と 2 は、母語が異なる者同士の会話で起こるコミュニケーション・ギャップをネタに取り上げている。作品 1 は、"time"の前の"the"のあるなしで意味が変わり、それを知らない相手との会話で、"the"があると「時間わかる？」、ないと「時間ある？」という意味の違いが生じることをうまく使った作品である。作品 2 は、英語の「（ピザなどの）一切れ」を示すone pieceと、日本で上衣と下衣（スカート）が一続きになった衣服「ワンピース」[14]との意味の食い違いをうまく取り込み、面白さを生んでいる。この 2 作品は、日英両言語を相対的に捉え、コミュニケーション上、理解に問題が生じる場面をうまく漫才に仕立てている。

作品 3 は、料理などでよく使われる、日本語での合い言葉「さしすせそ」に、若い女性の使う言葉を当てはめる場面で、ボケ役 B が「そ」に政治の問題でマスコミによく取り上げられていた「忖度（そんたく）」を当て、Aが突っ込みを入れる作品である。

3 作品とも、言語や文化の特徴の 1 つに焦点を当て、発想のちょっとした食い違いやずれをネタにうまく取り込んでいると言えよう。それぞれに、クラス全体のネタ発表で笑いを取り、大変好評であった。

14　英語では "a dress" が使われる。

4-2. 受講学生の授業コメントからみられる学びの分析

本節では、今回の漫才ワークショップにて受講学生が感じた学びや気づき、関心について、学生の授業コメントをデータとして分析し、検討する。検討のための分析データとして、漫才ワークショップの授業後（2020年12月22 ～ 23日）に、本学オンライン・プラットフォームであるTUFS Moodleに提出された授業コメントを使用する。授業コメントは出席者31名中27名からの提出がなされ、回収率87.1％であった。授業コメント提出にあたっては、その長さは指定せず、授業参加によって自らが学んだことや気づいたことについて記述するように指示した[15]。

分析においては、各学生のコメントを１件とし、合計27件のデータを対象とした。テキスト分析ソフトKH Coder ver.3を用いて、データから自動的に言葉を取り出し、計量的に分析する「テキストマイニング分析」（樋口 2018）を行った。データ中の語について、頻度順に並べた「抽出語リスト」（付表１）と、他の語との共起を図にして示す「共起ネットワーク」（図１）を作成した。なお、共起ネットワーク分析を行う際、描画する共起関係は、つながりの強さを示す指標であるJaccard係数による上位80語とした。

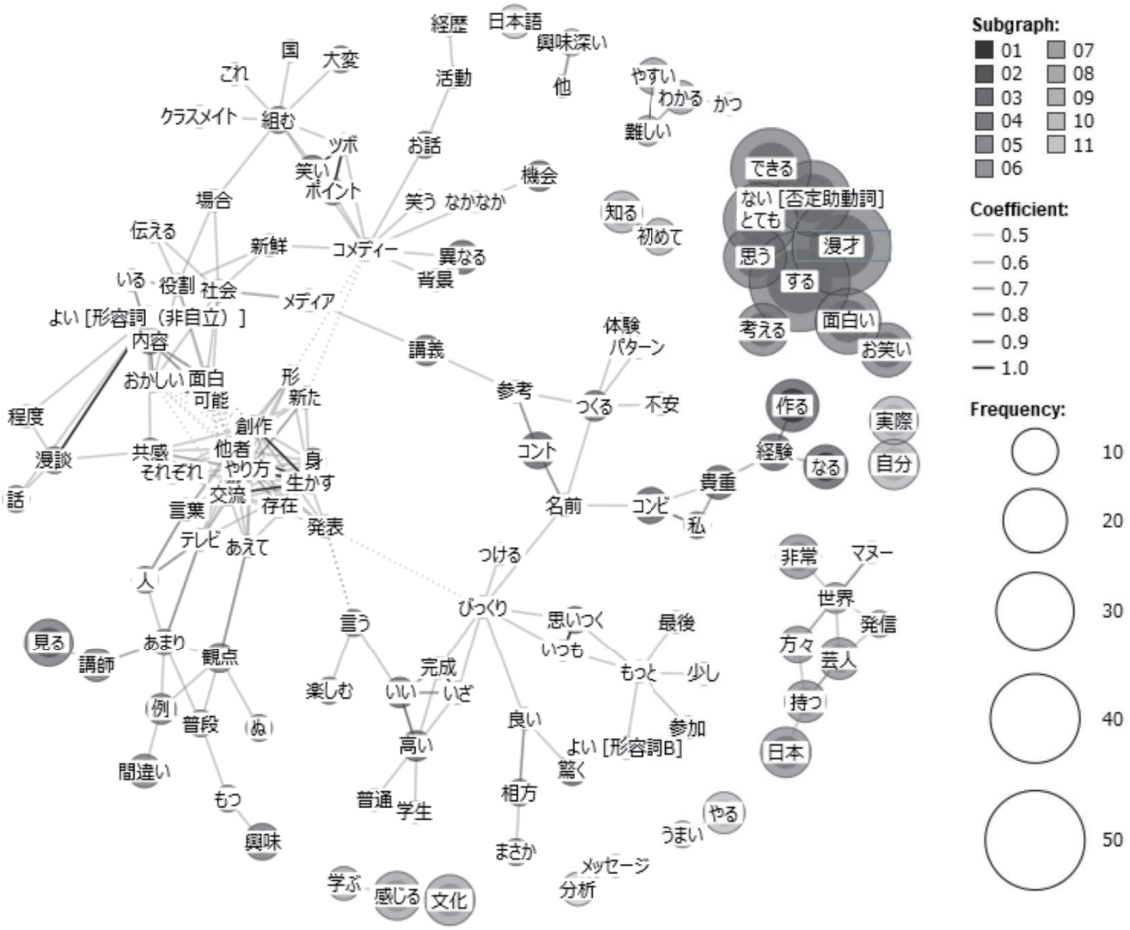


図１　漫才ワークショップの学生コメントに見られた共起ネットワーク

15　授業担当者（第一著者）は、履修学生に対して、学期中に提出された課題についての研究利用への協力依頼をし、使用許可を得た。

さらに、頻度の高い語や、その語との共起が見られる語を中心に、元のコメントを参照した上で、学生自身の感じた学びや気づき、関心などを10カテゴリーに分類した。各カテゴリー内で、カテゴリーの下位分類項目を設定し、その項目に関する言及があった学生コメントには、「１」としてカウントし、各項目についての言及をした者の人数を、表３に示した。各項目の人数をカウントする方法として、ある学生の授業コメントシートに、仮に、①漫才作りの経験と気持ちの変化への言及と、⑦ワークショップへのコメント、がある場合には、①と⑦の２項目へのカウントをすることにした。

表３　ワークショップに対するコメントのカテゴリーと記述件数

カテゴリー	カテゴリーの下位分類	コメント記述（人数）	カテゴリー合計（人数）
①漫才作りの経験と気持ちの変化	自分が漫才をつくることについての心配／不安／驚きとその解消	11	33
	初めての漫才作り	6	
	英語での漫才作り	1	
	自分で（相方とうまく）漫才をつくった満足感	7	
	漫才作りが楽しかった・面白かった	4	
	漫才をつくることの難しさ	2	
	お笑いをもっと好きになった	2	
②漫才作りの経験からの発見・気づき	漫才をつくる側の素晴らしさ・伝える側に立つことでの気づき	3	11
	漫才のパターンや原理を理解し、体験できた	2	
	言葉の面白さ	1	
	世界の中の日本文化・常識を感じる機会	1	
	間違いをネタにする視点が良い	1	
	2国間の笑いのポイントの共通性を感じた	2	
	学習としての漫才	1	
③発表時の気づき	発表時、笑いの反応が嬉しかった	1	12
	観客の共感の重要性	3	
	他のペアの漫才を楽しんだ	3	
	他のペアの漫才（英語）のクオリティの高さ・良いネタ	4	
	ゲスト講師・ゲストからのコメントや価値観への興味	1	
④漫才への気づき	（世界に向けた）漫才の可能性	4	7
	多言語による漫才の可能性	3	
⑤視野の広がり	言語学習への向き合い方、認識が変わった	4	6
	授業後にメッセージの分析もしてみたい	1	
	漫才のタイプによる伝わり方の違いも考えられそう	1	
⑥知識	漫才についての知識を得た	6	6
⑦ワークショップへのコメント	授業が有意義だった・貴重な機会になった	4	11
	授業が面白かった・興味深い	5	
	楽しめた	1	
	いつもと違う賑やかな授業開始	1	
⑧ゲスト講師・ゲストのキャリアへの興味	ゲスト講師・ゲストのキャリアが多彩	3	6
	海外経験を活かした漫才の面白さ	2	
	吉本興業の芸人さんの存在に驚いた	1	
⑨時間の制約	漫才作りの時間が短い	2	2
⑩通信の問題	途中で落ちてしまった	1	2
	機器の支障で、漫才作れず残念	1	

表３に示したカテゴリー順に、コメント記述を示しながら、受講学生の得た学びについて検討する。なお、以下に示すコメントは、学生からの了解が得られた記述のみのため、各項目に関する検討内容とコメントが十分対応しないこともあることを断っておく。

①漫才作りの経験と気持ちの変化

授業前に、漫才をつくる、または、漫才を分析する、と学生に連絡しており、漫才作りをせずに、漫才分析をすることも選択肢とし、各学生が決めることにしていた。ワークショップ前は、「まさか、自分で漫才作りをするとは思わなかった」「つくれるか不安だった」などの記述が回答者の４割、11名の学生に見られ、説明を受け、いざ作って演じ終わった段には「やってみて、面白かった」「ペアと協力して楽しく漫才をした」など授業時間内に気持ちの変化が生じ、不安も解消し、楽しんでいたことが伝わってきた。

・「今日の授業では、まさか自分が漫才をするとは思っていなかったのでできるか心配でしたが、ペアの○○さんと協力して楽しく漫才をすることができました。」
・「最初は、漫才など僕にできるのだろうかと心配していたが、実際やってみたらとても面白かった。」
・「最初は、基本的な日本語会話もまだうまくできないのに漫才など僕にできるのだろうかと心配していましたが、実際やってみたらとても面白かったです。」
・「お笑いはライブに行くほど好きですが、今回のワークショップを通して作る側のすばらしさを知ることができ、さらにお笑いを好きになれたような気がします。」

②漫才作りの経験からの発見・気づき

各学生ペア（コンビ）が漫才作りを行った際の、「つくる側」の意義（３名）や、日本やもう１つの国の文化や笑いへの気づき（2名）が示された。ゲスト講師による漫才のパターン解説の内容を、実際のペアでの漫才作りに適応できたという指摘も見られた。

・「分析だけではなく、実際に自分がメッセージを伝える主体となることを実践することができ、どのようにしたら相手に伝わるだろうか、や楽しい雰囲気をどのようにしたら出せるか、などについて考えるのもとても勉強になりました。とても楽しかったです！」

③発表時の気づき

聞く側だけでなく、漫才をつくり、演じる側に立つことで新たな気づきを得ていたことがわかる。日本語母語学生ペアは英語漫才をつくり、留学生ペアと留学生・日本語母語学生のペアは日本語漫才をつくった。どのペアも文化や言語、発想の違いなどをもとに、ユニークな作品をつくり上げていた。オンライン・ワークショップであったため、聞く側の学生は、拍手マークやそのほかのマークによる反応が中心となったが、演じるほうも聞くほうも、お互いに良い刺激を受けていたことが授業コメントから伝わってきた。発表後は、ゲスト講師やゲストから瞬時のフィードバックを得、達成感を感じていた。今回は、授業担当者とゲスト、ゲスト講師以外は、顔を出さない「ラジオ漫才」形式の発表となったが、そのことで、発表者の緊張レベルを抑える効果が生じた可能性も推測される。

・「言語の観点から見ても、あえて文法や言葉の間違いを上手く生かしてネタにすることで、頻繁に起きる間違いを学ぶことに繋がる。この間違いを生かす漫才を通して感じたのは、観客の共感がいかに大事であるかということである。自分が今回創作したネタも、日本人が苦手とする“th”と“s”の発音区別を面白おかしく扱ったものであったが、シンプルなネタでも多くの人に「あるある」と思ってもらえる要素の存在が非常に大切であると思った。」

・「他者のネタを聞いて、それぞれに個性がありかつ共感できる内容が多く、発表を大いに楽しむことができた。」
・「私は○○出身のクラスメイトとコンビを組ませてもらったので、比較的笑いのポイントが共有しやすく、ネタも作りやすかったが、これが全く異文化同士の相方とコンビを組んだ場合、お互いの国の笑いのツボを理解しながらネタを組むのはとても大変そうだなと感じた。」

④漫才への気づき

世界に向けた漫才の可能性を 4 名の学生が指摘した。「漫才とは？」など入門の解説にて、ゲスト講師が実践している多言語漫才や「お笑い輸出化プロジェクト」の話を聞くと同時に、自分で漫才作りをした経験から実感していることが伝わってきた。社会問題を楽しく解決する手法としての漫才の可能性にも言及したコメントもあり、アイデアの広がりが感じられる。

・「異文化交流という観点から考えると、講師の方が解説してくださったように、漫才のやり方（ツッコミのやり方など）そのものに各文化の特徴が表れるローカライズはとても良い例であると感じた。日本の文化だからと言って必ずしも日本の方式を押し付けるわけではなく、多様性を認めた漫才の形があることに非常に興味を持った。」
・「今日の授業を通して、漫才の新たな可能性に気が付くことができた。普段テレビで目にする漫才だけではなく、異文化交流や言語習得を目的とした漫才はあまりイメージがわかなかったが、実際に他者が創作したネタを聞き、自分たちで一から作り上げたことで、その意義を身をもって感じることができた。」
・「時間のない中で漫才を作ってみる経験は今までになかったので新鮮でした。今は社会的な発信として漫才の持つ役割は大きくないようですが、漫才が 1 つのメディアとしての役割を負う場合、環境保全やジェンダーについてなど面白おかしく社会的な内容を伝えることもできるのかもしれないと思いました。」

⑤視野の広がり

今回のワークショップにより、受講学生が、日本語あるいは英語のネタを考える中で、学習者が混同しやすい発音や言葉を振り返ったり、誤解が生じた経験を思い出したりすることで、言語学習でのミスを漫才ネタにして笑いに昇華できることに言及しているコメントもあり、漫才を超えて、言語学習や文化、コミュニケーションなどの新たな視野や動機づけを得ていることが伝わってくる。

・「今日は漫才のワークショップということで自分にとって初めての経験だったのですが言葉の面白さや、人を笑顔にする楽しさを学べたような気がしました。」

⑥知識

ワークショップ前半のゲスト講師による「漫才とは？」の話や漫才づくり、コンビ名決めのヒントから、自分なりに漫才を理解していたことがわかる。

・「コンビ名の名前の決め方やコントの例を聞き、お笑いもただ単に面白いことを考えようと闇雲に考えてつくるのではなく、パターンや考え方があることに気がつきとても面白かったです。」

⑦ワークショップへのコメント

授業そのものを評価するコメントが多く、漫才をつくるというワークの価値を感じたものだったと言える。また、わかりやすい説明と漫才ネタの例の紹介から、最初抱いた漫才への心理的な壁が低く／薄くなり、学生自身が漫才作りに取り組め、それを楽しめるように変化したことがわかる。ワークショップが面白かった、興味深い、有意義だったとする指摘が9名の学生からあった。

・「通常の授業では聞くことができない、とても面白く有意義な授業でした。普段からもまんざいや、おわらいに興味をもっていたため、講義をただ受けることを超え、楽しめたと思います。」
・「普段あまり漫才を見る方ではないのですこし初めの方は抵抗もありましたが、講師の方がわかりやすく例をあげてくださったり、漫才で場を和ませてくださったのでとてもたのしく参加させていただきました。」
・「今日は、Zoomに入ったらにぎやかだったのでびっくりしました。お笑いのワークショップということで、いつもとは一味違う授業で新鮮味があって面白かったです。びっくりしているうちにどんどん授業が進んでいって、コンビ名を決めるブレークアウトセッションに分けられたときは「思いつくはずないよー！！」と思ったけれど、はんぺんバーグというそれっぽい名前をつけることができたので良かったです。それで安心していたら10分で英語のネタを作れと言われて、今度こそ無理だと思いました。でも、相方をしてくれた○○ちゃんがいいテーマを思いついてくれて、なんと10分でできてしまいました。だけど、いざ発表してみたらどのコンビもとても完成度が高くて驚きました。こんな機会を用意してもらわない限りコントなんてすることもなかったと思うので、とてもいい経験になりました。」

⑧ゲスト講師・ゲストのキャリアへの興味

ゲスト、ゲスト講師の自己紹介に、海外大学院への留学経験や会社立ち上げ、ビジネス経験の話が織り込まれており、その話に興味を持ち、ゲストの豊かな個性や芸人への転身の理由に興味を持ったという記述が5件あった。

⑨時間の制約

ワークショップは 1 コマ限定で実施したことから、盛りだくさんの内容が90分に含まれ、漫才作りのペアワークは10分間であった。短い漫才を短時間の間につくる設定は敏捷性を養えるメリットがあるが、じっくりと取り組みたいというコメントも理解できる。

・「僕はM1（漫才の選手権）を予選からずっと見ていたので今回の授業は個人的に面白かったです。もう少し時間があれば、漫才が練られたなという思いもあります。」

⑩通信の問題

Zoomのブレイクアウト・セッションに切り替わる時に、通信状況が悪く落ちてしまった学生もいた。クラス全体での「漫才とは？」講義とネタづくり紹介、漫才ネタ発表には参加でき、コメントシートには自ら創作した漫才を載せ、熱心さが伝わってきた。

・「昨日ずっとパソコンの調子が悪く、ブレイクアウトになる直前に落ちてしまいました。せっかく漫才師さんたちがゲストで来てくださっていましたし、興味があるので参加したかったです、、」

5. 分析のまとめと考察

5-1. 分析結果

３で見たように、漫才ワークショップによって、受講学生は漫才に対する理解、漫才をつくり発信する経験を得て、それを楽しみ、漫才の価値や可能性を感じていることがわかった。特徴的なのは、受講学生の4割にとって距離のあった漫才が親しみ、広がりのあるものに変わり、メッセージ発信手段の１つと捉えられるようになったことである。自由記述式で、書かれた記述のみから分析を行うため、全数は不明だが、学生達の多くは、漫才が言語や文化の枠を超えた相互理解や交流に活用できると感じていることがわかった。今回はまだ試行的な取り組みであるが、受講学生は、目標として設定した「漫才を体験（創作）し、その面白さを感じること」「メッセージを伝える方法としての漫才の可能性をイメージできること」が可能になり、さらに漫才ワークショップをきっかけに、言語や文化に関する視野が広がった、と考えられる。

5-2. 考察

今回のワークショップは、オンライン授業の中でも、さまざまな国籍の学生が履修する「メディアとメッセージ」授業において、ゲスト講師、ゲスト（芸人）、授業担当教員が連携し、日本の文化の１つである漫才を自分でつくるという経験を通じて、多くの発見や視野の広がりの生まれた学びとなったことが示された。先の2-1で見たように、今世紀の学びが「より総合的に、より創造的に、より実践的に」（中島2018）変わると考えると、漫才を１つのテーマとして、学生自ら新しい作品としての漫才を創り出し、クラスで共有したことは受講学生にとって大きな意味があったと言える。また、そのプロセスにおいて、ゲスト講師の漫才に関する明瞭な講義や指示、学生ペアの漫才発表時のゲストとゲスト講師のコメントや肯定的な反応（笑い）が、心理的、認知的な足場かけ（Scaffolding）として機能し、豊かな学びにつながったことが推察される。今回のワークショップは、１つの実践事例ではあるが、従来、大学や学校において対象を「分析する」機会が多い中、創り出す活動を実践することも大いに意味があると言えよう。

コロナ禍におけるオンライン授業の状況は、石田（2019）が言う「人々がメディアの記号生活に組み込まれ」（p.369）、すべてがデータベースと化した状況と見なすことができる。その中で、石田は「自分のプラットフォーム」をつくり、自分をまとまった存在として回復させ、固有性を保ち、「ともに好奇心や関心を育て、お互いの知見を交換して世界が拡がる」（p.437）場の価値を指摘する。今回の「漫才ワークショップ」は、受講学生にとって、それぞれの「自分のプラットフォーム」をつくり、お互いの作品やアイデアを交換し、世界が拡がるような感触を得る機会となったといえるかもしれない。

6. おわりに

今回の漫才ワークショップでは、オンライン授業ではあったが、各受講学生の自らの選択により、漫才作りに取り組み、その楽しさや難しさを感じるとともに、つくった漫才をラジオ漫才の形式でクラスで発表することができた。本稿では、ワークショップにおける学生の学びを、ワークショップコメントによって分析した。また、今回は漫才のプロをゲスト講師として招き、さらに漫才、漫談のプロとして活動するゲスト３名を迎えた授業を行うことができた。創造性を生かした「自分のプラットフォーム」と

他者との知見の交換の場の設定が、今後さらにどうつくっていけるのか、追究していきたい。

鈴木　美加（すずき　みか）SUZUKI, Mika
東京外国語大学
島岡　学（しまおか　まなぶ）SHIMAOKA, Manabu
吉本興業

謝辞

今回のワークショップは、2020年度国際日本学研究院競争的経費（学部教育）を得て実施した。ゲスト講師（第二著者であるフランポネのマヌ―）とともに、ボランティアでゲスト参加をしてくださったフランポネのシラちゃん、Koさん、ヘンリーイシイさんに心より感謝します。また、建設的かつ丁寧なコメントをくださった査読者にもお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

参考文献

Griffin, Patrick, Barry McGaw and Ester Care (2012) Assessment and teaching of 21st century skills―Educational assessment in an information age, Heidelberg: Springer.（三宅なほみ（監訳）2014『21世紀型スキル：学びと評価の新しいかたち』北大路書房）

長谷川一（2018）「のぞき見ることと見せること：テクノロジー・映画・アトラクション」、長谷川一・村田麻里子編『大学生のためのメディアリテラシー・トレーニング』pp.147-152.

長谷川一、村田麻里子（2018）『大学生のためのメディアリテラシー・トレーニングテキスト』三省堂

樋口耕一（2018）『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

日高水穂（2018）「談話展開からみた＜創生期＞の東西漫才」『國文学』102, 関西大学424-399. <http://hdl.handle.net/10112/16717>（2021年9月21日閲覧）

石田英敬（2019）「補論　4つの追伸　ハイパーコントロール社会について：文字学、資本主義、権力、そして自由」石田英敏・東浩紀『新記号論』ゲンロン343-433.

石田英敬（2019）「おわりに」石田英敏・東浩紀『新記号論』ゲンロン435-438.

井藤元、田畑栄一（2017）「漫才作りをつうじた道徳教育の可能性」『東京理科大学教職教育研究』創刊号21-29.

中島さち子（2018）「21世紀の教育・学習」、経済産業省 第 1 回「未来の教室」と EdTech 研究会開催資料<https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/mirai_kyoshitsu/pdf/001_09_00.pdf>（2021年9月12日閲覧）

OECD（2018）The future of education and skills: Education 2030. <http://www.oecd.org/education/2030-project/contact/E2030_Position_Paper_(05.04.2018).pdf>（2021年9月12日閲覧）

OECD（2020）Curriculum (re)design: A series of thematic reports from the OECD education 2030 project: Overview brochure. <http://www.oecd.org/education/2030-project/contact/brochure-thematic-reports-on-curriculum-redesign.pdf>（2021年9月12日閲覧）

Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (eds.) (2003) Key Competencies for a Successful Life and a Well Functioning Society, Hogrefe & Huber.（ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク、立田慶裕監訳（2006）『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』明石書店

関口美緒、スペイン・ドリュー（2020)「中上級日本語学習者における創作活動―漫才の指導を通して―」『グローバルコミュニケーション教育センター　日本語教育論集　第35 号』筑波大学45-53.
東京外国語大学(2021)『東京外国語大学国際日本学部履修案内 2021年度入学者用』東京外国語大学

付表1　漫才ワークショップの授業コメント記述からの抽出語リスト

抽出語	出現回数
漫才	49
面白い	21
ネタ	20
思う	19
授業	15
お笑い	14
考える	13
作る	13
自分	12
日本	12
文化	12
聞く	12
楽しい	11
感じる	11
見る	11
実際	11
言語	9
今日	9
非常	9
芸人	8
持つ	8
知る	8
今回	7
コント	6
コンビ	6
英語	6
興味	6
経験	6
時間	6
初めて	6
方々	6
それ	5
異なる	5
学ぶ	5
間違い	5
貴重	5
講師	5
日本語	5
分析	5
ワークシート	4
観点	4
機会	4
驚く	4
講義	4
高い	4
今	4
笑い	4
世界	4
難しい	4
例	4

抽出語	出現回数
お話	3
ポイント	3
学習	3
楽しむ	3
共感	3
興味深い	3
言う	3
好き	3
最初	3
思いつく	3
私	3
視点	3
詳しい	3
色々	3
身	3
人	3
組む	3
相方	3
大変	3
内容	3
発信	3
普段	3
漫談	3
話	3
ありがとう	2
これ	2
それぞれ	2
びっくり	2
やり方	2
クラスメイト	2
コメディー	2
ツボ	2
テレビ	2
パターン	2
ペア	2
マヌー	2
メッセージ	2
メディア	2
可能	2
学べる	2
学生	2
活動	2
完成	2
形	2
経歴	2
言葉	2
個人	2
交流	2
国	2
最後	2

抽出語	出現回数
参加	2
参考	2
社会	2
受ける	2
少し	2
笑う	2
場合	2
心配	2
新た	2
新鮮	2
正直	2
生かす	2
創作	2
相手	2
存在	2
他	2
他者	2
体験	2
程度	2
伝える	2
背景	2
発表	2
不安	2
普通	2
僕	2
本当に	2
名前	2
面白	2
役割	2
様々	2
M1	1
Moodle	1
s	1
th	1
Zoom	1
1つ	1
いろいろ	1
お互い	1
さまざま	1
その他	1
にぎやか	1
ほか	1
まとも	1
もう少し	1
アウト	1
アメリカ	1
イコール	1
イシイ	1
イメージ	1

日本語の「不同意」に関わる談話研究の変遷と提言

The Disagreement Phenomenon in Japanese Oral Discourse Analysis: A Literature Review and Future Research Directions

袁　姝

This paper is a literature review on the disagreement phenomenon in Japanese oral discourse analysis. To clarify the trends, main findings and issues of previous studies, a search is done, and 84 papers published in 1983-2021 are extracted. Those papers can be divided into 4 categories, which are 1) linguistic theoretical studies related with universal features of disagreements, 2) empirical studies of Japanese native speakers' disagreements, 3) contrastive studies of Japanese and other languages in disagreements, 4) studies of disagreements used by Japanese native speakers and learners in multicultural communications.

The trends of previous studies showed that, in 1980s, some linguistic theoretical studies appeared, followed by empirical studies. Then, as to empirical studies, Japanese linguistic studies and contrastive studies increased from 1990s to 2000s, but in 2010s they turned to decrease. In contrast, from 1990s more multicultural studies are included, and keep increasing up to now.

To review more details, in the section of theoretical studies, the view of disagreements in Conversation Analysis and Politeness Theory are mainly summarized. In the section of empirical studies, firstly, definitions and types of disagreements are categorized within a conceptual framework. Secondly, the findings of Japanese linguistic studies and contrastive studies are reviewed from the aspects of "patterns of discourse structure", "strategies/linguistic forms" and "the contextual and social factors". Thirdly, multicultural studies are divided into 4 categories as "second language acquisition studies", "studies from the perspective of multicultural coexistence", "studies which focus on the introspections of participants" and "studies which focus on collaborative learning".

Finally, for future research, it is necessary to consider the following viewpoints: 1) to take a neutral attitude to understand disagreements, instead of a priori negative point of view, 2) to take non-verbal acts and longer stretches of discourse into account, 3) to analyze disagreements from a perspective of "multicultural coexistence" and beyond the native-nonnative dichotomy.

【キーワード】不同意、談話研究、文献レビュー、提言

Disagreement, Discourse Studies, Literature Review, Future Perspectives

1. はじめに[1]

日常生活において、我々は意見などが食い違うことに気づき、相手に納得できない気持ちを伝えることがある。このような現象は談話研究の分野で「不同意」「不一致」「対立」といった様々な用語で呼ばれてきたが、本稿では、議論の便宜上「不同意」と通称する。

日本語の「不同意」研究の登場と発展は、1970年代半ばからの言語研究の動向によるところが大き

1　本稿は、東京外国語大学主催の TUFS グローバルスタディーズ学会 第 1 回（創立）大会（2021.3.14）での口頭発表「日本語の『不同意』に関わる談話研究の動向と課題」において、いただいたコメントを基に修正・加筆したものである。

い[2]。その頃、言語研究の視点は「話し手」「聞き手」「伝達内容」に着目するようになり（野田ほか, 2002）、文を超える談話の文法や、語用論、談話分析、会話分析などの枠組を用いて音声言語を考察する談話研究も盛んになっている（糸井, 2003）[3]。「不同意」に関わる談話研究も同様に幅広い分野にわたり様々な知見が蓄積されてきたが、これまでの成果を整理し、展望を述べたものは寡少である。そこで、本稿では、先行研究の変遷をたどり、「不同意」の捉え方・特徴・使用実態に関して、言語理論的研究と日本語研究・対照研究・接触場面の研究といった実証研究を中心に概観し、今後の方向性について提言したい。

2. 本稿の対象となる先行研究の範囲

本稿で検討する先行研究は主に言語理論的研究と実証研究に二分でき、後者は分析対象の属性によって更に日本語研究、日本語と他言語の対照研究と接触場面の研究に分けられる（表1）。

表 1　本稿の対象となる先行研究の分類

種類名	下位分類	内容
言語理論的研究	-	個別言語を越えた「不同意」の普遍的特徴に言及した理論研究と文献レビュー
実証研究	日本語研究	日本語母語場面の「不同意」を対象とした実証研究
	対照研究	日本語と他言語の「不同意」を対象とした対照分析
	接触場面の研究	非母語話者が参加する接触場面の「不同意」を対象とした実証研究（母語場面と接触場面両方を扱う研究も含む）

先行研究の選定にあたっては、まずこれまで日本語の「不同意」を考察した博士論文（Jones, 1990;王, 2013; 楊, 2014; 堀田, 2014など）を参考にし、検索用の用語リスト（表2）を作成した。表2に挙げた用語をキーワードとして、国立情報学研究所、Google Scholar、ScienceDirect、国立国語研究所および国文学研究資料館のリポジトリで検索し、ヒットした査読付きの談話研究を対象に入れた。また、入手した研究の引用文献も確認し、表1の分類に該当するものを検討の範囲に加えた。最後に、言語を超えた「不同意」の普遍的特徴を整理するために、語用論、談話分析、会話分析、ポライトネス理論、社会言語学における主な論著から、明確に「不同意」に言及したものを洗い出した。

表2　検索用の用語リスト

言語	用語リスト
日本語	「不同意」「不一致」「不賛成」「反対」「反対意見」「反発」「反論」「否定（的意見）」「対立（会話）」「コンフリクト（トーク）」「ディスコーダンス」「不同調」
英語	「argument」「conflict (talk)」「disagreement」「discordance」「not in accord」

上述の手順に従い、計84本の先行研究を収集し、その内訳は表3にまとめた。本稿では、表3の先行研究を対象にし、まず次章では「不同意」談話研究の変遷について説明し、4-5章では、言語理論的研究と実証研究それぞれの視点と主な成果を整理する。最後に、6章では「不同意」談話研究の全体像を捉えた上で、先行研究の改善点を指摘し、今後の方向性に関する提言を行う。

2　それ以前に、国語学の領域では否定表現の性格（宮地 , 1952）や、相手の態度に対する肯定・否定を表す応答詞（南 , 1974）などの考察があるが、言語のラング面に焦点が当てられており、文脈に置かれた個々の発話からなる「不同意」談話研究とは言い難いため、本稿では対象外とする。

3　談話研究における「談話」という用語は音声言語・書記言語両方を指すことがあるが、本稿では狭義的に「音声言語」（いわゆる「話し言葉」）に限定する。

表3　発表形態別にみる本稿の対象となる研究の内訳

種類名	下位分類	時期	大学紀要	学会誌	論文集	学位論文 / 著書	研究報告	合計	
言語理論的研究	-	1983-2018	0	2	7	4	0	13	
実証研究	日本語研究	1984-2021	14	10	6	2	0	32	71
	対照研究	1987-2019	11	3	1	2	1	18	
	接触場面の研究	2000-2020	6	2	3	6	4	21	
合計	-	1983-2021	31	17	17	14	5	84	

3.「不同意」談話研究の変遷

本章では、表3に挙げた1983-2021年の「不同意」談話研究の変遷をたどる。

図1に示すように、年代別・種類別で先行研究の数の推移をみると、まず80年代は、個別言語を越えた「不同意」の普遍的特徴に言及した言語理論的研究の確立が主流で、会話分析やポライトネス理論などはこれにあたる（4章で詳述）。同時期に、これらの理論を検証するための実証研究が現れるようになった。これらは、日本語の言語的特徴を掘り下げ、他言語との異同を探ることで「不同意」の本質に迫るものである。

90年代に入ると、非母語話者が参加する接触場面の研究も「不同意」談話研究に加わり、研究対象の領域に広がりが見られる。そして、21世紀初めに実証研究に属する日本語研究と対照研究は最大値に到達し、その後は減少傾向が見られる。一方、接触場面の研究は増え続け、2010年代には、顕著な増加が見られている。また、同時期には言語理論的研究もやや増加している。これらは80年代の理論を批判的に検討した上で、先行研究を俯瞰しており、これらの知見はグローバル社会の談話における「不同意」の有り様の解明に示唆を与えている。

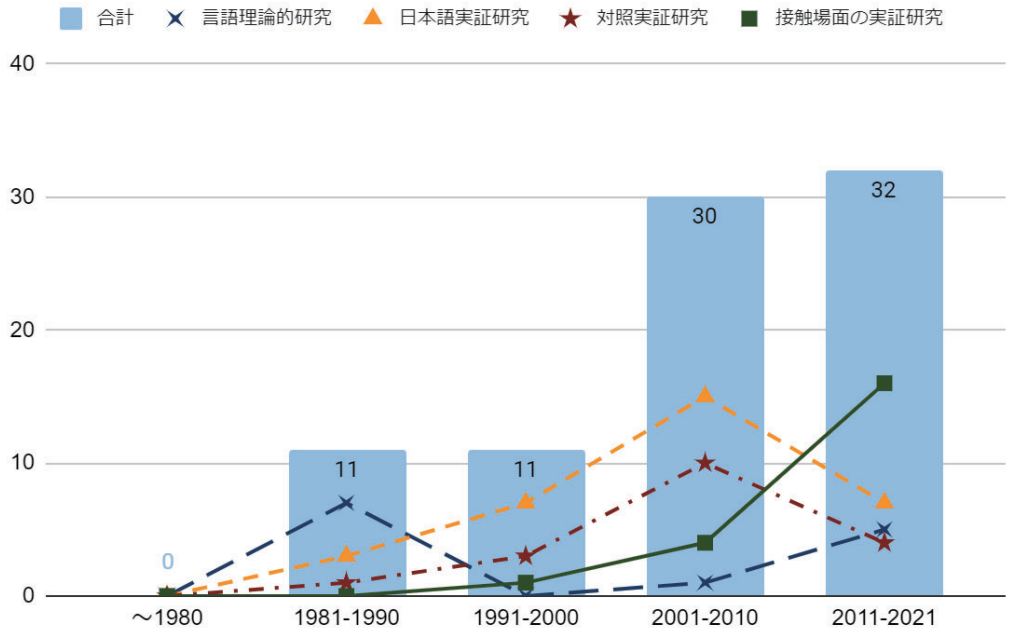


図 1　年代別・種類別にみる「不同意」談話研究の変遷

4. 言語理論的研究の概観

本稿の対象である「不同意」を含め、対立・葛藤・不一致・ディスコーダンスといった現象は、社会学・言語学・言語人類学・社会言語学などの様々な視座から考察され、理論化されている。会話分析やポライ

トネス理論などの観点では、談話構造、文脈、談話参加者の人間関係といった側面から「不同意」の捉え方を提示している。紙幅の関係上、本稿では、歴史的変容といった巨視的次元に属する研究を扱わず、「今・ここ」の談話を超えない「不同意」研究、つまり、具体的な場面で行なわれる談話を微視的に考察する研究のみに焦点を当てる。そのため、4.1節と4.2節はそれぞれ会話分析とポライトネス理論に関する言語理論的研究に絞り、個別言語を超えた「不同意」の普遍的特徴について紹介する。

4.1　会話分析の観点からみた「不同意」

まず、「隣接ペア」の観点からみると、「不同意」は何らかの対象に対する反応であり、「先行発話」が必要である。「隣接ペア」とは、「質問―返答」のような「2つの成分から構成される連鎖タイプ」である（Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974=2010, 西阪和訳, p.53）。「不同意」は「隣接ペア」の「第2成分」に相当し、「第1成分」に対する応答の一種と考えられる。

「評価―同意/不同意」のように、「隣接ペア」の「第2成分」は何種類か存在することもある。これらの「第2成分」は同等ではなく、優先的に産出されるものとそうではないものがある。人間の動機づけと関係なく、「優先的応答」は「遅れなし」に、「簡潔」かつ「直接的に」産出されるのに対して、「非優先的応答」の産出は「遅れ」「前置き」「理由といった説明」「間接的で緩和されている拒否部分」が伴われる（Levinson, 1983=1990, 安井・奥田和訳, p.412）。この仕組みは「優先応答体系」と呼ばれ、「不同意」は、「非優先的応答」と捉えられる場合が多い[4]。

さらに、「評価に対する不同意」とは、先行発話である「評価」と同じ対象に対してさらに評価する発話で、Pomerantz（1984）で指摘された「第二評価」に属する。同論文によると、このような「第二評価」としての「不同意」は、評価の対象に関して談話参加者各自が持つ経験・知識・認識の差異を反映するという。早野（2018, p.206）は、「第二評価」を含む談話の流れで、談話参加者は意見だけでなく、「誰が、何を、どのように、誰よりも知っているのか」という「認識の優位性」についても交渉を行い、そこに「認識的主張」の間の齟齬を解消する志向性がみられるとしている。

4.2　ポライトネス理論の観点からみた「不同意」

80年代のポライトネス理論では、「不同意」をネガティブに捉える傾向がみられる。例えば、Leech（1983=1987, 池上・河上和訳, p.190-191）は、「自己と他者との意見の相違を最小限にせよ」「自己と他者との合意を最大限にせよ」という「合意の原則」を挙げ、談話参加者が相手に部分的に同意し、異見を和らげる現象の真因を解明している。また、Brown & Levinson（1987=2011, 田中監訳）では、「不同意の表明」「否認または不賛成」（p.86）は、他者の「ポジティブ・フェイス」、すなわち「自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求」（p.80）を脅かす行動（FTA）と見做される。「FTA」を補償するために「不一致を避けよ」というストラテジーがあり、「形だけの同意」「擬似同意」「意見にヘッジをかける」といった方策はこれに属する（p.153-157）。ただし、「自己卑下」に対する「不同意」など、「FTA」とされないものもある。

しかし、21世紀以降、「Discursive Approaches to Politeness」の登場に伴い、文脈に置かれた「不同意」の複雑性、特にプラス効果にも関心が寄せられるようになった。Sifianou（2012, p.1555）は、「不同意」が「多様な機能を持ち、談話を様々な方向に持っていく」ことができ、その使用は親密度と社会性の証ともなり得ると論じている。Angouri & Locher（2012）は、「不同意」をアプリオリにネガティブな行為と

4　一方、「優先的応答」とされる「不同意」もある。例えば、「非難」に対する「否認」「不同意」などが挙げられる（Levinson, 1983=1990, 安井・奥田和訳, p.415）。

断言できず、コミュニティの中で形成された規範と、「不同意」の表明方法の影響も考慮すべきだとしている。また、場面と文脈も「不同意」の捉え方に影響を与え、例えば課題解決の場面では、「不同意」が目的達成に向けての不可欠な一環と参加者は予想するため、「不同意」への許容度が高いように見受けられる（Angouri&Locher, 2012）。

このように、「不同意」の捉え方に関しては、時代の流れとともに「ネガティブ」から「中立」へと変容がみられる。この捉え方は今後の実証研究にも敷衍し、検証されていくと考えられる。

5.「不同意」に関する実証研究の概観

本章では、「不同意」に関わる実証研究を概観する。5.1節では、下位分類を問わず、実証研究の中である程度共通している「不同意」の定義、分析対象の範囲と分類を整理する。5.2-5.4節ではそれぞれの下位分類、つまり日本語研究、対照研究と接触場面の研究の視点と主な成果をまとめる。

5.1　実証研究でみられる「不同意」の定義と分類

5.1.1　「不同意」の定義

「不同意」の記述・分析にあたって、先行研究では「argument」「conflict (talk)」「not in accord」「ディスコ―ダンス」「コンフリクト」「対立（会話）」「不同意（表明）」「反対意見」「否定・反論」「不同調」「不一致」といった様々な用語が用いられている。用語の定義も研究によって異なるが、何らかの食い違いに対する認識や反応に焦点を当てる点では共通性がみられる。一方、分析対象の範囲は多様性を持ち、談話の水面下にある思考内容から談話を超える社会文化的実践まで、裾野が広いように見受けられる。紙幅の関係により、すべての用語と定義を逐一記すことは割愛するが、本稿では、諸研究に記載された定義の内容を基に、「不同意」談話研究の分析対象の範囲を大まかに4種類に分け、次頁の表4にまとめる。

以上のように、「不同意」談話研究は分析対象となる範囲の多様性が見出される。4章の冒頭で述べたように、本稿では、「今・ここ」を超えない談話における「不同意」の捉え方・特徴・使用実態を解明する研究に焦点を当てる。つまり、表4に挙げた「社会文化的実践」を除外し、「談話のプロセス」「言語/非言語行動」「談話の水面下にある思考内容」を分析対象とする「不同意」研究を中心的に概観する。

5.1.2　「不同意」の分類

日本語の「不同意」は、主に「対人関係」と「食い違いのタイプ」の観点から分類されている。

「対人関係」に関して、4節で述べた会話分析とポライトネス理論によると、「不同意」が「非優先的応答」・「FTA」と捉えられることが多いが、そうではないこともあり、一義的に決定することは難しいことが分かる。木山（2005, p.255）はそれを踏まえ、「相手に対するプラス評価、または自己に対するマイナス評価」に対する「不同意」を「儀礼的不同意」とし、それ以外は「実質的不同意」としている。

「不同意」の引き金となる「食い違いのタイプ」について、大津（2001, p.212）は①「あることがらについての真偽判断の違いから起こる『事実認識の不一致』」、②「あることがらについての個人的な評価の違いから起こる『評価の不一致』、③「話し手が発話によって伝えようとした意味を聞き手が誤解した場合に起こる『意図と解釈の不一致』」という3分類を提示している。それを踏まえて、王（2013, p.11）は「実質的不同意」を「事実の不同意」と「意見や評価の不同意」に二分し、前者の場合には、参加者が情報を正しく伝えることを優先し、後者に比べてより明示的なストラテジーを使用する傾向があると述べている。

ただし、大津（2001）の分類は母語話者による雑談場面をベースにしたもので、接触場面や話し合い

表 4 「不同意」談話研究の分析対象に用いられる用語の定義と範囲[1]

種類名	説明	該当する用語例とその定義（出典）（下線部・和訳は筆者）
社会文化的実践	言語・非言語行為、および「今・ここ」における出来事である談話を超え、言語イデオロギーやアイデンティティの形成、さらに現代社会の特徴も内包する現象。	「ディスコ―ダンス」:「言語コミュニケーションとそれにかかわる社会文化的、記号的空間において、一致や調和、協調、和合、協和がない状態」（武黒 , 2018, p.7）
談話のプロセス	言語・非言語行為を越え、談話参加者が対立を感じ、「不同意」を表明またはあえて回避し、対立を対応するといった談話の流れ。「不同意」を表明する者だけでなく、談話参加者全員に注目する。	「Conflict talk」: “Firstly, in a narrow sense, conflict is defined as a speech activity in which two parties attempt to maintain their own positions by means of opposition（中略）. Secondly, and more broadly, conflict talk can be viewed as a process of opposition which includes not only the manifestation of opposition, but the whole process of inducement, initiation, development, and management of opposition. ”（Honda, 2002, p.574） （「狭義的には、参加者双方が反対を通じて自分の立場を守る言語活動であり、広義的には対立のプロセス、つまり反対の誘導、表明、展開と対応までの全過程を指す」）
言語 / 非言語行動	談話の一部をなすもので、発話者が納得できない気持ちを伝えるために使用する言語行動または非言語行動。「不同意」を表明する者のみに注目する。	「ある会話参加者が他者のある事実情報に対する認識、ある物事に対する意見や評価と異なる意識、意見や評価を持つときに行う不賛成や非難、反論、否定の意味や含意を持つ言語行為および非言語行為（笑い、沈黙など）」（王 , 2013, p.8）
談話の水面下にある思考内容	言語 / 非言語行動に表面化されるかに関わらず、参加者の間に思考内容の食い違い。	「会話の相手の先行発話に提示されたある事実情報の真偽についての認識や、ある物事に対する評価、感想などにおける会話参加者間の考えのくいちがい」（楊 , 2014, p.19）

5 この分類は、先行研究に明記された定義（表 4 の下線部）を基に筆者が作成したもので、必ずしも研究者本人の意識と一致しているとは限らない。

場面など、他の場面・状況において使用された「不同意」もこの3分類に括られるかは検討の余地がある。また、会話分析では「修復」や「第二評価」など、食い違いのタイプを規定した現象が体系的に考察されているが、「不同意」研究の場合、各種類の「不同意」に関する比較分析や、ある特定の種類の「不同意」を深く掘り下げた研究は少数しかない。

5.2　日本語研究の視点と成果

日本語のみを扱う実証研究においては、主に「不同意」の談話構造、ストラテジーと言語形式、そして「不同意」の使用に影響する要因という3点に注目し、考察を行っている。

5.2.1　「不同意」の談話構造

「不同意」の談話構造を考察する研究では、「不同意」の発話者だけでなく、談話に「不同意」が出た際に他の参加者がどう対応し、合意形成のためにどのように互いに折り合いをつけるかというプロセスも研究の領域に含まれる。

職場の談話を対象とする「不同意」研究として杉本(2002)と大和(2009)がある。杉本(2002)は会社、工場といった11種類の職場における自然談話を分析した結果、「不同意」に続く談話構造として「否定・反論―質問―応答」「否定・反論―反論―納得」「反論―反論―確認」「反論―反論―反論」の4つのパターンを提示している。その中で、特に複数回の反論からなるパターンが珍しく、「正面きっての議論」(p.433)への回避傾向が見られたという。大和(2009)は5名の日本語母語話者である教師による教材作成の話し合いを基に、会話分析の観点から「意見の歩み寄りに至るまでの過程」を考察した結果、「意見の不一致が表面化するシークエンス」「自分の意見の主張と説得のシークエンス」「意見調整を試みるシークエンス」という意見交渉のプロセスが明らかになった(p.61)。また、各段階において参加者の「立ち位置」、すなわち賛成や反対などの「参加者の立場と会話参加者間の関係」(p.60)が変化する様相もみられた。これらの研究は、ある程度一般性のある談話構造のパターンを提示しているが、「不同意」によって示された問題が解決に至ったかについて十分説明しているとは言い難い。

それに対して、雑談場面の談話において、高井(2009)は同性友人同士の雑談に出た「不同意」の後の談話構造を考察している。その結果、「不同意」によって示された問題が解決に至った場合、発話者は「聞き返しによる修正要求」や「根拠を述べないで否定する」手段を用い、相手に反論や説明の余地を残す傾向が見られた(p.175)。一方、相手の主張と真逆な主張で「不同意」し、後続の談話で「対立の内容が移行していったことで最初に提示された問題の解決につながらなかった」状況もある(p.172)。

5.2.2　「不同意」のストラテジーと言語形式

ストラテジーや言語形式に注目している研究では、「不同意」の発話者がどのように相手に配慮しつつ「不同意」を伝えるかに焦点を当てている。Jones (1990)は、会話分析の立場から、「テレビ討論、家族談話、オフィスでの同僚間の談話」(p.310, 筆者和訳)という3種類のデータを分析している。その結果、参加者が明らかに目下の状況を対立と捉えた場合、「同調+不同意」「自己卑下+不同意」「不同意+説明」「不同意+謝罪」「権威者の意見の引用」「露骨な不同意」「妥協」「折衷案」などのストラテジーを使用する傾向が見出された(p.56, 筆者和訳)。それに対して、自分が対立に置かれることを認めたくない、または直接に対立を対応したくない場合、参加者は言語行動として「対立に言及しない」や「スピーチスタイルの転換」などのストラテジーを使用し、非言語行動として「リズムの変化」「頻繁な笑い」といった多様なストラテジーを用いているという(p.90, 筆者和訳)。

また、真剣な対立だけでなく、「遊びとしての対立」の場合のストラテジーも考察されている。大津（2004）は女性親友同士の日常雑談を分析した結果、参加者は大げさに驚きなどの感情を演じることや、故意に強烈な対立表明をするといったストラテジーで「遊びとしての対立」を開始し、遊びの合図を伝え合うことで楽しむ様相が観察されたという。

「不同意」の言語形式・標識に関する研究として、Mori（1999）、Noda（2004）と大塚（2005）が挙げられる。Mori（1999）は日本語母語話者の日常雑談でみられる「不同意」に注目し、ターンの構築と連鎖の展開における「だから」「だって」「でも」「から」「けど」の語用的意味を考察している。Noda（2004）は学術ディベートにおける関係維持のストラテジーを考察した結果、「不同意」における「のだ文」の使用は、発話者が批判しているという認識を改め、状況の厳しさを和らげる効果や、相手に対する「否定的描写を個人的意見に」（p.123）し、批判の強度を弱める効果が見られたという。

また、大塚（2005）は日本人大学生による課題解決場面の談話を分析し、分析対象となった151例の「不同意」の表明の仕方を考察した。その結果、「ターンの始めに生じるマーカー」として「でも」「というか、というより」「だって」「いや、や、いやー」「違う、ではなく」「えええ？、ええ？、え？など」「否定的な評価」「躊躇」があり（p.83-87）、「ターンの中で生じるマーカー」として「受け入れ+不同意」「繰り返し+否定」「疑問表現」があることが明らかになった（p.87-88）。また、「特にマーカーがないもの」として「先行話者の発話とは逆の視点の発話」「発話内容から相手の発話に同意しているのではないがわかるもの」が挙げられる（p.89）。

5.2.3 「不同意」の使用に影響する要因

「不同意」の使用に影響する要因を中心的に考察した研究は、性差・親疎関係・場面や状況など、「不同意」の使い分けに影響を及ぼす社会的・場面的要因を解明している。

性差の影響を解明するため、張（2017）は、日本人同性友人同士の雑談と韓国人のそれにおいて、「不同意/否定的評価」がみられた「冗談」と「対立」という2種類の談話構造を分析している[5]。その結果、女性同士に比べ、男性同士のほうが「不同意/否定的評価」を多用することが分かった。また、対立が生じると、女性同士はそれを「トラブル源」と捉え、一致点を探すことで対立を解決しようとするのに対し、男性同士は、対立を解決しないまま談話を展開させることも見出された。一方、「冗談」の談話構造では、女性は一方的に相手をからかうのに対し、男性は互いに言い争うことが明らかになった。このような相違には、親密な関係の作り方が性別によって相違するという要因があるという。

また、親疎関係の影響に関して、木山（2005）は20代女性学生である親友同士と初対面同士の雑談から「先行発話―不同意―反応」の連鎖を抽出し、その頻度にt検定をかけて分析している。その結果、親疎関係に関わらず同程度の「不同意」が現れたが、「相手に対するプラス評価、または自己に対するマイナス評価」に対する「儀礼的不同意」（p.255）の場合、初対面同士の比率が親友同士より有意に高いことが明らかになった。一方、「儀礼的不同意」を除いた「実質的不同意」の比率について、友人同士は初対面同士より高く、有意差が認められている。

6　張（2017）では、「本稿では、ジェンダー差の観点から、（中略）男性同士と女性同士の相互行為に見られる類似点と相違点を明らかにすることを目的とする」（p.103）、「日韓差についてはあらためて分析を加えることにし、まず、本稿では、使用頻度と相互行為に見られるジェンダー差に焦点を当て（後略）」（p.107）といった論述があるため、同論文を対照研究ではなく、「不同意」の影響要因を考察する日本語研究と捉える。

5.3　対照研究の視点と成果

「不同意」に関する日本語と他言語の対照研究は、主に日英・日中・日韓・日タイという4種類がある。日本語研究と同様に、談話構造・ストラテジーと言語形式・影響要因という3つの視点からの考察がみられるが、対照研究の場合はストラテジーの使用頻度における量的研究や、「不同意」に伴う配慮の伝え方の比較分析が主流で、談話構造に着目したものは極めて少ない。

日英対照研究では、英語話者に比べると、日本語話者は意見表明より衝突回避を重視し、「不同意」を表明する際に事実論拠に基づいて「不同意」を暗示する傾向があることが分かる。例えば、Watanabe（2004）はアメリカ人と日本人それぞれのグループ討論を分析した結果、アメリカ人は異なる観点の発表を重視するのに対し、日本人はリーダーの設置、パネル形式での意見表明といった進め方で衝突を回避し、「自分の意見を支持する論点も支持しない論点も両方含めて一回につき一つ以上の論拠を述べる」（p.93）というストラテジーで対立を緩和すると指摘している。また、白井（2009）では、親しい間柄にある女性同士の課題解決場面の談話を分析した結果、日本語話者は参加者間の共有した事実に基づき、事実叙述や質問を行って「不同意」を暗に示すのに対し、英語話者は共有事実についてお互いの考えを述べたり、相手の考えの妥当性を問ったりして「不同意」することが明らかになった。

日中対照研究では、日本語話者は中国語話者より共感を重視し、「不同意」を非明示的に表明する傾向がみられる。王（2013）はフォーマルな相談場面・インフォーマルな相談場面・買い物場面・食事場面などを基に、上下関係・親疎関係・家族関係・友人関係といった状況における談話完成テスト（DCT）・自然談話・コーパスのデータを集め、日本語話者と中国語話者の使用した「不同意」方略を比較分析している。分析方法について、「不同意」に特化した単位方略を明示度によって「否定型」「指摘型」「発言要求型」「共感期待型」「回避型」に分類した上で、それぞれの場面・状況において、日本語話者の各種類の単位方略の使用率と中国語話者のそれにカイ二乗検定をかけ、使用率の差が有意に認められるかを考察している。その結果、全体として「多くの場面では日本語母語話者より中国語母語話者のほうが不同意を表明しやす」く、「明示的な言い方で不同意を表明する傾向」もあるという結論に至った（p.255）。特に、親しい同位の相手に対しても、日本語話者が中国語話者のようにストレートに言わず、暗示したり共感を要求したりすることが対照的である。

日韓対照研究に関しては、両言語とも対人配慮を重視するが、ストラテジーの使用について日本語のほうが明確なパターンが見られることが分かった。李（2001）は日本人大学生と韓国人大学生に、DCTと類似する実験インタビューを行っている。インタビューでは、上下関係（先輩、同級生、後輩）に親疎関係をクロスさせた6人の実在した聞き手を想定した上で、「不同意」の組み立て方を考察している。その結果、日本語では「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」というパターンがみられたが、韓国語では「不同意」がより柔軟に行われているという。また、李（2003）は「場の改まり度」の変数を加えて「不同意」の言語行動を考察したところ、フォーマルな場面かカジュアルな場面かによって、韓国人大学生の使用実態が明らかに相違していることを解明した。それに対し、日本人大学生の使用実態では顕著な差がみられず、両方とも聞き手に配慮する姿勢がうかがえたという。

日タイ対照研究では、配慮の伝え方に関して日本語とタイ語の間にある相違点が明らかになった。ワンウィサー（2010）は意味公式で「不同意」を類型化し、22歳-55歳の日本人・タイ人社会人の「目上に対する反対意見」の伝え方をDCTの手法で考察している。その結果、日本語話者は「相手の提案の短所」や「好ましくない結果の陳述」に言及することが少なく、また、一方的に自分の提案を出さずに相手の気持ちを配慮するという点でタイ語話者とは対照的であると述べている。さらに、両言語話者の配慮の示し方も異なり、日本語話者が「好意的な反応」「間を持たせる表現」を使用するのに対し、タイ語母語

話者が「呼びかけ」を配慮として用いているように見受けられるという。

このように、4言語との対照研究を通して、日本語話者が相手との共感を重視し、明示的かつ主観性の高い「不同意」ストラテジーの使用を避ける傾向が明らかになった。ただし、対照研究の多くはストラテジーの使用頻度を量的に分析するため、実際の場面・文脈を如実に反映しているとは言い難い。また、DCT手法の限界点として、協力者の回答が実際の言語使用から乖離する可能性があるため、他のアプローチからの検証も不可欠だと考えられる。

5.4　接触場面の研究の視点と成果

異文化交流における「不同意」を扱う接触場面の研究は、主に「言語習得」「言語的共生化」(岡崎, 1994)「談話参加者の意識」「教室での協働学習」という4つの観点から行われている。その中でも、言語習得に関する考察は主流である。その他3つの観点からの研究は萌芽的な状態で、今後、発展することが見込まれる。

5.4.1　言語習得に関する「不同意」研究

言語習得に関する研究は、第二言語習得論・中間言語語用論に依拠し、日本語研究と対照研究で観察された「不同意」の諸特徴を手がかりにして、学習者の習得状況や母語転移の可能性を解明している。分析の視点に関して、「不同意」のストラテジーや言語形式に注目する研究は多数ある一方、談話構造を考察するものは極めて少ない。

例えば、堀田(2014)は日本語母語場面・中国語母語場面、そして中国人上級学習者と日本語母語話者による日本語の接触場面の1対1話し合いを基に、談話参加者の「不同意」における①ストラテジーの連鎖、②ヘッジの使用、③学習者の認知プロセス(発話時の思考言語、留意点、語用論的知識)を考察している。ストラテジーの連鎖とヘッジの使用について、母語話者の使用頻度と学習者のそれに対してカイ二乗検定を行った結果、「先行発話―不同意―受諾・発展・転換」のような、話し手の「不同意」が1発話文のみで遂行される「単独型の不同意」の場合、ヘッジの使用について学習者の逸脱が多かったという。また、不同意にさらに不同意するような、話し手と聞き手の相互交渉が続く「複合型の不同意」の場合、母語話者に比べて、学習者の使用実態において「明確化要求」の先行、「理由提示」の過剰使用や、ヘッジの過少使用などの特徴が観察された。堀田(2014)はこれらの点を「語用論的規範からの逸脱」と捉え、その背景に目標言語である日本語の「不同意」の難しさと母語転移の影響があると論じている。

5.4.2　言語的共生化に関する「不同意」研究

前述のように、接触場面の研究では、学習者の使用実態を母語話者と比較分析し、両者の間にある相違点をすべて「逸脱」と捉え、修正すべきだと指摘する論考が多い。それに対して、接触場面の参加者を「共生日本語」の学び手と捉え、母語・非母語という固定属性に関係せず、参加者が対等に交流し、その場で「共生日本語」を形成するという考え方もある(岡崎, 2002)。例えば、平野(2006)は「共生日本語」の観点から、日本語教育実習生である母語話者と非母語話者の「反対意見表明」の通時的な変化を分析している。その結果、初期の段階では、母語話者と非母語話者がそれぞれ「共感期待型」と「否定型」を多用し、意見の歩み寄りというより見解の留保に留まっているように見受けられたが、時間の流れとともに、両者とも「指摘型」を多用するようになったという。このように、接触場面の談話において「言語的共生化」という変容が見られ、参加者が見解を十分に検討し合えるという「対等な共生関係」が生まれた傾向も見出されている。

5.4.3　談話参加者の意識に関する「不同意」研究

異なる社会的・文化的背景を持つ参加者が談話を行う際に、言語能力の不足や社会文化的知識の相違があるため、参加者がいつも順調に相互理解を構築できるとは限らない。そのことから、接触場面の談話参加者の意識を把握し、談話面と意識面を繋いで「不同意」を考察する研究が増加している。

楊(2011)は、「不同意」の聞き手の意識に注目し、日中接触場面の1対1雑談において、非母語話者の「不同意」に対して母語話者の受け取り方を考察している。その結果、明示的な「不同意」発話の半数以上が留意されなかった一方、婉曲的な「不同意」発話の半数以上が留意され、そのうちの3割が否定的に評価されたという。つまり、「明示的言い方をすると失礼になる」「婉曲的言い方であれば配慮」とは言えず、接触場面における「不同意」の規範をさらに掘り下げる必要がある。

「不同意」の話し手の意識を探る研究として楊(2014)がある。同論文は接触場面の言語管理理論に依り、上下関係が潜在化・顕在化している場合における、日中接触場面の中国人参加者の言語生成・管理プロセスを考察している。①実験室での雑談と事後インタビュー、②自然談話と事後インタビュー、③参加者の日常生活での経験をできる限り聞き出す「インターアクション・インタビュー」で得られたデータを分析した結果、中国人参加者は日本人参加者の先行発話から食い違いを感じた際に、「不同意」を含む「不一致応答」の適切性を検討していた。この結果から、「不一致応答」を生成・管理するというプロセスが明らかになった。そのような言語生成・管理プロセスの背景には、「不同意」を表明するか回避するか、表明するならどう伝えたらよいかの判断基準がある。その判断基準の裏にはさらに多様な要因が絡み合っている。例えば、「実情」「中国人参加者と日本人参加者のフェイス」「常識」「日中両国の言語的規範、社会文化的規範」などが挙げられる。

また、話し手の意図と聞き手の解釈のずれに関して、金(2015)は日中接触場面の物事を決める1対1話し合いとフォローアップ・インタビューを考察している。「不同意」と伴う配慮に関して、発話者の意識と行動および相手の理解について分析した結果、「表現形式」と「表現内容」における多様な配慮の伝え方が見出されたが、発話者の配慮が相手に伝わらず、話し手の意図と聞き手の解釈にずれが生じたこともあったという。例えば、非母語話者の「理由や根拠を伝える」方略が母語話者である相手に「意見の押し付け」と感じられたことがある。また、非母語話者が母語話者の「やってみてもいいけどね」(p.41)という発話を字面通りに受け取ってしまい、母語話者が暗示的に表した「やりたくない」という気持ちが読み取れないこともあったという。

5.4.4　教室での協働学習に関する「不同意」研究

教室での協働学習に関する「不同意」研究は、主に日本語教育の現場での実践を考察し、学習者の談話における「不同意」の使用と意識に言及したものである。母語話者の言語使用を手本とせず、参加者が共同で相互理解を構築する過程に主眼を置くという点で5.4.1の習得研究と異なっている。

胡(2018)は上級/超級の学習者が受講するピア・リーディング授業内の話し合いを基に、学習者の合意形成に至るプロセス、個々の発話機能の役割および司会者の役割を解明している。その中で、「否定」が出ると、「譲歩」「提案」など多様な発話機能が現れ、新しいアイデアが検討されるが、議論も長くなるように見受けられた。つまり、「否定」は議論の効率を低下させる危険性がある一方、議論の深化とよりよい案の創出にもつながった。したがって、「議論の活性化を確保するために、異なる意見に対して『否定』する勇気を持ち、建設的な『否定』の意見により『議論展開』に力を貢献すること」(p.113)も重要であると胡(2018)は論じている。

また、中井(2020)は話し合いの分析・評価活動を学部生の授業に導入し、受講した日本人と留学生の

学びを考察している。受講生自身が話し合いを経験し、それについて振り返りをする際に、「反対意見がないと視野が狭くなることがある」とワークシートに記述し、全体討論の際にもこのように発言した留学生がいたという。その後、複数名の日本人学生と留学生がこの意見を新たな視点として留意し、「すぐに同意してしまって内容が薄かった」「議論を深めるためには反対意見が必要だ」とワークシートに追加記入したことが観察された(p.84-85)。同論文は「不同意」の言語的特徴を解明したわけではないが、留学生が母語話者の「不同意」規範意識の変容を促す可能性を確実に示し、母語という固定属性による力関係に囚われず、互いに学びを深めている様相を明らかにしている。

6. 考察と提言

3-5章では、日本語の「不同意」に関わる談話研究の変遷をたどり、言語理論的研究における「不同意」の普遍的特徴と実証研究の視点と成果を概観した。本章では先行研究の全体像をまとめ、改善点を指摘した上で、今後の発展に向けての提言を行う。

6.1　先行研究のまとめと考察

まず、文単位を超える談話研究が盛んになることで、「不同意」に関わる研究は20世紀80年代前半から始まった。20世紀後半、言語のラング的側面だけではなく、パロール的側面にも着目するという言語観の変容により、人々が共同で作り上げる談話を分析対象とする語用論、会話分析といった言語理論的研究が普及するようになった。その中で、会話分析とポライトネス理論では、「隣接ペア」の「非優先的応答」であることと、「FTA」となる場合が多いことといった「不同意」の特徴が提示されている。ただし、これらの研究は、言語の抽象化・規範化された普遍的特徴を抽出するのが目的で、「不同意」が置かれた場面・状況・談話の流れを十分に掘り下げているとはいえない。そのため、「不同意」をアプリオリにネガティブに捉えるという傾向もみられる。2010年代以降の新しい理論研究ではこの観点が批判され、「不同意」のプラス効果も視野に入れる観点が提唱されるようになった。

言語理論的研究を検証するため、実証研究に属する日本語研究と対照研究は80年代半ばに登場し、21世紀始めまでは増加傾向となる。日本語研究は、主に「不同意」の談話構造、ストラテジーと言語形式、そして「不同意」の使用に影響する要因という3つの側面から「不同意」の使用実態を探っている。ただし、多くの日本語研究は「不同意」に伴う配慮の伝え方を中心に考察しており、文脈から離れて「不同意」がネガティブな行為だと断言する傾向がある。その背景には、前述した80年代の言語理論的研究の影響があると考えられる。

言語間の対照研究は主にストラテジーと影響要因に注目し、「不同意」について日本語と英語・中国語・韓国語・タイ語の共通点と相違点を考察している。その結果、他の言語話者より、日本語話者は相手との共感を重視し、主観的かつ好ましくないことへの言及を避けて非明示的に「不同意」を行う傾向が明らかになった。対照研究が持つ「ストラテジー重視」の視点は、「方略能力」を含む「コミュニケーション能力」(Canale & Swain, 1980)を代表とする80年代の言語能力観の影響を受けている可能性が高く、その成果も言語教育に重要な示唆を与えている。ただし、談話構造の面で、各言語の話者がどのように談話を織り上げるかについて研究を深める余地がある。

最後に、21世紀以降、日本語研究と対照研究は減少傾向に変わったものの、「不同意」に関する接触場面の研究は右肩上がりで、現在も増え続けている。接触場面の研究では、第二言語習得論・中間言語語用論の観点から、場面的・社会的要因を統制した上で、各種類のストラテジー・言語形式について母語話者と学習者の使用頻度を比較し、学習者の習得状況について問題点と解決策を取り上げる研究が主

流である。しかし、この観点は母語話者の日本語使用を規範とするため、母語話者内部の異質性を見逃し、学習者に日本語・日本文化への同化を求める危険性があることは否めない。

一方、少数ではあるが、文化の多様性を尊重し、母語話者と非母語話者が互いに折り合いをつける「共生日本語」の理念に依拠する接触場面の研究がみられる。また、談話参加者による相互理解の共同構築の過程に着目し、談話の水面下にある「不同意」の場面における話し手と聞き手の意識を探る研究もあれば、教室での協働学習でみられる「不同意」の機能の解明や、受講生による「不同意」の捉え方の変容に関する研究もある。これらの研究の登場は、佐々木(2006)の指摘した、「教育→支援→共生」という日本語教育観の変遷による影響を受け、伝統的な観念に新しい観念が加えて、多様な教育観が共存するという状況を浮き彫りにしている。

このように、「不同意」談話研究は80年代前半から現在にかけて様々な領域において研究がなされ、分析の視点も手法も多様性を見せ、談話における「不同意」のメカニズムの多角的解明に貢献している。ただし、改善点として①「ネガティブな捉え方」、②「発話/ターン単位のストラテジーに集約する分析対象の範囲」、③「共生日本語に依る研究の不足」が見出された。

6.2　今後に向けての提言

上述の3つの改善点に対して、本節では今後の研究の方向性を展望し、3点提言を行いたい。

第1に、「不同意」の捉え方に関して、アプリオリに「不同意」をネガティブに捉えず、中立の視点から研究を行うことを提言する。4章で述べたように、21世紀以降、「不同意」は親密度と社会性の証でもあり、様々な機能を持つことが新しい言語理論的研究で指摘された。しかし、これまでの日本語の実証研究ではこの観点に関する検証がまだ少ない。特に接触場面の研究において、胡(2018)と中井(2020)以外、「不同意」のプラス効果への言及がほぼされていない。

この点について、高宮(2012)が述べたように、「日本人は協調性があり、対立しない」というステレオタイプを持つと、「『適切な言い方』とは何かの判断の誤りにも繋がり、コミュニケーションを行う際に弊害となる恐れがあるであろう。また、このようなステレオタイプは、日本語非母語話者に、日本語のコミュニケーションのストラテジーを教える際にも影響があるだろう」という懸念点が挙げられる(p.97)。したがって、相手のフェイスを侵害せずに「不同意」を伝えることは重要であるものの、いかなる場合でも回避すべきというわけではない。今後は、場面・文脈をより重視し、「不同意」のプラス効果にも着目した研究が望まれる。

第2に、研究の視点に関して、「不同意」の分析対象の範囲をさらに広げることを提言する。例えば、対照研究と接触場面研究では発話/ターン単位を超える単位で「不同意」を考察することや、非言語行為を含むマルチモーダルの視点から「不同意」を考察することが挙げられる。

Sifianou（2012, p.1561）では、より長い談話のまとまり(longer stretches of discourse)を考察する視点の導入が既に自明の理であると述べられている。しかし、対照研究と接触場面の研究では、発話/ターン単位のストラテジーのみに注目する研究が主流である。Jones（1990)の指摘したように、発話/ターンを超える「不同意」は頻繁に見かけられるため、談話の「段落」など、発話より大きな単位を対照研究と接触場面の研究に取り入れる必要があるのではないだろうか。また、「不同意」は対人関係に支障をもたらす危険性があるため、それを非明示的に伝えることが多く、言語行動だけでは「不同意」と認識できない場合もある。この際、相手の真意を理解するには非言語行動が重要な手がかりとなる。したがって、マルチモーダルの視点から「不同意」を網羅的に分析することが求められる。

第3に、接触場面の研究の領域において、母語・非母語の固定属性に囚われず、談話参加者が折り合い

をつけながら形成した「共生日本語」の「不同意」の特徴を解明する研究を提言する。前述のように、佐々木(2006)によると、学習者を多文化共生社会の成員と捉え、自立学習・協働学習を発展させる「共生」という日本語教育の新しい理念がある。岡崎(2002)によると、「共生日本語」は「双方の文化に気づき、受けいれ、新たな文化の枠組みを自分に合った形で創造していくという『内容』の実現を担う言語である」。つまり、常に母語話者のことを優位的に考えるのではなく、両者とも「共生日本語の学び手」と捉え、相互理解を構築する過程に着目する必要がある。文化の多様性を尊重するために、今後とも、「共生日本語」の重要性が高まると予想できる。この観点から、「不同意」の使用と対応、およびその背景にある談話参加者の規範意識を扱う研究が求められていくと考える。

7. おわりに

本稿では、日本語の「不同意」に関わる談話研究を対象にし、80年代前半から現在までの変遷をたどった。また、研究の全体像を把握するために、言語的理論研究を概観して「不同意」の普遍的特徴を提示し、日本語研究・対照研究・接触場面の研究からなる実証研究の視点と主な成果を整理した。最後に、先行研究の改善点を踏まえて、今後の方向性に関して①文脈を考慮して「不同意」を中立的に捉えること、②「不同意」の分析対象の範囲を拡張し、「談話レベル」「マルチモーダルレベル」の考察も含めるようにすること、③「共生日本語」に依る接触場面の研究を増やすことという3点提言を行った。今後の課題として、本稿では検討できなかった英語・中国語の「不同意」談話研究を射程に入れて、通言語的な考察を行い、「不同意」のメカニズムを解明していきたい。

袁　姝(えん しゅ) YUAN, Shu
東京外国語大学大学院　博士後期課程

参考文献

Angouri, J., & Locher, M. (2012). Theorising disagreement. Journal of Pragmatics, 44(12), 1549-1553.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子(監訳)(2011)ポライトネス言語使用における, ある普遍現象 東京:研究社)

Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. Applied Linguistics, 1(1), 1-47.

早野 薫(2018)認識的テリトリー:知識・経験の区分と会話の組織　平本 毅・横森 大輔・増田 将伸・戸江 哲理・城 綾実(編)会話分析の広がり(pp.193-224)東京:ひつじ書房

平野 美恵子(2006)多文化共生指向の日本語教育実習生による反対意見表明の変化－ティーチャー・コミュニティー構築の過程から－　WEB版リテラシーズ, 3(1), 21-31.

Honda, A. (2002). Conflict management in Japanese public affairs talk shows. Journal of Pragmatics, 34(5), 573-608.

堀田 智子(2014)中国人日本語学習者の「不同意」行為－中間言語語用論の観点から－　東北大学大学院国際文化研究科博士論文(未公刊)

胡 方方(2018)日本語上級学習者のピア・リーディング談話の多角的分析 : 発話機能と司会役の役割を中心に　一橋大学大学院言語社会研究科博士論文(未公刊)

糸井 通浩(2003) 文章・談話研究の歴史と展望　佐久間 まゆみ(編)朝倉日本語講座 7 文章・談話(pp.275-297)　東京:朝倉書店

金 桂英(2015)話し合いでの「不同意コミュニケーション」における「配慮」の様相 : 接触場面での物事を決める話し合いの分析から　待遇コミュニケーション研究, 12, 35-51.

Jones, K. A. (1990). *Conflict in Japanese conversation*. Doctoral dissertation, Michigan: University of Michigan.

木山 幸子(2005)日本語の雑談における不同意の相互作用－儀礼的不同意に焦点をおいて－　言語情報学研究報告, 9, 251-265.

Leech, G. N. (1983). *Principles of pragmatics*. London: Routledge（池上 嘉彦・河上 誓作(訳)(1987)語用論　東京:紀伊國屋書店）

Levinson, S., C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press（安井稔・奥田夏子(訳)(1990)英語語用論　東京:研究社）

李 吉鎔(2003)韓・日両言語の反対意見表明行動の対照研究－場の改まり度による表現形式の使い分けを中心に－　阪大日本語研究, 15, 67-88.

李 吉鎔(2001)日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究 :談話構造とスキーマを中心として阪大日本語研究, 13, 19-32.

南 不二男(1974) 現代日本語の構造　東京:大修館書店

宮地 裕(1952)否定表現の一考察　西京大學學術報告. 人文, 2, 44-57.

Mori, J. (1999). *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese: Connective Expressions and Turn Construction*. John Benjamins Publishing Company.

中井 陽子(2020)話し合いの会話データ分析活動における学び－日本人学生と外国人留学生が参加する学部授業の分析－　東京外国語大学論集, 101, 73-93.

Noda, M. (2004). Hidden Disagreement: Relation Maintenance in the Japanese Discourse of Disagreement. In Szatrowski, P. E. (2004)(Ed.). *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction* (pp. 95-123). Tokyo: Kurosio Publishers.

野田 尚史・益岡 隆志・佐久間 まゆみ・田窪 行則(2002)日本語の文法 4 複文と談話 東京:岩波書店

岡崎 眸(2002)内容重視の日本語教育－多言語多文化共生社会における日本語教育の視点から－ 岡崎 眸(編)科学研究費補助金研究成果報告書 内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築, 322-339.（https://www.dc.ocha.ac.jp/comparative-cultures/jle/Okazaki/naiyoo-juushi.html, 2022/3/1 最終確認）

岡崎 敏雄(1994)コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化―日本人と外国人の日本語―　日本語学, 13(12), 60-73.

大塚 淳子(2005)不同意の表明 : 日本人大学生の場合　日本語・日本文化, (31), 81-92.

大津 友美(2004)親しい友人同士の会話におけるポジティプ・ポライトネス:「遊び」としての対立行動に注目して　社会言語科学, 6(2), 44-53.

大津 友美(2001)雑談における共感作りのためのコミュニケーション行動－不一致を表明する際の緩和処置について－ 言葉と文化, 2, 211-222.

大和 祐子(2009)意見の一致を目指す会話における意見交渉の過程―意見が異なる者同士の「歩み寄り」の始まりを中心に― 言葉と文化, 10, 59-75.

Pomerantz, A. (1984). Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes. In Atkinson,M., & Heritage,J. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (pp. 57-101). Cambridge: Cambridge University Press.

Sacks,H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for

conversation.（西阪仰（訳）（2010）会話分析基本論集－順番交替と修復の組織（pp.7-153）京都：世界思想社）

佐々木 倫子（2006）パラダイムシフト再考　国立国語研究所（編）日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性（pp.259-283）東京：アルク

白井 香織（2009）不同意の間接的発話行為に関する異文化比較研究：日本語とアメリカ英語の場合　千葉商大紀要, 47(1), 87-101.

Sifianou, M. (2012). Disagreements, face and politeness. Journal of Pragmatics, 44(12), 1554–1564.

杉本 明子（2002）職場における相互理解のコミュニケーション構造：否定・反論に対応する言語行動の分析　日本教育心理学会総会発表論文集, 44(0), 433.

高井 美穂（2009）問題解決の連鎖における解決志向の不同意と対立志向の不同意　日本語・日本文化研究, 19, 165-178.

高宮 優実（2012）対立場面における会話のストラテジー　ことば, 33, 85-101.

武黒 麻紀子（2018）ディスコーダンスと言語コミュニケーション　武黒 麻紀子（編）相互行為におけるディスコーダンス－言語人類学からみた不一致・不調和・葛藤－（pp.1-27）　東京：ひつじ書房

王 萌（2013）日本人と中国人の不同意表明：ポライトネスの観点から　福岡：花書院

ワンウィサー・クンパッタラニラン（2010）日本語とタイ語における提案に対する反対意見の対照研究－目上に対する反対意見表明を中心として－　日本語・日本文化研究, 20, 77-90.

Watanabe, S. (2004). Conflict Management Strategies in Japanese Group Discussions. In Szatrowski, P. E. (2004)(Ed.). *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction* (pp. 65-93). Tokyo: Kurosio Publishers.

楊 昉（2014）日中接触場面における中国語母語話者の不一致応答の言語管理、生成のプロセス　千葉大学大学院人文社会科学研究科博士論文（未公刊）

楊 昉（2011）中国語母語話者の不一致応答の分析－日本語母語話者に留意された逸脱の視点から　千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書, 9, 69-86.

張 允娥（2017）日韓同性間の会話における不同意・否定的評価の相互行為：ジェンダーとポライトネスの観点からみる対立と冗談　阪大日本語研究, 29, 101-128.

中国人日本語学習者のオノマトペの習得研究

―音象徴性を中心に―

A Study on Chinese Japanese Learners' Acquisition of Onomatopoeia Taking Phonetic Symbolism as an Example

周　超超・葛　茜

As we all know, onomatopoeia is an important part of Japanese. But it is also one of the difficulties for Chinese Japanese learners. Therefore, in order to explore the specific problems of learners' lack or inadequate grasp of phonetic symbolism and provide them with reference suggestions to promote their acquisition of onomatopoeia, by using semantic differential technique,this study investigated and analyzed the impression of Chinese Japanese learners on four types of onomatopoeia like "ABっ", "ABり", "ABん", "ABAB".

The results show that under the influence of mother tongue, learners hold the impression of repeated and continuous phonetic symbolism of "ABAB" because there are also "continuous and repeated" onomatopoeia words in Chinese.Because there are no corresponding phonological impression in the other three forms of onomatopoeia learners tend to memorize onomatopoeia as simple words. However, due to the short learning time and the insufficient introduction of Japanese onomatopoeia in the textbooks used in domestic intensive reading courses, the students in the second grade were not as good as the students in the other grades in terms of vocabulary accumulation. Secondly, according to the curriculum of Japanese major education in China, intensive reading is the main subject for students to acquire and accumulate basic vocabulary, but the three universities have cancelled intensive reading courses in the fourth grade. Compared with the basic stage, the fourth grade students shift their focus and their vocabulary accumulation is relatively stagnant. Therefore, the third grade students have the strongest impression perception of grasping the symbol of "ABAB".

These results further indicate the significance of positive transfer of mother tongue in second language acquisition and the important role of vocabulary accumulation in Japanese onomatopoeia acquisition.

【キーワード】オノマトペ、音象徴性、イメージ、意味微分法
Onomatopoeia, Phonetic Symbolism, Impression, Semantic Differential Technique

1. はじめに

周知の通り、日本人は日常的にオノマトペを多用するが、中国人日本語学習者にとって、そうしたオノマトペは習得が難しい学習項目の一つである。そこには様々な要因が考えられるが、特に、中国人日本語学習者における、日本語のオノマトペの音象徴性に対するイメージの欠如が挙げられる。この場合の「イメージ」とは、音声学の領域では、オノマトペを聞いた際に思い浮かぶものの姿などを指しておる。先行研究では「感覚」「知覚」「印象」などの用語も用いられているが、ここでは吉田(2010)に従って「イメージ」を用いる。先行研究によれば、日本人は乳幼児期から音象徴の感覚を身につけており、オノマトペの音からイメージを感じ取り、また知らないオノマトペを聞いても、なんとなくそのイメージを思い浮かべることができるそうである(吉田2010)。他方、中国人日本語学習者は、日本人が持つ日本語の音象徴のイメージが形成されていないため、日本語のオノマトペの意味や違いを理解することは容

易ではない。ただし、金(1989)によれば、日中両言語のオノマトペが類似している場合に限り、日本語のオノマトペを聞いた際、それと類似する中国語のオノマトペの音を中国人が想起する傾向があり、これを踏まえれば、オノマトペの音象徴性という点では、母語からの正の転移も認められるのである。しかし、具体的にどのような音が転移されやすいのか、またその理由はなぜかという点に関しては、未だに研究の余地が残されているといえる。

以上から本研究は、中国人日本語学習者を対象とし、彼らが日本語のオノマトペに対して抱く、音象徴上の具体的なイメージを明らかにし、中国人日本語学習者のオノマトペ習得への一助としたい。

2. 先行研究

以下、2.1節では日中オノマトペについての研究から、2.2節では中国人学習者の習得に着目した研究から、先行文献を検討する。

2.1 日中オノマトペについての研究

オノマトペの定義、形態、分類に関する先行研究は非常に多く、代表的なものとして、天沼(1974)、金田一(1978)、筧等(1993)などの研究が挙げられる。そのなかから金田一(1978)の見解を参照すると、オノマトペは「外界の音」を写す擬音語と「音を立てないもの」を音によって象徴的に表す擬態語の二つに分類される。さらに前者の擬音語は、「無生物の音」を表す擬音語と「生物の声」を表す擬声語の二つに分かれ、後者の擬態語は「無生物の状態」を表す擬態語、「生物の状態(動作容態)」を表す擬容語、「人間の心の状態」を表す擬情語の三つに分かれるそうである。一方、中国語では、日本語の擬音語に対応するものは「象声詞」と呼ばれている。李(2006)は、中国語の辞典『辞海』を参照し、この象声詞を、自然の音を模倣する語であるとした。他方、擬態語は、日本語、英語、韓国語においては擬音語と並列するが、中国語では擬態語の機能を持つ語は、様子や状態を表す形容詞に該当するとの見解を示した。このように見れば、日中両言語のオノマトペには、定義や分類上、大きな相違があることが窺われる。

では、音象徴性とは何か。芳賀(1977)によれば、言語には、それが指示する歴史的・社会的な約束として定められた意味の部分と、発話ダイナミックスの強勢と高低による感情の強弱があり、それらが象徴性と呼ばれる。この点をふまえ、平田・浮田(2008)は、音声が単なる記号列であり、語の意味を指示するために存在するとみなす「言語の恣意性」(Saussure2001)という考えとやや異なり、音声が性質・イメージをもたらす現象こそが音象徴であると指摘している。つまり、音象徴性とは、音韻や音素に潜在する象徴性であり、音と意味の直接的な対応関係を示すものなのである(Hinton, Nichols, Ohara2006)。

こうした日本語のオノマトペの音象徴性について、金田一(1978)は、eの音があまり品のないというニュアンスを含み、iの音が小さいことや運動の素早さを表し、aとoの音はiの意味に対立する傾向があると述べている。また、清音は鋭いもの、軽いもの、小さいもの、美しいものを表すのに対し、濁音は鈍いもの、重いもの、大きいもの、汚いものを表すとし、音象徴語の音と意味の関係を詳細に分析した。また、田守・スコウラップ(1999)は、「オノマトペ標識」[1]と呼ばれる促音、撥音、「り」音、母音の長音・反復の音象徴性について「語末の促音は瞬時性、スピード、急な終わり方;語末の「ん」は共鳴、語中の「ん」

1　日向・笹目(1999)は、擬音語と擬態語1647語を、その語形から49類型に分類している。その分類で最も多く見られるのが「ころころ」のような「ABAB」型である。次いで多い順に言えば、「ころっ」「にこっ」などの「AB っ」型、「ころり」「ずばり」などの「AB り」型、「すっきり」「はっきり」などの「A っ B り」型、「ぽかん」のような「AB ん」型と続く。そして、これら5つの上位の語形とその変種のほぼすべての語形の形態には、「促音」「撥音」「り音」「反復」「母音の長音化」のいずれかが伴う。これらは「オノマトペ標識」と呼ばれ、語がその形態からオノマトペと認識される重要な要素となっている。

は強調;母音の反復は音や動作の繰り返しないし連続;「り」音はゆったりとした感じ」を与えると指摘している。さらに仲本(2010)は、田守・スコウラップ(1999)の研究を踏まえ、具体例を挙げながら、清音と濁音、「AB っ」と「ABり」、「ABAB」と「ABん」の音象徴上の区別について、清音は小さな物、軽量、少量、肯定的な出来事や状態、濁音は大きな物、重量、多量、否定的な出来事や状態;「AB っ」ははやい動作、「ABり」はおそい動作;「ABAB」は進行相、「ABん」は結果相を示すと述べている。加えて、浜野(2014)によると、「っ」「り」「ん」のような促音、撥音などの形での拍の挿入は、一般的に何らかの強調の意味が付加されると指摘している。こうした見解をまとめると、オノマトペ標識の音象徴性は、下記の表1のような特徴を有することになる。

表1　オノマトペ標識の音象徴特徴

類別	特徴
「AB っ」	瞬時性、スピード、音や運動が急激で、唐突に終結、収束すること
「AB り」	ゆったりとした感じ
「AB ん」	共鳴、余韻のある音
「ABAB」	音や動作や状態の繰り返し、連続
「AB っ」と「AB り」	AB っ：はやい動作　AB り：おそい動作
「ABAB」と「AB ん」	ABAB：進行相　AB ん：結果相

他方、中国語における「象声詞」の音象徴性について、聶(2006)は、「ABAB」の形によって音の反復・連続を表すと指摘している。また、呉(2008)は、母音aは大きく、明快なこと、母音iは小さなこと、母音eは消極的な意味を表すとし、d、tの子音は通常硬い物にぶつかる時に発する音や金属による大きい音を表し、s音は摩擦の音を表し、ng音は音の延長というニュアンスを含んでおり、b、p音は破裂の音を表す場合が多いという。さらに、夏(2019)は、音象徴に基づく「笑い」に注目し、中国語も日本語も、母音oと似ている擬音語が、女性的な笑い方として多用されると指摘している。このように、日中両言語のオノマトペの音象徴性では、大きな相違点が見られる。しかし、そこには類似点もある。それは、清濁の対立や、母音のaはiより大きく、明快なイメージを有すること、そしてABABの形で反復・連続を表すことなどである。

2.2 中国人学習者の習得に着目した研究

2.1の節では日中オノマトペの音象徴上の類似性を検討したが、そのような類似性をもとに、中国人学習者が、日本語のオノマトペ習得において、どのような転移を経験しているのかについては不明瞭であり、それを検証したものは少ない。

こうしたなか、「意味微分法」という手法を用い、日本語学習者のオノマトペに対するイメージや感覚を研究した成果がある。この意味微分法とは、「SD法」(Semantic Differential Technique)とも呼ばれ、心理学者Osgoodが案出したものであり、「測定しようとする対象に応じたいく組かの対形容詞を両極とする7段階評定尺度を用いた統制連想法」と言われている(芳賀1963:34)。芳賀(1977)は、25尺度から成る意味微分法を用い、「ハ」「パ」「バ」の3種の語音を含めた6通りの無意味綴の音韻象徴性を大学生の被験者に評定させた。その評定の結果から、これら3種の語音の間では「パ」と「バ」がはっきりと対立しており、「ハ」は以上両者の中間に、「パ」寄りの位置で評価されるということが分かった。また王(2012)は、同じ意味微分法によって、日本語母語話者と中国人学習者が持つ、清濁音の対立における感覚の違いを調査した。その結果、中国人学習者も日本語母語話者も「語頭子音が有声音であるオノマトペ」は、

「語頭子音が無声音であるオノマトペ」に比べ、より一層「大きい・暗い・気持ちよくない・重い・うるさい・悪い」というイメージで捉えているとし、語頭子音が/h/‐/b/‐/p/の場合、日本人母語話者が感じている音声的な感覚は、中国人学習者には感じられていないということが明らかとなった。さらに、飯田・玉岡・初(2012)は、中国人学習者の読解能力と音象徴語の意味理解との関係性について調査を行った結果、読解能力が高いほど、音象徴語の意味への理解も高くなると指摘した。加えて、馮・玉岡(2018)は、中国人日本語学習者は日本語母語話者のように、聴覚的なイメージに基づいて日本語の擬音語を理解できず、また中国語のなかで似ている発音の擬音語から意味を類似することも難しい場合、語彙知識として習得することになると述べている。

こうした音象徴に対するイメージのほかに、オノマトペの習得が困難になる要因についての研究もある。例えば、張(2010)は、中国人学習者はオノマトペの訳語に注意を引かれやすく、その音韻・形態・音象徴性に関する認識が薄いと指摘している。また、譚・孟(2012)は、中国人学習者は、オノマトペの重要性を十分に認識しておらず、学習方法も不適切で、漢字に頼る傾向があると述べている。他にも、オノマトペの語彙教育を踏まえた研究もある。例えば、三上(2006)は、初級段階の教科書やカリキュラムの多くは文型・文法シラバスを中心に構築され、学習者が必要とするオノマトペの語彙の教育には目が向けられていないという。また、肖(2011)は、日本の留学生用の教科書と日本の国語教科書におけるオノマトペの扱い方を、中国の四種類の日本語教科書と比較検討した結果、オノマトペの語彙数が決して高くはないこと、そしてオノマトペに関する練習問題がわずかしかないことを指摘した。さらに、魏(2016)は、四種類の精読教科書に掲載されているオノマトペの語彙数や導入の程度、説明内容などを調査した結果、「人の動き」に関するオノマトペが一番多く導入されているが、各教科書におけるオノマトペの数は少なく、同時にオノマトペの扱い方も不適切だと指摘している。加えて、宮(2020)の研究結果も、上記の肖(2011)や魏(2016)とほぼ同じ結論を出している。

以上から、日中両言語のオノマトペには、定義と分類に相違があっても、一部の母音や子音の音象徴性においては、類似性が見られることが分かった。ただし、中国人学習者が持つ音象徴上のイメージが母語話者と異なる部分もあり、その際はオノマトペを直観的かつ経験的に習得する傾向もある。また、従来の研究では、清濁の対立や母音の長音化を対象に研究されたものが多く、「オノマトペ標識」で表記されうるオノマトペを対象に行った研究は、管見の限りそれほど多くはない。代表的なものとして、対照研究の視点から、比喩としてのオノマトペ「ころころ」と「圓滾滾」とを比較した呂(2004)や、「ABAB」型の「ごろごろ」「ばたばた」を例に、多義的なオノマトペの意味・用法を研究した三上(2004)、共感覚比喩の視座から、五感を表す「ABAB」型のオノマトペにおける意味転用を研究した張(2020)などが挙げられる。しかし、研究手法という点で、アンケート調査をメインとしつつ、音象徴性のイメージをより明確かつ具体的に可視化するという点では研究の余地が残されており、同時に、学習年数によって、イメージが同じかどうかを明らにすることも必要であろう。

そこで、本研究では、以下の二つの研究課題を設定し、研究を進めることとする。

1. 中国人日本語学習者が、「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」型のオノマトペに対して、具体的にどのような音象徴上のイメージを持っているのか。
2. 学年によって、このような音象徴上のイメージには変化が見られるのか。

本研究は、音象徴性の視点から、この二点を明らかにし、中国人日本語学習者のオノマトペの習得および指導方法の改善のための一助としたい。

3. 調査の概要

本研究は、まず音声ビデオを作成し、中国の三つの大学の日本語専攻生に聞かせ、アンケートに答えてもらい、その結果を意味微分法や統計処理ソフトを用いて分析した。具体的な過程は、以下である。

3.1 音声ビデオの作成

芳賀(1963)の評価項目に基づき、本研究は10項目を評価項目とした(表2)。また、それぞれ四つの対応する形式が実際に使われる(無意味語ではない)ということを基準とし、6語根24語[2]のオノマトペを刺激語として選定した(表3)。

表2　評価項目

①早い—遅い	⑥鋭い—鈍い
②強い—弱い	⑦硬い—柔らかい
③変わりやすい—変わらない	⑧気持ち良い—気持ち悪い
④明るい—暗い	⑨重い—軽い
⑤単発的だ—連続的だ	⑩結果的だ—進行的だ

表3　刺激語

「AB っ」	「AB り」	「AB ん」	「ABAB」
かちっと	かちりと	かちんと	かちかち
とろっと	とろりと	とろんと	とろとろ
ぱたっと	ぱたりと	ぱたんと	ぱたぱた
ちくっと	ちくりと	ちくんと	ちくちく
ころっと	ころりと	ころんと	ころころ
ぼろっと	ぼろりと	ぼろんと	ぼろぼろ

評価項目と刺激語に基づき、調査用の音声ビデオを作成した。音声ビデオは中国在住の日本人教師に協力を仰ぎ、静かな教室で録音し、ノイズ処置も行った。また、本調査を行う前に、中国人日本語学習者10名に予備調査を行った。そして被験者から「一語セットの長さが少し短い」「一単語の読み上げる回数が少し足りない」というフィードバックを得て、以下の表4のように修正した。

表4　本調査で使用した音声ビデオの改善点

改善項目	予備調査	本調査
⑴一語セットの長さ	60s	80s
⑵一単語あたりの読み上げた回数	10 回	14 回
⑶一単語ごとの前後の提示音	ある	ある
⑷男女の声の間の間隔	ある	ある

3.2 調査の実施

本研究の調査は、中国南方にある三つの大学に在籍している日本語専攻生を対象に行った。被験者

2　この 24 語はすべて『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』講談社（山口 2003）から抽出したものである。

全員が、入学して初めて日本語を学び始めた学生である。そのうち、在籍年数2年は66人、3年は64人、4年は60人で、被験者全体の分布は、ほぼ1:1:1であった。こうした被験者の構成は、以下の表5で示した。

表5　被験者の構成

学年	2年	3年	4年	合計
A大学	24人	22人	30人	76人
B大学	16人	27人	10人	53人
C大学	26人	15人	20人	61人
合計	66人	64人	60人	190人

調査は2018年の9月と12月に、三つの大学で実施した。被験者全員を一つのマルチメディア教室に集め、以下の手順で調査した。なお、調査票の配布から調査終了まで、およそ45分かかっている。

(1)まず、power pointで調査の目的、回答の仕方、音声データを流す手順について、被験者に詳しく説明した。なお、power pointは日本語で作成しているが、説明は中国語で行った。

(2)次に、アンケート用紙を全員に配り、アンケートの回答方法、7段階評価方法、および評価項目について目を通すよう指示し、調査方法に関する質疑応答の時間も設けた。被験者からの質問は主に7段階評価方法に関するもので、必要に応じて詳しく説明した。

(3)さらに、調査が円滑に進むよう、調査を始める前に、二つの例を挙げて被験者に評価をさせた。その上で、有効なデータを選別するために、アンケートの回答方法は単語の聞き取り、単語の意味理解判断、7段階評価という三つの段階に分けているが、具体的には付録1のように示した。

3.3 分析の枠組み

調査結果は、芳賀(1977)に倣い、意味微分法によって分析した。意味微分法の具体的な手続きについて、芳賀(1977:67-68)は次のように説明している。

> 意味微分法は一種の心理学的尺度(モノサシ) psychological scaleである。例えば、「よい－わるい」「活発な－活発でない」などの形容詞対(日本語では形容動詞対も用いる)を数個ないし数10箇用意して、それから(よいⅢⅢわるい)のように7段階の尺度を作り、ある概念の印象がこの7段階のいずれにあてはまるかを√印で被験者に記入させる。被験者には、あらかじめ「よい」に最も近い段階を「非常によい」と考え、以下順に「かなりよい」「ややよい」「中間あるいはどちらでもない」「ややわるい」「かなりわるい」「非常にわるい」と考えるように教示の中で説明しておく。以上は「よい－わるい」についてであるが、他の形容詞対の尺度についても同様な方法でチェックを入れるように被験者に指示する。この方法を用いることにより、必要なだけの形容詞対の尺度の上で、評価すべき対象物の印象をチェックすることができる。つぎに、チェックによる評定の結果は数量化される。「よい－わるい」の尺度では、「非常によい」に7点を配し、以下順に6、5、4、3、2点を配し、「非常にわるい」には1点を配する。こうして、例えばある被験者集団にある対象物の印象をチェックさせた結果は、その得点を平均することによってOsgoodが意味得点semantic scoresと呼んだものに変換することができる。この意味得点をプロフィールで示したものが意味プロフィールSemantic pro1eである。さらに、また、2つのプロフィールの間の類似性(あるいは相違性)をみるために、2つのプロフィール間の距離を指数化することも試みられた。Osgoodはその指数を意味距離distance score (D.S.)と呼び、つぎの式で表わしている。

D.S.=$\sqrt{\sum_{i=1}^{n} d_i^2}$ 但し d_i は各尺度上の二つのプロフィール間のずれの値

概略すると、まず、7段階評価によって、被験者によって異なる対象物につける点数が得られる。例えば、尺度1と尺度2を設け、対象物1、対象物2に調査を行った。尺度1において、対象物1、対象物2につける被験者全体の得点を平均化することで、それぞれ意味得点1と意味得点2を得られる。すなわち、意味得点が、ある対象物に対する被験者全体の点数の平均値となるということである。この意味得点1と2をプロフィールすると、意味プロフィールAになる。尺度2にも２つの意味得点をプロフィールすることによって、意味プロフィールBになる。意味プロフィールとは、対象物のあいだの相違点と共通点を直観的に表すものである。また、意味距離とは、二つの間の距離を指数化することによって得たものである。この例では、意味距離は意味プロフィールAとBを上記の式で指数化することで得られた結果である。つまり、意味距離は、いずれも任意の2つのプロフィールあいだの隔たり、または類似性を示しているが、意味距離の結果を比較してみると、この値が大きくなればなるほど、プロフィールのあいだに隔たりがあることを意味する。

3.4 データ分析ソフト

本研究は、SPSSというソフトを用いて統計分析を行った。SPSSとは、統計製品とサービスソリューション（Statistical Product and Service Solutions）の略称であり、IBM社の統計学分析演算、データマイニング、予測分析、意思決定支援タスクで用いられるソフトウェア製品や関連サービスの総称である。また、データをより直観的かつ客観的に示すために、本研究はOriginというソフトを用い、意味プロフィールの図形分析を行った。OriginはOrigin Lab会社によって開発された製図、データ分析のソフトであり、データを2D、3Dなどの様々な図形によって表す機能がある。

3.5 その他の資料収集

被験者の日本語習得の状況を詳細に把握するため、三大学の日本語専攻のカリキュラムや、使用する教科書なども参考資料として収集した。中国の大学における日本語専攻の教育では、教育部の指導要領である『教学大綱』に則りつつ、各大学の裁量で柔軟にカリキュラムを設定しているが、そこには共通点が多い。基本的に、大学の1年2年は基礎段階とされ、日本語の知識を伝授し、四技能を訓練するための科目――精読を中心に、読解、聴解、発音、文法、作文など――が設けられている。3年4年は高学年段階とされ、日本語学や日本の社会・文化などに関する高度な専門知識を教える科目が設けられている（葛2012）。特に4年生では、インターンや卒論の作成を考慮し、日本語そのものの語学授業はなくなっている。こうした傾向は、三大学から収集したカリキュラムからも、同様に見られた。

4. 調査の結果と分析

4.1 被験者全体の分析

以下の表6は、「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」型のオノマトペをそれぞれ比較し、その差における意味距離を計算したものである。

表6　四つの型のオノマトペにおける意味距離

語根	「AB っ」「AB り」	「AB っ」「AB ん」	「AB っ」「ABAB」	「AB り」「AB ん」	「AB り」「ABAB」	「ABAB」「AB ん」
かち	1.251	1.288	2.052	1.771	1.289	2.451
とろ	1.329	1.383	1.900	2.258	1.149	2.571
ぱた	0.754	1.329	2.377	1.472	1.917	2.356
ちく	1.468	2.395	2.785	3.202	1.585	4.365
ころ	1.366	1.406	2.128	2.282	1.21	2.799
ぼろ	1.051	1.275	2.004	1.552	1.412	2.611
平均値	1.181	1.479	2.179	2.013	1.425	2.823

この意味距離の平均値を見ると、「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」型のオノマトペのなかで、意味距離が最も小さいのは「AB っ」―「ABり」(1.181)であり、最も大きいのは「ABん」―「ABAB」(2.823)であることが分かる。すなわち、被験者のイメージでは、「ABん」型と「ABAB」型のあいだでは、イメージの隔たりが最も大きく、「AB っ」型と「ABり」型とのあいだでは、隔たりが最も小さいことになる。また、語根から意味距離を見ると、意味距離が最も小さいのは「ぱたっ－ぱたり」(0.754)、最も大きいのは「ちくちく－ちくん」(4.365)の組み合わせである。すなわち、被験者のイメージにおいて、「ぱたっ－ぱたり」のあいだでは隔たりが小さいが、「ちくちく－ちくん」の間では隔たりが大きいことが分かる。これらの結果を詳しく調べるために、意味プロフィールによってさらに分析した。

「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」の意味得点の平均値をプロフィールしたものが下記の図1である。図1のなかで、太い実線が「AB っ」、赤い点線が「ABり」、細い実線(三角付け)が「ABん」、細い実線(菱形付け)が「ABAB」を表している(以下、図2 ～ 4の表記も同様)。

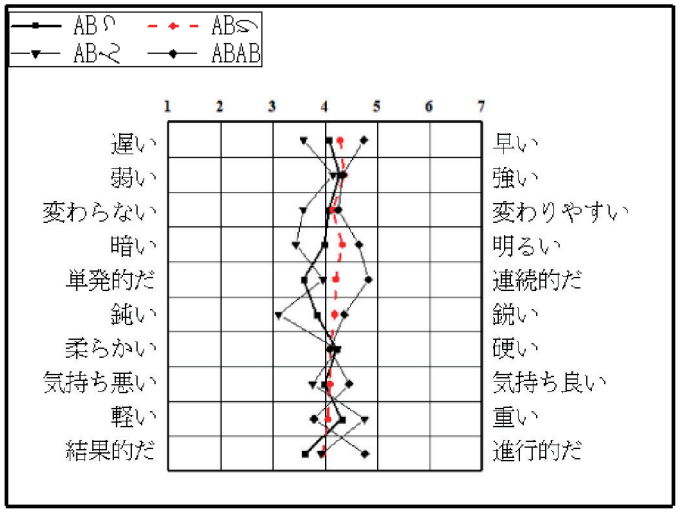


図1　被験者全体による四型のオノマトペの間の意味プロフィール

意味得点が高いほど「早い」「変わりやすい」「明るい」「連続的」「鋭い」「気持ち良い」「進行的」というイメージを持っていることになり、逆に意味得点が低いほど「遅い」「弱い」「変わらない」「暗い」「鈍い」「気持ち悪い」というイメージを持っていることになる。つまり、意味得点の高低は、被験者のイメージ

と直接関わっているのである。こうした点から図1をみると、「ABAB」を表す細い実線（菱形付け）が、他の三つの線より大きく右側に寄っていることから、「ABAB」の意味得点が高いことが分かる。それに対し、細い実線（三角付け）の「ABん」が、大きく左側に寄っていることから、その意味得点が低いことが分かる。このように、被験者全体が持っている、「ABAB」型に対する「変わりやすい」「連続的」「進行的」というイメージは、表1に示す「ABAB」型の「音や動作や状態の繰り返し、連続」という音象徴と一致していることが分かる。「ABん」型には「暗い」「鈍い」というイメージが少し見えるが、明確ではない。また、「AB っ」型の分布状況をみると、太い実線の「AB っ」は、その大部分が「ABAB」型、「ABん」型の両線のあいだを通っているが、「単発的―連続的」「結果的―進行的」の評価項目においては、大きく左側に寄っているので、意味得点が最も低いことになる。この点から、被験者が「AB っ」型に「単発的」「結果的」というイメージを持っていると言えよう。最後に、「ABり」型の赤い点線がおおよそ「ABAB」「ABん」の両線の真ん中を通っており、かつ他の三線と交差している点も見られるが、大きく右側、左側に寄っている箇所はない。つまり、「ABり」型に対する被験者のイメージは、非常に曖昧であることを示していると考えられる。

次に、「ABん」「ABAB」型を表す細い実線、「AB っ」「ABり」型を表す太い線を、それぞれ見ていこう。前述のように、「ABん」「ABAB」の両線は、それぞれ大きく左や右へ寄る傾向にあり、結果「弱い―強い」「柔らかい―硬い」という二つの評価項目を除き、両型の意味得点のズレが非常に大きいことが分かる。特に、「結果的―進行的」という評価項目では、「ABん」型の意味得点が「結果的」へと、また「ABAB」型の意味得点が「進行的」へと接近しており、両線において大きなズレが見られる。これは表1で示した「ABAB」は「進行相」、「ABん」は「結果相」という音象徴上の特徴と一致している。他方で、「AB っ」「ABり」型は、ともに真ん中を通っており、両線が重なっている部分も多い。特に、両型の区別が最も見られる「遅い―早い」という評価項目を見ると、「ABり」の赤い点線が「AB っ」の太い実線の近くに接近しており、しかも「ABり」の赤い実線が「AB っ」の太い実線よりも右側に寄っていることから、「早い」というイメージがより強いことが分かる。ここから分かることは、表1における「AB っ」「ABり」の音象徴上の特徴であった、「AB っ」「ABり」型のあいだには音象徴の対立があるという記述と大きくズレているということである。こうした結果を踏まえると、被験者の「ABん」「ABAB」型に対するイメージは、「ABん」「ABAB」型の音象徴性における「進行相」と「結果相」の対立と一致するが、「AB っ」「ABり」両型の音象徴性の違いは区別しにくいと判断できよう。

以上の結果から、被験者全体は、「ABAB」型のオノマトペには「繰り返し、連続」というイメージを持っているが、「AB っ」型には「瞬時性、急激、唐突に終結、収束」、「ABり」型には「ゆったりとした感じ」、「ABん」型には「共鳴、余韻」というイメージを持っていないということが判明となった。また、「AB っ」「ABり」型のあいだには、「はやい動作」と「おそい動作」という音象徴の違いを感じ取れないが、他方で「ABん」と「ABAB」型には、「結果的―進行的」という音象徴の違いを感じ取れるということも分かった。

4.2 学年による違いについて

4.2.1 分散分析からみる各学年におけるイメージの違い

本研究は、各学年の状況を統計的に精査するために分散分析を行い、有意差が出たものについては多重比較（TukeyのHSD法）も行った。その結果を、それぞれ表7から表9において示した。

表7、8、9において、評価①～評価⑩は10項の評価項目を表し、類型「1234」はそれぞれ「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」型を表している。また、「平均値±SD」は、各評価項目における四型の各得点の総体的状況である。例えば、表7の「3.60±0.75」という数値は、評価項目①「早い―遅い」における「AB っ」型オノ

マトペの得点は、最小で「3.60－0.75」、最大で「3.60＋0.75」となるという総体的な状況を示している。

表7　二年生による四型のオノマトペに対する評価の平均値及び標準偏差

	類型 1（平均値± SD）	類型 2（平均値± SD）	類型 3（平均値± SD）	類型 4（平均値± SD）	F 値	多重比較
評価①	3.60 ± 0.75	3.90 ± 0.94	3.60 ± 0.87	3.95 ± 1.11	0.745	
評価②	3.77 ± 0.67	4.09 ± 0.69	3.82 ± 0.63	3.88 ± 0.79	0.74	
評価③	4.00 ± 0.83	4.07 ± 0.77	3.82 ± 0.88	3.67 ± 0.85	0.869	
評価④	3.87 ± 0.56	4.09 ± 0.63	3.55 ± 0.63	4.20 ± 0.56	4.236**	類型 3 ＜類型 2・類型 4
評価⑤	3.94 ± 0.57	4.17 ± 0.73	3.93 ± 0.45	4.17 ± 0.69	0.841	
評価⑥	3.71 ± 0.66	4.13 ± 0.80	3.62 ± 0.55	4.06 ± 0.60	2.605	
評価⑦	3.81 ± 0.80	3.77 ± 0.73	4.07 ± 0.75	3.75 ± 0.57	0.754	
評価⑧	4.25 ± 0.74	3.88 ± 0.80	3.93 ± 0.60	4.10 ± 0.77	0.965	
評価⑨	4.25 ± 0.78	4.01 ± 0.64	4.21 ± 0.77	3.85 ± 0.65	1.223	
評価⑩	3.94 ± 0.48	3.88 ± 0.55	3.95 ± 0.69	4.08 ± 0.79	0.325	

*：P ＜ .05　**：P ＜ .01　***：P ＜ .001

上記の表7は、二年生の結果である。評価項目④「明るい―暗い」のみ、「類型3・類型2」「類型3・類型4」に有意差が見られた［F（3、55）＝4.236、P ＜.01］。

表8　三年生による四型のオノマトペに対する評価の平均値及び標準偏差

	類型 1（平均値± SD）	類型 2（平均値± SD）	類型 3（平均値± SD）	類型 4（平均値± SD）	F 値	多重比較
評価①	4.21 ± 0.79	4.48 ± 0.78	3.46 ± 1.10	5.24 ± 0.99	10.142***	類型 3 ＜類型 2・類型 4 類型 1 ＜類型 4
評価②	4.65 ± 0.69	4.54 ± 0.66	4.38 ± 0.78	4.43 ± 0.73	0.459	
評価③	3.82 ± 0.83	4.16 ± 0.80	3.08 ± 0.63	4.63 ± 1.23	8.305***	類型 3 ＜類型 2 類型 1 ＜類型 4
評価④	4.00 ± 0.94	4.52 ± 0.68	3.35 ± 1.00	4.76 ± 0.77	8.396***	類型 3 ＜類型 2・類型 4
評価⑤	3.18 ± 0.80	3.81 ± 1.04	3.83 ± 0.88	5.32 ± 0.90	15.942***	類型 4 ＞類型 1・類型 2・類型 3
評価⑥	3.88 ± 0.75	4.32 ± 0.72	2.93 ± 1.03	4.41 ± 0.81	10.538***	類型 3 ＜類型 1・類型 2・類型 4
評価⑦	4.37 ± 0.87	4.22 ± 0.68	4.33 ± 0.71	4.21 ± 0.72	0.179	
評価⑧	3.88 ± 0.85	4.29 ± 0.81	3.81 ± 1.07	4.77 ± 0.86	3.85*	類型 4 ＞類型 1・類型 3
評価⑨	4.50 ± 0.98	4.07 ± 0.81	5.24 ± 0.76	3.70 ± 0.89	9.392***	類型 3 ＞類型 2・類型 4
評価⑩	3.31 ± 1.01	3.74 ± 1.08	3.77 ± 0.96	5.44 ± 0.73	15.459***	類型 4 ＞類型 1・類型 2・類型 3

*：P ＜ .05　**：P ＜ .01　***：P ＜ .001

上記の表8は、三年生の結果である。評価項目②⑦を除き、残りの8項目に有意差が見られた。評価①においては、「類型3・類型2」「類型3・類型4」「類型1・類型4」に、［F（3、57）＝10.142、P＜.001］の有意差があり、評価③においては、「類型3・類型2」「類型1・類型4」に、［F（3、57）＝8.305、P＜.001］の有意差が認められた。また、評価④⑨においては、「類型3・類型2」「類型3・類型4」に、［F（3、57）＝8.396、P＜.001、F（3、57）＝9.392、P＜.001］の有意差が見られた。評価⑤⑩では、ともに「類型4・類型1」「類型4・類型2」「類型4・類型3」に、［F（3、57）＝15.942、P＜.001、F（3、57）＝15.459、P＜.001］の有意差が

認められた。さらに、評価⑥においては、「類型3・類型1」「類型3・類型2」「類型3・類型4」に、[F（3、57）＝10.538、P＜.001]の有意差があり、評価⑧では、「類型4・類型1」「類型4・類型3」に、[F（3、57）＝3.850、P＜0.05]の有意差が認められた。

表9　四年生による四型のオノマトペに対する評価の平均値及び標準偏差

	類型１（平均値± SD）	類型２（平均値± SD）	類型３（平均値± SD）	類型４（平均値± SD）	F 値	多重比較
評価①	4.35 ± 0.82	4.45 ± 0.75	3.65 ± 0.87	4.99 ± 0.78	10.176***	類型３＜類型１・類型２・類型４ 類型１＜類型４
評価②	4.41 ± 0.85	4.46 ± 0.51	4.25 ± 0.92	4.63 ± 0.66	1.021	
評価③	4.44 ± 0.75	4.28 ± 0.63	3.73 ± 0.77	4.44 ± 0.78	4.326**	類型３＜類型１・類型４
評価④	4.06 ± 0.85	4.36 ± 0.53	3.39 ± 0.62	4.89 ± 0.76	18.289***	類型３＜類型１・類型２・類型４ 類型１＜類型４
評価⑤	3.58 ± 0.78	4.50 ± 0.88	4.04 ± 1.10	5.00 ± 1.14	8.801***	類型１＜類型２・類型４ 類型３＜類型４
評価⑥	3.88 ± 0.69	4.13 ± 0.62	2.86 ± 0.57	4.57 ± 0.77	27.703***	類型３＜類型１・類型２・類型４ 類型１＜類型４
評価⑦	4.42 ± 0.68	4.27 ± 0.59	4.28 ± 0.97	4.28 ± 0.85	0.203	
評価⑧	3.87 ± 0.74	4.11 ± 0.50	3.58 ± 0.73	4.51 ± 0.71	7.671***	類型３＜類型２・類型４ 類型１＜類型４
評価⑨	4.22 ± 0.70	4.08 ± 0.61	4.80 ± 0.78	3.78 ± 0.90	7.45***	類型３＞類型２・類型４
評価⑩	3.58 ± 0.58	4.15 ± 0.56	4.02 ± 0.84	4.82 ± 0.91	11.152***	類型１＜類型２・類型４ 類型４＞類型１・類型２・類型３

*：P＜.05　**：P＜.01　***：P＜.001

上記の表9は、四年生の結果である。これを見ると、「強い―弱い」「硬い―柔らかい」という二つの評価項目②⑦以外の、他の8項目では有意差が見られた。評価①④⑥では、ともに「類型3・類型1」「類型3・類型2」「類型3・類型4」「類型1・類型4」に、[F（3、54）＝10.176、P＜.001、F（3、54）＝18.289、P＜.001、F（3、54）＝27.703、P＜.001]の有意差が認められた。評価③では、「類型3・類型1」「類型3・類型4」に、[F（3、54）＝4.326、P＜.01]の有意差があり、評価⑤では、「類型1・類型2」「類型1・類型4」「類型3・類型4」に、[F（3、54）＝8.801、P＜.001]の有意差が見られた。また、評価⑧においては、「類型3・類型2」「類型3・類型4」「類型1・類型4」に、[F（3、54）＝7.671、P＜.001]の有意差があり、評価⑨では、「類型3・類型2」「類型3・類型4」に、[F（3、54）＝7.45、P＜.001]の有意差が認められた。最後に、評価⑩においては、「類型1・類型2」「類型1・類型4」「類型4・類型1」「類型4・類型2」「類型4・類型3」に、[F（3、54）＝11.152、P＜.001]の有意差が見られた。

以上から、10項の評価項目のなかで、二年生は評価②のみに「ABり」と「ABん」、「ABAB」と「ABん」に有意差が認められたことが分かる。また、三年生と四年生は、評価②と評価⑦を除いた残りの8項目において、「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」のあいだに有意差が見られた。つまり、上級生と比べて二年生はイメージの差が小さいことが有意差を以て示された。では、四型のオノマトペに対して、各学年が感じ取っているイメージの違いとは一体どのようなもので、また、どの程度までその違いを感じ取っているのだろうか。この点について、以下4.2.2節において、意味プロフィールの視点から検討する。

4.2.2　各学年による意味プロフィールの違い

以下の図2は、二年生の「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」型に対するイメージの意味プロフィールである。

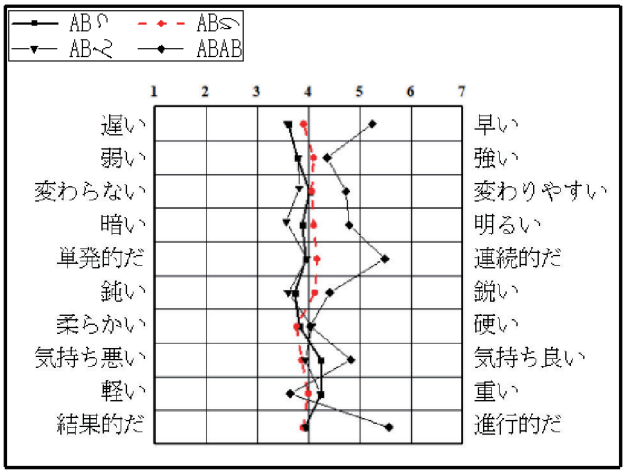


図2　二年生による四型のオノマトペの間の意味プロフィール

上記の二年生の図2を見ると、図1と大きなズレが見られるだろう。図2では、「ABAB」を表す細い実線は、図1とほぼ同じような曲線を成しており、しかも「軽い—重い」という評価項目を除き、大部分が右側に寄っている。しかし、「AB っ」「ABり」「ABん」を表す三つの線については、その大部分が重なっており、そのため各評価項目の意味得点が高くも低くもない、4.000に近いことが分かる。つまり、二年生は、この三つの型のオノマトペに対して、非常に曖昧なイメージを持っていると考えられる。このことから、二年生の学習者は「ABAB」型のみ、「連続的、進行的」というイメージを感じ取れるが、「AB っ」「ABり」「ABん」型では、その音象徴性を感じ取ることができないと言えよう。

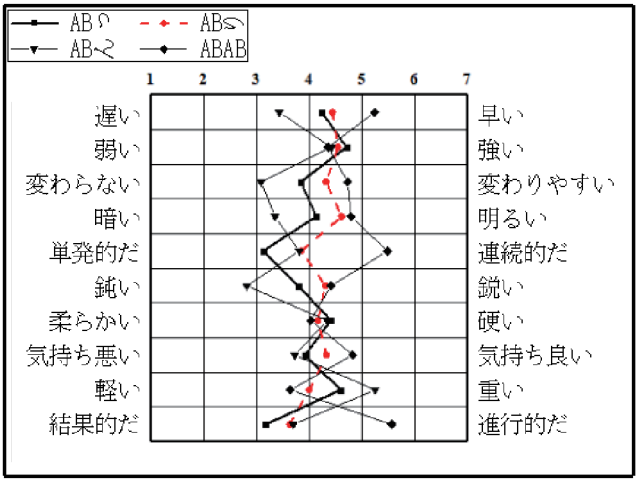


図3　三年生による四型のオノマトペの間の意味プロフィール

次に、三年生の意味プロフィールを見ていこう。上記の図3を見ると、四つの曲線の分布状況は図4と非常に似ていることが分かる。また「ABん」と「ABAB」においては、音象徴上の隔たりが大きいが、「AB っ」と「ABり」では、音象徴上の違いがはっきり見られない。しかし他方で、図4での「ABり」を表す赤い点線と比べれば、図3のは、曲線の弧度が大きくなり、各評価項目での意味得点の高低起伏がはっきりと見られる。つまり、「ABり」型に対して、三年生は四年生より敏感であると考えられる。また、「遅い—早い」「変わらない—変わりやすい」「単初的—連続的」「軽い—重い」「結果的—進行的」などの評価項目を見ると、三年生の「ABん」と「ABAB」における意味プロフィールは、四年生のそれよりも大きい。つま

り、「ABん」と「ABAB」における音象徴上の違いについて、三年生は四年生よりその違いを強く感じ取っていると推測できる。さらに、「単発的―連続的」の評価項目では、図3における「AB っ」の意味得点が、図4より左側に近く、三年生のほうが「AB っ」の音象徴性をより強く感じ取っていると言えるだろう。

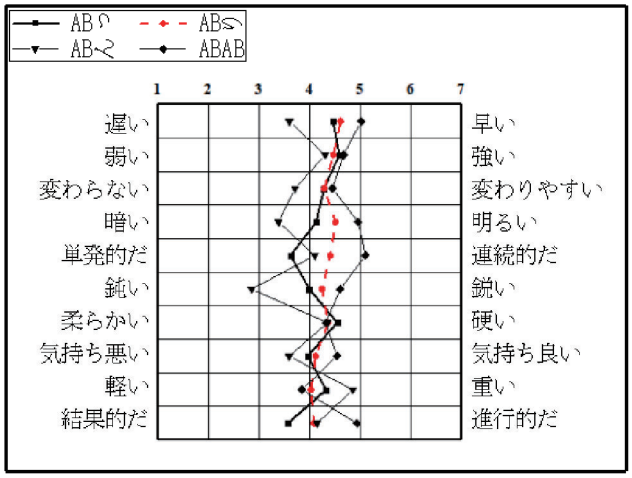


図4　四年生による四型のオノマトペの間の意味プロフィール

上記の図4を見ると、図1の分布状況とほぼ同じく、細い実線の「ABAB」の大部分が右側に寄っており、ほぼすべての項目で意味得点が高い傾向にある。他方、「ABん」を表す細い実線の大部分が左側に寄っており、この点では意味得点が低くなっている。また「AB っ」と「ABり」を表す太い実線と赤い点線が、およそ「ABAB」と「ABん」とのあいだを通っており、この点で、意味得点としては、高くも低くもないと言える。ただし、「単発的―連続的」という評価項目では、「AB っ」の意味得点が最も低く、「柔らかい―硬い」という評価項目では、「AB っ」の意味得点が最も高いことも分かる。さらに、「ABん」と「ABAB」、および「AB っ」と「ABり」の二組の意味プロフィールを見ると、「ABん」と「ABAB」組の意味プロフィールは大きく、音象徴上の隔たりも大きいが、「AB っ」と「ABり」の両型では、音象徴上の違いははっきり現れていない。こうしたことから、四年生は「ABAB」型に「連続的」「進行的」、「AB っ」型に「単発的」、また「ABAB」型に「進行相」、「ABん」型に「結果相」という音象徴上のイメージを持っていると言えるだろう。

こうした結果をまとめると、二年生、三年生、四年生は、一様に「ABAB」型に「連続的、進行的」のイメージを持っているが、なかでも三年生は、他の学年よりも強く、その音象徴性を感じ取っていることが分かる。また、三年生も四年生も「AB っ」型に「単発的」、「ABん」型と「ABAB」型とのあいだに「結果的―進行的」というイメージを持っていることが分かる。しかし、二年生に関しては、それらを全く意識していないのである。そして最後に、分散分析の結果から見ても、意味プロフィールの分布から見ても、二年生と三年生・四年生とのあいだには大きな差が見られ、また三年生は四年生よりオノマトペの音象徴性を強く感じ取っているという傾向があることも明らかになったのである。

5. 考察

本研究は、中国人日本語学習者のオノマトペの習得について、「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」型のオノマトペに対する音象徴のイメージ、および学年による違いに焦点を当て、調査を行った。その結果、本研究の課題1については、被験者全体が「ABAB」型のオノマトペに「繰り返し、連続」のイメージを持っているが、「AB っ」型に「瞬時性、急激、唐突に終結、収束」、「ABり」型に「ゆったりとした感じ」、「ABん」型に「共鳴、余韻」というイメージを持っていないことが分かった。また、「AB っ」型と「ABり」型のあい

だでは、「はやい動作」と「おそい動作」という音象徴の違いを感じ取ることができないが、「ABん」型と「ABAB」型では、「結果的―進行的」という音象徴の違いを感じ取れることが分かった。

次いで、研究課題2についてであるが、二年生、三年生、四年生ともに、「ABAB」型に「連続的、進行的」のイメージを持っているが、そのなかでも特に三年生が、そのイメージを他の学年よりも強く感じ取れていることが分かった。他方、「ABAB」型のオノマトペを除き、三年生も四年生も「AB っ」に「単発的だ」、「ABん」と「ABAB」とのあいだに「結果的―進行的」というイメージを持っているが、二年生では、そうしたイメージを全く抱いていないのである。つまり、同じ中国人学習者といっても、学年によって、音象徴上のイメージには変化が見られることが明らかとなったのである。

では、なぜこのような習得上、異なる傾向性が見られるのだろうか。L2の習得に影響を与える要因として、言語的要因、学習者の要因、並びに環境要因が挙げられるが、ここでは学習者の母語干渉と中国の大学における日本語専攻教育の特徴から考察を進めてみたい。

まず、学習者の母語干渉について考察してみよう。先述したように、中国語も「ABAB」型のオノマトペがあり、日本語と同じく「反復、連続」の音象徴イメージを持っている。この点に関して、本研究で明らかとなった、学習者が「ABAB」型のオノマトペに「繰り返し、連続」のイメージを持つという結果は、金(1989)などの先行研究の見解と一致している。つまり、学習者は、中国語の「ABAB」型オノマトペの「反復、繰り返し」の音象徴的なイメージを、日本語の「ABAB」型オノマトペのイメージにそのまま重ね合わせ、類推しているのである。他方で、「AB っ」型・「ABり」型・「ABん」型の音象徴上のイメージを持っていないという調査結果は、母語の中国語のなかに日本語のオノマトペと類似する形のオノマトペがないことから、転移が起きにくいと考えられる。

次いで、学年によって音象徴のイメージに違いが生じる理由を検討してみたい。三年生も四年生も「AB っ」に「単発的だ」、「ABん」と「ABAB」とのあいだに「結果的―進行的」というイメージを持っていたが、二年生はそうしたイメージを抱くことはなかった。この傾向は、中国の日本語専攻教育におけるオノマトペの教育のあり方に起因すると考えられる。多数の研究で指摘されているように、実際の教育現場では、学習者が必要とするオノマトペの語彙の教育には注意が向けられていない。主幹科目として各学年に設置されている「総合日本語」の教科書でも、そこで取り扱うオノマトペの語彙の数は著しく限定されている。しかし、中国人日本語学習者は、日本語母語話者のように、音象徴のイメージに基づいてオノマトペを理解できず、加えて中国語の擬音語からその意味を類推しにくい場合には、オノマトペの習得には、それを語彙知識として習得する道以外はない(馮・玉岡2018)。そのため、教科書や授業のなかで、オノマトペのインプットが欠如してしまうと、その習得は期待できないだろう。また、二年生は、体系的に日本語を学ぶ時間が短く、語彙や知識も三年生や四年生ほど多くはないので、オノマトペに関する知識も少なく、音象徴性もイメージしにくいと考えられる。

しかし、なぜ「ABAB」型の「連続的、進行的」の音象徴イメージを、四年生ではなく三年生がより強く感じ取れているのだろうか。これもオノマトペのインプット量による結果だと考えられる。既に前文で触れたように、中国の大学における日本語専攻教育は、教育部の『教学大綱』を規定に則りつつ、カリキュラムを組み立てているが、日本語そのものの学習を目的とした主幹科目である「総合日本語」は、四年時にはなくなり、その代わりに、卒論作成や日本の社会・歴史などの選択科目が設けられる。本研究の三大学のカリキュラムも、この通りである。つまり、四年生の学習者は、日本語そのものの学習よりもむしろ、「日本の社会・文化」「日本文学研究」などの専門知識の学習に精力を向けねばならず、その結果、語彙の量などが相対的に低下・停滞しているのではないかと考えられる。そしてここに、四年生において、オノマトペの学習と理解が乏しくなる一因があると考えられるのである。

これらの習得の傾向性から、中国人日本語学習者にとって、日本語のオノマトペは、音象徴をイメージしにくい語彙であり、かつ習得が難しい語彙であることが改めて証明された。そして、本研究での研究成果は、再度、母語による正の転移の活用と、オノマトペの語彙知識の増加による習得を促す必要性を示唆している。さらに、学習者にオノマトペの音象徴をどのようにイメージさせるのかという点では、発声に伴う身体感覚が音象徴のイメージ形成につながる可能性が指摘されている（平田、浮田2008）。こうした指摘から、本研究では展開できなかったが、今後、学習者のオノマトペの習得という点では、日本語を教える教員が、身体感覚を使ったオノマトペの習得を授業に導入することで、学習者の音象徴のイメージ形成を助長させるような教育現場も必要ではないかと思われるのである。

6. おわりに

本研究は、意味微分法を用い、中国人日本語学習者が抱く、「AB っ」「ABり」「ABん」「ABAB」型のオノマトペにおける音象徴性に対するイメージ調査を行った。同時に、学年によるイメージの差およびその要因も併せて考察した。

結果としては、中国人日本語学習者は「ABAB」のオノマトペに「繰り返し、連続」のイメージを持つが、「AB っ」「ABり」「ABん」の三型には、相応しい音象徴上のイメージを持っていないことが分かった。また、「ABん」と「ABAB」では、「結果的―進行的」という音象徴の違いを感じ取れるが、「AB っ」と「ABり」のあいだには、「はやい動作」と「おそい動作」という音象徴の違いを感じ取ることができないということが判明となった。同時に、二年生、三年生、四年生はともに「ABAB」型に「連続的、進行的」というイメージを持つが、学年によるイメージの差が顕著であることも明らかとなった。こうした習得の傾向性は、母語による正の転移、オノマトペに関する語彙の量や知識が影響を与えていることも示唆された。

しかし本研究では、調査の制約上、日本語母語話者のデータとの参照ができず、中国人日本語学習者のみの調査に留まっている。また、習得に影響を与える要因の考察には、さらに緻密な研究方法が必要とされるだろう。今後、本研究で明らかになった傾向性をもとに、それを母語話者のデータと参照させながら、教室内での調査や実践も加えて、研究を進めていきたい。

周　超超（しゅう　ちょうちょう）ZHOU, Chaochao
中国広東科技学院外国語学院 専任講師
葛　茜（かつ　あかね）GE, Qian
中国福州大学外国語学院　助教授

謝辞

本稿の修正に当たり、中国福州大学外国語学院の黒岡佳柾先生及び査読者より非常に有益なコメントを頂きました。この場を借りまして厚く御礼を申し上げます。

参考文献

天沼寧編（1974）『擬音語·擬態語辞典　第5版』東京堂出版
陳楊（2013）『中日拟声词对比』吉林大学硕士论文
馮亜静・玉岡賀津雄（2018）「中国人日本語学習者による擬音語と擬態語の習得に影響する要因」『中国語話者のための日本語教育研究』9、中国語話者のための日本語教育研究会編、35-51
葛茜（2012）「中国の大学日本語専攻教育は何を目指しているか―『教学大綱』の分析から―」『日本語・

日本学研究』2、日本語・日本学研究／東京外国語大学国際日本研究センター編、33-45
宮倩(2020)「关于中国日语学习者拟声拟态词习得之研究—以教材分析为中心」华东师范大学硕士论文
芳賀純(1963)「日本人学生の学習した英語名詞の意味構造の比較研究」『教育心理学研究』11（1)、日本教育心理学協会編、33-42
芳賀純(1977)「意味微分法による清音と濁音の比較 (II) :「ハ」「パ」「バ」について」『文藝言語研究. 言語篇』1、筑波大学文藝・言語学系編、65-82
浜野祥子(2014)『日本語のオノマトペ—音象徴と構造—』くろしお出版
日向茂男・笹目実(1999)「語形からみた擬音語・擬態語2」『東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学』50、東京学芸大学紀要出版委員会編、189-209
Hinton L, Nichols J, Ohala J J（2006）. Sound Symbolism. Cambridge University Pres
平田佐智子・浮田潤(2008)「音韻象徴・音象徴と身体性——言語認知過程研究をベースとした実験的アプローチの提案——」『人文論究』58（2)、関西学院大学人文学会編、49-63
飯田香織・玉岡賀津雄・初相娟(2012)「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」『日中言語研究と日本語教育』5、『日中言語研究と日本語教育』編、46-54
金慕箴(1989)「中国における日本語の擬音語・擬態語の教育について」『日本語教育』68、日本語教育学会編、83-98
金田一春彦・浅野鶴子編(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店
筧寿雄・田守育啓・村田筧寿雄・田守育啓・村田忠男・角岡賢一・小谷学 (1993)『オノマトピア：擬音・擬態語の楽園』勁草書房
李鏡児(2006)「现代汉语拟声词研究」复旦大学硕士论文
劉芸(2013)「现代汉语象声词的语言性质和运用特征」『菏泽学院学报』35（4)、菏泽学院学报编辑部编、70-72
呂佳蓉(2004)「比喩としてのオノマトペ—「ころころ」と「圓滾滾」—」『日本認知言語学会論文集』4、日本認知言語学会編、480-483
三上京子(2004)「多義オノマトペの意味・用法の記述と指導の試み——「ごろごろ」「ばたばた」を例として」『小出記念日本語教育研究会論文集』12、小出記念日本語教育研究会編、63-77
三上京子(2006)「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU 日本語教育研究』3、国際基督教大学日本語教育研究センター編、49-63
仲本康一郎(2010)「感性の言語学1：オノマトペ再考」『言葉の学び、文化の交流：山梨大学留学生センター研究紀要』5、山梨大学留学生センター編、3-14
聶仁発(2006)「关于象声词的再思考」『宁波大学学报（人文社科版)』19（1)、宁波大学学报编辑部、21-25
日本株式社会旺文社编 (1991)『日汉双解学习字典』外语教学与研究出版社
Saussure, Ferdinand de.（2001)『普通语言学教程』外语教学与研究出版社〔Saussure, Ferdinand de.（1922). *Cours de linguistique générale*. Ed. by Bally, C. and Sechehaye, A., Payot〕
篠崎摂子(2006)「精読教材の本文について」曹大峰编著『日语教学与教材创新研究—日语专业基础课程综合研究—』高等教育出版社、151-156
田守育啓(1998)「日本語オノマトペ—多様な音と様態の表現—」『日本音響学会誌』54（3)、日本音響学会編、215-222
田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999)『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版

譚冰・孟亮(2012)「オノマトペの習得について——電子科技大学日本語科の学生を対象に」『日本教育与日本学研究——大学日语教育研究国际研讨会论文集(2012)』、刘晓芳 钱晓波主编、69-74
王瑩(2011)「異なる日本語学習者による日本語のオノマトペに対する感覚評価」『日本語教育研究』57、長沼言語文化研究所編、65-82
王瑩(2012)「日本語の擬音語・擬態語に対する感覚評価を中心とした日中対照研究 : 有声破裂音と無声破裂音との比較を通して」『日中言語対照研究論集』14、日中言語対照研究会編、105-121
魏暁紅(2016)「关于日语教育中拟声拟态词导入的考察」吉林大学硕士学位论文
呉校華(2008)「现代汉语拟声词研究」南昌大学硕士论文
肖東娟(2011)「教材中拟声拟态词的研究」华中科技大学硕士学位论文
夏逸慧(2019)「音象徴に基づく「笑い」に関する擬音語の日中対照研究」『日本語教育方法研究会誌』26(1)、日本語教育方法研究会編、70-71
山口仲美編(2003)『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』講談社
吉田たか(2010)「日本語オノマトペに対する母語話者と韓国人学習者のイメージの違い—清濁の対立を中心に—」『日本語學研究』28、韓国日本語学会編、137-153
張冉(2010)「日语拟声拟态词的学习」中国海洋大学硕士论文
張園園(2020)「从通感比喻看“ABAB型”五感拟声拟态词的语义转换」吉林大学硕士论文
中国教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组(2000)《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》、大连理工大学出版社
中国教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组(2001)《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》、大连理工大学出版社

付録1

被験者の基本情報
性別：男　（　　）　　女（　　）
大学：
何年生：(1) 大学　　年生　　或いは　　(2) 院生　　年生

＊実験の手順

第一段階:聞いた単語を＿＿＿＿＿＿　に書いてください(カタカナ・ひらがな両方可)。

第二段階:聞いた単語の意味を理解しているかどうかを自分で判断し、理解できるならば、(　)の中に○を書いてから、後ろにその単語の意味を書いてください。理解できないならば、(　)の中に×を書いてください。

第三段階:引き続き単語を聞きながら、その単語は7段階のどこに当てはまるかを＿√＿印で記入してください。(例えば:「非常に早い」に7点を配し、以下順6、5、4、3、2点、「非常に遅い」には1点を配する)

＊音声データ:男女各1名、東京方言話者により自然なスピードで読み上げたもの

80ｓ／語セット(男女7回ずつ読み上げた)

第一段階＋第二段階:男2回ずつ、女2回ずつ(20ｓ)

第三段階:男5回ずつ、女5回ずつ　(60ｓ)

(一)まず、例を挙げながら試してみましょう

例1、＿＿＿＿＿＿＿＿

単語の意味:(　　)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

意味微分評定表 2――7 段階評価								
意味尺度 A	1	2	3	4	5	6	7	意味尺度 B
遅い								早い
弱い								強い
変わらない								変わりやすい
暗い								明るい
単発的だ								連続的だ
鈍い								鋭い
柔らかい								硬い
気持ち悪い								気持ち良い
軽い								重い
結果的だ								進行的だ

安部公房における思想的転換

―『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』を通して―

The Change of Thought in Abe Kōbō: "Dendrocacalia" and "The Crime of S. Karma"

解　放

Existentialism, as conceived by Abe Kōbō, was a consciousness which recognized reality. However, he dedicated himself to surrealism, which emphasized the unconsciousness. To Abe, who believed in existentialism, consciousness comes before reality. However, after Abe turned to surrealism, the power relationship between consciousness and reality began to shift. In addition, Abe realized the similarity between surrealism and communism, therefore he converted to surrealism and at the same time approached communism. This study will focus on the early works of Abe, "Dendrocacalia" (1949) and "The Crime of S. Karma" (1951), and will clarify the change of thought in Abe Kōbō.

In "Dendrocacalia", the consciousness of the characters would be unable to recognize reality. It was the unconsciousness, not the consciousness, who controlled the actions of the characters. In other words, in the world of "Dendrocacalia", consciousness is assumed to be incapable of interpreting reality. In "The Crime of S. Karma", reality had more influence than consciousness because the bodies of the figures were controlled by matter, not by consciousness. One of the reasons could be his approach to communism, which is based on Marxism.

【キーワード】安部公房、実存主義、シュールレアリスム、共産主義
Abe Kōbō, Existentialism, Surrealism, Communism

はじめに

安部公房の初期作品には、実存主義が反映されているために、非常に難解であったことがしばしば指摘されている。しかし、1950 年代に入ってから、安部の作品はシュールレアリスム的な要素を主に反映するようになった。この系列に属する作品は、「変形」や「変身」をテーマとするものが多く、現実世界ではありえない事物や出来事が織り込まれている。

ただし、安部がシュールレアリスムに傾倒したのと同時に、共産主義にも接近したことは注目に値する。例えば、彼は自身の思想的転換について、「私自身、実存主義から、シュール・リアリズムそれからさらにコミュニズムと、思想的にも方法のうえでも大きく三転した」と述べている[1]。とりわけ、安部が「ぼく自身の中のシュールリアリズムの考え方の展開としてのみの共産主義だった」と述べているように、彼は共産主義をシュールレアリスムから発展したものだと受け止めていたのである[2]。

従来の研究では、安部公房の作品に反映されている実存主義、シュールレアリスムと共産主義に関して、それぞれ孤立した個体として研究する傾向があった。しかし、安部が実存主義から離脱して、シュールレアリスムに興味を持ち始めるようになり、さらに共産主義へと傾倒した経緯から、ある種の厳密な関係を見出せると考えられる。本論文では、安部公房が認識していた実存主義の特徴を考察した上で、彼が実存主義から距離をとる原因と、シュールレアリスムと共産主義へと接近した背景と

1　安部公房「あとがき――『猛獣の心に計算器の手を』」『猛獣の心に計算器の手を』平凡社、1957 年 12 月、p.266
2　安部公房「共同体幻想を否定する文学」『図書新聞』、1972 年 1 月 1 日号

の関連性を検討することによって、初期の安部公房の思想的転換を明らかにしたい。

1．安部公房の実存主義

1940年代の安部公房は実存主義に没頭していたが、その実存主義とは如何なるものであったのだろうか。安部は自身が書いたエッセイの中で実存主義について次のように語っている。

> 戦争中、ぼくは仕組みの裏を、いろいろ考えちゃったんですね。ほんとうのことを知りたいという気持ちが強いわけですよね。それで文学のほうでなくて、哲学のほうに向かっていったんです。戦争中のことですから、読めるものはハイデッガーとか、そういうものですよ。そこに一応逃避点を見付けて、サルトルなんか全然知らずに、実存主義という世界観で現実を何か書きたい気持ちがあったんですね。[3]

安部が考えていた「実存主義」とは、「戦争中」の「現実」を認識する一種の「世界観」であり、すなわち、「現実」世界と対立する人間の〈意識〉（＝「世界観」）の方向を指し示すもので、サルトルによって現在一般的に知られている実存主義とは異なるものであったように思われる。また、「ハイデッガー」の名前が挙げられているように、安部がここで語っている「実存主義」とは、サルトル以前の現象学的実存哲学の意味合いが多く含まれているのではないかと予想することが可能であろう[4]。つまり、安部公房にとっての実存主義とは、おそらく、フッサールの現象学を基盤に置いた哲学であり、すなわち、〈意識〉とは常に〈何ものかについて〉の〈意識〉でなければならないという哲学的方法だったと考えられる[5]。例えば、安部は最初に参加した研究会『夜の会』において、「実存的方法の確立をしなければならぬことを主張した」と言う発言をしている[6]。この言葉に示されているように、安部は実存主義そのものを探究したのではなく、やはり「実存的方法」の重要性を強調したかったにすぎない。

したがって、「世界観で現実を何か書きたい」という一節から察するように、安部が強調している「実存的方法」とは、戦争中に起きている事柄を自身の〈意識〉によって描くという方法論であったと言えるかもしれない。言い換えれば、この時期の安部公房にとって、〈意識〉とは、「現実」を解釈できるものである同時に、この〈意識〉は「現実」に優先するものとされているように思われる。

周知の通り、安部の「実存主義」の原点はリルケにあったのである[7]。安部の自筆年譜には、戦中か

3　安部公房「何を書きたいか――戦後作家の場合――」『文芸』第11巻第11号、1954年10月、p.122

4　安部公房のエッセイには戦時中の読書経験が散見されている。とりわけ、ハイデガーについて、「どちらかというとハイデッガーの方が自分の役に立ちそうな気もしたけれど、感覚的にはヤスパースの方がつき合いやすかった。[…] これからの世界観の形成は、やはり実存主義を媒介にしてすべきだという気持ちは戦中から準備されていたからね」（「錨なき方舟の時代」『死に急ぐ鯨たち』新潮社、1986年9月、p.91）や、「戦争中にヤスパースやハイデッガーを読んでいましてね。サルトルも早く読みましたし、実存主義に興味をもった」（安部公房「〈僕の創作劇評は三者三様〉『東京新聞』のインタビューに答えて」『東京新聞』、1955年9月18日号）などのような記述が見られる。

5　フッサールは現象学の研究領域について、「唯一残りつづけるはずのものは、それ固有の本質においての『意識そのもの』であり［…］つまりもろもろの思念されているもの」（エトムント・フッサール、渡辺二郎、千田義光訳『イデーンⅢ』みすず書房、2010年11月、p.76）と語っている。現在、フッサールの現象学は「意識の学」や「主観性の学」と規定されているが、オイゲン・フィンクはこうした規定を批判的に受け止めている。（オイゲン・フィンク、新田義弘、小池稔訳『フッサールの現象学』以文社、1982年2月）

6　安部公房「MEMORANDUM 1948」1948年5月、引用部は「創作メモ」として未刊行のため、『安部公房全集1』（新潮社、1997年7月、p.483）に拠った。

7　安部公房は、リルケの作品に啓発されて文学と哲学の世界に没頭した経歴について、「あれは戦争中のことだった。[…] ぼくはリルケの世界、とりわけ『形象詩集』と『マルテの手記』に耽溺した。[…] リルケはぼくに、精神の死を体験させてくれた。その、死人の眼でものを見る術から、シュール・リアリズムまでは、比較的近い道のりだった」（「リルケ――苦痛の記憶・その後」『詩の本Ⅲ　詩の鑑賞』筑摩書房、1967年12月、pp.276-278）と述べている。

ら戦後にかけて、リルケに没頭していたことを示す、以下のような記述が見られる。

> 戦争が進むにつれて、精神状態はますます悪化。ほとんど学校に出なかったが、その間なにをしていたのか、あまり記憶がない。[…] ほとんど空白の二年間であった。ただ、リルケの「形象詩集」に耽溺した。[…] いつの間にか、リルケ調の詩を書きはじめていた。それは、詩というよりも、「物」と「実存」に関する、対話のようなものだった。[8]（下線筆者、以下同）

留意すべきは、安部がリルケの詩を模倣して作った自身の詩について、「『物』と『実存』に関する、対話のようなものだった」と述べていることである。安部のエッセイには矛盾した記述や、理解することが困難な箇所がしばしば見られる。「『物』と『実存』」についても、それが具体的に何を指し示しているかは不明だが、安部の内面において、「物」と「実存」が二項対立に構造化されていることは確かであろう。安部が探究し続けていた「実存」が、ある種の〈意識〉であることを考慮すれば、ここでの「『物』と『実存』」とは、「物」と〈意識〉との対立に言い換えられるかもしれない。さらに注目すべきは、安部は「物」と「現実」を同じ概念で認識していた点である。例えば、あるエッセイで安部は、「物」を「現実」と同一視した、次のような言葉を書き記している。

> 客観的現実とは物質であり、それは意識の外にある。意識は物質の産物であり、反映だが、それ自身は物質ではない。この物質的現実と意識の関係をはっきり見きわめることなしに、新しいリアリズムを論ずることはほとんど無意味に等しい。[9]

この引用は弁証法と史的唯物論に関する安部の記述の一部である。「意識」という言葉が明確に使用されている同時に、「客観的現実とは物質」であるという表現に示されるように、安部は「現実」と「物質」を同一視し、「現実」（＝「物質」）と「意識」を対立の構造と見做していたのである。したがって、安部がリルケに啓発され、「『物』と『実存』に関する、対話のようなもの」を創作した背景には、彼が「現実」と「意識」との対立構造を内包していたことを見出せると考えられる。また、先述の通り、実存主義者としての安部にとって、「意識」は「現実」を決定できるものとされていたために、この時期の安部は実存的な「意識」を中心とする思考様式を持っていたと言えるかもしれない。

しかし、安部公房は実存主義から出発したものの、早い段階で実存主義を放棄していたように思われる。例えば、針生一郎との対談の中で安部は、次のように述べている。

> 俺は戦争中生っ粋の実存主義者だったよ。[…] 実存主義がこわれはじめたのは、終戦後の体験だよ、瀋陽に一年半ばかりいた。社会の基準が徹底的にこわれるところを目撃して来たわけだ。恒常的なものに対する信頼を完全に失った。[…] とにかく俺は即物的な見方を身につけた。[10]

ここで安部は、「実存主義がこわれはじめた」理由を「終戦後の体験」に帰結させている。終戦後の引揚げ体験は、安部公房の作家としての生涯にとって重要な経歴である。実際、実存主義を反映した安部の初期作品には、彼の引揚げ体験を下敷きにしているものが多い。安部の初期作品に実存主義的

8　安部公房「年譜」『新鋭文学叢書 2　安部公房集』筑摩書房、1960 年 12 月、pp.278-279
9　安部公房「新しいリアリズムのために――ルポルタージュの意義」『理論』第 18 号、1952 年 8 月、p.30
10　安部公房「解体と綜合」『新日本文学』第 11 巻第 2 号、1956 年 2 月、pp.147-148

思考が反映されていると同時に、引揚げ体験を見出せるのも、彼の言葉にあるように実存主義の崩壊が終戦後の引揚げ体験と密接に関わっていたからであろう。例えば、安部は実存主義に傾倒した理由について、次のように述べている。

> ぼくが実存主義に傾倒した一番大きな理由はごく単純で、「存在が本質に先立つ」とぼく自身考えたからです。軍国主義においては本質が存在に先立っていました。祖国とか母国という概念が本質というカテゴリーに入るわけです。ところが実存主義的観点からすれば、そうした概念は一種の従属概念にすぎません。[11]

安部の言葉に示されるように、彼が抱いていた「実存主義」は、戦時中の軍国主義による国家というものを人間の本質とする傾向に対抗するために機能してきたのである。しかし、国家を最優先するこの思想は敗戦によって大きく変容した。安部自身が「敗戦体験は、国家とか郷土とかに帰属しないで、なおかつ人間の存在とは何か、を考えさせた」と語っているように、敗戦によって引揚げ者にとっての国家自体が喪失したように感じ取られたために、国家を人間の本質とする思想的抑圧に対抗する実存主義の必要性も失われていたと考えられる[12]。

先述したように、戦中の安部が傾倒していた「実存主義」とは、おそらく「現実」を認識する彼の「意識」を指し示している。ただし、実際のところ、安部の終戦後の引揚げ体験は彼の「意識」を大きく変容させたように思われる。例えば、かつて住んでいた奉天を回想する際、安部は次のように述べている。

> 私が育った奉天というところは、あの殺風景な満洲の中でもとくに殺風景な町である。[…] 私の父は個人的には平和な市民であった。しかし日本人の全体は武装した侵略移民だった。たぶん、そのせいで、私たちは奉天を故郷と名乗る資格をもたないのだ。[13]

「日本人の全体は武装した侵略移民だった」という言葉に示されるように、安部は「満洲」に移動した日本人を「侵略移民」と語っている[14]。つまり、安部は自身を含めた満洲に滞在した日本人の大多数を入植者と認識していたのである。しかし、安部が「侵略移民」と認識していた日本人は戦争に敗北したことによって、従来保たれてきた地位は逆転してしまった。終戦後の満洲での経歴について、安部の自筆年譜には次のように書き記されている。

> しかし、満洲は、意外に平穏だったし、いっこうに戦争が終る気配もない。[…] 脱落者の意識に悩まされた。八月になって、急に戦争がおわった。ふいに、世界が光につつまれ、あらゆる可能性が一時にやって来たように思った。だが、つづいて、苛酷な無政府状態がやってきた。[…] 階級や、人種差別の崩壊……[15]

11　安部公房「安部公房との対話」『ユリイカ』第 26 巻第 8 号、1994 年 8 月、p.131
12　安部公房「新人国記 '82 外地㉜――現代の先端を行く」『朝日新聞』、1982 年 10 月 4 日号
13　安部公房「奉天――あの山あの川」『日本経済新聞』、1955 年 1 月 6 日号
14　「満洲」や「奉天」のような固有名詞＝地名など、原則として「」を付けた上で考察しなければならない。本稿では、上記の歴史用語に関して、論述の便宜上「」を使用せずに表記する。
15　前掲、安部公房（1960 年）、p.278

安部は自分を含めた日本人が終戦前には「侵略移民」であったと語っている一方で、ここでは、敗戦間際の自分が「脱落者の意識に悩まされた」と述べている。「階級や、人種差別の崩壊」という言葉に示唆されているように、戦前から戦中において日本人が持っていた特権は失われ、終戦によって満洲における民族間の従来の権力構造が壊されたのである。このように、終戦前まで日本人が統治階級に位置していたという固定化された「意識」と、戦後における日本人引揚げ者たちの権力構造の転落という「現実」との齟齬が、安部における実存主義の崩壊につながっていたのかもしれない。

2. シュールレアリスムと共産主義への傾倒

実存主義から距離をとるようになった安部公房が到達したのが、シュールレアリスムである。安部が考えていた実存主義がその独自性を含んでいるように、彼が傾倒していたシュールレアリスムにも何か特徴的なものを孕んでいるのだろうか。安部は 1949 年 8 月に「シュール・リアリズム批評」というエッセイを発表し、その中で、初めて理論的にシュールレアリスムについて述べた。

> 今では精神作用の構造を《意識―無意識》の図式によって説明するのは一応の常識である。意識と、絶えずその監視検閲を受けている無意識との矛盾、内的軋轢がプシコノイローゼだと考えられる訳である。[…] 抑圧階級の圧制が意識では検閲し切れないほどの刺戟を無意識界に与えた場合、バランスはついに破れる。精神深層作用は露呈あるいは爆発せざるを得ない。[…] シュールリアリストはただ単に深層作用を主張したのではない。意識作用の負担を超えた無意識界への刺戟を主張したのである。[…] たしかにそれは正しい被抑圧階級の芸術である。[16]

安部によれば、シュールレアリスム芸術とは、被抑圧階級（＝「無意識」）の芸術であり、そのシュールレアリスムとは、抑圧される存在に目を向けるもので、公的な「意識」の機能を担う抑圧階級への抵抗によって生み出されたものである。安部が考えていたシュールレアリスムは、一般的に知られているシュールレアリスムの概念とは些細な差異があるものの、その本質を捉えていることは確かである。周知のように、シュールレアリスムは第一次世界大戦後、1920 年代のパリで生まれた文化活動である。このシュールレアリスムは、ヨーロッパの近代社会を根源から批判し、とりわけ、権力側による既成の諸秩序への抵抗を本質としている[17]。被抑圧階級（＝「無意識」）に視点を向け、抑圧階級（＝「意識」）への抵抗を重要視している安部公房は、シュールレアリスムの本質を見抜いており、こうした思想は、安部の実存主義時期における「意識」中心の思考様式に揺らぎが生じていることを示唆していると言えるかもしれない。

ただし、初期の安部の思想的転換はシュールレアリスムに留まるものではなかった。例えば、『デンドロカカリヤ』を境に、それまでの作品に多く反映されてきた実存主義に代わり、シュールレアリスムを描くようになった経緯について、安部は次のように述べている。

> 戦争中、ぼくは実存主義者だったんだよ。[…] そこらへんからだんだんと唯物論に近づいていった。その手掛りになったのがシュール・リアリズムなんだ。転換期だったな。[…]そこから『デ

16　安部公房「シュール・リアリズム批評」『みづゑ』第 525 号、1949 年 8 月（現段階、「シュール・リアリズム批評」の初出版を確認することができないため、引用は『安部公房全集 2』（新潮社、1997 年 9 月、pp.262-263）に拠った。）

17　シュールレアリスムの概念について、アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』（巌谷國士訳、岩波書店、1992 年 6 月）、巌谷國士『シュルレアリスムとは何か――超現実的講義』（メタローグ、1996 年 6 月）と酒井健『シュルレアリスム――終わりなき革命』（中央公論新社、2011 年 1 月）を主に参照した。

> ンドロカカリヤ』に抜けて行ったわけだ。[…] やっぱり『デンドロカカリヤ』だな、あのころやっていたのは、いかにさまざまな現象からヴェールをはぎとるかということ。観念的といわれたが、どう観念と闘って観念のヴェールをはぐかという、自分の中へ唯物論を確立するストラッグルだったと思うんだ。そして行きついたのが『壁』だった。「S・カルマ氏の犯罪」というやつ。[18]

安部によれば、『デンドロカカリヤ』を境に、シュールレアリスムが主に反映されるようになった理由として、「だんだんと唯物論に近づいていった」ためだとしている。前節において、終戦前の安部は「意識」を「現実」（＝「物質」）に優先するものと考え、「意識」中心の思考様式を持っていたと述べた。そうだとすれば、戦中の安部が独自の実存主義に没頭していた背景には、〈唯心論〉の影響を見出すことができるのではないだろうか。このことから、「観念的といわれたが、どう観念と闘って観念のヴェールをはぐかという、自分の中へ唯物論を確立するストラッグル」という一節は、安部が〈観念論〉もしくは〈唯心論〉から「唯物論」へと転向したことを示唆していると考えられる。シュールレアリスムに関する安部の次の言葉は注目に値する。

> その代表的な運動であるシュール・リアリズムは、その名のごとく現実を超える、あるいはより現実的であるために、意識下の問題を取上げた。つまり、はじめに書いた物質への接近が主張だったのである。意識と物質は対立するものであり意識の下では物質がいかに奇怪なグロテスクな反常識的な姿をもって現れるか、それを示そうとした。[19]

安部によれば、「シュール・リアリズム」とは「物質への接近が主張だった」のである。言い換えれば、シュールレアリスムに転換した安部は、自己の観念と意識を排除し、現実に即した上で物質を優先して考えるようになったのかもしれない。したがって、安部が語っている「転換期」とは、単に実存主義からシュールレアリスムへの作風の転換ではなく、実存的な「意識」を中心とする思考様式から、「現実」を中心とする思考様式への内面の変化を画するものでもあったように思われる。

安部が実存主義者からシュールレアリストへと身分を変更したと同時に、〈唯心論〉から「唯物論」へと思想的側面においても転換したのは偶然ではなく、その背景にマルクス主義の史的唯物論を知的基盤の一つとする共産主義の存在と影響を見出すことができる[20]。マルクスとエンゲルスによれば、共産主義とはプロレタリアートの解放の諸条件に関する学説であり、資本主義における労働者の搾取の停止といった経済的変革を主に主張している[21]。また、『共産党宣言』によれば、共産主義者の目標は「プロレタリアートを階級として構成すること、ブルジョワ階級の支配を崩壊させること、プロレタリア階級によって政治的権力を獲得する」ことである[22]。ここでの「プロレタリア階級」とは、「労働者」のみではなく、「小中産階級、小産業主、商人、年金生活者、職人そして農民」を指し示しており、

18　前掲、安部公房（1956 年）、pp.148-149
19　前掲、安部公房（1952 年）、p.33
20　マルクス主義を構成する重要な一貫として「唯物論」が位置づけられている。例えば、マルクス主義社会学者のアンリ・ルフェーヴルは、マルクス主義における「唯物論」の重要性について「マルクス主義は、世界観としてその幅と深さの全体においてとったばあい、弁証法的唯物論とよばれる」（アンリ・ルフェーヴル、竹内良知訳『マルクス主義』白水社、1971 年 3 月、p.29）と指摘している。
21　共産主義の内容について、マルクス『経済学・哲学草稿』（長谷川宏訳、光文社、2010 年 6 月）とエンゲルス「共産主義の諸原則」『ワイド版　世界の大思想　Ⅲ -5　エンゲルス：社会・哲学論集』（岡崎次郎訳、河出書房新社、2005 年 5 月）を主に参照した。
22　マルクス、的場昭弘訳『新訳　共産党宣言　初版ブルクハルト版（1848 年）』作品社、2010 年 9 月、pp.56-57

すなわち、ブルジョワ階級に抑圧されている全ての階級を意味している[23]。

先述したように、シュールレアリスム芸術運動も、権力側が作り出した既成の秩序への破壊を目的としている。シュールレアリスムと共産主義に関する諸概念を比較対照すると、両者には内在的な共通性がうかがわれ、つまり、シュールレアリスムと共産主義は同じ水準で語られる必然性を帯びていると言えるかもしれない。実際、アヴァンギャルド芸術の専門家である波潟剛が指摘するように、戦時下の日本において、シュールレアリストは共産主義者と同じく政府の弾圧を受けていたために、シュールレアリスムと共産主義は同一視される傾向があったのである[24]。おそらく、安部公房もこうした傾向に影響された作家の一人であったと考えられる。例えば、シュールレアリスムを定義する際、安部は次のように述べている。

> このシュルリアリズムというのは、いわゆる、無意識だとか潜在意識というものを、大体、とりあつかっている。[…] フランスの左翼作家というのは、ひとり残らず、シュルリアリストの出身です。[…] 非常に新しい形式というものは、民衆の能動的な動きがはじまると、その中で、急速に大衆化し、正しければ、それが新しい民衆形式になって発展してゆくのです。[25]

安部によれば、「フランスの左翼作家」は全て「シュルリアリスト」であり、「シュルリアリズム」自体も「民衆」や「大衆」を基盤にしなければならないのである。このような引用を通して、安部公房のシュールレアリスムに関する理解が、前述した共産主義の中心的思想と類似していることがわかる。安部が日本共産党に入党申請したのは、1951 年 3 月、つまり『S・カルマ氏の犯罪』が刊行された 1 ヶ月後である。『S・カルマ氏の犯罪』と共に短編集『壁』（月曜書房、1951）に収録された『洪水』（『人間』1950.12）や『赤い繭』（『人間』1950.12）などの作品には、階級闘争への言及や革命などの要素が見られ、安部が共産主義に傾倒していたことを伺い知ることができる[26]。これらの前衛的な作品からは、政治的抑圧を受けていた、戦後日本の労働者や社会的弱者への眼差しが伺われるため、安部が、社会的弱者に視点を置く共産主義に近づいた理由の一つに、「被抑圧階級」に焦点を当てているシュールレアリスムに没頭していたことが考えられる。

安部は自身の初期作品について、リルケを模倣した『終りし道の標べに』のような抒情的な作品から、シュールレアリスムの代表作品『デンドロカカリヤ』を経て、共産主義にも言及するようになった『S・カルマ氏の犯罪』に至ったと述べている[27]。したがって、『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』は、実存主義からシュールレアリスムと共産主義への安部の思想的転換を究明する上で非常に重要な作品と言えるかもしれない。次節から、『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』を

23　同上、p.50

24　波潟剛はシュールレアリスムと共産主義との関係について、「戦時下の芸術的前衛にとって、シュルレアリスムが、あるときには芸術至上主義の証しとなり、またあるときには共産主義の証しともなった。[…] 戦時下において変化したのは、シュルレアリスムと共産主義との関連が「アヴァンガルド」という概念にも適用され、従来芸術至上主義者へのレッテルであったはずの「アヴァンガルド」までもが共産主義と結びつけられた点であろう。前衛概念の交錯はこうして、〈アヴァンガルド＝共産主義〉という図式を生み出した」（『越境のアヴァンギャルド』NTT 出版、2005 年 7 月、p.72）と述べている。

25　安部公房「芸術の革命」『現代文学講座 I 』飯塚書店、1958 年 9 月、pp.71-72

26　高野斗志美は『壁』に収録されている諸作品に安部が抱えていた共産主義を見出し、「年譜を読むと、『赤い繭』の前後、安部公房の、コミュニズムへの接近と、実践への参加、がはじまる。『赤い繭』の《オレ》に、プロレタリアートのイメージを、『洪水』にその反抗のイメージを、「事業」に、資本の搾取のイメージを、そして、『魔法のチョーク』に、知識人の自己変革のイメージを、わたしたちは、見てとることもできよう」（『増補　安部公房論』花神社、1979 年 7 月、p.40）と指摘している。

27　前掲、安部公房（1956 年）、pp.148-149

対象に、シュールレアリスムに傾倒していくのと同時に、共産主義にも接近し始めた安部公房の思想的転換のプロセスを明らかにしたい。

3.「意識」と「無意識」の転倒――『デンドロカカリヤ』

安部公房は『デンドロカカリヤ』の初出版が刊行された1949年8月に「シュール・リアリズム批評」というエッセイを発表し、このエッセイの刊行は、安部が実存主義者からシュールレアリストへと身分転換を遂げたことを意味している。ただし、転換期の作品とされている『デンドロカカリヤ』(『表現』1949.8)には、シュールレアリスムのみでなく、実存主義も反映されている点は注目に値する。例えば、「デンドロカカリヤ」という植物の名称から「極悪の植物」という意味合いを見出した李貞熙は、「コモン君」が植物に変形することについて、「内なる悪への願望をいざない、みずからの内に閉じ込めてしまったのである。人間存在の実存性と社会的存在性の間の人格変換である」と述べている[28]。また、斎藤朋誉は作品にある「顔を考えるのではない、顔で考えるのだ」という表現と、安部のエッセイに語られている「サルトルが実存を書いたのだとすれば、カフカは実存で書いた」[29]という箇所との類似性から、『デンドロカカリヤ』に描かれている「顔」に実存主義との関係を見出している[30]。

このように、『デンドロカカリヤ』における実存主義やシュールレアリスムの表象を指摘する論考はあるものの、実存主義者からシュールレアリストに至る安部の内面の変化に視点を置く研究は少ない。先述したように、実存主義に没頭していた時期の安部は、「意識」に焦点を当てたが、シュールレアリスムに偏向するようになってからは、「無意識」に視点を向けるようになり、「無意識」の表象を試みるようになったのである。この節では、『デンドロカカリヤ』初出版のテクストを対象として、作品に描かれている「意識」と「現実」の関係に着目した上、「無意識」が如何に表象されてきたかを考察することによって、実存主義からシュールレアリスムへの安部の思想的転換を究明する。

『デンドロカカリヤ』の主題の一つが、主人公「コモン君」が植物「デンドロカカリヤ」に変形することである。田中裕之は「コモン君」の植物化に関して、「植物への変形は、このように、不安感を契機に、意識が外界から切り離され、自己の内面に向かった時に起こるのである」と述べている[31]。田中によれば、変形が起こる際、「コモン君」の「意識」はもともと「外界」にあるが、そこから「切り離され」て、「コモン君」の内面に向かって入ってゆくのだ。しかし、テクストにある「顔の後ろで意識だけが、そっぽを向くなんて、ひどく悲しい行為だよ」という言葉に示されているように、「意識」はもともと「顔の後ろ」に設定されているために、「意識」が「外界」から「切り離され」て、「コモン君」の内面に入ってゆくという田中の論点と矛盾するように思われる。「コモン君」が最初に変形した際、作品では次のように述べられている。

> ぼくらの病気はとりもなおさず、あのぼくとこのぼくとが入れちがいになって、顔はあべこべの裏返しになり、意識が絶えず顔の向側へおっこちてしまう……、それが植物になることさ。おや、どうしたの？ああ、発作だね。言ってる先から植物病だね。しっかり顔をおさえて、ひっくりかえらないように、そして力一杯顔に全身の動きを想出させるようにするんだ。

28　李貞熙「安部公房『デンドロカカリヤ』論――または、「極悪の植物」への変身をめぐって」『稿本近代文学』第19号、1994年11月、p.151
29　安部公房「第2回20世紀文芸講座――カフカとサルトル」『世紀ニュース』第4号、1949年6月1日
30　斎藤朋誉「初期安部公房の変貌――「デンドロカカリヤ」の生成――」『国学院大学大学院紀要』第44巻、2012年、pp.122-123
31　田中裕之「『デンドロカカリヤ』論――《植物病》の解明を中心に」『国文学攷』第128号、1990年12月、p.5

引用にあるように、「顔の向側」とは現実の世界を指し示しており、「顔」が「裏返し」することによって、「顔」の内側にある「意識」が外側の現実の世界に入り込もうとしている。「意識が絶えず顔の向側へおっこちてしまう」に着目すると、ここでの「意識」の移動とは、「コモン君」の内面から外界へと移すプロセスであると考えられる。したがって、「コモン君」の植物化とは、高木光子が「意識が身体から乖離してしまうことは植物化の特徴であるようだ」と指摘しているように、元々身体の内部にある意識が身体から切り離される過程であるとする議論の方がより妥当ではないかと思われる[32]。

『デンドロカカリヤ』では、「コモン君」は合計四回の変形を遂げる。最後の変形を除けば、その変形は全て「意識」と関わる中で行われてきた。例えば、「コモン君」の最初の変形は、次のように書き記されている。

> ざっと音をたてて、意識が軽い断層の模型をつくる。すべすべしたその断層面に、コモン君は、そう、はっきりそのままの格好をした自分が映っているのを見たんだ。その時なんだよ。コモン君はふと心の中で何か植物みたいなものが生えてくるように思った。[…] 足が見事に地面にめり込んでいる。なんと植物になっているんだ！ぐにゃぐにゃした細い、緑褐色の、木とも草ともつかぬ変形。そして、意識の断層は、もう模型どころではない。たしかに自分の外に、空を覆うように巨大な壁が現実に存在していた。

「コモン君」が「意識の断層」に映っている自分の像を見るうちに変形は起きるのである。この「意識の断層」は、二回目の変形では、「一年前の体験とそっくり、意識の断層、高い壁がそそり立っていた」とされ、三回目の変形では「意識の断層の向う側で起っている虚像に、逆らう気はなかったんだよ」とされている。留意すべきは、この「意識の断層」は、「コモン君」の変形後には、「自分の外」に「現実に存在していた」「巨大な壁」と化している。植物に変形する際の「意識」は、明らかに人間の主体の外側にある現実世界の一部として描かれている。つまり、人間が植物に変形する以前には、「意識」と現実の世界は「顔」を境界線に分割され、その「意識」は「顔」の内側、すなわち主体の内部に留まっているのである。しかし、植物に変形して以後は、それまで「顔」の内側にあった「意識」が現実世界に晒されるようになり、現実世界の一部と化す。

「コモン君」が植物に変形することによって、「意識」と現実世界との位置関係が変容することは、安部が実存主義からシュールレアリスムへと傾倒した経緯を思い起こさせるかもしれない。既に述べたことだが、実存主義に傾倒していた時期の安部にとって、「意識」は「現実」に優先するものとして認識されてきたのである。しかし、上記の引用に示されているように、『デンドロカカリヤ』の世界では、「意識」と「現実」の関係は予め固定されているのではなく、「意識」が「現実」の一部となり得ることが示唆されている。これは、実存主義者としての安部の認識に揺らぎが生じている兆候ではないかと思われる。ここで「コモン君」の二回目の変形場面に着目してみたい。変形する直前に、「コモン君」は「珈琲舗カンラン」の外の風景を見ながら、次のように語っている。

32　高木光子「安部公房「デンドロカカリヤ」試論」『繍』第 16 号、2004 年 3 月、p.119

次第に外の動きが激しく思われ、ともすれば意識が遅れがちに思われだした。意識が外界の動きに充分追いついていれば、どんな動きも静止状態に飜訳されてしまうのだが、どうも具合悪い。すべての動きが追いつけないでいる意識の中にぼんやり動きのままの尾を引くんだからね。

「コモン君」は「外界の動き」を「意識」で捉えようとするが、「意識」は「外の動き」に追いつくことができないのである。ここでの「外界」や「外」とは、「珈琲舗カンラン」の外の現実世界を指し示しており、「すべての動きが追いつけないでいる意識」という言葉に、現実世界を「意識」で捉えることの限界が表現されているのかもしれない。これと類似した表現は、「コモン君」の三回目の変形後にも見られる。三回目の変形を経て、「コモン君」は次のように語っている。

コモン君は自分でも事情がすっかりは飲込めなかったよ。事のなりゆきはどうも意識の外にあったらしいのだね。ほっておけば、顔はしきりと裏返しになりたがるものらしいが、手というやつは、反対にともかく顔を表向きにしようとしたがるものらしいのさ。

ここに示されているように、「事のなりゆきは」は「意識の外にあったらしい」と「コモン君」が考えている。三回目の変形を経た「コモン君」は、「意識」が「事情」や「事のなりゆき」に完全に追いつけていけないことに気づいたように思われる。この段階の「コモン君」にとって、「意識」はすでに「事情」や「事のなりゆき」などに代表される現実世界を認識することができなくなってしまっている。つまり、ここでの「意識」は「現実」に優先するものではなく、「現実」を決定することも不可能となっていると言えるかもしれない。

注目すべきは、コモン君の「顔」が「ほっておけば」「しきりと裏返しになりたがる」ことである。植物に変形することと常に同時に発生している「顔」の「裏返し」だが、この「ほっておけば」や「しきり」という言葉に示されているように、「顔」は「コモン君」の「意識」によって「裏返し」されるのではなく、彼の意志に関わりなく「裏返しになりたがる」。実際のところ、「顔」のみではなく、「コモン君」の「手」や「足」などの行動も、おそらく「コモン君」の「意識」によってなされるのではない。たとえば、三回目の変形から人間の姿に戻ったのち、「コモン君」は次のように考える。

手というやつは実にいろんなことをしたがるものだ。足元の土に突刺っているナイフを見ることもなしに見詰めていると、「アア！」と持主の困惑した叫びにもかまわず、手はいきなりそれを拾上げ、さっさと内ポケットにしまい込んでしまったじゃないか。コモン君はただぼんやり、どうでもいいと思っただけだった。そうすると、足までが見くびったのか、さきほどからいくらか落着をとり戻し注意深く探るようにこちらをうかがっている男の前を、訳もなく走りはじめたよ。コモン君は、やはりどうでもいいと思いながら、幾分坂になっている塀ばかりの道をどんどん駆けぬいていった。

ここに「コモン君」の「手」と「足」の行動が描かれているが、「手」と「足」の行動について、「コモン君」は共に「どうでもいいと思った」という反応しかできなかった。「コモン君」は自分の「手」と「足」を「意識」的に動かしているのではなく、むしろ、「手」と「足」は、「コモン君」から離脱した独立した生物であるかのように自らの意志によって行動しているように思われる。つまり、「手」

と「足」の行動は、「コモン君」の視点から見れば無意識によって行われたものであり、すなわち、変形以前と以後のどちらにおいても、「コモン君」の意識は、現実の世界を捉えることができず、その行動の指揮をとっているのは意識ではなく、無意識であったと考えられる。

実存主義者であった安部は「意識」にのみ焦点をあて、彼にとって、「意識」とは「現実」を決定できるものと想定されてきた。しかし、転換期の作品とされる『デンドロカカリヤ』においては、安部は「意識」から「無意識」に視点を向けるようになり、また、シュールレアリスムに傾倒して以降は、実存主義の時代に見られた「意識」と「現実」との力関係が転倒したのだと言えるかもしれない。

前節で考察してきたように、安部は〈唯心論〉を相対化して「唯物論」に近づいた結果、『デンドロカカリヤ』や『S・カルマ氏の犯罪』のような作品に到達したのである。安部が語る「転換期」とは、単に実存主義からシュールレアリスムへの転換ではなく、「意識」中心の思考様式から「現実」中心の思考様式への思想的転換を内包しているように思われる。次節では、『S・カルマ氏の犯罪』を対象に、人間の主体の周縁化を考察することによって、シュールレアリスムの延長線上にある共産主義が安部公房を如何に影響してきたかを明らかにする。

4. 周縁的「物質」の逆襲――『S・カルマ氏の犯罪』

『S・カルマ氏の犯罪』は多くの先行研究によって議論されたが、その論点は主に、名前の喪失の意義、壁への変形の意味合い、海外の文学作品による影響という三つの方向に分けられる。この作品は安部文学の中で重要な位置を占める代表作だが、テクストにシュールレアリスムから共産主義への安部の思想的転換が反映されていると論じた研究は比較的少ない[33]。『S・カルマ氏の犯罪』では、「ぼく」の名前が失われることが主なテーマとして作品全体に貫いている。しかしながら、名前を失っていることに気が付く前に、「ぼく」はまず他の違和感を覚えている。

> 朝、目を覚ますということは、いつもあることで、別に変わったことではありません。しかし、何が変なのでしょう？何かしら変なのです。[…] するとその変な感じが忽ち胸のあたりに集中して、ぼくは胸がからっぽになったように感じました。[…] ぼくは自分の名前がどうしても想出せないでいるのでした。[…] このおかしな現象が、胸の中のからっぽな感じとなにか関係があるらしいと分かった以外、なんにも分かりませんでしたから、考えるのもやめました。

この一節に示されているように、「ぼく」は名前を失っていることに気付く前に、まず、「胸がからっぽになった」異変に気づいている。「ぼく」によれば、「名前がどうしても想出せない」「このおかしな現象」は、「胸の中のからっぽな感じとなにか関係があるらしい」のである。注目すべきは、この空洞となっている「ぼく」の胸は、常に外界の物質を吸収しようとしている点である。

33　『S・カルマ氏の犯罪』から安部の思想的転換を見出した先行論として、田中裕之の「『S・カルマ氏の犯罪』論――作家誕生の物語――」（『近代文学試論』第 28 号、1990 年 12 月）が挙げられる。田中は「『S・カルマ氏の犯罪』以降の安部は、自ら作家主体を《真の世界の果》に置き、精神の自由を保ちつつ、同時に、社会的自由の獲得をも求めて、外界の変革へと向かうのである。それはすなわち、『S・カルマ氏の犯罪』に即して言えば、《ぼく》の存在を許さなかった裁判組織の破壊へと向かうことにほかならない。[…]『S・カルマ氏の犯罪』からは、この、実存主義からコミュニズムへという思想上の転向を窺うことができるのである」（p.41）と指摘しているが、シュールレアリスムから共産主義へと転換した経緯について詳しく論じられていないように思われる。

ぼくとラクダとはしばらくの間じっと見合っていました。[…] するとぼくの喜びがただラクダを吸収したいという胸の陰圧の慾望にすぎなかったことに気づきました。ラクダを見まいとするのに、ぼくは非常な抵抗と努力をしなければならないのでした。

やにわに胸の空虚感が内側から激しく胸壁をかきむしりはじめます。胸の陰圧は、ぼくの気持ちなんかどうでもよく、ドクトルの言うようにただその空虚を満たすために吸収することばかり望んでいるのでしょう。

ここでは、「ぼく」の「気持ち」と「ぼく」の「胸の陰圧」は対立したものとして提示されている。「胸の陰圧」は「ラクダ」のような物質を「吸収したい」という「慾望」に満ちているが、「ぼく」はその「慾望」が満たされないように「抵抗と努力」している。「ぼく」の「気持ち」と「胸の陰圧」との対立は、フロイトの精神分析で用いられている「自我」と「エス」の対立を想起させるかもしれない。フロイトによれば、人間の心的装置は、自我、エス、超自我によって構成されている。エスとは欲動の集合体であり、無意識の領域に属する。自我は外部の状況を察知して、エスの欲動が外部の状況と矛盾しないように抑圧している意識である[34]。「自我」と「エス」の相互作用は、「ぼく」の「気持ち」と「胸の陰圧」との対立と類似しているように思われる。つまり、物質を吸収しようとする「慾望」を持つ「ぼく」の「胸の陰圧」は無意識の機能を果たし、「慾望」を満たさないように「抵抗と努力」している「ぼく」の「気持ち」は意識の機能を果たしている。

「胸の陰圧は、ぼくの気持ちなんかどうでもよく、ドクトルの言うようにただその空虚を満たすために吸収することばかり望んでいる」という言葉に注目すると、ここでの「胸の陰圧」は「ぼくの気持ち」に関係なく、ただひたすら「空虚を満たす」ことに集中している。外界の物質を「吸収」する行為は、意識によって行われているのではなく、無意識によって行われていると言えるだろう。実際のところ、「ぼく」は、物質を「吸収」する行為を意識的に制御できないことについて、早い段階から気づいているように思われる。

ほんとうに申訳ありません。あとでお詫びしようと思っていたのですが、実はそのとおりなんです。まったくそんな気じゃなかったのに、つい見とれているうちに消えてしまっていました。ぼくが吸い取っちゃったんですね。でも、意外です……

病院で胸の異常を診察される際の「まったくそんな気じゃなかった」や「意外です」といった言葉に示されているように、物質を吸収することは、「ぼく」の意識では制御できない行為である。つまり、「吸収」する行為は自発的に行われ、「ぼく」の視点から見れば、それは無意識に進行している。前節では、「コモン君」の無意識的な行動について議論したが、このような行動は、『S・カルマ氏の犯罪』における、物質を無意識的に吸収する行為と類似しているように思われる。

『デンドロカカリヤ』には、実存的な「意識」が「現実」を対象として捉えることの不可能性が示唆されている。つまり、シュールレアリスムへと傾倒してから、実存主義時代における「意識」が「現実」に優先するという安部の思想に変化が見られるようになったのである。それでは、『S・カルマ氏の犯罪』において、この「意識」と「現実」との位置関係は如何に表象されているのだろうか。実際のところ、『S・カルマ氏の犯罪』においても、「意識」と「現実」との位置関係は転倒しているように思われる。

34　ジークムント・フロイト、道籏泰三訳「自我とエス」『フロイト全集 18』岩波書店、2007 年 8 月

例えば、「ぼく」が名刺や衣服に拘束されている場面は次のように描かれている。

> そのうち、睡っていないのに、足のほうから次第に上へと知覚がぬけて、やがて全身すっかりしびれて動かなくなってしまいました。けれど不思議に視覚と聴覚と意識だけは残っていて自由になるのでした。

ここでの「意識」は、身体と切り離されているように描かれており、身体を支配することができなくなっている。この場面以降、同じ状況が頻繁に発生している。例えば、「ぼくは跳上りました。[…] ぼくの意志ではなく、靴が勝手に跳上ったのでした」という一節に示唆されているように、「ぼく」の身体の動きは、自らの「意志」によってなされているのではなく、「靴」という物質によって決定されている。登場人物の身体が「意識」ではなく、「靴」のような物質に支配されていることは、「現実」(=「物質」) が「意識」以上に強い影響力を持っていると言えるかもしれない。『S・カルマ氏の犯罪』に示唆されているこのような「意識」と「現実」(=「物質」) との力関係は、「意識」が「現実」(=「物質」) に優先すると考えた安部の実存的思想とは明らかに異なる。ここで、「ぼく」が「ドクトル」と「ユルバン教授」に拘束されている場面に着目したい。

> 意志に反して、彼は二人――ドクトルとユルバン教授の足元に仰向けにならなければなりませんでした。すると、それだけでも耐えがたいことだったのに、そのうえズボンと上衣がするりと自分で脱げおちてしまいました。しかしズボンと靴が足首を、上衣が手首をと、それぞれしっかりつかまえて上下に力一杯ひっぱるので、やはり身動きすることはできませんでした。まるで全意識をガラス張の箱に入れて、人間にさらしているような屈辱、とりわけ Y 子を意識すると、彼は全身に想像のうろこが密生してくるのでした。

引用にあるように、「ぼく」の身体は「まるで意識」のように、「ドクトル」と「ユルバン教授」の目の前に晒されている。ここで人間の身体は、「意識」と同一視されていることがわかる。そうだとすれば、身体が、「ズボン」や「上衣」、「靴」などの物質に拘束されていることを、物質による「意識」の支配を表す比喩として解釈することができる。物質が人間の身体を抑圧していることは、以下の場面で典型的に示されている。

> 「そうだ、おれたち物質は堕落した。」としわがれた声で呟いたのはネクタイでした。「とくにおれみたいにな、ひどい堕落さ、しかしそれは人間のせいだ。畜生、首を締めるということがどんなことだか思い知らせてやろうか。」
> すると他の身のまわり品たちも興奮して口々に叫びました。「奴等にとっておれたちが役に立っても、おれたちに奴等はからっきし無用の長物だ。」「一方的な搾取……妥協はない！」「そうだ、われわれ物質は主体を恢復しよう。」「生活権を奪取するんだ。死んだ有機物から生きている無機物へ！」

ネクタイや名刺、服装などの「物質」たちは、「人間」に対して「主体を恢復」するための革命を起こそうと計画している。「生活権を奪取するんだ。死んだ有機物から生きている無機物へ」に着目すると、この言葉を、「物質」たちが「有機物」から「生活権を奪取」して、「無機物」が主導権を握る

世界を作ろうとしている、と解釈することができる。つまり、「物質」たちの革命とは、人間中心の社会を破壊して、脱人間社会、すなわち物質中心社会を作る革命である。また、人間の身体が「意識」を象徴することを考慮すれば、この革命は、「意識」が中心に置かれ、「物質」が周縁に置かれる従来の構造から、「物質」が中心となり、「意識」が周縁化される新しい構造を作る過程を示唆しているように思われる。「物質」における周縁から中心への転倒を示しているのが「壁」の存在である。

> 地球がまだ平たい板で四頭の白象に支えられているとか考えられていたころ……、世界の果、それは当然極度に密度の拡散した周辺地帯として解釈されていました。しかし、現代［…］地球がまるくなったので、世界の果は四方八方から追いつめられ、そのあげくほとんど一点に凝縮してしまったのですね。［…］世界の果はそれを想う人たちにとって、もっとも身近なものに変化したわけなのです。言いかえると、みなさん方にとっては、みなさん自身の部屋が世界の果で、壁はそれを限定する地平線にほかならぬ。

「世界の果」はかつて「周辺地帯」と解釈されていたが、「現代」では、この「世界の果」は「一点に凝縮」したものと理解されている。つまり、「世界の果」は本来周縁的存在であったが、現在では中心的存在と転倒している。この「一点に凝縮」した「世界の果」（＝「部屋」）の一部とされている「壁」も「世界の果」（＝「部屋」）と同じように、周縁的存在から中心的存在へと化している「物質」であると考えられる。

『S・カルマ氏の犯罪』に見られる「意識」の周縁化と「物質」の中心的存在への転化に、〈唯心論〉から「唯物論」への安部の思想的転換を見出すことができるかもしれない。作品の中では、「ユルバン教授」が「唯物論者が神だの恩寵だの、聞くだに傷ましい」と語っているように、「唯物論」という言葉が明確に使われている。このように、「意識」が中心から周縁へと転倒する一方で、「物質」が周縁的存在から中心的存在と化していることは、おそらく安部が「意識」中心の思考様式から「現実」中心の思考様式へと転換したプロセスを意味していると考えられる。この作品において、「唯物論」の思想が中心的位置を占めているのは、安部がマルクス主義に影響されていたことが理由の一つと考えられる[35]。例えば、藤井貴志は「物質」の革命とマルクス主義との関連性について、「マルクス主義における主人（ブルジョアジー）と奴隷（プロレタリアート）の弁証法をパロディ化し、有機物（主体）と無機物（客体）の関係に置換した上で『革命』を展望する構図」であると指摘している[36]。

この作品にマルクス主義が強く意識されている背景に、安部がマルクス主義を知的基盤とする共産主義に接近した経緯を見出せると考えられる。例えば、「ぼく」の職場は「パルプ工場」という重労働を必要とする空間であり、近代の資本主義を代表するそのような工場が作品の舞台と設定されているのは、安部の初期作品の中でも『S・カルマ氏の犯罪』が最初である。また、「三時になると組合の大会がありましたので、私もカルマさんも出席しました」という「Y子」の言葉や、名刺が「ゼネストをやるんだ。手段は問わない」と語っていることも、共に共産主義を想起させるかもしれない。安部公房は『S・カルマ氏の犯罪』の創作について次のように述べている。

35　本作の背景にマルクスの存在を見出した代表的な論考として、鳥羽耕史の研究が挙げられる。鳥羽によれば、登場人物の左目と右目にそれぞれ実体と仮象が映っていることは、マルクスの『資本論』における労働と商品の関係を示唆している。（「S・カルマ氏の剽窃――初出「壁」1951」『運動体・安部公房』一葉社、2007年5月、pp.128-129）。

36　藤井貴志「〈オブジェ〉達の革命――花田清輝と安部公房「壁――S・カルマ氏の犯罪――」『愛知県立大学説林』第64号、2016年3月、p.25

> 文学的にも、思想的にも、私は一つの転機に立っていた。実存主義ヤスパースとリルケからぬけだし、社会に目をむけることで、アヴァンギャルドの方法にひかれはじめ、「世紀」というグループをつくっていたころである。作品のうえから言えば、芥川賞をうけた『壁――S・カルマ氏の犯罪』が、ちょうどその屈折点に当っている。[37]

この記述から察するように、本作において、「社会に目をむける」という安部の共産主義的な眼差しが投影されたのは、「アヴァンギャルドの方法」、つまり、シュールレアリスムの影響が考えられる。安部が共産主義へ接近した理由の一つに、シュールレアリスムの存在がうかがわれ、すなわち、周縁的存在に視点を向ける共産主義の特質と、シュールレアリスム芸術における被抑圧階級（＝「無意識」）を重要視する特徴との類似性を挙げることができるかもしれない。

おわりに

本論文では、安部公房の前衛的な代表作と称される『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』を分析することによって、初期の安部の思想的転換が同時期の文学作品に如何に影響を与えているのかについて論証した。

安部はそのエッセイにおいて、彼自身の考えていた「実存主義」とは、サルトルによる一般的に知られた実存主義とは異なるものであると表明している。それは、戦争中に起きている「現実」を認識する彼の「意識」の方向を指し示すものであったように思われる。終戦前の安部にとって、「意識」とは「現実」に優先するものであった上、この「意識」は「現実」を決定できると安部が認識していた。しかし、「意識」で「現実」を解釈することの不可能性に気づいた安部は、実存主義に対して懐疑的になり、「無意識」（＝「被抑圧階級」）を重要視するシュールレアリスム芸術に傾倒するようになった。また、安部公房は、被抑圧階級を重要視するシュールレアリスムの特徴と、周縁的存在に視点を向ける共産主義の特質との類似性を見出したために、共産主義をシュールレアリスムの発展したものとみなし、シュールレアリスムに転換した同時期に共産主義にも接近したと思われる。

安部の転換期の作品とされる『デンドロカカリヤ』では、登場人物の意識は、現実世界を認識することができず、また、人物の行動を指揮するのは意識ではなく、無意識であったのである。『デンドロカカリヤ』の世界において、実存的な「意識」は「現実」を解釈することができないと想定されていたように思われる。『S・カルマ氏の犯罪』では、登場人物の身体が「意識」ではなく、物質によって支配されており、「現実」（＝「物質」）が「意識」以上に強い影響力を持っていたのである。このような周縁化されてきた「物質」が中心的存在と化す過程は、安部がマルクス主義を意識した結果であり、その背景には、彼がマルクス主義を基盤とする共産主義に接近した経緯を見出すことができる。

本論文では、安部における、「意識」を中心とする思考様式から、「現実」を中心とする思考様式への変化を指摘した。ただし、「実存主義」、「シュールレアリスム」と「共産主義」自体への議論が不十分であり、安部公房の思想的転換と、歴史上の思想家との比較まで踏み込む余地がなかった。こうした課題を今後の論文で探求したい。

解放（かい　ほう）XIE, Fang
吉林大学／東京外国語大学非常勤講師

37　安部公房「あの朝の記憶」『文學界』第 13 巻第 3 号、1959 年 3 月（『安部公房全集 9』新潮社、1998 年 4 月、p.429）

補記

本論文は、2021 年 3 月に東京外国語大学大学院総合国際学研究科へ提出した博士論文の一部を基とし、全体に大幅な加筆・修正を施したものである。『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』からの引用は『安部公房全集 2』（新潮社、1997 年 9 月）に拠る。

参考文献

アーチー・ブラウン、下斗米伸夫監訳『共産主義の興亡』中央公論新社、2012 年
李貞熙「安部公房『壁――S・カルマ氏の犯罪』論」『文学研究論集』第 12 号、1995 年
猪木正道『新版増補　共産主義の系譜』角川文庫、2018 年
岡庭昇『花田清輝と安部公房　アヴァンガルド文学の再生のために』第三文明社、1980 年
荻正「安部公房「S・カルマ氏の犯罪」におけるキャロル、カフカ――裁判について――」『国語国文学研究』第 33 号、1997 年
斎藤朋誉「超現実主義から共産主義へ――安部公房「シュールリアリズム批判」について――」『埼玉大学国語教育論叢』第 14 号、2011 年
瀬木慎一『アヴァンギャルド芸術――体験と批判』思潮社、1998 年
杣谷英紀「安部公房『壁――S・カルマ氏の犯罪』の方法」『日本文芸研究』第 52 巻第 1 号、2000 年
田中裕之「比喩と変形――安部公房の変形譚について」『梅花女子大学文学部紀要』第 37 号、2003 年
鳥羽耕史「「デンドロカカリヤ」と前衛絵画――安部公房の「変貌」をめぐって」『日本近代文学』第 62 号、2000 年
新田義弘『現象学とは何か』講談社、1992 年
藤井貴志「シュペルヴィエルの影――安部公房「壁――S・カルマ氏の犯罪」と埴谷雄高――」『国語と国文学』第 97 巻第 3 号、2020 年
宮坂和男『哲学と言語――フッサール現象学と現代の言語哲学』ナカニシヤ出版、2006 年
森村優太「「デンドロカカリヤ」論」『佛教大学大学院紀要』第 43 号、2015 年
吉田節子「安部公房「S・カルマ氏の犯罪――壁――」論」『大妻国文』第 4 号、1973 年
吉田俊彦「『S・カルマ氏の犯罪』（安部公房）考」『岡山県立短期大学研究紀要』第 31 号、1987 年
渡辺広士『安部公房』審美社、1976 年

対格言語における活格形式、能格形式、「心」の表現と それらの起源に関する類型論的試論

―「主語」「フォーカス主題」の観点から見た 日本語とフィリピン・台湾諸語との例外例の対照より―

A Typological Examination of Active Type, Ergative Type and "Mind" Expressions in Accusative Languages and their Historical Correlation: A Contrastive Analysis of the Irregularities in "Subject" in Japanese and "Focus Topic" in the Philippine-Formosan Languages

森口 恒一

The aim of this paper is to clarify the prima facie irregular uses of Subject marker in Japanese and Focus Topic marker in Tagalog, a Philippine-Formosan language, by contrasting the two languages.

In the former language "ga (が)" basically functions as Subject marker and in the latter "ang" does as Focus Topic marker. The irregularities in both languages are in common. In the irregular sentences in Japanese the Subject marker functions as the denotation of the Objective meaning and in Tagalog the Focus Topic marker does as that of the Object meaning or non-focused meaning.

The contrastive analysis of the two languages reveals that the irregularities are only observed in the limited expressions; Stative Expressions. In Japanese so-called "Aggrieved" passive and Serialverb constructions and in Tagalog Pseudo-verb and "ma-" prefixed stative verbal constructions show irregularities.

These irregularities in Japanese are given an account by the analysis of the "Stativity" through the embedded construction and transformations to a simple sentence and those in Tagalog are expressed through special classes of the verbal construction.

The discussion by the Contentive Typologists leads to an assumption that the active language type has started at first and changed into two types of the languages, Ergative language and Accusative language depending on their ways of the livelihood as shown in the former part of this paper. The Accusative type of the language is supposed to have directly inherited its system from the Active type.

The result of the contrastive analysis between the two languages proves that the irregularities in Subject and Focus Topic systems originated from the surviving differences between the active case group vs. non-active case group in Active type of language. The active case marking system changed into the accusative case marking system and the non-active case marking system and the absolutive case or its substituting marker are still extant in linguistic irregularities in these languages. And the latter system especially created new systems of expressing the "mind" afterwards, one of which is the Japanese "Aggrieved Passive" and "Serialverb" and the other of which is "Subjunctive or Optative" verbal forms in Indo-European languages.

【キーワード】活格言語、能格言語、対格言語、日本語、フィリピン・台湾諸語
Active Language, Ergative Language, Accusative Language, Japanese Language, Philippine-Formosan Language Group

はじめに

日本語の他動詞文に一定の助動詞が付加されると目的格“**を**”が主語“**が**”になる場合（リンゴ**を**食べる：リンゴ**が**食べたい）やフィリピン・台湾諸語のある動詞の形式で、目的格“［ng=（nang)］”［-Focus］が「フォーカス主題」“ang”［+Focus］となる形式［Nakita① ko② **ang** bahay③. =（私に②）家が③見えた①。］のような一見例外のように思える文が上記の言語に存在する。本論文の目的は、そのような日本語やタガログ語（フィリピン・台湾諸語）の「主語」や「フォーカス主題」などの文法形式の例外的であると考えられている現象に注目して両言語を対照して、類型論、特に内容類型学の「活格」:「不活格」形式や「絶対格」等の観点から考察し、その歴史的な変化の探求をも試みた[1]。

I.「類型論」

1. 人類の発達と「類型論」

人類は、地球環境の変化からアフリカの故地に住むことはできなくなり、そこから出て2足歩行をして地球上を歩いて広がった。移動手段である直立歩行により身体的進化と退化が起こった。その際の注目すべき進化の第一段階は、体躯の直立と食べている物の変化である。この体と生活の変化の結果、咽喉・口腔と脳の広がりが出来たことにより前者は叫び声から共鳴による調音の結果の複雑な音、すなわち、言語音、音声を取り扱えるようになり、後者は、肉食の獲得と脳領域の拡大により論理的な思考へと道を開いた。これは、直立歩行を行った結果、種として起こった共通の能力の進化である。故地のアフリカを出て異なる方向へ長い間直立歩行で放浪した結果、独自に獲得した人類共通の能力の発展につながる。種として故地に住むことができなくなった人類への歴史的変化の賜物である。しかも、言語は人類史上ではつい最近の10万年程前までは体系として成立してなく、人類進化の最終的な発達と考えられる。

言語体系としての発達は、言語能力の獲得の結果を使い、放浪している間にばらばらに発達したものである。さもければ､世界の言語の多様性を説明することは不可能である。人類の放浪の間に起こった進化の途中で「可能性ある複数の言語（文法）化」のすべての規則からその一つを発達させる進化と必要のない他の規則を放棄するという退化が影響を与えたように思われる。そうなると「その可能性のある文法化」を全て数え上げ、比べ合わせる「対照」という「類型論」（類型学）は重要な分野になる。

2.「類型論」（類型の研究史）

類型論とは、人間の獲得した言語形式の種類を並べ上げることである。種としての言語能力獲得という現象は共通に起こったが、それ以降は、各言語で独自に音素の固定と文法形式の選択による発達が起こった。個々の選択基準の集合が類型論であり、どれを選択するかは言語次第であり歴史的偶然性でもあった。

一方、視点を変えて言語学史的な類型論の流れを考えてみよう。人類史の中では、音声の獲得が言語発達の最初であるが、言語学では、外見的・形式的特徴に注目して可能性の分類をまず行った。しかし、20世紀後半になると形式より「意味」、言語の内容的な部分を重要視し、それに対して色々な

1　本論文は、対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第31回研究会で発表した時のコメントにより発表原稿に理論的な部分を加え、改稿したものである。コメントを頂いた方々に感謝の意を表したい。

形式が対応するという観点が重要であるというということがわかってきた。

ⅰ）初期の類型論（学）：外見的分類　―　外見、形式を同一形式内で対照する。

①　音声：音素の発見

「音素」は、差異または注目と無視に基づく意味を区別する音的な仮想的単位である。これはある意味で、進化（注目）と退化（無視）の組み合わせの結果であると言える。

人類が獲得した仮想的な言語能力の音素が、音の区別、差異による意味の区別をもたらしたことを発見したのは、Courtenay であり、De Saussure、Trubetzkoy であった。最初の言語能力であり他の文法事項から独立して意味の区別に必要な音を選び、他を無視するという能力は音声器官の発達以降に各地を放浪した人類のバラバラに得た共通の能力である。

②　文法形式の分類

一方、この「音素」の発見に少し先立ち、世界の言語の文法の形式に焦点を当てたのが、Schlegel, W. Humboldt、Schleicher である。語の内部構成、すなわち、意味を表す単語とそれに付随する文法的変化に注目してその結び付きを調べ、「孤立語、膠着語、屈折語、抱合語」を定義づけた。その後、Tesnière は文の構造と時間的変化と意味の構造・階層性に注目した類型論を提案し、1970 年代には Greenberg 達の語順（＝発話時間）、関係節構造、対格と動詞などの形式の順序の共通性を発見した。一方、対格言語、能格言語というような文の格構造に注目した類型論も起こった。これらすべては、外的形式の関係に注目したために　関係類型学とも呼ばれている。その他に、広い意味の類型としての研究も行われている。

ⅱ）内容類型学

一方、20 世紀後半には、形式ではない意味からの類型論も起こった。クリモフの内容類型学（Contentive Typology）である。これまでの同一形式の枠から離れ、意味（内容）から形式を規定する類型論（学）である。形式が初めにあるのではなく、「意味」の内容に対応して形式があって、人類の方がいろいろな形式を考案したと考える方が妥当であろうとする考え方である。特に活格型、能格型、対格型の類別を重要視して研究した[2]。

3.「類型論の特性」→ 形式の統一化の拘束は必要か。

関係類型学のように形式のみに固執したタクソノミー的な考え方ではなく、視点を変えて同じ意味内容でも、表現形式が異なるという考え方が重要になってくる。すなわち、基準としては意味関係が中心であり、それに対して形式の選択を行うということである。簡単に言えば、別言語に翻訳するときに、表現形式を変えなければいけない場合が往々にしてあるという事実がその証拠として挙げられる。類型論的には重要な視点である。

その一つの例をヨーロッパの言語、日本語とフィリピン・台湾諸語で対照して見てみる。

ヨーロッパの言語に見られる名詞の性である。これは、文法的な利点に注目したものであるが、基本的には、有生（Animate）：無生（Inanimate）との人間からの外界の見方に起源がある。アフリカの名詞分類に似ている。関係類型学では、区別があり似たような分類であるということで終わりであるが、意味から来る形式の選択という視点からすると内容言語学の「包含事象」（Implication）という

2　山口（1994）、石田（2016）（2019）、クリモフ（石田訳）（2016）

観点からいろいろヴァリエーションが考えられる。すなわち、一つの意味内容を複数の形式で表現するということであろう。

バントゥー系の言語では複数の名詞分類が行われていて、外界を分類しているということがわかる。印欧語の名詞の性は、有生：無生であるかという生物と非生物の区別に焦点、注目を当て、これに基づいた文法説明の統一性から始まった。この現象は、一見バントゥー諸語の名詞分類と同じであるが、ここで大きく違いがあるのは、前者は複数のグループ分けであるのに対し、印欧語系の起源は、2種類の分類である。人間の目から見た外界の分類基準が異なる。前者は、外界すべてであるが、後者は、有機物と無機物との対立から起こっているようである。そして、この分類は、文法を説明するためにできたもので、それを単にグループ名を付けるときに使ったのである。しかし、人類の外界の認知の仕方を反映しているとも思われ、それを語彙の結び付きで提示する手段、文法に使ったのかもしれない。

そこで、基準は同一であるが、異なる形式でこの有生と無声の意味基準を使っている例を種々の言語で見てみる。そうすると名詞分類の影響から来るいろいろな形式があることがわかる。名詞分類の基準は、関係する名詞の文法的依存により異なる文法的変化を引き起こすということである。目線を変えれば、日本語やフィリピン・台湾諸語でも、異なる形式で暗にこの有生：無生の対立を示しているということである。

ⅰ）日本語の暗黙の「有生：無生」名詞分類

同じ日本語でも方言差が大きいが、共通語（関東方言）の言語現象である「いる」「ある」の違いであり、名詞と関係する数詞である。

ア．先生が（いる。／*ある。）　鉛筆がここに（*いる。／ある。）
イ．先生がひとり（いる。／*ある。）　リンゴが3個（*いる。／ある。）[3]
ウ．バスは今ここにある。バスは、今ここにいる。

これらは、（共通）日本語では名詞の明確な名詞分類ではなく、内包的に、意味内容的に含んでいる要素を他の文法関係の形式がその存在を指示している。特に、ウの文は、「バス」を文脈により無生と有生とに解釈する選択である。

ⅱ）フィリピン・台湾諸語の暗黙の「有生：無生」名詞分類

一方、フィリピン・台湾諸語にも基本的に有生・無生の基準に従った文法的な形式がある。

この言語グループでは、有生と無生ということで出発したと考えられるが、人間、すなわち、名前を持つ動物とそれ以外とカテゴリー分けがなされている。以下のような区別である。

ア．名詞の人名の冠詞　Kumain① na② (si / *ang)③ Taro④.（太郎④は③もう②食べた①。）
　　名詞の普通冠詞　Kumain① na② (*si / ang)③ lalaki④.（その男④は③もう②食べた①。）
イ．数詞 da-doa① ka mahakay②　（二人①の男②）（ヤミ語）（人用の数詞）
　　a-doa① ka kois②、*dadoa ka kois（2匹①の豚②）（ヤミ語）（人以外に用いられ数詞）

3　助数詞に関しては中国語の影響が大きいが、人を数える助数詞は、日本語独自のもののように思われる。

数詞に関する規則は、多くの台湾諸語では現在でも残っているが、フィリピンでは、一部の山深い地域の言語にのみ残っていて、現代語の数詞の中に規則があったことを示す例も多く残っている[4]。

ウ．３人称代名詞 “siya” は、人に対しての指示のみに使い、その他の物（=it）の指示は指示代名詞（ito, iyan, iyon）（これ、それ、あれ）を使う。

この意味内容中心による基準が複数の文法化の形式の違う例は多数見られ、それも言語間ではなく、方言間でも違いが見られる。たとえば、（1）「行く・来る」、（2）「やる・もらう」、（3）「使役 vs. 他動詞」での違いである[5]。

4.「整合的」（Consistent）と「分裂」（Split）という現象の意義

関係類型学にも内容類型学（能格言語、活格言語、対格言語）にも例外、限定という追加規則がある。すなわち、前者では、「整合的言語」（Consistent Language）：非整合的言語（Inconsistent Language）であり、後者では分裂現象（Split）、また、「分裂－ S」（Split-S）：「流動－ S」（Fluid-S）という現象である。

「整合的言語」：「非整合的言語」は、同一類の形式の選択で、同レベルでの選択形式の同一性形式と非同一性形式の選択を指す。重要なものの一つは人類の逃れられない運命である時間に制限される発話の順序・語順が全体的に統一されているかどうかによって区別され、それが文法事項に影響を与えているかどうかである。

前者の例では日本語が、O-V（目的語－動詞）言語、Adj-N、V-Aux の語順で、後者の例は、フィリピン・台湾諸語では、V-O（動詞－目的語）言語でありながら、形容詞→名詞でも 名詞→形容詞の順でもよく、関係節→名詞でも名詞→関係節でもよい。一方、フランス語の名詞－形容詞の語順に関しても一定の規則はあるが、原則的には両方の語順が可能である。個々の言語の特殊性にあるかもしれない。

一方、能格言語、活格言語には「分裂現象」（Split）という意味による使い分けがある。能格言語の「分裂現象」は、ある他動行為が完了状態、特に、3 人称等の制限によって能格構造（能格と絶対格）が使われ、その他は「絶対格」構造や対格構造が使われるという内容的・意味的に複雑な要素にかかわるグループ分けである。この他動性、完了状態、3 人称の意味的限定は何を意味するのであろうか。関係類型学の場合の「整合性」に関する変化とは全く異なるものになる。

一方、活格言語では、「分裂－ S」（Split-S）と「流動－ S」（Fluid-S）という二つの形式があり、特に、流動－ S は、自動詞の格は話者が決定する。すなわち、どんな自動詞でも、主語を動作主にするか被動者にするかは話者が決めることができ、動作主の表示が意志または制御の度合を、また被動者の表示が意志または制御のなさ、さらには話者の側の被害意識や同情を示すことにもなる。ただ、この違いは、分類のためであり、それ以上に必要なのは意味内容に関する詳細な理論付である[6]。

4　森口（1975）
5　森口（1977）（1995）
6　Dixon（1994）本論で議論する部分を単にグループ分けしたに過ぎないのかもしれない。

II. 類型の裏にあるもの：注目、視点と社会的発達
→ 類型論の人類学的解釈

そこで、素朴な疑問が起こって来る。「各種の類型の起源、発生理由は何なのであろうか？」多分、この疑問に対しては関係類型学からの答えは出て来ないように思われる。また、「分裂現象」が何を物語っているのかも知りたい。そうなると言語の類型と人類の文化・生業・発達歴史との関係があるのではないかと予測される。

ⅰ）古人類学から見た人類の発達

ここで、人類（霊長類）の発達（古人類学）と言語の類型との間に何らかの相互関係が存在するかを考えてみる。

人類の歴史は自然人類史の観点から以下のように明らかにされている[7]。

【弱い動物】

1. 初期猿人（Ardipithecus）（580 万年前～ 440 万年前）

樹上生活のために木の実､果物を採集して食べる。そのために何が有用であるかに注目し見極める。肉食動物に食べられる危険があるが、樹上生活なのでその可能性は低い。（「ある」というものを分類することが重要な時代である。）

2. 猿人（Australopithecus）（400 万年前～ 200 万年前）

地球環境の変化から草原に追い出されて 2 足歩行の地上での生活が始まり、肉食動物に食べられる可能性が非常に高くなる。一方、肉食動物の食べ残りの採集から肉食を始める、特に、動物の“おこぼれ”の死んだ肉と骨（骨髄）を食べる。骨髄を取り出すために、石器を使い、その結果、親指が発達する。彼らにとってすべてが「ある」であるがその中には“いた”（＝「いる」から「ある」）に注目する。そして、危険を察知して逃げて生き残るためには、「いる」に焦点が移る。「心ここにあらざれば見れども見えず聞けども聞けず」は、死を意味する。

【強い動物】

3. 原人（Homo erectus）（230 万年前～ 150 万年前）

人類は棍棒、手斧（Hand axe）、槍等を使い、盛んに狩猟を行う。この時点で有生と無生の対立を見極め、食料としての“生きて「いる」”動物を殺すと動物は“死ぬ”という「ある」状態に変化し、肉になる。

4. 旧人（Homo Heidelbergensis, Kabwe）（50 万年前～ 4 万年前）

2 足歩行で道具を使っての狩猟により盛んに肉食をしていた。その結果による音声器官と脳の拡大が起こり言語の発生へと人類の肉体的準備が出来つつある。人類は猟をした結果の肉を食べ、肉体的に頑強になり、直立姿勢により次第に口腔、咽頭、喉頭が広がり、脳が拡大した。

5. 新人（Homo sapiens）（20 万年前～）

発達した言語能力を使い、残っていた他の人類を駆逐する。火の使用により食物が柔らかくなったのと直立している時間が増大したことにより音声を発するのに都合の良い音声器官と脳領域の拡大と

7　馬場（2015）

なった。その後、放浪狩猟生活から定着化した（栽培）農業生活に移行して行った。時代が変遷すると人類としての「心」表現方法が発達した。

すべての動物は食物を見極めて、敵対者の動きに反応する行動に対応するきっかけとなる「注目・焦点」という能力を必ず動物として保持している。動物である人類は当初から動物としての「注目、焦点」という能力を必ず持っている。それに加えて生活の変化に伴い重要な能力を発達させたのである。

ⅱ）言語類型と人類の歴史

人間の感覚器官で感知されるのは、「存在」、「状態」、「移動」、「変化」、「停止」等であり、そして、それに能動的な「働きかけ」をする能力もある。人は、それらの行動・変化に「注目・焦点を当てる」という行動を起こす。言い換えれば、不動のものには、「存在」（＝ある）、生きているものには、「状態」（＝いる）、成長する「変化」（＝なる）のような分類をして、それらに対しての「働きかけ」（Action）（＝する）によりそれを「変化」（＝なる）させるということが可能になった。目の前に広がる世界に焦点を当て、感知して生きるために食料を得なければいけない人類としての必要な行為である。

人類は、自然変化の結果の熟れた植物の実等を得る採集（第 1 の採集）のための外界の分類を行うことでその歴史が始まる。環境変化の結果の 2 足歩行後に熟れた植物の実等（なる）に加えて肉食動物の獲物の残りをあさって収穫する。「ある」と「いた」＝（ある）との分類の時代である。第 2 の「採集」時代である。しかし、他の肉食動物からの脅威があり、「いる」＝（肉食）動物を区別する必要がある。すなわち、有生と無生の区別の必要性が発生する。その結果が「活格言語」（Active language）に発達したと考えられる。それゆえに、これらの現象は、前述の活格言語の「分裂－ S」と「流動－ S」という分類に引き継がれる。

第 3、4 の時代の段階で、狩猟民が生き物を攻撃して死に追いやり、そして、食物にする。かつての人類とは逆に脅威に感じていた肉食動物の立場になる。動物を殺すということを行い、それを死に追いやり、食物にするという行為の結果が問題になる。これは能格言語、特に「分裂現象」の特徴と同じである。行為をし（能格）＋　停止（完了させ）＋　肉（ある）（絶対格）にするという行為と獲物（＝ 3 人称）に「注目」した「絶対格」と「能格」が考えられる。いわば。「いる」の獲物を「いた」にし、「ある」に変化させるのである。また、最後の「新人」の時代になってからの人類は、定着化して（栽培）農業を行う。ある行為をすることにより植物が大きくなり食べ物になるという使役的・他動的な言語形式である。「する」ことにより何かが成長する＝「なる」という行為の言語化である。そして、働きかけと変化と「注目・焦点」という観点を大幅に言語の形式に取り入れたのが、「対格言語」になると推定される。このような類型の存在は、言語規則の発展が人間の認知形式と生業形式に対する「注目・焦点」行動に起因しているように思われる。また、人類が発達すると行為主体（活格）的表現にそれの客観的な表現に加えて主観的な表現形式、「心」というものの表現形式に発達し、意見や事実の評価などを言語化するようになったのであろう。進化の過程で人間が最終的に得たものが「心」の表現であろう。これを表現する言語的な類型として考えられる形式もある。

ⅲ）人類の進化と言語の特徴

動物の重要な武器・盾となる「注目・焦点」を発展させ、言語的なものに応用したものが、文法における「語順トピック」、「有生・無生」、「活格」、「絶対格」、「能格」、「対格」、「フォーカス主題」、「主語」であろう。一つの名詞句を文の中での順番を入れ替え強調した「語順トピック」、「有生・無生」に基づいた「活格」・「絶対格」、生き物を殺し食物にするということに注目した「能格」と「絶対格」、文

章の流れの中で「注目・焦点」した名詞句とその格構成に焦点を当てた「フォーカス主題」、単文を構成する中心的な役割を果たす動詞を形成する認知項目の一つに注目した「主語」という見方が出来る。その後の形式化がおこるのが、「心」の表現である。

そこで、この人類の進化と言語の特徴を言語の類型の形式にあてはめてまとめてみよう。

【弱い動物】

1. 初期猿人（Ardipithecus）

植物採集のみで、「ある」ものを捜すという目的のために分類が重要な時代である。「名詞分類」の発生。

2. 猿人（Australopithecus）

草原に出て肉食動物に食べられる可能性があるが、動物の残り物から肉食を始める。採集物（動物のおこぼれ；脊髄；親指の発達）の分類とともに肉食動物に食べられるという危険から有機類と無機類という基準で外界の分類が必要になる。すべてが無生「いた」と「ある」（不活格性）である。しかし、肉食動物から逃げるために有生「いる」（活格性）に焦点が移る。「有生：無生」の対立の萌芽が起こる[8]。

【強い動物】

3. 原人（Homo erectus）

狩猟が盛んになったことにより有生:無生＝「いる:ある」文法性が起こり、それを形式化して「活格：不活格」タイプ＝活格言語に近くなる。

4. 旧人（Homo Heidelbergensis）

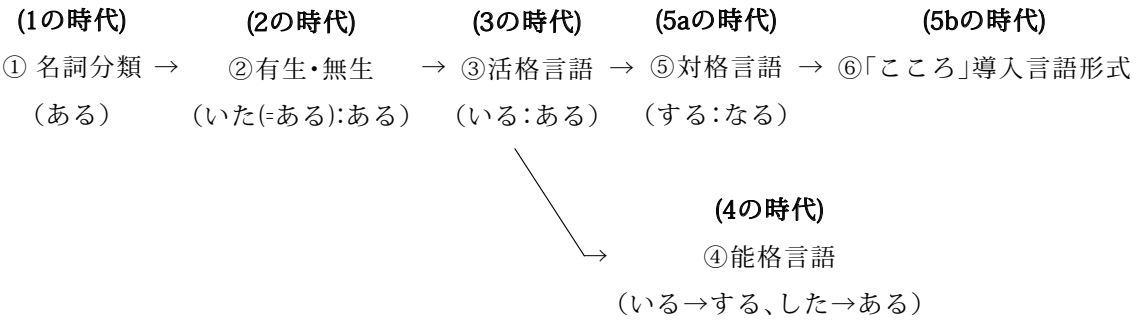
多くの道具を獲得した後、肉食の発達（有生を無生にして食物にする）のための猟を始める。その際には、絶えず２足歩行を行う。その結果、音声器官が発達する。人類の対象物;獲物（「絶対格」）に対する「行為（action）＋完了（perfect）+ 状態（stative）」というある行為をし、「する」（能格）の結果の生（「いる」）から死への変化（＝いた）とその後の食物を意味する肉＝「ある」の状態に変化することが重要になる。これが能格性であろう。活格性の中でもこの能格性の要素に注目した言語が「能格言語」である。

5. 新人（Homo sapiens）

音声の完全な獲得により次第に言語を獲得し、他の人類を駆逐していくと同時に定着化して、作業・仕事をし（する）、その結果、もの＝食べ物が増える（なる）。「する」と「なる」、すなわち、作業（使役行動）により植物を栽培するという農業を開始する。栽培農業という「するとなる」、使役・他動行為をした結果の「なる」の他動詞的表現から「対格言語」になる。その後に「心」の表現形式が加わる。

8 「活格性」＝ Active ;「不活格性」＝ Stative（=Inactive）

1 ～ 5 の人類史と言語の類型の発生を考えて図示すれば以下のように推定される。



1 の木の上で食べ物を捜す時代から「名詞分類」が起こり、2 の時代で、草原へ出て「いた」（有生の無生化）と「ある」（無生）の感知と肉食動物から逃げるために、「いる」に焦点を当て始める。3 で「いる・ある」の言語、「活格言語」への発達、4 で、狩猟とその結果の肉、「する」、「した」から「ある」への「能格言語」、その後、5a で別の文化・社会形式に移行した後に、栽培農業、「する」と「なる」になり、対格性の勃興の後、5b で「心」の表現のような流れとなる。

しかし、上記の人類発達の歴史の流れと言語類型との関係を時間的に同期させることは不可能である。それは、言語の発生は「旧人」時代の終わりないしは「新人」時代の初めであり、完全に自分のものにしたのはたかだか 10 万年前であり、それまでの起源となった人類の発達へと遡れない。しかし、世界では同じように人類が分散して同じ変化をし、同じ生活をしていたとは考えられない。世界中、同じように発達して来たわけではない。各地に人類がそれぞれの発達の段階に従って生活していた。逆に、世界各地に分散した後に外的な影響力でそれぞれの段階にとどまり、昔の生活方法を保持し、それ以降人類の社会的な発展がなくても快適な生活を継続している人類も多くいた。言語発生の時点でどの段階にいたということが問題で、その結果、言語の多様な類型が出てきたのだろうと考えられる。それゆえにバラバラなのである。歴史的な変化が違う、種々の生活方法が世界各地に残っていたということが原因なのであろう。

一方、人類の進化によりある類型から別の類型が発達したという仮定が正しいとすると、各類型が独立して存在して残っているのではなく、前段階の類型をも含めて変化して行ったと想像される。そうなると、新しい類型の中に古い時代からの形式から同じ内容・意味を表現する新しい形式が発達していったとも考えられる。言語形式の歴史的に認められる意味表現が別形式で現代の言語に残っているのではないかということである。言い換えれば、対格言語の中に能格性、活格性、「心」の表現が別形式で残っているのではないかという推測である。

ところで、森口（1975）（2005）で「フォーカス主題」「主語」の「注目、焦点」という観点から対格言語の日本語、フィリピン台湾諸語、ヨーロッパ諸語の対照を行ったが、これらの言語の対照の結果から考えるといずれの言語にも基準と矛盾する例と形式がある。これらの例の分析から対格言語での新しい能格的形式、活格的形式が起こり、それらと共に「心」に関する類型が別形式で発展していったのではないかと予想される。本論は、それらの新しい手法を示唆するような言語形式を追及する課題の解決に向けての類型論的な試論である。

Ⅲ. 日本語とフィリピン・台湾諸語の「主語」と「フォーカス主題」；「格助詞」、「係助詞」と「受動態」

森口（1975）（2005）等で日本語とフィリピン・台湾諸語における「主語」「フォーカス主題」について論じた。これらの言語現象はともに人間の動物としての能力の「注目、焦点」という観点からそれを表現する形式を追及したものである。

「主語」は、認知的なものを表現する単文の中心である動詞の成立のためにどの行為者、対象物等に「注目・焦点」しているかが問題となり、「フォーカス主題」は、文章・内容の流れの中で一つの名詞句と格に注目して出来上がった文法事項である。前者は、日本語では選択された名詞に「主語」の格助詞“が”が付加され、それと共に動詞が作りあげられる。フィリピン・台湾諸語では、「主語」選択は、感知した行動を表現する動詞語根とそれに付加される接辞の選択により動詞が決定されることを論じた。一方、後者は、日本語では「格助詞」への「係助詞」“は”の置換、追加で表現されるのに対し、フィリピン・台湾諸語の「フォーカス主題」の取り出しと動詞の変化＝受動態を選択していて、ヨーロッパの言語にも見られる「主語」（フォーカス主題）選択と動詞の形態の変化が問題である受動態と基本的に同じ形式であることがわかった。

まとめれば、以下のようになる。

- 「注目・焦点」
  1. 行動等の認知から来る単文における動詞化に関する「注目・焦点」→「主語」
  2. 文章の中での格関係に関する「注目・焦点」→「フォーカス主題」

- 日本語
  1.「主語」認知により「格助詞」“が”の付加と動詞化→動詞の選択／（接辞の選択）
  2.「フォーカス主題」格付きの名詞句の選択 →「係助詞」“は”の置換と付加

- フィリピン・台湾諸語
  1.「主語」の認知における単文を構成する動詞変化 →　動詞語根と接辞の選択 / 別動詞
  2.「フォーカス主題」：文章中の格付きの名詞句の選択 →「フォーカス主題」
  →　冠詞の付加・交換＋動詞の接辞の選択→受動態

Ⅳ. 日本語の受け身――「被害」、「敬意」と「伝聞」の受け身とは？

Ⅲ. で見てきたようにフィリピン･台湾諸語の「フォーカス主題」システムとヨーロッパの「受動態」は「フォーカス主題」の取りだしと動詞の対応という原理から発展したと考えられる。しかし、日本語は同じ原理ではあるが、名詞句の「フォーカス主題」の選択と「係助詞」の置換・付加という原理だけで、それに伴う動詞に対する操作がない形式で発展したと考えられる。そうすると、日本語で良く言われている「受動態」は、全く異なる別種類の言語規則であると推測される。

ⅰ）「恩恵」、「敬意」と「伝聞」の３表現

日本語の場合は、英語のように「能動態」の動詞から文章などの流れの「注目・焦点」により「受

動態」への変化ではなく、自動詞でも他動詞でも形成され、それに加えて必ず何らかの付加的な意味を持つ。それが、「被害の受け身表現」（1・2）、「敬意表現」（3）と「伝聞表現」（4）である。

1. （私は、）鹿に大事なおからを食べられた。
   （私は、）親父にあの世に行かれた。
2. 子供がガキ大将にたたかれた。
   ガキ大将にたたかれた。
3. 天皇は／におかれましては、神社に詣でられました。
   先生は、お神酒を飲まれましたか。（cf. 可能：お神酒が飲めましたか。）
4. 駅前で盆踊りが踊られた。
   （cf. 皆が、盆踊りを踊った。：同族目的語動詞）

これらの日本語の受動態の特徴は、形式は一見してヨーロッパの言語の受動態の形式をとっているが、大きな違いは、前述のように他動詞のみに変化が起こるのではなく、自動詞・他動詞両方に対して同様の変化が起こる。その上に、「被害」、「敬意」、「伝聞」等の意味も加わる。このように、一定の「情緒」・「心」・「心情」的な意味が付加されるという事である。

一方、似たような意味を付加するという表現として、「恩恵表現・行為の精神的な授受表現（「恩恵・利益表現）」のような「心」的表現もある。

「紹介状を書いてやる」、「紹介状を書いてもらう」

という表現は、英語、フィリピン・台湾諸語には見られない形式の「連用接続・―て」形式（＝連続動詞）（Serialverb）である。二つの動詞が連続して結びつけられるという言語形式である。動詞が二つあるということは、二つの単文の結合、複合した結果と考えられる。そこで「恩恵」形式を意味的に考えると、ある単文を目的語とする抽象的な意味を表現する複文ではないかと考えられる。構造的に言えば「単文」が埋め込まれた意味構造＝階層的意味構造の複文形式を考えれば分析可能になる。発話時は、主節の主語「私」等とそれに対する「心」的要素が省略された形になったと考えられる

［私が［あなたが紹介状を書く］をあなたに／から［＋恩恵］貰う。］[9]
→ 私があなたに紹介状を書いてもらう。［恩恵表現］

この形式をみてみると活格的な表現を状態、不活格的にして感情を表現するのではないかと考えられる。

一方、Austin（1962）、Ross（1970）は、「行為遂行分析」（Performative Analysis）という手法を考え、その基準は、発話することにより、ある別の行為をしているという論文である。前述の日本語で似たような形式を考えると「恩恵」表現となる。その特徴は、表現を一定の複文の「心」的行為を行うということである。内容・意味を埋め込み構造で表現し、「連用接続・―て」形式（＝連続動詞）にして、その一部の「心」の部分を消去するという手法である。

9 ［＋恩恵］等の表示は、抽象的な「心」的要素を示す。

ただ、これらの「心」の表現の解釈は、1 ～ 4 のように主語や目的語により「心」的表現内容が判断されるようである。今後の研究の課題である。

ii）「被害の受け身」「敬意」「可能」

そうすると日本語の「被害の受け身」も単文を埋め込んだ複文形式にして、「心」の中の部分が消去されることにより、「心」の中の「被害」を表現する文形式が出来上がったのではないかと推定される。日本語の「被害の受け身」は、ヨーロッパの言語のような単文の問題ではなく、複文、埋め込み文の問題で、「心」の中からの表現を言語化するのである。

父に死なれる。→［[父が死ぬ］ことが私を［＋害］する]］
→［[父が死ぬ」ことにより私が［＋害］される。]］

という複文を受け身の形にした表現と考えられる。

また、同じ規則をあてはめると「敬意」表現は、従属節の動詞を受身形にして、敬意を表する主節の主語――一人称――、話し手を消去するということになる。この形式は、「文化的な背景」の影響を受けてもいるようである。

「先生が行かれる。」→［[先生に（関して）私が［先生が行く］**を**［＋敬意］する]］
→（先生に（関して）「先生が**行く」が**私によって［＋敬意］**される**）

また、別の例としては、可能の表現でも

［我々は、［我々が、今、この景色**を**見る］ことが出来る。］
＝［我々は、今、この景色**が**見られる。］

となる。活格的な表現を複文の構造から心的状態表現＝不活格的にして、従属節の主語を「絶対格」（＝主格）にし、能力を持つ主語を消去するということになる。これらの同じ形式と考えられる文が異なる「心」等の意味を加えるのは、1. 主節の「心」に関する動詞の種類と主節における格関係、2. 主語の種類、3. 動詞の「意味」、4. 文脈で決定されるようであるが、紙面の都合上、詳細な分析は、省略する。

フィリピン・台湾諸語の「フォーカス主題」と動詞の変化という形式は、ヨーロッパの言語の「受動態」と形式としては同じものと考えられる。しかし、日本語の場合は、助詞という形式を駆使して表現し、使わなかった動詞変化、受動態――主語の変化と受け身の助動詞を加える――という形式を複文構造に使い「心」を表現しているようである。

V. 奇妙な「主語」、「フォーカス主題」と類型論の「能格言語、活格言語」性と「対格言語」

i）日本語の場合

次に問題になるのが、III の原則が当てはまらない日本語の「主語」とフィリピン・台湾諸語「フオー

カス主題」の問題である。

日本語の場合は、Ⓐ：複合動詞（連続動詞（Serialverb ＝「連用接続／―て」形式））の文、Ⓑ：単文では情緒動詞に分類される動詞（形容動詞）とⒸ：ある種の助動詞が付加された情緒動詞や可能動詞、状態動詞といわれている形式が使われる際に III で述べた原則からすると外れていて、一見例外と思われる奇妙な「主語」の例が多くある。しかし、「連用接続・― て」形式（＝連続動詞）を埋め込み構造で意味を分析して、構造を考えると、Ⓐの例外的に見える特別な日本語の「主語」の説明も出来ると考えられる。また、ⒷⒸの動詞表現は、共通して一定の意味の助動詞・形容動詞に限定出来ることがわかる。完了と状態 = 動きの停止、可能、好き嫌いといういわば状態性、「情緒動詞」という基準に基づいていて、共通の意味は、すべて状態を表現する不活格性（状態性）である。

Ⓐ

「主語」として「絶対格」／不活格の形式が残ると考えられ文がある。古い形式の類型の表現が残っている。能格性と不活格性である。

1. 豚**が**そこに／*[?] そこで死んでいる。（状態）（＝有生）、豚**を**そこで殺している。（行為継続）
   晩御飯のために豚**が**そこに／* そこで殺してある。（行為、完了、状態、）（能格的）
   （＝他動による活格→完了→不活格）
2. ある人がポスター**を**そこに / そこで貼っている。（行為継続）
   ポスター**が**そこに／* そこで貼ってある。（行為、完了、状態）（能格的）
   （＝他動による活格→完了→不活格）
3. 知らないうちにそこに／* そこでネジ**が**もう入っている。（活格→不活格）
   ネジ**を**（今）そこに／そこで入れている。　（行為継続）
   ネジ**が**（もう）そこに／* そこで入れてある。（能格的）（＝他動による活格→完了→不活格）

先に述べたように他動行動により生きている動物（いる）を殺し（＝他動、活格的→完了→不活格）、肉という塊（ある）（不活格）にするということに注目して、一種の活格的な動物を不活格的にするという意味が能格形式だとすると、やはり日本語にも能格形式が残っている。

晩御飯のために豚が（そこに／* そこで）殺してある。（他動→完了→不活化）（能格的）
［［晩御飯のためにそこで豚を殺し］て、［（殺した）豚（肉）がそこにある］］
ポスターがそこに貼ってある。（他動→完了→不活化・状態）（能格的）
［［ポスターをそこに貼る］て、［ポスターがそこにある。］］

となり、これも能格的な表現を埋め込み型の意味構造にして、それを連続動詞の形式で表現したのである。埋め込み文＝従属節の主語は、後半で「絶対格」になっていることを示している。また、「* そこで」ではなくて、「そこに」という副詞の違いも絶対動詞としてこの「ある」は使われているのであろう。一方、能格＝行為者を同時に表現しようとすることは日本語では不可能のように思われる。

Ⓑ

以下の 4 と 5 の文は、情緒状態を表す文である。意味的には、活格言語における無標的（Unmarked）

な「絶対格」を持つ文である。活格動詞と絶対動詞の中間に来る「情緒動詞」に相当する。単文で、以下のようなグループの例がある。日本語では「形容動詞」といわれる品詞と願望、可能を表現する助動詞である。

まず、4 を見てみよう。

4. 私（にとって）は犬**が**嫌いだ。　（不活格的）（状態）；犬**を**嫌う。（活格的）
私（にとって）はこの辛さ**が**いやだ。（不活格的）（状態）；辛さ**を**厭う。（活格的）
私（にとって）はリンゴ**が**好きだ。（不活格的）（状態）；リンゴ**を**好む。（活格的）

好き・嫌いの特徴の一つは、

私（にとって）は犬が嫌い（な［＋動物］）だ。（＝である）（断言、状態＝不活化）
→［［犬が］［私が嫌う［＋動物］］だ／である］（擬似分裂文）

という意味を表現する強調構文である。これは、以下に述べるように構造的に擬似分裂文（Pseudo-Cleft Sentence）的な分析でも主語の「が」については説明がつく。

ところで、トピックという表現は行為状態等をそのまま活格的に表現しているのではなく、文章的な指示または報告、断定であり、「注目、焦点」などを表現する手段であり、報告、伝聞という形式を持つ。それゆえ、トピック的な文は不活格的な表現となる。その証拠には、この形式は、フィリピン・台湾諸語では、「フォーカス主題」の基本となる。VI で示すように擬似分裂文で、格付きの名詞が取り出されて、「フォーカス主題」が無標の「絶対格」となる。しかし、日本語の場合この主語が「絶対格」であるということはⒷの例文だけではわからないが、後述のⒸの助動詞を使った文から「絶対格」であることがわかる。

4 ではやはり埋め込み構造で、それが不活・状態＝「ある」である一定の品詞・形容動詞の場合には意味的には「絶対格」になるという古い文法形式があてはめられているようにも思われる。日本語には「絶対格」がないので、「主語」を使うのであろう。古い形式が対格言語にも残っているように思われる。

Ⓒ

Ⓑでの対象物が、「絶対格」になると解釈できるという証拠は、次のような可能、願望等の助動詞が付加される場合にも見られる。文としては、「状態」＝不活格を示している。

5. 私（に）は、リンゴ**が**食べたい（状態）（である）（不活格的）：リンゴ**を**食べる。（活格的）
私（に）は、山**が**見える。（状態）（である）（不活格的）：山**を**見る。（活格的）
私（に）（は）、酒**が**飲める。（状態）（である）（不活格的）：酒**を**飲む。（活格的）
［私（にとって）は［私がリンゴを食べる］たい（状態）（である）］（不活格的）
→ ［［リンゴが］［［（私が）食べる［たい］］（食べ物）］である。］（擬似分裂文）

Ⓑの「私（にとって）はリンゴ**が**好きだ。」は、活格表現「リンゴ**を**食べる」に対しての不活格の状態表現と「絶対格」のリンゴとの結び付きである一つの証拠となる。それに「*彼は／が食べたい。」

という発話がないことからも普通は「主観的な心を持つ」“私”という部分が省略されている。

この他に、「字が読める」（状態）（不活格的）；「字を読む」（活格）；山が見える（不活格的）：山を見る（活格的）等の対立は、「強調構文」（＝擬似分裂文）という形式で活格表現から不活格表現へと意味の変換を行うのである。その文を操作し、関係部分を消去して、活格から不活格への処置と「絶対格」への移行を行うのである。その擬似分裂文の形式で使われる“が”を日本語の場合は「絶対格」という格がないために使うのである。

ii）タガログ語（フィリピン・台湾諸語）の場合

一方、タガログ語には、IV、V‐ i）であげた原理で説明できない「フォーカス主題」がある。タガログ語やその他のフィリピン・台湾諸語には「動詞連続」という形式はなく、また「受動態」は「フォーカス主題」に使われているので、日本語のような使い方はできない。しかし、フィリピン・台湾諸語では日本語にはない「擬似動詞」（Pseudoverb）と呼ばれている動詞的であるがアスペクトの変化がない「動詞」と「ma-」といういくつかの品詞を作り上げる状態を表す接辞がある。これらは、「フォーカス主題」規則からいうと例外的な使い方をする。特に、後者には、品詞により動詞的な変化があるものとないものがあり、動詞的な使い方の場合には前述の「フォーカス主題」規則に合わない。

また、日本語は、所有の表現は「ある」の方が自然で、（東京に家がある。東京に家を??持つ。／持っている。）また、「－た」という形式も時制ではなく、アスペクトが基本だと思われるところも「活格言語」の残存とも思える。以下のタガログ語の例でもこの点が関係し、やはり「擬似動詞」に「活格言語」の面影を残している。

1. 擬似動詞（Pseudoverb）（アスペクト変化なし）[10]

Ⓐ「フォーカスの不定」（may）（不定化、伝聞）（フォーカス上昇）

may の単文的な使用法は、「ある・持つ」という意味を持ち、前述の活格言語の特徴を保持している。このグループの言語は、「ある」と「持つ」との区別がない。

一方、文章と関係すると以下のようになる。

May① trabaho② si Juan③.（Juan 氏は③仕事が②ある／った①。）
May ginawawa① ang Amerikano②.（何かが、アメリカ人によって②なされた①。）不活格化
Ginagawa① ng Amerikano② iyon③.（それは③、アメリカ人によって②なされた①。）活格[11]

may というアスペクト変化のない「擬似動詞」が使われると不定、または、伝聞的な意味になり状態を表現する。そして、文法的には、「主題」である名詞が不定の場合には「主題」ではない名詞が「上昇」して「主題」になる。これも、伝聞的な表現となり、「主題」であるが、「絶対格」が変わったものだとも考えられる。

10　1972 年頃に機会があって山口巌氏のお宅を訪れたことがあった。その時、筆者のタガログ語についての修論に関する話題が出て、同氏は絶えず有標（Marked）と無標（Unmarked）という基準で話を進めて行った。当時、クリモフについての研究を開始していたかは不明である。

11　［ng=nang［naŋ］］＝［－ Focus］；ang ＝［＋ Focus］

Ⓑ 願望、好み（Gusto）（不活格的）

ア．Gusto① ni Pedro② ng titser③.（ペドロは②、先生と（いう職業）③が好きだ①。）
イ．Gusto① ni Pedro② ang titser③.（ペドロは②、その先生③が好きだ①。）

という意味の違いがあるが、好きな主体の Pedro は、［－ Focus］になっていて、文法上は対象物の「先生」が、「フォーカス主題」＝［+Focus］＝ ang でも［-Focus］＝ ng［nang］でも良いということは、「絶対格」の形式を有していると考えられる。

ウ．Gusto① na-ng② k-um-ain③ ng bata④.
（子供④は、食べることが③好きである①。）（不活格的）
エ． Nagkaka-gusto① na-ng② kumain③ ang bata④.
（その子供は④、食べる事が③好きである①。）（活格的）（動詞）

この対象物が「絶対格」的な文法構成になっているのは、「擬似動詞」といわれている ayaw（きらい）、dapat（必要がある）、kailangan（必要がある）、ibig（好き）等の状態を表現するいわゆる「状態動詞」、「情緒動詞」で、古い活格言語の「絶対格」の形式が残っているように思われる。

これらの「状態動詞」、「情緒動詞」の特徴は、いわゆる主体を表す名詞は［-Focus］になりその対象物が意味により［+Focus］、［-Focus］でも表現される。（ア、イ、ウ、エの文）これも「状態」を示す不活格動詞の「絶対格」の要素が対格言語に残り、「フォーカス主題」との組み合わせで出来上がったものと考えられる。擬似動詞の特徴は、動詞的な時制の変化がなく状態を示しているとともに冠詞の選択は文脈による「フォーカス主題」の原理に従っているのもその特徴である。「好きである」と完了の「好きだった」の区別はなく、副詞（小詞）で区別を表現しなければいけない。

日本語、フィリピン・台湾諸語の形式も、英語の methinks（「私には … と思われる」）、古い与格主体的な言い方という非人称形式と似通っているが、前者のグループには非人称形式がない。英語の methinks の主体が「与格」であるという形を考えるとその並行性がわかり、同じように状態動詞の「絶対格」が残っているのであろう。この型式は、Dixon（1994）の流動－ S の形式であるようにも思われる[12]。

2. 動詞接辞　ma-

Ⓐ　不変化接辞　（アスペクト変化なし）

①ア．Maganda① ang babae②.（その女性は②、美しい①。）（アスペクトの変化なし、形容詞）
イ．Makuwarto① si Juan②.（フワン（氏）は②、お金①を多く持っている。）
（アスペクトの変化なし）、形容詞）

接辞 ma- の場合には、以下の②のように動詞接辞としての変化をする形式がある一方、①の接辞としては、動詞としてのアスペクトの変化がない形容詞（＝状態）を形作る。

12　接辞 maka- が付加された動詞はアスペクトの変化を表現する。：nagkaka-（未完了）

ma- という接辞は、文法的には２種（①、②）、意味的には３種（ア、イ、ウ）の役割を持つ。第一のグループ①は、形容詞につく ma- である。これは、アスペクトの変化がない。このグループには、もうひとつの形容詞的な接辞、①―イがあり、ただ違う所は、名詞の語根について、量が多い、頻繁に行われるという意味が付加される。①は、接辞の変化がない形容詞（＝状態）である。一方、第２のグループの②は、動詞として機能するもので、これは、アスペクトの変化がある。

以下の②のような特殊な「フォーカス主題」と思われる形式も日本語と同じような状態性という基準で統合されているように思われる。

Ⓑ　動詞接辞　ma- 可能・状態（不活格的）と maka- 可能（活格的）（アスペクト変化あり））

②ウ．Na-kita① ko② ang simbahan③．（（私に）②教会が③見えた①。）（状態、不活格的）
エ．Naka-kita① ako② ng simbahan③．（私は②教会を③見ることが出来た。①）（可能、活格的）[13]

ウの文は、日本語の訳からわかるように「焦点」を当てていない、眼前に広がっているような意味を表現していて、主体ではなく対象物：（教会）が「フォーカス主題」［＋ Focus］（ang）になっている。エの文は、「焦点」が当たっている能動行為の可能を意味していて、主体の人間が [+Focus]=“ako” になっている。

前述の特殊と思われる表現形式は、すべて「状態」＝不活的な意味に関係するものである。そのことを考えると活格性：不活格性の対立とそこでの「絶対格」の存在が予感される。

これらの奇妙なフィリピン・台湾諸語の「フォーカス主題」や日本語の「主語」は、古い形式の「活格：不活格」形式と「能格形式」が形を変えて対格言語に残り、日本語では、「絶対格」は、「主語」や「フォーカス主題」で表現され、フィリピン・台湾諸語では、「擬似動詞」と接辞 ma- で、「絶対格」を「フォーカス主題」として表現しているようである[14]。

以上のように、対格言語での「主語」「フォーカス主題」の例外例について議論してきたが、言語が異なるが、不活格の似たような意味の状態表現の文は、特殊な「主語」、「フォーカス主題」の使い方がなされているのに気が付く。特に、日本語では埋め込み構造の形で意味の基本を表現し、それを「連続動詞」「擬似分裂文」等で表現する一方、タガログ語では、「擬似動詞」のような意味的には状態を表現し、活格的な文を状態という不活格な表現にする形式と状態を表す接辞 ma- で表現する方法がある。

しかしながら、フィリピン・台湾諸語での「敬意」の表現は、別の接辞――“maki-”, “paki-”――を使って表すとともに、能格的な形式は存在しないようである。

ヨーロッパの言語にも、活格言語と関係あるかと思われる形式が多く残っているとみられる。例えば、活動態・不活動態や意志的動詞・非意志的動詞の形態的区別の痕跡があり、動詞の項が「主語」以外をとる言い方としては、例えば英語の methinks である。

13　t-um-ingin, tingn-an（look at）; Tumingin ako ng simbahan：教会を（じっと）見る。（活格的、行為）。na-, naka- = 完了形。
14　現在のところフィリピン・台湾諸語では真の意味の「能格構造」の存在は認められない。

VI.「絶対格」「主語」「フォーカス主題」の歴史的な変遷

言語の類型には、現在のところ「活格言語」「能格言語」「対格言語」の３種類があるとされている。しかし、前述のように「能格言語」は「活格言語」を使用する狩猟民に発達した言語であるとするとこの形式は文化的な特殊な発展と考えられる。そこで、議論の中心になるのは「活格言語」と「対格言語」との２種類の類型の問題である。

上記のⅤ－ｉ）— ⒷとⒸやこれまでの議論から「対格」言語の単文では「主語」であっても、何らかの状態的な表現にはその規則が当てはまらず、それはかつての「絶対格」が保存されているからであろうと推測した。特に、活格動詞表現の状態性化・不活格性化するという形式の中でも注目されるのが「主題化」である。後には、「対格言語」の不活格的表現である「擬似分裂文」へと変化し、単文形式の活格表現の「能動態」に変わり、それがまた、単文形式の不活化表現になる「受動態」に変わっていったという複雑な変化をたどったと推定される。それが、以下で示すタガログ語の例であろう。

日本語の「リンゴは、私が食べた。」という文をタガログ語に翻訳すると、基本的、一般的には

Ang① mansanas② ang③ k-in-ain④ ko⑤.
（リンゴ②は、①私によって⑤食べ（られ）た④（もの）である。）

であり、すべての格の取り出しが可能である。もう一つの表現として単文の

K-in-ain① ko② ang mansanas③.
（リンゴは③、私によって②食べられた①。）

という表現が使われる。すなわち、タガログ語では、基本的には「フォーカス主題」は複文の「擬似分裂文」であり、活格的な表現から不活格的な表現を導き出して前者のような「主題化」（＝無標化、絶対格化）の表現に変化したように思われる。それがその後、活格的な表現になったのが、後者の文である。

そうすると、「フォーカス主題」というものもかつての「活格言語」の活格表現形式への特別な意味の付加による不活格表現形式への変化の結果の「絶対格」であろうと予測される。そこでその変遷を追ってみたい。

まず動物に「注目・焦点」という原理から始まった活格言語の「絶対格」という形式から、次に同言語の活格形式の動詞文のマーカーの「主語」のような格が起こった。一方、情緒動詞や願望、強調などの意味の違いと付加による状態性を表現する不活格化形式（状態表現）への応用・発展で、それが、文章における「主題化」＝不活格化、すなわち、複文の「擬似分裂文」になり、その後「対格言語」において単文化した。取り出（主題化）された名詞と格に、日本語は「係助詞」の「は（＋格助詞）」という形式をとり、動詞に関する変化は起こさなかった。一方、フィリピン・台湾諸語では、取り出した格を「絶対格」＝「主題」で無標化（Unmarked）し逆に消去された格マーカーを示す動詞の個別的な変化を引き起こしたのであろう、印欧語は、「主語」を使い、同じように消去された格マーカーを示す動詞の個別的で限定的な変化を引き起こしたのであろうという結論に達した。特に、前者では、動詞の接辞が、後者では、動詞の分詞形が使われたのであろう。また、「能格」形式は、「対格

言語」へ発展への萌芽として「能格」＋「絶対格」という特殊な意味を表現するための形式を考案したのであろうと推測される。

VII. ヨーロッパの言語の接続法と非人称表現と「心」の表現とは

日本語の「被害の受け身」、「恩恵」、「敬語」、「伝聞」の形式のような「心」を埋め込み構造の形で表現し、その主節の消去と「連続動詞」等で表現する形式、または、「受動態」の形式を日本語は使う。一方、タガログ語では、may 等で不定を表現すると同時に、「敬意」表現は、接辞 maki-、paki- を使って表現している。

この日本語、フィリピン・台湾諸語独特の形式とは違い、ヨーロッパの言語は別の形式で表現しているようである。「動詞の接続法」である。「仮定」と「伝聞」という「心」の表現をする際にヨーロッパの言語にみられる特殊な動詞形態――**接続法**――の場合も、埋め込み構造で意味を表現し、動詞が接続法になり、その主節＝「心」の部分が消去されるという非常に似通った形式を持つのである。

If I were a bird, I could fly to you. → [I ASSUME (if I be a bird, I can fly to you.)]

また、ドイツ語では自動詞の受け身があり、それは形を変えて、伝聞的、客観的な表現に使うようである。

Man tanzte in der Halle.（人々が広間で踊っている。）（活格、同族目的語動詞）
Es wurde in der Halle getanzt.（伝聞）（非人称受け身）（不活格化）
In der Halle wurde getanzt,（トピック主題）（状態）（不活格化）

上記のような２番目と３番目の文の特徴は、不定表現である。ドイツ語では活格的な第一の文の自動詞を受動化して非人称の代名詞と結びつけ、日本語と同じように不活格的な「伝聞」表現をしているのである。そして、「位置主題化」するとその主語は消去されるのである。これは、英語の、methinks と結びつくと思われる。これも複文形式で階層的に解釈をすれば、Austin 的な解釈で出来上がった形式とも思える。

おわりに

動物の重要な本能である「注目・焦点」に基づいた言語形式は、「主語」、「フォーカス主題」である。前者は、外界の出来事を文に作り上げ、動詞化する際に目に映るものへの「注目・焦点」の問題であり、後者は、文章の流れの中の「注目・焦点」の問題である。この規則が「対格言語」を支配している一つの「原理」であろうと考えられる。しかし、その規則があてはまらない例を分析してみると以下のようなことが明らかになった。

「主語」「フォーカス主題」は、「対格言語」の日本語でもフィリピン・台湾諸語でも共通する同一の原理の上に成り立っている。違いは、動詞の変化形式の有無である。しかし、この規則の例外例を追求すると「活格」形式を「不活格化」（＝ 状態的な表現）にした場合に起こる。そして、共通の基底の意味形式をそれぞれの言語で別の規則により表現している事がわかった。日本語の例外の分析か

ら埋め込み構造で基底の意味を説明し、それらに一定の文法的な変化を起こして、関係部分を消去して出来上がったものが、例外的な表現、「奇妙」な「主語」になるとも考えられる。一方、フィリピン・台湾諸語では、動詞としての変化がない「擬似動詞」と状態を表現するアスペクトの変化がある ma- という特別な接辞を使った「不活格」表現で例外的な表現、「奇妙」な「フォーカス主題」、実はかつての「絶対格」を使うのである。

日本語の場合は、使っていない「受動態」と「連続動詞」という形式を使い、埋め込み構造で「心」の内容をも表現出来、その主節で「心」の部分を表現する。また、「伝聞」的な表現する時にはフィリピン・台湾諸語では擬似動詞 may という形式を使っている。一方、印欧語では、それらは動詞の特殊な形（接続法）その他各種の類型的な手法や，非人称構文を使うと表現することが出来る。これらすべての例外例は、「活格表現」の「不活格表現」化という原理に基づいていて、古い「絶対格」が残っていると考えられる。

その中での大きな変化は、「フォーカス主題」を表現する新しい形式が「対格言語」で考案されたことであろう。活格言語の「活格表現」に「主題化」するという一定の意味が付加されて「不活格表現」になるという手法を使い、その後の「対格言語」で中心的になる「フォーカス主題」を表現し、更なる活格化（＝単文化）で新しい形式が考案されたことであろう。

単純に外界を表現するために主体を示す活格言語の「絶対格」という形式から始まり、次に同言語の活格形式の動詞文の中心となる“主になる語”＝「主語」に似たマーカーが起こった。その後、活格文の不活格化表現形式が考案された。単純な活格文に伝聞、主観、情緒や願望等の意味の付加による不活格化表現（状態表現）の形成方法が使われ始めた。その中で、文章における活格文を「主題化」という強調文＝不活格文にするという手法で、主題構文＝擬似分裂文（Pseudo-Cleft Sentence）が考案された。その後、「対格言語」において取り出された名詞と「格」に、日本語は「格助詞」と「係助詞」“は”との置換または「格助詞」への「係助詞」“は”（ある意味では「絶対格」）の付加という不活格化表現形式を選び、動詞に関する変化は起こさなかった。一方、フィリピン・台湾諸語と印欧語では、取り出した格、「絶対格」＝「主題」は無標（Unmarked）のままにして、逆に消去された格を示す動詞の個別的な変化を基本にして、不活格的表現である受動態化を引き起こしたのである。日本語では、「絶対格」を表現するのは、「係助詞」“は”と「主語」“が”であり、フィリピン・台湾諸語では「絶対格」の「(フォーカス主題」であり、印欧語では、「主語」への移行と受動態形式であろうと推測される。

この試論から結論付けられることは、言語を「能格言語」、「活格言語」、「対格言語」、又は、それらの分裂（Split）という方法だけで定義づけ、分類がされるものではないことを示している。古い時代の「活格言語」の一形式（活格形式から不活格形式）から最終的に発達したと考えられる「フォーカス主題」が「対格言語」に起こった。しかもそのメインになる表現形式に加えて、一部に古い類型の規則の影響も残り「不活格」（＝状態）的に意味表現する手段が考案された。それらは、メインを補う形で使われているのである。この古い「活格言語」の「活格」（＝行為表現、客観的表現）の「不活格化」（状態表現＝主観的な報告・注目的表現）という形式が人類の言語で発達し、それらが「心」の表現形式に改良されて、現代も保存されていることがわかった。また、その中心となるのは、「絶対格」である。

森口　恒一（もりぐち　つねかず）MORIGUCHI, Tsunekazu
静岡大学

文献

馬場怒男（2015）『私たちはどこからきたのか：人類 700 万年史』東京、NHK 出版、158p.

Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge University Press. Cambridge. xxii + 271.p.

Greenberg, J.H. (1963) "Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements." in Greenberg(ed.), *Universals of Language*. MIT Press. Cambridge Mass. pp.72-113

——(1974) *Language Typology: A Historical and Analytic Overview*. Janua Linguarum. Series Minor 184. Mouton. The Hague.

Greenberg, J.H., C.A., Ferguson & E.A. Moravcsik (1978) *Universals of Human Language*, 4vols., Stanford Univ. Press, Stanford, Calif.

Humboldt, W. von (1836) *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwickelung des Menschengeschlechts*. F. Dümmler. Bonn,

石田修一（2016）『内容言語学の原理』東京、三省堂

——（2019）『人類史における活格言語、能格言語、——内容類型学の視点から——』『類型学研究』Vol. 5、pp.79-156.

クリモフ , G.A.（石田訳）（2016）『内容類型学の原理』東京、三省堂

Lehmann, W.P. (1973) "A Structural Principle of Language," in *Language* 49, pp. 47-66.

——(1978) *Syntactic Typology. Studies in the Phenomenology of Language*, Univ. of Texas Press. Austin.

森口恒一（1975）「タガログ語と日本語の主語」『雑誌・言語』Vol. 4 No.3. pp. 42-46. 東京、大修館

——（1977）「数詞から見た高砂族とフィリピン諸族の言語」『日本民族と黒潮文化』角川選書 No.91. pp. 318-336. 東京、角川書店

——（1995）「フィリピン・台湾高砂諸語における「主語」と「主題」」『言語研究』第 107 号 pp. 87-112.

—— (2005) "A Typology of Languages Based on Valence/Voice-marking and Focus." in *Corpus-Based Approaches to Sentence Structure*. pp. 95 –126. John Benjamin.

Ross, J.R. (1970) "On Declarative Sentences," in R. A. Jacobs & P. S. Rosenbaum (Eds.), *Readings in English Transformational Grammar*. pp. 222–272. Georgetown University Press. Washington.

Saussure, F. de (1916) *Cours de linguistique générale*. Publié par Bally, C & Séchehayé C.A., Payot, Paris.

Tesnière, L (1959) *Élèments de Sytaxe structurele*. Klincksieck, Paris.

Trubetzkoy, N.S. (1939) *Grundzüge der Phonologie*. Travaux du Cercle Linguistique de Prague. Prague

山口厳（1994）「活格言語・能格言語・対格言語」『雑誌・月刊言語』Vol. 23 No9, pp. 35-42. 東京、大修館

海外日本語教育インターン派遣に求めるものと求められるもの

―大学院科目「日本語教育実践研究」での実践を例に―

What Overseas Japanese Language Education Internship Dispatch Requires and What Is Required of Overseas Japanese Language Education Internship Dispatch: Example of Practice in the Graduate School Subject "Japanese Language Education Practical Research"

谷口　龍子

This paper summarizes the implementation status of internships to overseas Japanese language education institutions, which is a program that has been conducted at our university as part of graduate school education for 15 years since 2005. Due to changes in supply and demand between the students to be dispatched and the educational institutions that accept them, the purpose of intern dispatch is slowly changing from learning about Japanese language education overseas to the practice of education in the field. Along with this, the contents of pre-dispatch education and post-dispatch education have also changed. The status of online Japanese language education and training during the Covid-19 pandemic in recent years is also reported.

【キーワード】日本語教育、海外日本語教育インターン派遣、大学院授業科目、日本語教育の実践、オンライン日本語教育研修

Japanese education, overseas Japanese language education internship dispatch, the graduate school subject, practice of Japanese education, online Japanese language education and training

1. はじめに

将来、日本語教育に携わることを目指す者にとって、海外での日本語教育の現場に触れることは、自身の日本語教育の知識の多寡を確認したり、現場での教育実践を経験するだけでなく、各地域に根差した言語教育の多様性を知り、教育観をあらためて見直す上でも有益である。

本学では2005年度から、大学院教育の一環として日本語教育インターン実習が行われてきた（宇佐美　2010）[1]。その間に、海外における日本語教育の状況や派遣される学生たちのバックグラウンド、さらに外部資金の条件も変化し、受け入れ側の期待や送り出す側の派遣前教育の在り方も変化してきた。近年は、Covid-19感染者の増加により、2020年以降海外へのインターン派遣は困難となり、これまでの現地派遣に替わってオンラインによる日本語教育研修が行われ、実習形態の選択肢が増えつつある状況となっている。

そこで、本稿では、本学において大学院教育の一環として行ってきた日本語教育インターン派遣の

1　宇佐美 (2010) によると、2005 年度に総合国際学研究院に博士前期課程科目「日本語教育学臨地研究」が新設、翌年 2006 年度からは博士後期科目「言語教育学自立研究」が新規開講している。

うち、海外への派遣実施に的を絞り実施状況[2]について、重要な財源となっている国際交流基金のプログラムの変化も交えて振り返りつつ、送り出す側（派遣前教育、派遣される学生）と受け入れる側（体制、教員、日本語教育を学ぶ学生たち）という両方の視点から、海外日本語教育インターン派遣の意義についてあらためて考察したいと思う。

2. 本学大学院科目における日本語教育インターン派遣について

筆者が担当する本学大学院総合国際学研究科博士前期科目「日本語教育実践研究1・2」[3]および博士後期科目「言語教育論2」では、学生自身が日本語教育を実践するフィールドを探し、調査・実践計画をもとに現地で日本語教育を行うという自立研究を行っている。日本語教育機関に触れることで自身のこれまでの日本語教育に関する知識やビリーフなどについて再考すること、さらに異文化交流を視野に入れた日本語教育の実践について考えることを目的としている。

渡航や実践のスケジュールは、派遣先の事情によって様々だが、おおよその傾向としては、夏頃までに派遣先を決め、秋以降に派遣されるケースが多い。派遣前は、派遣される国や派遣機関の日本語教育事情についての下調べ、現地の日本語教育の現場でのリサーチトピックを決めて調査・実践計画を立てること、母語別日本語教育に関する知識を身につけたり、現地の使用言語に接したり学んだりすることも期待される。これらの一連の活動は、当該授業科目における活動として位置づけることができる。派遣前教育として、春学期の「日本語教育実践研究１」（博士前期課程）、あるいは「言語教育論１」（博士後期課程）を履修し、派遣中の活動は、派遣時期と派遣期間により、秋学期あるいは冬学期の「日本語教育実践研究２」（博士前期課程）、「言語教育論２」（博士後期課程）を履修することで、大学院の授業科目における活動の一環として単位が付与される。派遣後は、派遣報告会を実施することで派遣者による振り返りの機会となる。翌年以降の派遣に向けての他の学生たちへの刺激となり、実施報告は社会への還元としても機能している。

3. 日本語教育を知ることから、日本語教育の実践へ（日本語教育インターン派遣の目的の変化）

宇佐美(2010)によると、本学において国内外への日本語教育インターン派遣が正式に行われたのは2006年で、現在の「日本語教育実践研究」科目（博士前期課程）の前身となる博士前期課程科目「言語教育臨地研究」、「言語教育臨地実習」が大学院地域文化研究科言語教育学推進プログラムとして開設され、その授業の一環として、日本語教育インターン派遣が開始された。日本語教育インターン派遣の目的は、大学院生自身の自主的な研究計画力、研究遂行能力を高め、幅広い視野を修得させることであった。

海外インターン派遣には渡航費や宿泊費など経費がかかるが、2009年より国際交流基金「海外日本語教育インターン派遣」プログラムに採択され、基金からの補助を受けることで、本格的に海外日本語教育インターン派遣が開始されることとなる。渡航の航空運賃や宿泊費用がこのプログラムにより得られることから、派遣数が増え、本学との交流協定校[4]を中心とする多くの大学に学生を派遣される機

2　本学からは海外の交流協定校へ様々な形で日本語教育のインターン派遣が行われている。本稿では、筆者が担当する授業科目の一環として行われた海外日本語教育インターン派遣のみを考察の対象とする。

3　「日本語教育実践研究」科目は複数開設されており、担当教員によって授業内容は異なる。本稿の考察対象は、筆者が担当する「日本語教育実践研究 1・2」（博士前期課程）および「言語教育論 2」（博士後期課程）のみとする。また、筆者が担当する「日本語教育実践研究」では日本国内の日本語教育機関をフィールドとしたインターン派遣も行われているが、本稿では考察の対象としない。

4　2021 年 5 月 1 日現在、本学との国際学術交流協定校は 229 校ある。

会が増えた。主な派遣先は表１）のとおりである。

表1）大学院授業科目の一環としての海外日本語教育インターン派遣（2009年度－2016年度）

	大学名	国名	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1	オーストラリア国立大学	オーストラリア	1	1	3	1	1	1	1	2
2	ヴィクトリア大学	ニュージーランド	1	1	0	0	0	0	0	0
3	リュブリャーナ大学	スロベニア	1	1	1	2	2	2	2	2
4	ルンド大学	スウェーデン	0	1	0	0	0	0	0	0
5	マドリード自治大学	スペイン	1	1	1	1	1	1	0	0
6	ヴェネツィア大学	イタリア	1	1	0	1	1	1	1	0
7	ブカレスト大学	ルーマニア	1	1	2	2	2	1	2	0
8	エアランゲン大学	ドイツ	0	0	1	0	0	0	0	0
9	リーズ大学	イギリス	0	0	0	0	3	0	0	0
10	コロンビア大学	アメリカ	0	0	0	2	2	0	0	0
11	ミシガン大学	アメリカ	0	0	1	2	0	0	0	0
12	韓国外国語大学校	韓国	0	0	0	1	1	1	1	1
13	上海外国語大学	中国	3	8	6	4	6	4	6	2
14	香港大学	中国	1	2	1	1	1	0	1	0
15	北京大学	中国	0	0	0	0	0	3	1	0
16	東北師範大学	中国	7	0	0	0	0	0	0	0
17	國立台湾大学	台湾	0	0	0	0	4	0	1	0
18	淡江大学	台湾	0	0	0	0	0	0	0	2
19	シーナカリンウィロート大学	タイ	1	1	0	0	0	0	0	0
20	シンガポール国立大学	シンガポール	1	1	1	0	0	0	0	0
21	タマサート大学	タイ	0	0	0	0	0	0	0	1
22	ハノイ国家大学外国語大学	ベトナム	0	0	0	0	0	0	0	1
23	王立プノンペン大学	カンボジア	0	0	0	0	0	0	0	1
24	国立ガジャ・マダ大学	インドネシア	0	0	0	0	0	0	0	1
	合計数		19	19	17	17	24	14	16	13

※派遣者の一部には学部生も含まれる。
（東京外国語大学グローバル・キャリア・センター提供資料をもとに筆者作成）

筆者は2015年度より、当該科目を担当しているが、当初これらの科目の履修者の多くは、日本語教育の実践経験がない学生であった。日本語教育に関する知識は多少あっても実践や実習の経験はなく、インターン派遣により日本語教育の現場を知ることを目的とする者が多かった。したがって、派遣の受け入れ側には、言語教育、特に日本語教育の実践に定評がある機関あるいは日本語教育のスペシャリストによる指導が期待されていた。現地での活動は教員の補助業務や授業の見学が中心で、派遣期間は２～

３週間程度であった。派遣前教育では、日本語教育文法の確認や教案の作成、教室活動の実践に関する基本的な知識を身につけるためのトレーニングを行っていた。

その後、2017年度から国際交流基金のプログラムがアジアセンター所轄の「大学連携日本語パートナーズ派遣」となり、派遣先がASEAN諸国および中国、台湾に限定されることになった。派遣の目的も若干変わり、日本とアジアの文化交流の促進・強化を目指すこととなる[5]。それに伴い、当該科目における海外の日本語教育機関への派遣もアジアが中心となる。

海外では、現地の日本研究に関わる歴史や言語政策、日本語のプレゼンスにより組織における日本語教育のカリキュラムやコースデザインは様々である。

谷口・坂本(2013)では、東京外国語大学国際日本研究センターの日本語教育事情事情調査データベース[6]をもとに、日本語の語学教育としての位置づけが欧米型とアジア型に大きく分かれることが指摘されている。この区別は当該データベースや現地調査から見てとれた大きな２つの傾向であり、二項対立を示すものではない。

欧米では、「日本研究（Japan Study, Japanology）」の伝統により、日本研究そのものを英語あるいはドイツ語、フランス語など現地の言語で行うことが基本となる場合が多い。学部、大学院教育の中で日本語教育はほとんどの大学で必須であるが、日本語の運用能力の向上は日本の交流協定校への短期・長期的留学に負っていることが多く、教育機関によっては、日本語の学習者週3コマ程度、卒業時までに初級終了程度のレベルであっても卒業、修了が可能 なところもある。

一方、アジアでは、近年は、日本語教育は研究のためと言うより、経済交流、科学技術習得など実学目的で行われる傾向が強く、日本語の運用能力の習得に重点が置かれている場合が多い。日本研究も進められてはいるが、欧米のような現地の言葉での研究の蓄積が少ないことから日本語の文献から学ぶ必要があり、そのためにまず日本語のリテラシー能力を身につける必要がある。つまり、欧米型とは逆に、アジア型は各地の大学では日本語のリテラシー能力を身につけた後に日本研究を進めるという順序で進んでいるところが多い（谷口・坂本2013）。したがってアジアの日本語教育機関には語学教育としての日本語の授業が豊富にあり、これらの授業を充実させるためには日本語人材が必要となるのである。本学から派遣されるインターンに対しても、授業見学だけでなく、授業における教室活動に参加し、教員のサポートをしたり、場合によっては授業をまるごと担当し教壇に立つことが求められるケースが出てきた。派遣期間も短期間ではなく、現地の学年歴に合わせて、学期を通しての数か月の滞在が期待されるようになった。

5　国際交流基金の大学連携パートナーズプログラムの申請要領には、プログラムの趣旨として以下のことが書かれている。「日本とアジアとの文化交流の促進・強化を目指し、日本国内の大学等（以下「連携大学等」という）で日本語教育を専攻する学生を、ASEAN 諸国を中心とするアジアにおける高等教育機関等にインター ン（大学連携日本語パートナーズ）として派遣し、現地日本語教師・学習者を支援するとともに、現 地の人々との相互理解を促進し、深めることを目的としたプログラムです。」https://www.jpf.go.jp/j/program/dl/ac/pdf/AC-IP_j.pdf　2021 年度

6　国内外の日本語教育事情調査のデータベース：調査内容のうち、以下の 17 項目について公開している。学部および大学院の日本語関連学科やコースの特徴、学科の構成（組織・教員数・学生数）、日本語学習の主たる目的、必修科目名、日本人教員情報（人数・専門・役割・採用条件・現況・担当科目）、目標とする日本語のレベル、必修科目の使用テキスト、卒業生の進路、学習上の困難点、カリキュラムの中の日本留学の位置づけ、留学に対する意識・条件・選抜、連携大学、留学後の学生の状況 https://icjs.jp/?page_id=39

表2)大学院の授業の一環としての主な海外日本語教育インターン派遣(2017年度－2021年度)

大学名	国名	2017	2018	2019	2020	2021
上海外国語大学	中国	2	2	0	0	*2
國立台湾大学	台湾	1	1	1	0	0
ヤンゴン大学	ミャンマー	1	1	1	0	0
タマサート大学	タイ	1	2	2	*1	*1
ハノイ国家大学外国語大学	ベトナム	1	2	2	0	0
国立ガジャ・マダ大学	インドネシア	1	1	0	0	0
フィリピン大学ディリマン校	フィリピン	0	1	1	0	0
ラオス国立大学	ラオス	0	0	1	0	0
新世界日本語学校	中国	0	0	0	0	1
		7	10	8	1	4

※1 ＊印はオンラインで実施　(筆者作成)
※2 日本語教育インターン派遣には外部資金によるものと学生の自費による実施があり、本表は両者を含む。

国際交流基金のプログラムがアジア地域限定に変更された頃、本学に進学する大学院生たちのバックグラウンドにも若干変化が見られるようになった。これまでのような日本語教育実践の未経験者ではなく、学部において日本語教育の教壇実習を経験した者、日本語教育の基礎的な知識と教授経験がある者や、日本語学校の現役の教師、青年海外協力隊などによりすでに海外で日本語教育の経験がある者が大学院に進学するケースが増えてきたのである。これらの学生たちが日本語教育インターン派遣に望むことは、日本語教育のスキルのブラッシュアップやこれまで経験した日本語教育の現場とは異なる地域での日本語教育の実践である。受入機関の要望と派遣希望者のバックグラウンドが相まり、送り出す側と受け入れる側の双方の要望に叶った派遣が実現されるようになった。表2)は、2017年度以降の派遣先リストである。

表3)海外日本語教育インターン派遣先と派遣期間(2019年度)

	派遣先	派遣実施日	派遣期間
1	上海外国語大学	*2020年2月～ 3月	2週間
2	國立台湾大学	2019年10月13日～ 10月26日	2週間
3	タマサート大学	2019年8月15日～ 9月29日	46日
4	ハノイ国家大学外国語大学	2019年8月下旬～ 10月	2 ヶ月
5	ヤンゴン大学	2019年12月2日～ 2020年2月28日	3 ヶ月
6	フィリピン大学ディリマン校	2019年7月25日～ 12月21日	5 ヶ月
7	ラオス国立大学	2019年8月下旬～ 2020年1月末	5 ヶ月

＊上海外国語大学への派遣はCovid-19の影響により実施中止となった。　(筆者作成)

派遣が数か月に及ぶ長期間のものが増え、現地での活動内容も授業見学や教員の補助だけでなく、教壇実習が増えたことから、派遣前教育の内容も個々の派遣のケースに合わせて対応することになった。派遣先である日本語教育機関における日本語教育の現状(教授法、教室活動など)把握、教壇実習のための教案作成やマイクロティーチングに加えて、アクションリサーチの計画指導などが主な指導内容となった。

4. 海外日本語教育インターン派遣実践の効果

日本語教育の未経験者にとって日本語教育の現場に触れることは、日本語そのものや日本語教育の知識、日本語教育の実践、組織における日本語教師の業務内容や人間関係など様々なことについて、既有知識を確認しつつ経験することができる。さらに、現地で生活をすることで、現地における異文化接触、言語ゲストしての体験など得られるものは限りなくある。

日本語教育の経験者にとっても同様の収穫が得られるだけでなく、日本語教育実践の多様性、教員と生徒との関係性についての意識、日本語教育全般の既有知識や自身の教育観や教え方などのビリーフを再考するきっかけとなる。さらに、派遣者にとっては日本語教育研究のためのデータ収集の機会を得る機会も得られ、日本語教育の人的ネットワークを構築する機会ともなる。

実際、日本語教育の未経験者であった学生がインターン派遣を経験することで日本語教育への興味が深まり、卒業後に国内の日本語教育機関に就職するケースや、在学中にインターン派遣として訪れた海外の教育機関に卒業後に就職するケースもある。このように海外日本語教育インターン派遣は学生たちのその後の人生に大きな影響を与えていることがわかる。

では、受け入れ側の学生たちにとってはどのようなメリットがあるのであろうか？日本語そのものを教える技術や効果に関しては、派遣された学生自身のバックグラウンドにより個人差が出るであろう。しかしながら、現地の学生たちの学習動機や学習意欲の向上という点においては大きな効果が見られることが実施報告からわかっている。学生と年齢が近い者が日本語を教えることでより教師を身近に感じ、動機の向上につながったこと、それまで日本語には興味がなかった学生がインターンと知り合ったことにより、日本語に興味を持ち、その後の学習意欲につながったという報告が上がっている。インターン派遣終了後も派遣生と現地の学生との交流が続き、派遣生が現地の学生の日本留学の手助けをするケースも見られる。インターンには日本語ネイティブではない学生もいるが、日本語を母語としない留学生のインターン派遣は、現地で日本語教育を学ぶ学生たちにとってあこがれや目標となることもある。現地の学生たちから「どうすればそんなに日本語が上手になるのか？」と日本語学習の方法などについてアドバイスを求められたというインターン経験者からの報告もある。

5. オンライン日本語教育研修の実践

2020年に入り、コロナ禍で現地派遣が難しくなったことから、オンラインによる日本語教育研修を行う機会が増えてきた。現地の授業そのものがオンライン形式に移行した受け入れ先の教育機関では、もともと派遣される予定だった本学のインターンに対してオンライン研修を行なっている機関もある。授業の補助だけでなく授業実践も行われている。

2021年度は、海外の 1 大学においてオンライン日本語教育の研修が行われた。現地の大学における会話や翻訳の授業などオンライン授業に参加し、教員のサポートや学生の会話練習の相手をするなど様々な活動への参加が許された。自作の資料や実習にオンラインでコメントをもらい、オンラインでの授業展開を学ぶことができ、日本語教育に関するIT技術も向上したという報告が上がっている。

オンライン研修においても、現地の日本語教育の事情（教授法、教室活動の実践、教員と学生の関係性など）を知る、日本語を教えるなどの活動は可能である。また、受け入れ先の学生たちと知り合うことで、調査研究のデータ収集の協力者を得る機会も得られ、実習生にとって有意義な経験になることは間違いない。

一方、受入先側の受け入れ体制の整備（インターンが参加する授業や教員の確保、インターンの役割分担の確認、研修前の準備や指導、実践にあたっては、IT技術者の補助など）が必要となる。オンライン

による日本語教育は、教室での授業以上に、視聴覚教材や豊富なスライドの準備が必要となることから実習生にとっても準備に時間がかかるという現実もある。

当然オンライン研修では補えない部分もある。現地の生活を体験したり、学外の人々と授業以外のところで交流を行うことはできない。たとえ数週間であっても現地に滞在できれば、日本語教育の現場で活動を体験するだけでなく、その土地で生活し、人々や現地の言葉に接することで、日本語教育の現場の背景にあるその国や地域の言語、文化、社会を知り、その上で現地における日本語教育の位置づけや意義を考えることができ、その意味は大きいが、オンライン研修ではどれだけバーチャルリアリティを駆使しても補い切れない。

今後もCovid-19との共存が続くことが予想され、オンライン研修も継続されることと思われる。現地の学生と研修をうける学生とのオンラインによる授業外の交流活動を行うことや学外の言語景観や人々の日常生活の様子などについてオンデマンド式で視聴、現地の言語空間を体験できるような仕組みを作るなどの工夫が望ましい。

6. おわりに（まとめ）

これまで本学大学院における授業の一環としての海外日本語教育インターン派遣の実施状況の変遷について概観してきたことを簡単にまとめる。外部資金のプログラムの条件などの影響によりアジア地域への派遣が増えることになった。それに伴い、受け入れ先となる日本語教育機関の需要とインターン派遣を希望する大学院生のバックグラウンドの変化が相まり、派遣の目的が日本語教育の現場を知ることから、教育実践に変わり、派遣機関も長期になった。派遣前教育の内容もその変化に対応して修正されることになった。また、近年はCovid-19の影響により現地派遣に変わってオンライン研修が増えつつあるということである。

言語教育は、参加者間のふれあいという点において教員と学生、学生同士が生でインターアクションを行う対面の授業に優るものはないであろう。しかしながら、ワールドワイドに教員と学習者を結ぶことができる点やコスト面などの利点から、オンラインによる日本語教育研修は、今後言語教育の実践形態の１つとして存続すると思われる。

今後は遠隔言語教育システムにおける教育実習の方法、各種教授法の発展、教材の開発、バーチャルリアリティやオンライン式とオンデマンド式教材の併用など日本語教育実習に関する発展や開発が期待される。

谷口　龍子（たにぐち　りゅうこ）TANIGUCHI, Ryuko
東京外国語大学

謝辞

長年、本学のインターンを受け入れてくださっている海外の交流協定校の担当諸機関および担当の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

付記

本稿は、平成28年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」「認知の異なりが言語教育および言語習得に及ぼす影響－海外日本語教育インターンシップ実践の記録、および産出データからの考察」（研究代表者:東京外国語大学谷口龍子、共同研究

者:東京農工大学篠原和子)、国際日本研究センター国際日本語教育部門共催、共同研究発表会での発表内容をもとに大幅に加筆修正したものである。

参考文献

谷口龍子・坂本惠(2013)「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査 データベース中間報告Ⅰ －欧米型(日本研究の中の日本語教育)とアジア型(日本語教育から日本研究へ)－ 」『日本語・日本学研究』No.3 東京外国語大学国際日本研究センター

谷口龍子(2018)「本学大学院での海外日本語教育インターン派遣の取り組み」 共同研究発表会　第一部「海外日本語教育インターン派遣によって誰が何を得られるのか」平成28年度文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門共催発表資料

宇佐美まゆみ(2006)『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成」プログラム報告集１』東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室

宇佐美まゆみ(2007)『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成」プログラム報告集２』東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室

宇佐美まゆみ編(2010)『平成21年度日本語教育学臨地実習報告書』東京外国語大学大学院総合国際学研究科言語応用専攻日本語教育学専修コース

日本語教育インターン派遣報告会発表資料(2016年度～ 2021年度)(「日本語教育実践研究２」(博士前期課程)科目、「言語教育論２」(博士後期課程)科目)

国際日本研究センター主催　夏季セミナー 2021
（2021年7月21日～ 7月22日、ZOOMにて）

サマースクール
大学院生研究発表要旨

◆日本語・日本語教育◆

守屋　久美子（Kumiko Moriya　東京外国語大学）
　　完全遠隔日本語教育実習の実施と実習生が感じた課題点
　　―ICTを活用した遠隔日本語教育実習の学習環境構築を目指して―
エー　ピュー　ニェイン（Aye Phyu Nyein　東京外国語大学）
　　ミャンマー人日本語学習者が使用する聴解学習ストラテジー
　　―ヤンゴン外国語大学の日本語学習者を対象として―
チホネンコ　マクシム（Maksim Tikhonenko　東京外国語大学）
　　日本語母語学習者による高校英語「対話」スピーキング
　　―学習者コーパスの縦断的成長：流暢性と複雑性の視点から―
グエン　ザ　トーアイ　ズ（Nguyen Gia Thoai Du　東京外国語大学）
　　日本語母語学習者によるベトナム語の“完結／未完結”標識“rồi / sẽ”の習得
　　―日本語のテンス・アスペクトとの対照的視点から―
ジュマエフ　ラヒモナリ（Jumaev　Rakhmonali　東京外国語大学）
　　日本語とウズベク語の受身分の対照研究
帰　翔（Xiang Gui　東京外国語大学）
　　「太郎に限らず次郎」は一つの句か
　　―「集合操作表現」の再考察―
葉　素穎（Ye Suying　北京大学）
　　雑談における「物語の開始」の日中対照研究
　　―質問の機能と会話参加者の相互行為を中心に―
佐藤　茉奈花（Manaka Sato　東京外国語大学）
　　アニメキャラクターの性格と文末表現の関係
デナザレ　フィゲイラ　フラヴィオ（東京外国語大学）
　　日本語とブラジル・ポルトガル語の翻訳に見られる役割語の様相
　　―表現手法の新しい類型化の試み―
シルヴェステル　カツァワ（Sylwester Kacała　ヤギェロン大学）
　　日本語における一人称代名詞の用法と役割
アレクサンドラ　ホラプエク（Aleksandra Chrapek　ヤギェロン大学）
　　視聴覚翻訳の方法の分析
　　―「スターウォーズ」と「機動戦士ガンダム」を中心にして―

◆歴史・文化・文学◆

ジョン　ヘンダレアル　フェルナンデス（João Renda Leal Fernandes　リオデジャネイロ州立大学）
産休・育休制度と現状の日伯比較分析

王　喬丹（Qiaodan Wang　東京外国語大学）
水木しげるの戦争をめぐる『墓場鬼太郎』における妖怪キャラクターのあり方

陳　佳涵（Jiahan Chen　東京外国語大学）
「デンドロカカリヤ」と『壁』に関する考察―花田清輝の批評を触媒に―

張　希毅（Gxiyi Zhan　東京外国語大学）
共振する「内」と「外」―『行人』における「未来」への可能性―

シルウィーディー　サラ（Sarah Sherweedy　東京外国語大学）
〈夫婦像〉を形成する「革命」―太宰治『おさん』を中心に―

李　喜珍（Heejin Lee　韓国外国語大学校）
後藤明生『夢かたり』論―植民地挑戦と「わたし」の沈黙―

蘇　文甯（Wen-ning Su　国立台湾大学）
中世叙景歌における叙情性―瀟湘八景和歌における「瀟湘夜雨」を中心に―

二階　健次（Kenji　Nikai　東京外国語大学）
山吹歌の「みの」考―常縁から道灌へ―

渡邉　啓太（Keita watanabe　東京外国語大学）
1960年代東京における警察の防犯活動

港　那生（Nao Minato　東京外国語大学）
べ兵連の地域的展開：長崎べ兵連を中心に

犬塚智史（Satoshi Inuzuka　シンガポール国立大学）
テレビジョンは家族を結びつけることができたのか？
―インターネット普及以前の1960年から1990年にかけての実証的検証―

築地　夏海（Natsumi Tsukiji　東京外国語大学）
日本の動物園を通してみるアジアゾウと人間の関係についての人類学的考察

賴　瑜瑩（Yuying Lai　東京外国語大学）
日本における就業形態と生涯学習の発展

重松　香奈（Kana Shigematsu　東京外国語大学）
特別支援を必要とする在外の子どもたちの言語発達の実態を複数言語獲得の可能性
―多言語環境シンガポールにおける調査から―

陳　怡青（Isei Chinn　日本大学）
翻訳と「文字」の役割に関する研究―『敦煌』論―

安　昭映（Soyoung Ahn　韓国外国語大学）
『今昔物語集』の女性観に関する考察

完全遠隔日本語教育実習の実施と実習生が感じた課題点
―ICT を活用した遠隔日本語教育実習の学習環境構築を目指して―

A Study on Implementation and Related Issues on Japanese Language Teacher Training on Full Online: Aiming for Online Learning Environment of Japanese Language Teacher Training Using ICT

守屋　久美子

本研究は教育デザイン研究に基づき、準備から実習実施まで全てオンラインで実施した遠隔日本語教育実習について関与者である実習生５名への事後インタビューを分析し、実施に関する課題点を探った。２学期にわたって２つの異なるタイプの完全遠隔日本語教育実習を実施し、その後行ったインタビューの結果、実習生は学習者との関係において①日本語教育の技術に関する課題点、②日本語教育実習特有の課題点、③遠隔教育特有の課題点を抱えていた。また、教師および実習生間のスケジュール調整にも課題が見られた。以上の結果を踏まえ、遠隔日本語教育実習の実施においては実習生への遠隔による学習リソースの提供、学習者の既習内容から独立した実習コース設計、議論の場の設計、遠隔教育の理論を踏まえた実習実施が必要であることが明らかとなった。

キーワード：遠隔日本語教育実習、教育デザイン研究、ICT、学習環境デザイン、オンライン授業
Online Japanese language teacher training, educational design research, ICT, Learning environment, Online class

ミャンマー人日本語学習者が使用する聴解学習ストラテジー
―ヤンゴン外国語大学の日本語学習者を対象として―

The Strategies Use of Learning Japanese Listening Comprehension of Learners in Myanmar: An Analysis of Surveys Held at Yangon University of Foreign Languages

エー・ピュー・ニェイン

本研究では、ミャンマーにあるヤンゴン外国語大学（以下 YUFL）の日本語主専攻学習者の聴解学習ストラテジー使用の傾向を明らかにすることを目的とし、YUFL の日本語主専攻学習者２年生、３年生、4 年生を対象に、聴解学習ストラテジー使用についてアンケート調査を実施した。調査から得られたデータに対して探索的因子分析を行った結果、第 1 因子「繰り返すストラテジー」、第 2 因子「既有情報から内容理解を構築するストラテジー」、第 3 因子「聞き取った内容を基にアウトプットするストラテジー」の 3 つの因子が確認された。使用頻度の観点から、学習者は第 2 因子を一番多く使用し、続いて第 1 因子、第 3 因子の順に使用していることが分かった。さらに、聴解学習ストラテジー使用の学年による違いや日本語能力試験の合格レベルによる違いから分析し、考察する。

キーワード：聴解、学習ストラテジー、日本語学習者、ヤンゴン外国語大学、ミャンマー
Listeningcomprehension,Learningstrategies,JapaneseLearners,YangonUniversityofForeignLanguages,Myanmar

高校英語縦断的「対話」スピーキング学習者コーパスの研究
―流暢性と複雑性のケーススタディー―

Longitudinal Research on Fluency and Complexity of L1 Japanese Learners of English Conversations by High School Learners

チホネンコ・マクシム

２０ヶ月にわたり 32 名の日本語母語話者高校生の英語学習者がフィリピンにいる教師から 1 ヶ月に一回オンライン英会話スピーキングレッスンを受講した。更に 22 名の統制群がおり、15 課目から 17 課目まで 3 レッスンのみを受講した。レッスンの時のやりとりは文字化され、マルチモーダルのコーパスにされ、分析された。

本発表では、２名の学習者による英語やりとりの縦断的な分析の結果を紹介し、流暢性と複雑性の変化パターンを紹介する。20 ヶ月にわたり顕著に向上したのは流暢性、特にスピーチ・レートである。一方で、複雑性は少ししか伸びなく、一切変化してこなかった指標も見られた。

キーワルド：複雑性、流暢性、縦断的研究、第二言語習得、コーパス
Complexity, Fluency, Longitudinal Research, SLA, Corpus

日本語を母語する学習者よるベトナム語の「rồi / sẽ」表現の習得

Second Language Acquisition of aspectual expressions「rồi / sẽ」in Vietnamese by native speakers of Japanese

グエン・ザ・トーアイ・ズ

本稿では、東京外国語大学でのベトナム語専攻３年・4 年生の上級学習の８名を主たる対象者として、完結と未完結表現の「rồi / sẽ」の習得に関する調査を行う。まず、学習者に背景情報のフェイスシーを記入してもらって、その後「rồi / sẽ」の使用に関する 20 分程度のテストの回答にも依頼する。次に、決まった話題について参加者と 30 分程度の会話を実施する。両言語におけるアスペクトは多少な違いがあるために、日本語を母語とするベトナム語学習者にとって、「rồi / sẽ」の習得は困難ではないかと予想される。調査を通じて、日本語 L1 学習者による、「rồi / sẽ」の使用状況が明らかにした上で、適切な指導法に応用すると期待される。

キーワード : 非完結相、完結相、アスペクト、ベトナム語教育、第二言語習得
perfective, imperfective, aspect, Vietnamese language education, second language acquisition

日本語とウズベク語の受身文の対照研究

A Contrastive Study on Passives of Japanese and Uzbek

ジュマエフ・ラヒモナリ

筆者は自分の日本語学習経験および教授経験を通して、ウズベク人母語話者が日本語学習する際もっとも誤用が起こりやすい項目の一つである受身文について日本語とウズベク語の対照的な分析を行い、両言語の受身文の間にみられる共通点と相違点を明らかにすることを目的とした。

本研究では、書き言葉における両言語の受身文がどのように使われているのかに関する調査分析を行った。文学小説として、夏目漱石の「こころ」とそのウズベク語翻訳本 “Qalb[1]”、安部公房の「砂の女」とそのウズベク語翻訳本 “Qumdagixotin[2]”、「箱男」とそのウズベク語の翻訳本 “Yashik-Odam[3]”、を用いた。データ中に受身文がどのように使われているかを、受身文の使用率を中心として調査分析を行い、両言語の受身文の使用率を明らかにした。

また、第一に、両言語にともに存在する受身文、あるいは片方にしか存在しない受身文という形で整理し、日本語とウズベク語の受身文の範囲を明らかにした。

第二に、日本語とウズベク語両言語で共に存在するタイプであっても、ウズベク語では受身文を避けるケースがあるように思われるので、それがどういう性質のものであるのかを明らかにした。

1 “Qalb” は日本語からウズベク語への翻訳である。2013 年に N.Aminova によって翻訳された。
2 “Qumdagixotin” はロシア語からウズベク語への重訳である。2016 年に VahobRuzmetov, ErkinErnazarov によって翻訳された。
3 “Yashik-Odam” はロシア語からウズベク語への重訳である。1986 年に S.Rahmon によって翻訳された。

「太郎に限らず次郎」は一つの句か
―「集合操作表現」の再考察―

Is "Taro nikagirazu Jiro" a phrase?
A Reconsideration of “Set Operational Expressions”

帰　翔

日本語には、「太郎に限らず次郎も来た」、「花子をはじめ多くの学生をパーティーに呼んだ」、「国語に加えて数学も不合格だった」、「雑誌のかわりに辞書を買った」など、同類の事物を並べ、並べられる事物の相互関係を示す複合辞表現がある。

本発表は、複合辞句を後続名詞句の従属要素として見る江口正氏の「集合操作表現」説を検討する。「太郎に限らず次郎」を一つの「名詞句の拡張的な構造」として扱う分析には少なくとも、副助詞・係助詞によるとりたての範囲解釈の問題や、量修飾の副詞成分との共起問題が起きると指摘したい。

キーワード：複合辞、「に限らず」タイプ、とりたての範囲、量修飾の副詞句、等位構造
compound particle, the “nikagirazu” type, scope of focusing particles, quantity adverbial phrase, coordinate structure

雑談における「物語の開始」の日中対照研究
―質問の機能と会話参加者の相互行為を中心に―

A Contrastive Study on the Start of Conversational Narrative between Japanese and Chinese: focus on the Functions of Questions and the Interactions between Speakers

葉　素穎

本発表における「物語」とは、「雑談の中に現れる過去に発生した出来事の報告」のことである。質問は本来情報要求の機能を持っているが、会話管理の面においては、話題の導入をしたり、会話の開始をさせたりする働きもあるとかんがえられる。それに、「質問－応答」という参加者のやり取りの中で、会話が動的に構築されていくことになるだろう。そこで、本発表では、友人関係の日本語母語話者と中国語母語話者の雑談に現れる「物語」の開始に焦点を当て、質問の機能と会話参加者の相互行為という視点から実証的に考察し、日中両言語の相違を記述・説明しようとする。

キーワード：物語の開始、質問、相互行為、日中対照研究
the start of conversational narrative, questions. interactions, contrastive study

アニメキャラクターの性格と文末表現の関係

The Correspondence between Sentence-final Expressions Used by Anime Characters and Their Personalities

佐藤　茉奈花

アニメなどの創作作品では、キャラクター特有の言語表現が登場する。キャラクターの年齢や性差、職業などの社会的属性と言語表現との結びつきについては、役割語研究においてこれまで盛んに行われてきた。しかし、内面的な属性である性格と言語表現との結びつきに関する研究はまだ少ない。そこで、本研究ではアニメ『ラブライブ！ school idol project』を分析対象とし、女性キャラクター９人の性格と言語表現との関係について分析、考察を行った。公式プロフィールから性格を表す語を抽出し、性格診断法「東大式エゴグラム」を参照して、９人のキャラクターを５つの性格的グループに分類した。そのうえで、それぞれの性格的グループ内でどのような言語表現が使用されているのか、文末表現に注目し、分析を行った。その結果、特に女性文末詞の使用・不使用によって、キャラクターの性格が効果的に表現されていることがわかった。

キーワード：アニメ・キャラクター・性格・文末表現・女性文末詞
Anime, Character, Personality, Sentence-Final Expressions, Feminine Sentence-Final Particle

日本語とブラジル・ポルトガル語の翻訳に見られる役割語の様相
―表現手法の新しい類型化の試み―

デナザレ・フィゲイラ・フラヴィオ

本研究ではブラジル・ポルトガル語において、日本語の役割語がどのように翻訳されているかを分析している。本発表では、金水（2003）が提案する「役割語度」及び山口（2007）が提案する「足し算式」と「引き算式」という役割語の表現手法を参考とし、漫画から収集された例文を分析しながら、「足し算式」、「引き算式」、「入れ替え」という三つの手法に分けた役割語の表現手法の新しい類型を提案する。役割語の表現手法の新しい類型はまだ初歩的な段階にあるため、今後の課題として、役割語の例文とその翻訳のデータを更に増やし、その有効性を検証することが挙げられる。

キーワード：日本語の役割語、ブラジル・ポルトガル語、翻訳、役割語の表現手法、日本の漫画
Japanese Role Language、Brazilian Portuguese, Translation, Methods of expression of Role Language, Japanese Comics.

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
山口治彦（2007）「役割語の個別性と普遍性：日英の対照を通して」、金水敏（編）『役割語研究の地平』くろしお出版、pp.9-25

日本語における一人称代名詞の用法と役割

First Person Pronoun: Its Usage and Function in the Japanese Language

シルヴェステル・カツァワ

本発表では、日本語における人称代名詞の特徴を論じ、ヨーロッパ言語における人称代名詞と比較したいと思います。そして、一人称代名詞を例にしてその文法的な役割について話したいと思います。

一人称代名詞は性別や身分や語り手の気持ちなどの様々なニュアンスを表し、本発表では敬意と皮肉さを表示する一人称代名詞を取り上げて分析します。最後に、一人称代名詞を分類し、ソーシャルメディアを中心にしてその使用頻度を紹介します。

キーワード：言語、文法、一人称代名詞、敬語、皮肉さ
language, grammar, first person pronouns, honorific language, sarcasm

視聴覚翻訳の方法の分析
―「スターウォーズ」と「機動戦士ガンダム」を中心にして―

Analysis of Audiovisual Translations Based on "Star Wars" and "Kidō Senshi Gundam"

アレクサンドラ・ホラプエク

本発表では、視聴覚翻訳の方法、特に字幕と吹き替えの相違やそのメリットとデメリットについて話したいと思います。用例として、同様なテーマを取り上げている「スター・ウォーズ」と「機動戦士ガンダム」の二つの作品を分析します。両作品は、世界のシネマトグラフィーに大きな影響を及ぼしたもので、サイエンスフィクションというジャンルの先駆的な名作です。

キーワード：視聴覚翻訳、映画、字幕、吹き替え
audiovisual translation, film, film subtitles, dubbing

産休・育休制度と現状の日伯比較分析

Maternity, Paternity, Childcare and Caregiver Leaves in Japan and Brazil: A Comparative Analysis

ジョアン・ヘンダ・レアル・フェルナンデス

The lecture seeks to present to international students a brief description of the leaves available to adoptive or birth parentes in Japan and Brazil. It also intends to discuss how these issues are importante to promote more gender equality in the workplace. Some other foreign legal systems will also be mentioned, such as the Swedish, Norwegian and Chilean models of parental leaves.

Key words: Comparative Law; Parental Leave; Maternity Leave; Paternity Leave; Childcare and Caregiver Leave; Japan; Brazil; Sweden, Norway; Chile; Employment discrimination; Gender Equality; Labor and Employment Law.

水木しげるの戦争をめぐる「墓場鬼太郎」における妖怪キャラクターのあり方

Yo-kai's Ideal Situation in *Graveyard Kitaro*, Based on Shigeru Mizuki's Experience of War

王　喬丹

アジア・太平洋戦争に於ける激戦地ニューブリテン島での戦闘、負傷経験を持つ漫画家である水木しげるは戦後、戦記漫画、妖怪漫画などを描きつづけた。『総員玉粋せよ！聖ジョージ岬・哀歌』(1973)などの戦記漫画では水木自身の戦争体験は決定的な重みを持っている。一方、その妖怪漫画も例外なく、彼の戦争体験に大きな影響を受けたと言える。その中でテレビ化された『ゲゲゲの鬼太郎』は貸本時代に描いた『墓場鬼太郎』を改名したものである。

子供向けの作品に偏る『ゲゲゲの鬼太郎』とは違い、『墓場鬼太郎』はグロテスクに満ちたシーンが多くある。このような人物設定とストーリーの構成は水木の戦争経験から大きな影響を受けたと思う。そのため、『墓場鬼太郎』は水木しげるの戦争経験に根ざして書かれていることを論証することは、本研究の研究目的である。本研究は、『墓場鬼太郎』の人物設定とストーリーの構成の両方から、水木の戦争経験から受けた影響を明らかにする。つまり、どうしてそのような人物、物語のストーリーを設定するかについて、戦争経験の視点からその原因を明らかにする。

キーワード：妖怪、水木しげる、マンガ、戦争体験、隠喩
yokai, Mizuki Shigeru, manga, war experiences, metaphor

「デンドロカカリヤ」と『壁』に関する考察
―花田清輝の批評を触媒に―

Research on "Dendrocacalia" and "The Wall": Be Guided by the Comments of Hanada

陳　佳涵

「デンドロカカリヤ」は安部公房が 1949 年 8 月に発表した作品である。筆者は、安部が 1940 年代後半に書いた初期作品には、物語の面にも、使われた言葉の面にも、退廃的な傾向がはっきりと感じられるのを修士論文の中で指摘した。その一方、「デンドロカカリヤ」は、安部のシュルレアリスムの第一作であり、また変革作としても大きな意義があると位置付けられる。しかし、作品の変革に関する先行研究の多くは、前作と異なる「デンドロカカリヤ」の良さに焦点を当て、その前の初期作品における退廃の傾向についての言及は少ない。さらに、花田が述べた「デカダンと同様な形態をもつ」という話から、花田にとっては、安部の作品は決して非退廃的なものと言えないことが明らかである。これは、二人の間に「デカダンス」に対する理解の違いによるものと考え、修士論文で花田と安部が持つ「デカダンス」感覚の異同点について分析を行った。実際に花田は安部の作品を批判したほか、太宰治、坂口安吾などの無頼派の作品も批判したことがある。筆者今後の研究のポイントは、同時代に「堕落」あるいは「デカダンス」の風潮の形成を促す原因を解明し、その系譜をまとめることである。今回の報告では、安部は花田の評価をどのように見受けているのかを検討し、「デンドロカカリヤ」と比較しながら、『壁』（1951 年）に「デカダンス」から脱却させるために安部はどのように努力したのかを検討したい。

キーワード：安部公房、花田清輝、シュルレアリスム、デカダンス、戦後文学

共振する「内」と「外」
―『行人』における「未来」への可能性―

The Union of the Subject and the Object: Implying the Way to Future Possibility of Civilization in *Koujin*

張　希毅

本研究は夏目漱石の小 説『行人』における意味を生成する機構を解明するものである。まず、作品にあらわれた複数の女をめぐるエピソードのヒロインたちは実際に主人公 の一郎の寸断された「身体」のメタファーであることを検証し、その切断の表象と響く漱石の文明論的意識を考察する。それは『行人』の中で 主人公 の 一郎と二郎がそれぞれに前近代的日本、近代日本の寓意性が託され、西洋近代のもつ同一化倫理により、前近代的な日本の主体が抑圧され、切断された図式である。この意味で、最終章の「塵労」にお ける一郎の旅は、こうのように寸断された主体 性を回復するための儀式として理解しえる。この上、旅の中で一郎が悟った「絶対」の境地と連動する「禅」という思想の転回を考察し、テクストの中で提示された西洋的近代のヘゲモニーがきたした「外発的な開化」を脱し、真の開化の未来に通じる可能性を解明する。

キーワード：近代、前近代、メタファー、情動、禅
modern, pre-modern, metaphor, affection, Zen

〈夫婦像〉を形成する「革命」
―太宰治の『おさん』を中心に―

The "Revolution" Shaping the Image of Husband and Wife: Focusing on Dazai Osamu's "Osan"

シルウィーディー・サラ

太宰はデビュー作の『列車』から、未完の絶筆の『グッド・バイ』まで、様々な〈夫婦像〉を描いてきた。その〈夫婦像〉の形成に影響した外在的な要素が幾つか見られる。その一つとしては「革命」である。太宰治文学における「革命」についての多くの研究が『斜陽』を中心として論じたものであるが、「革命」は前期作品から後期作品にかけて登場する太宰治文学の一つキーワードである。

今回の発表では、「革命」という言葉が 16 回も登場する後期作品の『おさん』を取り上げ、同じ 1947 年に発表された『斜陽』の「道徳革命」と比較しながら、太宰が描いた二面性があると考えられる「革命」と、それが、『おさん』に登場する旧い「夫婦像」と違う、「夫婦」というかたちのあるものを超えたデカダン的な〈夫婦像〉の形成に及ぼした影響に注目したい。

キーワード：太宰治、おさん、夫婦、革命、道徳革命
Dazai Osamu, Osan, Husband and Wife, Revolution, Moral Revolution

後藤明生『夢かたり』論
―植民地挑戦と「わたし」の沈黙―

Meisei Goto's "Yumekatari": Colonial Korea and the Silence of Narrator

李　喜珍

後藤明生は外地引揚派に属した作家である。後藤は初期から植民地朝鮮での幼年期と敗戦・引揚体験を多くの作品で描いており、その代表作が『夢かたり』(1975)である。そこで本発表では、『夢かたり』の「わたし」が他人と関わる場面を検討し、現在の「わたし」は植民地朝鮮について他人との違いを感じるとき、沈黙することを確認する。「わたし」のこのような姿勢は、その原因が幼年期にあると考え られる。幼年期の「わたし」は朝鮮を他者として認識しており、それは公然の秘密として沈黙を守るべきことでもあった。

しかし、日本へと引揚げた後、他者であった朝鮮は「わたし」を規定する自己の一部となり、「わたし」は日本社会に同化しえない他者となる。 ここで変わらないのは、朝鮮がいつも他者の立場に置かれることであり、沈黙を守る「わたし」の姿である。

キーワード：後藤明生、夢かたり、引き揚げ近代、前近代、メタファー、情動、禅
modern, pre-modern, metaphor, affection, Zen

中世叙景歌における叙情性
―瀟湘八景和歌における「瀟湘夜雨」を中心に―

The Lyricism of Descriptive Poetry in the Medieval Period Japan:
A Study on 'Night Rain on Xiao-Xiang' in Waka

蘇　文甯

「瀟湘八景」は中国を起点として、日本や韓国などの東アジアの国々に渡り広く知られている画題であり、詩題でもある。鎌倉後期、中日両国を行き来した禅僧によって日本に伝えられた「瀟湘八景」は、五山禅僧の間に数多くの漢詩が詠作された一方、和歌の世界にも歌題として扱われはじめた。

本発表は「瀟湘八景」の一景である「瀟湘夜雨」と題した和歌の表現を考察することを試みるとともに、この歌題に含まれている叙情性を明らかにすることを目的にする。

そこで、孤愁をモチーフとした中国の「瀟湘夜雨」と異なり、和歌における日本の「瀟湘夜雨」は斑竹や屈原の故事を踏まえながらも、むしろ「瀟々」たる夜雨と理解され、平安時代以来白居易によって形成した草庵での夜雨の憂愁に影響されたと考えている。本発表によって、同じ題でありながらも自然から反映された歌人の情緒が元来の漢詩題から変容した現象が伺えられたと思われる。

キーワード：中世和歌、瀟湘八景、夜雨、叙景歌、叙情性
Waka in the Medieval Period Japan, the Eight Views of Xiao-Xiang, Night Rain, Descriptive Poetry, Lyricism

山吹歌の「みの」考
―常縁から道灌へ―

Thinking about the Yamabuki's "Mino" of Waka: Change from Tsuneyori to Dokan

二階　健次

太田道灌山吹譚は、和歌発心譚として人々に膾炙されている。これは江戸時代中期の『常山紀談』の影響である。山吹譚の本歌は『後撰集』の兼明親王歌であるが、中世私家集の『雲玉和歌抄』に採録がある。三条西実隆や宗祇に「山吹と蓑」の掛け合わせ歌がみられ同時代に共有されていたこと、『雲玉和歌抄』では「天神法楽歌」として菅原道真の文武両道を讃えた奉納歌であること、「蓑」は「美濃」の掛詞にもなること等から、この譚は「道灌」ではなく、古今伝授を宗祇に授け、東征の留守に領国美濃を奪われた「東常縁」が投影されると考えた。江戸将軍の「武家諸法度」に「文武両道」が掲げられると、江戸の道灌人気が高まって、常縁から道灌へ入れ替わっ ていったと考えた。また、無学な土地の者が統治者をへこます「笑われる西行」の話型があることに注目した。これらの視点を踏まえ、「和歌と説話」の関係を見直し、再構築を試みた。

キーワード：太田道灌、東常縁、和歌発心譚、山吹の花 、笑われる西行
Oota-Doukan, To-Tsuneyori, Waka origin, Yamabuki flowers, laughed at Saigyo

1960 年代東京における警察の防犯活動

Crime Prevention Activities by Police in Tokyo in 1960s

渡邉　啓太

本報告では、1960 年代東京で展開された警察 による 防犯活動 の 諸相を検討する。1950 年代後半から進行した都市化が犯罪の質的・量的な悪化をもたらし ていると認識した警察は、1960 年代に入り「小暴力」の予防・取り締まりや風俗営業の取り締まり、青少年の補導等の都市における防犯活動を本格的に強化していく。これらの方策は国家的なメガ・イベントとしての 1964 年東京オリンピックを円滑に進めるために行われたものでもあったため、その開催地かつ都市化が急速に進行していた東京は とりわけその状況が問題視され、厳格な防犯対策を講ずべき場所として設定されていたのである。さらにこの際、警察は地域住民や学校、関連機関に自主的な防犯活動および警察の防犯活動への理解と協力を積極的に要請しているが、ここからは「犯罪の防止」を通じた人びとへの警察権力の浸透が見て取れる。以上の過程を、警察によるナショナルな秩序と都市秩序の形成に着目して考察する。

キーワード：警察、防犯活動、東京、都市化、オリンピック
police, crime prevention activities, Tokyo, urbanization, the Olympics

ベ平連の地域的展開
―長崎ベ平連を中心に―

Spread and Development of Beheiren: Focusing on Nagasaki Beheiren

港　那央

「ベトナムに平和を！」市民連合（以下、ベ平連）は、1965 年 2 月のアメリカによる北ベトナム爆撃の本格化をきっかけに日本で結成された、ベトナム反戦を訴える市民運動体である。規約や会員制度はなく、ベトナム反戦の意思を持つ者であればどこでも誰でも一人でもベ平連を名乗り活動することができたため、最初に結成された東京を拠点とするベ平連が 1974 年に解散するまでの間に、全国で数百ものベ平連が結成され独自の運動が展開されたと言われる。従来のベ平連研究では、「中心的」存在であった東京のベ平連が主な研究対象であった。しかし、各地で発生した様々な地域のベ平連の運動にも注目すべきであるとして、2013 年に地域ベ平連研究会が発足し、今日、ベ平連研究は新たな段階に入り飛躍的な発展を遂げつつある。本発表では、その地域的展開の動きの一つと捉えられる、長崎県長崎市で誕生した長崎ベ平連について、その結成背景と特徴を中心に報告する。

キーワード：ベ平連、市民運動、反戦運動、ベトナム戦争、長崎県
Beheiren, citizens' movements, anti-war movements, Vietnam War, Nagasaki City

テレビジョンは家族を結びつけることができたのか？
―インターネット普及以前の 1960 年から 1990 年にかけての実証的検証―

Had the Television Brought the Family Together?
An Empirical Assessment of Pre-Internet Age Japan from 1960 to 1990

犬塚　智史

Shortly before the mass spread of television across Japan, a sociologist Ikutaro Shimizu asserted that television "brings humans back to home" and creates a space where all family members, from grandparents, parents, and to children, share a pleasant time together. Such an optimistic view seemed to have prevailed in the late-1960s and the 70s, by which time the nationwide habit of the whole family lounging in front of the living-room television over dinner—as we still are weekly reminded from depictions in Sazae san and chibi Maruko chan—was firmly established. Yet, as many commentators and scholars have problematized, such idyllic family TV viewing has long been on the wane, and today rarely do we find a cheerful three-generational family dinner like Sazae san's or Maruko chan's. Far from uniting the family, recent research often associates television viewing with reduced civic participation and even social isolation. How has the function of television so diagonally transformed from uniting the family to aggravating isolation?

As a starting point to tackle this question, I quantitatively examine the first three decades of Japanese television, from 1960 to 1990, before the popularization of the Internet. I found from multiple television surveys that, from the mid-1960s to the 70s, television indeed had functioned as a medium to bring family members together. However, in the 1980s, there emerged a practice of "individualized enjoyment of mass-produced entertainment" with the introduction and popularity of devices such as the VTR, Walkman, and video games especially among youths, as well as with a second or a third television set now installed in bed-rooms. This practice contrasted vividly with the "en famille enjoyment of mass-produced entertainment through the living-room television" of the late-1960s and the 70s, and I argue, anticipated the subsequent decades of social media. The significance of this research lies mainly in the finding that the highly-individualized use of media, which often is associated with social isolation, began already during the transitional decade of the 1980s, well before the era of the Internet.

キーワード：テレビ、家族、個人化、社会的孤立、1980 年代
Television, family, individualization, social isolation, the 1980s

日本の動物園を通して見るアジアゾウと人間の関係についての人類学的考察

An Anthropological Study of Relationship between Asian Elephants and Humans from the Stight of Zoos in Japan

築地　夏海

本発表では、日本の都立動物園での事例を用いつつ、園内で飼育されているアジアゾウと、園職員や来園者といった様々な立場の人々とがどのようにコミュニケーションを取り関係性を構築しているのかを考察する。

動物園は、人々がそれぞれの生息地域に行かずして、あらゆる動物種を目にして出会う機会をもたらす空間である。とりわけ本研究では、タイやスリランカといった本来の生息地から日本の動物園にやって来たアジアゾウに焦点を当て、人間の飼育管理下にありながらも園内で生きるアジアゾウと、飼育担当職員や解説ガイドボランティア、また来園者などとの間でどのようなコミュニケーションや観察が行われているかについて聞き取りやインタビュー調査をもとに検討した。これにより、人々のそれぞれの立ち位置に応じて、飼育ゾウに対する人々の認識、姿勢や行動において微細な差異が存在していることを明らかにした。

キーワード：文化人類学、動物園、アジアゾウ、人と動物の関係
Anthropology, Zoos, Asian Elephants, Human-Animal Relationship

日本における就業形態と生涯学習の発展

Development of Employment Style and Lifelong Learning in Japan

賴　瑜瑩

本研究は日本社会における就業形態の変化に基づき、生涯学習の発展のルーツが職業訓練から一般教養に変わっていく過程を明らかにする。また、この発展過程についての検討により生涯学習の定義を補充できるのではないと考える。

日本は東アジアの国々には最も経済的に発展した国である。日本の文部科学省が生涯学習の定義を提供し、その定義の詳細ごとに追加の説明とサポートポリシーを提供している。文部科学省はまた、時代に歩調を合わせ、教育観の変化に応じて定義を修正・拡大するために定期的な議論を行っている。その議論の中に職業訓練は生涯学習の定義に欠さないいけない内容である。

本研究において、まず第二次世界大戦後の経済復帰の要求に応じ、発展してきた職業訓練の状況を確認する。次に、1960 年代末に形成された日本企業内職業教育制度を分析する。最後に、現在まで継続された企業内職業教育制度はどのように第三次産業発展により変わっていくのかを検討する。

キーワード：就業形態、生涯学習、職業訓練、成人教育、日本社会
Japanese employment system, Lifelong learning, Vocational education, Adult education, Japanese society

海外で特別な支援を必要とする子どもたちの言語発達に関する親の葛藤
―多言語環境シンガポールにおける調査から―

Parental Conflicts Regarding Language Development of Children with Special Needs:
From a survey of Singapore in a Multilingual Environment

重松　香奈

グローバル化が進み、人々が世界を移動する現代となった今、日本へ帰国する予定のない海外永住家庭や長期滞在家庭の子どもが著しく増加している（東京学芸大学国際教育センター .2014）。また、日本国内では、約 4％の義務教育段階のこどもが教育的配慮を要すると言われ、その数は国内だけでなく、海外においても増加傾向にある（海外子女教育振興財団 ,2019）。

本研究では、シンガポール在住の発達障害や知的障害、肢体不自由などを持つ子どもや発達に不安を持つ保護者たちがメンバーとなっている某団体にご協力いただきアンケート調査を行った。その結果、約 8 割が言語発達における不安を抱え、医療機関を受診していたことがわかった。また、保護者が抱える悩みとして、子どもとコミュニケーションがとりにくい、という悩みがあり、これは、モノリンガル環境にある子ども、バイリンガル環境にある子ども、両方に共通する悩みであった。本研究で保護者が抱える言語発達面での葛藤を明らかにすることで、今後多言語環境で育つ子どもたちの言語やコミュニケーションを高める支援の在り方について、支援の実践に向けた示唆を提示したい。

参考文献

海外子女教育振興財団 (2019)「日本人学校における特別支援教育の実態について」
東京学芸大学国際教育センター（2014）『海外子女教育の新展開に関する研究プロジェクト報告書－新しい補習授業校のあり方を探る』

キーワード：シンガポール、多言語環境、特別支援、言語発達、葛藤
Singapore, Multilingual environment, special needs, language development, conflict

翻訳と「文字」の役割に関する研究
―『敦煌』論―

Research on the Role of Translation and Character

陳　怡青

井上靖の『敦煌』は、一九五九年一月から五月にかけて雑誌『群像』に連載された小説である。進士試験に落第した趙行徳の敦煌への道を描いた作品である。先行研究には、趙行徳が秀才であること、旅行者から探検家に変身していること、彼が広義的な文化そのものへの関心を持っていることに焦点が当てられた。また、井上靖の学問や書物への敬意など、作家研究に軸が置かれる形で分析されてきた。しかし、趙行徳は物語の最初から最後まで、「文字」の世界に没頭していることが分かる。彼にとっての「文字」の内側と外側の世界とその変遷について、先行研究のなかで注目されたことはなかった。

本発表は、趙行徳にとっての「文字」の内側と外側の世界とその変遷を、趙行徳にとっての「学問」、「朱王礼」という人物、趙による対照表―「辞書」作り、二人の女性と自然風景の役割という四つの点から明らかにしていきたい。

キーワード：『敦煌』、井上靖、宋、漢字、西夏文字

Dunhuang, Yasushi Inoue, Song Dynasty, Chinese character, Xixia character

『今昔物語集』の女性観に関する考察

Consideration on the view of womanhood in "Konjaku Monogatarishu"

安　昭映

『今昔物語集』は平安時代末期に成立されたと見られる日本最大の説話集である。当時の世相を活写しているため、当時の人々の生き方をくみ取ることのできる歴史史料として価値があるとも言えるだろう。特に恋愛譚の場合、必ず各話に愛し合う男女が登場するので、その関係性から男女の世間的立場を比較することができる。本発表では『今昔物語集』本朝世俗部の恋愛譚に語られた恋の成り行きと評語を検討し、当時の社会的女性観について確認する。

男性から女性に恋を仕掛けたとしても、破綻の責任を女性に押し付ける評語が多数を占めることから社会的に女性を蔑視する風潮が蔓延したと考えられる。

恋愛において舵を握っているのは男性側で、女性は男性に振り回されるというストーリが多く見られる。一見女性が主導しているように見える話もあるが、結局女性は男性に翻弄される。男女関係において女性は受動的な立場に置かれている弱者だったと考えられる。

キーワード：今昔物語集、恋愛譚、女性観、男女、世間的立場
Konjaku Monogatarishu, Tales of love, View of womanhood, Male-female romantic relationship, Social position

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語·日本学研究』第 12号執筆者一覧

帰翔	東京外国語大学大学院博士後期課程
張希毅	東京外国語大学大学院博士後期課程
平原真紀	東京外国語大学大学院　国際日本研究院特別研究員
楊佳嘉	名古屋大学人文学研究科博士候補研究員
楊柳岸	東京外国語大学大学院博士後期課程
フィットレル・アーロン	早稲田大学高等研究所講師
鈴木美加	東京外国語大学
島岡学	吉本興業
袁姝	東京外国語大学大学院博士後期課程
周超超	中国広東科技学院外国語学院 専任講師
葛茜	中国福州大学外国語学院
解放	吉林大学 / 東京外国語大学非常勤講師
森口恒一	静岡大学名誉教授
谷口龍子	東京外国語大学

『日本語·日本学研究』国際編集顧問一覧（順不同）

孫建軍	北京大学	郭連友	北京外国語大学
蕭幸君	東海大学（台湾）	尹鎬淑	サイバー韓国外国語大学校
李吉鎔	中央大学校（韓国）	鄭家瑜	国立政治大学
金鍾德	韓国外国語大学校	林慧君	国立台湾大学
LIM Beng Choo	シンガポール国立大学	Tasanee Methapisit	タマサート大学

編集後記

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第 12 号をお届けします。今号への投稿論文の総数は 19 本、そのうち 10 本が採択されました（日本語教育 1、言語研究 3、文学・歴史・社会 6）。それに加えて、寄稿論文と寄稿研究ノート、そして本センター主催の夏季セミナー「言語・文学・社会」（2021 年 7 月 20 日 - 23 日）に併せて開催された、サマースクールの発表者である学内外の大学院生の発表要旨も掲載されています。本号刊行にご協力いただいたすべての皆様に心から感謝申し上げます。（友常）

東京外国語大学国際日本研究センター
日本語·日本学研究 vol.12
Journal for Japanese Studies

発行：2022 年 3 月 31 日
編集者・発行者　東京外国語大学国際日本研究センター
代表者　友常勉
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F
Tel/Fax: 042-330-5794

Online edition: ISSN 2186-0777

Journal for Japanese Studies Vol. 12 (2022)

[Peer Reviewed Article]
The grammatical status of "set operational expressions"
Xiang GUI

The Union of the Object and the Subject:
Passions toward the Other Side in Koujin by Natsume Souseki
Xiyi ZHANG

Chinsetsu Yumiharizuki and two novels of Yangjiajiang Yanyi
Maki HIRAHARA

A Study on Taiko Hirabayashi's "Laying Train":
From the perspective of Biopolitics
Jiajia YANG

The Creation of the Image of "Prostitutes in Manchuria"
in the Literature of Tsutomu Mizukami's Works:
From "Karayuki-san" to Korean "prostitutes"
Liuan YANG

About Translations of Preface (jokotoba) in Manyōshū Poems:
Their Methods and Historical Change in German and English Translations
Áron FITTLER

[Peer Reviewed Research Note]
Improvisation "Manzai Workshop" by Multinational Students,
Entertainers, and Teachers: Attempt to Create a Unique Message
in "Media Japanese" Class
Mika SUZUKI, Manabu SHIMAOKA

The Disagreement Phenomenon in Japanese Oral Discourse Analysis: A
Literature Review and Future Research Directions
Shu YUAN

A Study on Chinese Japanese Learners' Acquisition of Onomatopoeia:
Taking Phonetic Symbolism as an Example
Chaochao ZHOU,Qian GE

The Change of Thought in Abe Kōbō:
"Dendrocacalia" and "The Crime of S. Karma"
Fang XIE

[Article]
A Typological Examination of Active Type, Ergative Type and
"Mind" Expressions in Accusative Languages and their Historical
Correlation: A Contrastive Analysis of the Irregularities in "Subject"
in Japanese and "Focus Topic" in the Philippine-Formosan Languages
Tsunekazu MORIGUCHI

[Research Note]
What Overseas Japanese Language Education Internship Dispatch
Requires and What Is Required of Overseas Japanese Language Education
Internship Dispatch: Example of Practice in the Graduate School Subject
"Japanese Language Education Practical Research"
Ryuko TANIGUCHI

Abstracts of the Graduate Students' Session in Summer Seminar 2021
Contributors
International Editorial Committee Members
Postscript

International Center for Japanese Studies
Tokyo University of Foreign Studies